
夢幻の瞳 現の涙

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻の瞳 現の涙

【Nコード】

N9930V

【作者名】

橘伊津姫

【あらすじ】

「夢」を操る術士・アイヒナとその相棒・闇姫。

二人が旅立ったのは、眠りに囚われた人々を助け出すためだった。

【神】の力が息づく「セルギナ大陸」を舞台に繰り広げられる、世界を救う為の戦いの幕が切って落とされた！

拙サイト「皓月迷宮」にて公開中

プロローグ（前書き）

セルギナ大陸四大国の一つ、玉の国・瑰^{タマ}。
いまここから、新しい神話が始まろうとしている。

プロローグ

闇の中に、妙なる楽の音が流れる。

低く地を這い、高く空を駆ける。

月と星が見守る中、複雑な音色に歌声が加わった。耳に心地よい、まろやかな声音。

夜に、眠りと夢を司るエルキリユースの聖歌が流れていく。

良質の玉を多く産出する国　　瑰^{かい}　険しい山々に囲まれたこの国は、セルギナ大陸四大国に数えられるほど富んだ国だ。だからといって、民の全てが豊かなわけではない。国の中央が富み、離れていくほど貧しくなる。それはどこへ行っても変わらない。

だが、衣食住がこと足りていれば、そんな事は関係ないだろう。少なくともアイヒナの訪れたこの村は、戦や災害さえなければ、日々の暮らしに満足しているようだった。

広場の中央には巨大な火が焚かれている。炎に揺られ、長い影を落としたアイヒナが最後の音を奏でた。リュートが静かにその弦を止める。周囲でかすかなため息が漏れる。

「旅のお方、素晴らしい音曲であった。わしらの祭りに、このような華を添えていただけたとは……」

篝火^{かがりび}を囲むように座っていた村人の中から、一人の老人が進み出て礼を言う。

「何の。私のような流れ者を村に入れ、食事まで与えてくださった皆様への、ささやかなお返しでございます。お耳汚しでなければよろしいのですが」

答えるアイヒナの髪が、篝火の明かりに輝いた。月光を紡いだかのような銀。

さらにもてなしを、と張り切る老人に明日の出立が早い事を告げて、穏やかな笑みで辞退する。リュートを肩に掛け、村人の輪の外へと歩を進める。この後、祭りは真夜中過ぎまで続くのだ。宿とし

て与えられた小屋へと向うアイヒナの足が、ふと止まる。

「仕事　かな？　閼姫かんぎよ」

小さく呟かれた言葉に、閼かんの中から答えがあった。

「そのようじゃな、主殿あるじの」

果たして何者なのか？　アイヒナの周囲に人影はない。

「あの……旅のお方……」

おずおずといった感じで、アイヒナの背後から声がかかる。振り向くと、十歳くらいの少年を連れた母親が立っている。

「はい。先程の私の呪歌じゅかが聴こえましたか？」

二人に向ってニツコリと微笑む。

「え？　ええ、あの　」

言いよどむ母親を無視して、少年に目線を合わせて膝を折る。

「夜、眠れないのは君だね？」

「うん、そうだよ。お姉ちゃんの目、すっごくキレイだ。お日様の当たった、どんぐりの実みたい」

「ああ、ありがとう。お礼に君の怖い夢を退治してあげよう。名前は？」

「ボク、マイルって言うんだよ」

「そう。私はアイヒナだ」

彼女は黄金の瞳を細めて笑った。

1章 旅立つ者・思案する者（前書き）

何かを正しく認識し、対応策を決めるためには、正しく事象を見極めなければならぬ。

そのためには、自分の肌で感じなければ。旅立つ者の真理はどこに？

1章 旅立つ者・思案する者

世界地図を広げると、一番最初に目に入る巨大な大陸　セルギナ。

大小の国が散らばる中に、四つの大国がある。玉の槐国^{かい}、木の栖国^{さい}、海の涛国^{とう}、絹の継国^{けい}。それぞれに守護神を祀り、神殿が国教として権力を持つ。

数多くの玉泉を擁するここ槐国では「大地母神・イシュリン」を守護神とし、その神殿を中心とした大都市が出来上がっていた。国民の心の支えとなる、宗教の都・宗都サンガル。

もちろん、信仰が限定されている訳ではないので、イシュリンのもの以外の神殿もある。中心地に近いほど、信徒が多い。

「一体どこから、こんなに人が出てくるのかねえ？」

大神官の私室から、美しく舗装された街並みを見下ろし、一人の青年が呟いた。

「何かおっしゃいましたか？ トウージュ王弟殿下^{おうてい}」

大神官のリュヒターが執務机から顔を挙げて尋ねた。トウージュは肩をすくめると、何でもないと手を振り、リュヒターを見る。

「それで何か掴めたか？」

手元の書類に視線を戻しながら、リュヒターは長いため息を吐いた。

「このところ国内で続いている変死についてですな。我がイシュリン神殿でも色々と探ってはいるのですが、まだ手がかりすら掴めない状態で」

「国内最大の情報量を持つ、イシュリン神殿でもか　」
二人が頭を悩ませているのは、このところ槐国内を騒がせている、変死事件についてだ。

死亡しているのは老若男女を問わず、場所柄的にも共通点はない。

ただ、いずれも眠っている間の事であり、外傷もない。初めは流行り病かとも思われたのだが、どうやらそうだったモノではないらしい。

「エルキリユースが神狂いでもされたか」

トウージュが疲れたように口を開く。

「殿下。ご冗談でも、そのような事を口にされますな。仮にも相手は『神』なのですぞ」

リュヒターが恐れ多いと、素早く印を切る。

世界に広く伝わる神話では、エルキリユースは眠りと夢の神だ。

主神“秘められたる御名”ラングマールの息子でもあり娘でもある神。夢を喰うと言う伝説の獣・ドラムーナを従がえ、夢魔・バフオナを狩る。

「そういえば、エルキリユース神殿はどうなのだ？」

今さらな質問に、リュヒターは渋い顔をした。

「あちらも独自の調査をしているようですが。我が神殿よりも影響が大きいでしょう。なんせ、眠るのが怖いんですからな」

「しかし、エルキリユース神殿には夢幻鏡があるだろう？ ああ、

『夢渡り』を可能にするという至宝が！」

リュヒターのすっかり薄くなってしまった頭を睨み付けながら、トウージュは声を大きくした。

「ありませんよ」

次の言葉を口にしようと思を継いだところに、サラリとリュヒターが答える。

「え？」

「ないんです、夢幻鏡。現在、エルキリユース神殿には。もちろん確認済みです」

握り締めた拳を、力なく両脇に垂らす。

「はああ」

大神官は執務机を離れ、トウージュに深々と礼をする。

「トウージュ王弟殿下。誠に申し訳ございませんが、午後の典礼が

ありますので……」

「ん。邪魔をしたな」

自ら扉を開きトゥージユを送り出しながら、リュヒターは思い出したようにその背中に声をかけた。

「そう言えば、エルキリユースの巫女が一名、“夢織り”として神殿を出たようです」

しかし、それがどういう意味を持つのか、二人には判らなかった。

＊＊

「なあ、主殿」

昼下がりの街道を、アイヒナがムツツリと歩いている。

食料が残り少ないわけでも、路銀が心許ないわけでもない。

「吾^{われ}は思^{おも}うのだがな、主殿よ。最近の夢魔はアレだな」

アイヒナの肩より一段低い所で声は続く。

「質^{しち}が落ちて、一向に腹^{はら}がくちくならん。ここらでこつ、デカイ奴をだな」

「やかましいぞ、闇^く姫^{ひめ}」

とうとう我慢できずにアイヒナが口を開く。

「黙^{もく}って聞いておれば、ベラベラとよく働く口^{くち}だな！ お前のソレはっ！」

怒鳴り返したその先にいるのは、一頭の黒狼だった。ただ、瞳だけが燃えるように紅い。

「大体、そのナリでしゃべるな。誰かに見られたらどうする」

銀の髪を布でまとめ、肩にリュートを入れた袋と荷物を掛けている。

魂国はセルギナ大陸の北に位置しているため、夏は短く冬が長い。季節は秋。旅するには最も適した時期ではあるが、風は早くも冷たい。ずり下がったマントと荷物をゆすり上げ、金の瞳で連れの黒狼を睨み付ける。

「しゃべるのなら、人になれ！」

知らない人が聞いたら、神経を疑われてしまいそうな事を叫んでいるアイヒナの目前で、黒狼の姿がたちまち人型に変わっていく。

「これでよろしいのかな、主殿よ？」

街道を渡る風に長い黒髪を流し、紅眼を細めて言葉を紡いだのは、黒い衣装に身を包んだ女性だ。しかも、すこぶるつきの美女。

「それでな、先程の続きなのだが。やはり仕事をする以上、吾としてもそれなりの報酬が欲しいと思うわけだ。」

延々と続く彼女の言葉に、アイヒナは頭を抱えた。

「うるさい。頼むから少し静かにしてくれ、閻姫」

獣がしゃべり、姿を変える。そのような不思議に、驚きもしないアイヒナの正体とは。

「神代のエルキリユースが従がえたドラムーナも、こんな奴だったのか？」

まだ世界が熟していなかった神代の時代。いずこかより現出した神“秘められたる御名”ラングマールが、力を持った言葉で世界を創り上げた。

何もなかった世界を整えるために、主神は自らの力を使って神々を生み出した。

天空神シャーリハーンとその妻、大地母神イシュリーン。水を司るケシュと、その巡り会う事のない恋人、火神ネフティ。孤独の神・風神バルメツサと荒ぶる神・海神メラーイサの兄弟。芸術神ミュールと背中を合わせた美神フォルンの姉妹。

天空神は太陽神トラバルーナと月神リユスの二柱の神を、大地母神は豊穡神アルスメナと死神ラ・ズーを生み出した。

そして力を使い果たした主神の身の虚ろより暗黒神アーカバルが生まれ、ため息の中から眠りと夢の神エルキリユースが生まれた。

神々を生み出した疲労により、主神ラングマールは世界を去り、最期の時まで目覚める事はない。

セルギナ大陸に広く伝わる神話である。

各国はそれぞれ、自国の風土や産業に関わる神を守護神として祀り、その神殿を中心とした都市を持っている。

瑰国なら『宗都サンガル』であるし、他の四大国ならば、栖なら『聖都マシューン』、濤なら『教都リュシューン』、継ならば『天都バルガン』である。もちろん他の神殿もあるが、中心となるのは守護神殿だ。ただし、主神ラングマールの神殿はない。彼の神が“秘されている”からである。アイヒナの口にしたエルキリユースの神殿もサンガルにある。

三月ほど前まではエルキリユース神殿の巫女だったアイヒナが、今は旅人となっているその訳は 彼女の連れにあった。

悪夢を喰い、夢魔・バフォナを狩る伝説の獣・ドラムーナ。

ところがアイヒナは、その「伝説」のドラムーナと出会ってしまったのだ。

神殿には両性神エルキリユースの吐息で出来たといわれる至宝・夢幻鏡があった。三年に一度、巫女の位を問うために行う祭りの席で、その夢幻鏡からドラムーナが現れエルキリユースの神託を告げた。

『吾は闇姫。夢の神エルキリユースよりの神託を告げる。この神殿で一番のリユートの弾き手を示すが良い。その者に夢幻鏡を与え、探索の旅へと出すのだ』

そして選ばれたのが、アイヒナだった。

「何で私なんだ？ 他にもリユートの弾き手はいたららう？」
歩きながらアイヒナがぶつぶつと呟く。

「そもそもお前、あれは詐欺だ。何だつて、こんな大事な探索の旅を、一介の巫女にさせるんだ？ それこそ、夢長様にでも任せるか、もっと力のある姉巫女様達でもいいじゃないか。リユートが上手いというだけの理由じゃ納得がいかん」

隣を歩きながら闇姫が反論してくる。

「理由は主殿が一番良くご存知だろう。あえて言わせてもらえるなら、決定権は吾にはなかったのだからな。吾はエルキリユースに従がったまでぞ。主殿のリユートを気に入ったは、彼の神。今さら吾に文句を言ったところで、どうにもなるまいに」

ああ言えば、こう言う。ぐったりと脱力したアイヒナは口をつぐんだ。

気付けば太陽は大きく傾いている。

「……これは野宿だな」

ポツリとこぼした言葉に、闇姫が答える。

「吾としては、人間がおる場所の方が良いのだがな。野宿ではバフオナにありつけぬではないか、主殿よ」

右手で額を押さえると、主は食いしばった歯の隙間から声を絞り出した。

「頼む。しゃべるな」

2章 珠春宮・パールローサ（前書き）

眠ったまま二度と眼を覚まさない「死の眠り」。
この奇妙な流行病に、国中が恐怖におびえていた。

2章 珠春宮・パーテイルローサ

控えめなノックが思考の隙間に入り込んでくる。

「お入り」

扉を開けて、女官が顔を出す。

「おくつろぎのところ、失礼致します。アイナセリヨース王妃殿下。トウージュ王弟殿下がお戻りになりました。重要なお話なので、王妃殿下にもお越しいただきたいとの事でございます」

「判りました。トウージュ殿下は、どちらにおいでかしら？」

「はい、陛下の御寢所に……」

「すぐに伺います」

一礼して下がった女官を見届けると、アイナセリヨースは身支度を整えた。

五分後、国王の寢所のノッカーを鳴らす。

「お入り」

細い国王の返事に、王妃は胸の痛みを隠して扉を開けた。

「お待たせ致しました、陛下。お帰りなさいませ、王弟殿下」

トウージュと目礼を交わし、国王のベッドへ近づきながら声をかける。

「お加減はいかがですか？ コルウィン」

「ああ、今日は随分と気分がいい。いつも心配をかけるね、アイナセリヨース」

ベッドに上体を起こし、優しい微笑を浮かべているのは、彼女の夫であり瑰国の要であるコルウィン・イルス・ダルム・瑰である。

十九歳で王位に就き、若いながらも堅実に国を統治してきた。だが二年前に原因不明の病に倒れ、いまだ完治していない。世継ぎの御子がいれば国の不安も薄らいだだろうが、三年前に娶ったアイナセリヨースとの間に子はなかった。

「トウージュ。宗都の様子はどうであつた？ 何か手がかりになり

そんなことは？」

病床の国王の言葉に、トウージュは苦しげに首を振った。

「何も。イシュリン神殿の網にも、獲物はかかっています。エルキリユース神殿についても尋ねてみたのですが。」

「直接、エルキリユース神殿には行かれたのですか、トウージュ殿？」

「いいえ、義姉上。あの神殿の者達は、世俗にあまり興味を示しません。まあ、それでも事が事だけに、知らん顔も出来なかったようです。」

アイナセリヨースは、考え込むコルウインの横顔を見つめた。

「珠春宮は、パーティルローサはまだいい。守護結界の張られたこの都市は、もうしばらく大丈夫だろう。しかし、王都ハディースはどうなる？ 宗都であるサンガルですら犠牲者が出ているというのに。都市より離れた里は？ 村は？ どうすれば良いというのか？」

上掛けを握り締めて、コルウインが声を荒げる。焦りに震える国王の手を、王妃がそっと包み込む。

「兄上。しばらくの間、パーティルローサを留守にしてもよろしいでしょうか？」

トウージュが何かを思いついたように口を開いた。不思議そうにしている二人に、

「リユヒターが気になる事を言っていました。エルキリユース神殿には、現在、夢幻鏡がないと。そして巫女が一人、神殿を出たようだとも。どうにも気になるのです。なぜ、今なのか？」

いったん言葉を切り、トウージュは続けた。

「もしかすると、何も意味のない事なのかもしれません。こんな時期にパーティルローサを空けるのは、兄上にも義姉上にも負担をかけることになりますが……。」

「ご心配には及びませんよ、トウージュ殿。政は陛下とわたくしが何とかいたします。今、最も優先されるべきは『死の眠り』です。どうか一刻も早く、解決策を見つけてください。」

コルウインの視線を受けて、アイナセリヨースが請合あひあった。

「申し訳ありません。いつも俺のわがままに付き合わせてしまつて、頭を下げながら、国王夫妻に目をやる。神々はなぜ、この二人に子を授けないのか。」

元々、地方行政の役人である赤官せきかんの娘だったアイナセリヨースをコルウインが一目で気に入り、是非にと請われて輿入れした。当時、身分違いと重臣達の間で反対意見が沸き起こつたが、普段温厚なコルウインがその反対を抑え込み、ついに娶つてしまつた。

王妃となつたアイナセリヨースは、その聡明さをもつて国民に愛された。大臣達の間にも認識を改める者が多かつたが、三年経つた後も御子がない事に、一部の者から彼女を離縁するか側室をとるか、強く勧められていた。国王が倒れてからは、政を代行するアイナセリヨースを快く思わないものも少なくはない。

退室するトウージュを見送つて、コルウインは深くため息を吐いた。

「あれにも苦勞をかけるな」

「トウージュ殿のお陰で、わたくし達も随分助かつておりますものね」

コルウインもアイナセリヨースも、自分達に子がない事をトウージュが心配しているのを知っていた。互いへの愛情と信賴の絆で結ばれている国王夫妻。跡継ぎがない事は二人の生活を寂しいものにしてしたが、大臣達の勧めに従がつて、離縁する気も側室を娶る気もなかった。

「我等に子がなければ、いずれトウージュに国を預けなければならん。余に出来るのは、魂という国を傾けずに次代へ託す事だ」

ベッドに身体を横たえるのを手伝いながら、アイナセリヨースは呟いた。

「申し訳ございません。わたくしが子を成せないばかりに、陛下にもトウージュ殿にもご迷惑をお掛けいたします」

今度はその手を、国王が包み込んで答える。

「貴女が気に病む必要はない　と言ったところで気休めにもならないが。それに貴女の責任ばかりでもあるまいよ。余の身体が元に戻れば、あるいは……。まあ、世継ぎがなければ、魂国はトウーヅユに任せれば良い。もっとも、あれは嫌がるだろうがな」

「さあ、陛下。少しはお休みになれませ」

「ああ。もうしばらく、ここにいてはくれまいか、アイナセリヨース？」

「仰せのままに」

コルワインはいたずらっぽく微笑むと口を開いた。

「もう貴女に伝えたかな？　愛していると」

アイナセリヨースも微笑みながら答えた。

「まあ、不思議ですわね。わたくしも陛下を愛しておりますのよ」
束の間の優しい時間である。

＊＊

どんよりと曇った空は、今にも泣き出しそうに見える。

王都ハディースの一つ手前の街、コリヨン。特にあてのある旅ではないが、アイヒナの足は自然ハディースへと向いた。

街へ入ってまずは食事と、手ごろな店を物色する。一人（？）旅とはいえ、懐具合は贅沢を許せるほどではない。

しばらく進むと『赤い牡鹿亭』と書かれた看板を見つけた。どうやら、宿を兼ねた食堂らしい。改めて宿を探すのも面倒だと、アイヒナは『赤い牡鹿亭』へ入っていく。ドアを開けると、女将らしき女性が客の食器を下げているところだった。

「いらつしゃい。食事かね？」

にこやかにかけられた言葉に、アイヒナも笑んで答えた。

「食事と宿を頼みたいんだが、部屋は空いているかな？」

「おや、旅の人かね。どれでも好きな部屋が空いているよ。食事は何にする？　今朝から煮込んだシチューに、よく焙あぶった鶏がある

よ。味は保証付きさ。コリヨンでうちより美味しい店は、そうはないさね」

世話好きらしい女将は、口と同じように身体も良く動く。きびきびと働く彼女を見ながら、

「それじゃあ、両方もらおうか。そうそう、二人分をお願いしよう。後から連れが来る予定なのでね」

慌てて二人分にしたのは、何かを思い出したかららしい。

女将は奥へ引つ込むのと同時に、アイヒナの足元に落ちた影から、黒狼の鼻先がひょこん、と生えた。

「主殿？」

「ああ、もういいから早く出て来い」

鼻先が引つ込むと、今度は影から闇姫と呼ばれていた美女が、するりと出てくる。すると、彼女はアイヒナの影に潜んでいるのか？

食事時には遅すぎ、酒を飲むには早すぎる。そんな中途半端な時間のために、店内には二人以外に客はいない。

本来、夢魔・バフォナを食するドラムーナである闇姫だが、通常の食事の味を覚えて以来、主人の相伴しょうばんにあずかる機会が増えた。

というより、有無を言わず無理やりに同席するのだ。

「おや、お連れさんも着いたのかい？ こりやまた、大した別嬪べっぴんさんじゃないか！ もうちょつと時間がかかるからねえ。これでも飲んでおくれよ。なあに、あたしからのおごりだよ」

テーブルの上に素焼きのジョッキを二つ置き、鼻歌交じりで戻っていく。ジョッキからは、甘酸っぱいリンゴの香りが漂ってくる。よく冷えた、リンゴの発泡酒だ。

待つ事しばし。並べられた料理は、女将の自慢通りの味だった。

「女二人連れで旅かね？ 道中、何かと物騒だろうに。どっか、あてでもあんのかい？ 見たところ、巡礼の旅というわけでもなさそうだし……。おっと、余計な事聞いちゃったね。さあ、この部屋だよ。けど本当に一部屋でいいのかい？」

話好きの女将に案内されて、二階の部屋に通される。

「ええ、大丈夫ですよ。それから、申し訳ないんだが水を使わせてもらえないだろうか？ 季節柄、埃っぽくてかなわない」

「ああ、いいともさ。ちょっと待ってておくれよ」

アイヒナの頼みを快く引き受けると、女将は階下へ降りていく。

「ふ……ん。悪くないな」

闇姫が部屋を見回して呟く。人間以上に人間臭い。

ベッドに腰掛けて荷物を解いていると、女将が水がめとたらいを用意してくれた。彼女に礼を言くと、水浴びの支度を始める。

たらいに水を張り、荷の中から取り出した一枚の呪符に、エルキリユスの聖句を呟き水面に落とす。水に触れた符は、たちまち溶けて消え去り、跡形もなくなる。

アイヒナは頭に巻いていた砂よけの布を解くと、着物を無造作に脱いでいく。

「慎みとか何とか、持ち合わせてはおらぬのか、この主殿は」
ため息をついて立ち上がると、闇姫は窓にカーテンを引いた。

「ああ、済まない。忘れていたよ」

傾いた太陽の投げかける赤い光が、カーテンに遮られて、柔らかなオレンジ色に輝いている。その中で一人、神への聖句を呟きながらアイヒナが身体を清めている。その大理石のように白い肌は、魂で産出される最上の玉にも劣るまい。流れる銀の髪は、月神リユスの放つ光を紡いだかのようなようだ。ふくよかな双丘の間には、夢神エルキリユスに捧げられた者の証として神名が神聖文字で刺青されている。

長い髪をギュツと絞り、水気を切ってたらいから出る。タオルで身体中を軽く拭くと、輝く裸体のまま、荷物から一枚の鏡を取り出した。両手に乗るくらいの小ぶりの鏡に、水がめに残った水を注ぐ。やはり小さく聖句を呟きながら、右手で印を切る。

「闇姫」

アイヒナの声に、闇姫が静かにリユートを手渡す。かわりに鏡を

受け取り、床に膝をついて捧げ持つ。

部屋の中に、リユートの高い音が響いた。アイヒナが一弦だけを爪弾いている。その清浄な音色に導かれるように、闇姫の捧げ持つ鏡から、不思議な光がこぼれ始めた。

アイヒナの黄金の瞳が、何かを読み取ろうとその光を追いかける。ゆらりと、何者かの影が光の中に映り込む。正体を見極めようと、アイヒナが目を凝らした瞬間。

ビィィィン……。

爪弾いていたリユートの弦が切れた。途端に、鏡からこぼれていた光も掻き消える。

長い息をついて立ち上がるアイヒナに闇姫が問うた。

「何ぞ見えたかや、主殿？」

着物を手早く身に着けながら、彼女は答えた。

「ん。ほんの一瞬だがな。誰かが夢を見ている。だが」

不機嫌そうに顔をしかめ、吐き出すように続ける。

「あれは、世界の滅びを見る夢だ」

3章 出会い・聖と邪と（前書き）

病の打開策を見つけようと、市井に飛び出した王弟・トウージユ。彼はとある酒場で、運命的な出会いをする。彼女たちは一体何者なのか。

3章 出会い・聖と邪と

時は前後する。

王都ハディースから東へ離れた都市『匠都ホルテス』。産出された玉は、原石のままホルテスへと運び込まれる。ここで原石は美しく磨かれ、加工され、姿を変える。この匠の街から商人の街『商都スガン』へと出荷され、国外へと送られる。

そのホルテスの関門の外、街道沿いに広がる森の中を、一人の女性が走っている。しきりと背後を気にしながら、昼間でも薄暗い森の中を、慣れぬ足取りで進んでいく。

とつくに陽は落ち、ホルテスの関門も閉まってしまった時刻に、なぜ女一人で持ちの中を走っているのか？

疲労に呼吸が乱れ、足がもつれた。

「あつ　！？」

茂みの中に倒れこみ、その拍子に左腕にザックリと裂傷を負う。

「つく！　ハア、ハア、ハア……」

酸素を求めて喘ぐ体は、本人の意志に反して動こうとしない。せわしない呼吸を繰り返しながら、彼女は背後を振り返った。

森の中を渡る風と、小動物の気配。そして、うるさいほどの自分の心音。

歯を食いしばり、次第に治まってくる呼吸音に、かすかな嗚咽が混じる。茂みの中で膝を抱え、子供のように丸くなりながら彼女はボロボロと涙を流す。

「　しょう。ちくしょう。ちくしょう！」

血を吐くように、彼女の口から呪詛の言葉がこぼれる。

「あいつら、許すもんかつ！　いつか絶対殺してやるっつ！」

<何がそんなに憎いのか？>

ふいに、誰かの声が頭の中に響き渡る。

「誰っ！？」

ギクリ、と体をこわばらせて、彼女は周囲を見回す。

くそれほどに憎い相手がいるというのなら、我が力を貸してやるうゝ

「誰よ！　うつん。誰でもいいわ。本当に力を貸してくれるのね？」

心を占めていた恐怖が去り、憎しみが膨れ上がる。

「見返りは何？ まさか、タダで力を貸してくれるわけじゃないんでしょ？」

取り引きを申し出た彼女への返事は、甲高い哄笑だった。

くはあははは。氣に入つた！ 氣に入つたぞ！ 地を這う人間の分際で、我に取り引きを持ちかけるとは！ 良かるう。我の力と引き換えに、そなたは何を差し出そうと言うのか？ >

体の底から湧き上がってくる震えを止める事が出来ない。自分は取り返しのつかない事をしようとしているのかもしれない。……しかし、その思いも、彼女の心を抑えるだけの効力を持つてはいなかった。

「命を！ あたしから全てを奪った奴等の命を全部、あなたにあげる！ それで足りないってんなら、あたしの命も持つていけばいいわ！」

くその申し出、しかと聞き入れた！　我はそなたに力を貸そうぞ。
そなたの名を、我が前に示すが良い＞

茂みに隠れていた丸い石に血だらけの左手をついて立ち上がる。

「カーティよ！ 工匠バンクスの娘、カーティ！」

< 契約は成された！ >

カーティの血の付着した丸石が、赤い光を放って震える。光の中に人影が浮かび上がった。全身を黒いローブに包んだ、長身の美丈夫だ。赤い光の中でなお、燃え盛るような輝きを持つ朱色の瞳が、残忍な光をたたえて煌く。滑るような輝きを持つ黒い髪は、生物の如く蠢めりいている。

「礼を言うぞ、カーティ。永きの封印は破れた！ 世界に散った我が身の欠片を取り戻し、我は再び君臨する！ そなたに我が名を呼

ぶ事を許そう。このアーカバルの名を」

立ちすくむカーティの左手を優しくとると、流れる血に口をつける。

「ア、アーカバル様……」

恍惚とした表情で、カーティは呟いた。

「良い娘だ。我を受け入れよ。まっただ闇の祝福を受けるが良い」

空にかかった月神リュスが、まるで身を隠すかのように雲に遮られ、森は深い闇に沈んだ。

＊＊

陽が落ち、家々の窓に明かりが灯る頃になると、『赤い牡鹿亭』は一日の中で最も忙しい時間を迎える。食事と酒と喧騒。仕事の不満を洩らす者、カード遊びに興じる者、出世を祝う者。様々な感情が混じり合い、不思議な世界を造り出している、とトウージュは思った。

トウージュ・ラムナ・イルス・瑰。第二位の継承権を持つ、王弟殿下。先王クリュスト・ブロン・アーナス・瑰の庶子。

王宮における彼の立場は、決して安定したものではない。殊に、当代の国王が病弱で跡継ぎがないとあれば、尚更である。現にコルウィン^{ウイン}を廃し、トウージュに即位を求める声が重臣達の間から挙がった事もある。その時は、宰相を務めるリュフォンの働きで事なきを得たが、この先もこういった問題が噴出しなとも限らない。

元々、宮城^{ウージュ}であるパーティルローサに居つく事の少ないトウージュが、市井へ繰り出す回数が増えたのもこの頃からだ。これには二つの理由がある。一つは、彼を擁する官吏達が失望してくれる事を狙ったものだ。そしてもう一つの理由は、政治へ直接参加できない兄、コルウィンへの情報提供のためである。

腹違いであるとはいえ、トウージュはコルウィン^{ウイン}を深く愛していた。身分の低かった彼の母は、まだ幼いトウージュを残してこの世

を去った。後見のないトウージユを引き取ったのは、先王の第一王妃ティメイラである。彼女によって、コルウィンとトウージユは実の兄弟のように育てられた。そうして少年だったトウージユの心にある決心が芽生えた。

いつか、この恩に報いたい。

身分を隠して街へ出て、トウージユは人間の強さ・しなやかさを知った。王宮の奥深くには判らぬ事を理解した。

国とは、統治する者と支える者で成り立っている。どちらが欠けても成り立たぬ。王族は国を治める重責、民の生活を守る努力を負うからこそ、王族として認めてもらえるのだ。それを忘れたとき、王は力尽くで玉座から追われるだろう。王とは、その首で国民の命を贖^{あがな}うために存在しているのだ。

そんな事を食堂の隅のテーブルで、酒杯を傾けながら一人考えていた。そんな時、ふと店の中が静かになった。何事かと顔を挙げる

と、女が二人、二階から降りてきたところだった。腰まである銀髪を一本に編んでたらしめている女と、黒髪を流した長身の女。女性二人の旅人は確かに珍しいだろうが、なぜ、皆が言葉を飲み込むのか、と不審に思ったその瞬間。

二人が同時に振り向いた。燃えるような紅眼と、吸い込まれそうな黄金の瞳。

美しいだけの女ならば王宮で山ほど見た。大層魅力的な姫君も幾人も知っている。聡明さを兼ね備えた女性は身近にいた。前王妃ティメイラと現王妃アイナセリョースだ。

しかし、今日の前にいる二人が纏^{まと}う圧倒的な存在感は何だ？ 美しさとはそのまま力となる事を具現化した、この二人は何者なのだ？ トウージユの自問は、ドアが乱暴に開けられる音に中断された。

「おうい、女将！ 酒だ、酒！」

すでに出来上がっているらしい、粗野な服装の巨漢三人組が入ってくる。店内の客達は、彼等を見るなり眉をひそめた。

「やれやれ、またバルモスの奴だよ」

「誰も何も言わないんだから、好き勝手のし放題だ」

テーブルで交わされる小声の会話から推し量るに、どうやらこの三人組、近所でも有名な鼻つまみ者らしい。

「よう、兄貴。こんな所に、たいした別嬪さんが二人もいるぜ」

連れの一人が挙げた声にバルモスが振り向いた。窓際のテーブルに落ち着いた、アイヒナと闇姫を目にする。

「へええ、こりゃあ、すげえ上玉じゃねえか。なんだい、姉さん方二人つきりかい？俺達と一緒に飲まねえか」

断りもせずに彼女達のテーブルに腰を下ろす。しかし、二人は知らん顔でグラスを口に運んでいる。他の客達は気の毒そうな視線を送っているだけで、誰も何も言わない。とぼつちりを恐れているらしい。

「黙ってねえでよお。どうせ男の相手しながら金稼いでるんだろ？愛想の一つでも見せて、酌ぐらいしてくれ　っ！」

最後まで言えず、バルモスの巨体が椅子から吹っ飛んだ。アイヒナの横に腰掛けたバルモスが、言葉の途中で彼女の肩に手を掛けようとしていたのを、闇姫が正面から蹴り付けたのだ。

「薄汚い手で主殿に触るでないわっ、この下衆が！！」
凄まじい怒号が飛ぶ。

連れの男に助け起こされながら、バルモスが怒りに顔をゆがめる。
「っこの　。女だと思つて優しくしてやりや図に乗りやがって。
ワイト、ゴメス、やっちまえ！」

手空きの一人　こちらがワイトだろう　が闇姫に向って手を伸ばし……。

「わっ、いててて！」

「なあ、主殿。こいつ等全員、かみ殺してもよいか？」

ワイトの右腕を捻り上げながら、闇姫が憎憎しげにアイヒナに問う。

あっ、と言う間に大騒動に発展させてしまった相棒に、アイヒナは大きなため息を吐く。

「お前の頭の中には、穏便に解決しようと言う考えは、全くないんだな……」

今にも殴りかかってきそうなバルモスとゴメスに視線をやると、静かな声でこう言った。

「バルモス殿、とかおつしやったか？ 私とて、気分次第では愛想も作ろうし酌もする。しかし、連れと二人で寛くわいでいるところへ強引にねじ込まれては、興きようも殺がれようというものだ」

「う、うるせえ！ 少しばっかりキレイな面してやがるからって、所詮男と枕並べて金もらう類の女なんだろうが！ 偉そうな事ほざいてんじゃねえぞ！」

店中の客が注目している中で恥をかかれ、このまま引き下がる訳にはいかない。アイヒナの衿元を掴み上げると、バルモスはすでに見せた。たかが女一人、ちつとぐらい痛い目に合わせてやれば、泣いて謝罪するに違いねえ。

そう考えた自分に後悔するのに、さして時間は必要なかった。

「何か誤解があるようなので言っておくが、私はエルキリユース神殿の夢織り・エルーシャだ。乞われれば音曲も披露しようが、金をもらっても体は売らん。彼の神により眠りを奪われても構わんというなら、試してみるか？」

冷静に答えを返し、バルモスの腕を優しく掴む。

「もつとも、私も大人しくしている気はないが」

次の瞬間、店内に悲鳴が響き渡った。アイヒナの胸元を掴んでいたはずのバルモスの右腕が、肘の所でブランと垂れている。

聞き苦しい悲鳴を上げながら右腕を抱え込む男に

「虚うつけ者めが。ドラムーナでさえも恐れる我が主に、手を出したりするからだ。肘が外れただけが、そんなに痛いのか。大の大人が見苦しい」

相変わらずワイトに逆関節を極めながら闇姫が呟いた。

「いい加減に、他のお客人にも迷惑だ。お引取り願おう」

「うつつ、こいつ」

ゴメスが懷から何かを取り出そうとした瞬間、鈍い音がして素焼きの破片が飛び散った。白目をむいたゴメスが、ゆつくりと沈んでいく。

「兄さん方、そこまでにしときな。これ以上やったら洒落にならん。退いた方が身のためだろう？」

彼女達のテーブルからやや離れた席に腰掛けていたトウ・ジュが口を挟んだ。

バルモスが涙ながらに何かを言いかけた時、厨房のドアが開き女将が姿を現す。どうした事か、その手には長箒ながほうきが握られている。

「店の方が騒がしいと思ったら。また、あんた達かい！　うちにやあな、あんた達に売る酒はないよ！　ほら、帰った帰った！！」

こうして肘の骨を外されたバルモスと意識のないゴメスを担いだワイトは、女将の箒によって捨て台詞も言えないまま、店の外へ掃き出されてしまった。

「まったく。図体ばかり大きくなって、やってる事はガキのまんまだよ」

腰に両手をあてて、女将はフンと鼻を鳴らした。アイヒナと閨姫の方へ向き直り、

「悪かったねえ。ちよいと地下の酒蔵に降りてたもんだから、騒ぎに気付くのが遅くなっちまったよ。大丈夫だったかい？　何かされなかっただろうね？」

申し訳なさそうに謝るのに、

「いえいえ、私には心強い相棒がありますし、こちらの方が助けてくださいましたから」

と、笑顔でアイヒナが手を振る。先程の助け舟を出してくれた青年が、気まずそうに口を開く。

「すまん、女将。ジョッキを一つダメにしちまった」

床の上には、ゴメスを撃沈した素焼きのジョッキだった物の破片が散乱している。

「なあに、構うもんかい。気にしなさんな。お客さん方に怪我がな

くて何よりさ」

手にした簞で手際よく床を掃き清めていく。もしかしたら、このような事態には慣れているのかもしれない。

「ホントに……。大の大人がこんだけ雁首揃えて、女の子一人守れないんだからねえ。嫌なつちまうよ」

女将の言葉に、店内の客達がキマリ悪そうにうつむいた。

「まあまあ。それよりも女将、よく冷えたエールを一杯もらえないか？」

「あいよ。ちょいと待てておくれね」

トウージュの言葉に、ホッとした空気が流れた。

「ところでさ、お姉さん方。そっちのテーブルに行ってもいいかな？」

彼の申し出に、闇姫は胡散臭げな視線を投げる。そんな相棒に苦笑しながら、アイヒナは席を示した。

「先程はありがとうございました。私はアイヒナ。こちらは、連れの闇姫と申します」

頭を下げるアイヒナに、トウージュは笑いながら告げた。

「いやあ、俺の出る幕じゃないとは思ってたんだけどね。さすがに刃物はマズイと思ってさ。あ、俺、トウージュ」

「ほう、王弟殿下と同じお名前ですね」

神殿関係者である以上、王族の系譜は頭の中に叩き込んである。

「王弟殿下と同じ年の生まれだね。親が殿下にあやかろうってんでつけたのさ。しかし、いくら何でも不敬だよな」

女将の運んできた新しいジョッキと夕食の皿に手を伸ばしながら、会話は弾んでいく。

「ふん。王弟とやらがこれ程に軽薄であつたならば、たちまち魂は立ち行かなくなるだろうよ」

鶏の脚をもぎ取り、パクリと啜えて闇姫が言った。トウージュは内心、苦笑するしかない。

「これ。お前は口が過ぎる。それに殿下は、珠春宮パーティルロー

サの重臣達よりも民に深い理解があると、下々には人望が厚い」

アイヒナの言葉に、いよいよ正体が明かせなくなってしまったトウジユである。

そのまま差し障りのない世間話が続く中、闇姫とトウジユが見事な健啖^{けんたん}ぶりで、テーブルの上の料理を平らげていく。

食後の香茶を楽しんでいると、客の一人がおずおずと声をかけて来る。

「なあ、姉さん方。あんた、さっき頼めば音楽もやってくれるような事を言っていたが、本当かね？」

どうやら、バルモスとのやりとりを聞いていたらしい。

「ああ。あいにく吟遊^{バード}詩人ではないので、流行の曲には疎いかもしれんが、それで良ければ」

別の客から声が掛かる。

「構うもんかい。何か一曲やってくれないかい？ お代は弾むぜ」

「それなら、一曲につき金貨一枚だ」

横から闇姫が口を挟む。

「なにい？ そいつあ高けえや。もちつとまけてくんない」

「悪いな。こちらも懐が心許ない。もちろん、聞いてからで構わんぞ。だが、断言してもいい。お前達は金貨を払うよ」

妙に世間ずれしているドラムーナである。苦笑すると持ち歩いてるリュートの袋の口を開け、アイヒナは手に馴染んだ楽器を取り出す。先刻切れたはずの弦は、もちろん張り直されている。

「まずは、何を弾きましようか？」

「おう。そいじゃあ、“エギル王とシルス姫の恋歌”をやつてくれや」

客の声にリュートを爪弾きながら、記憶を確かめるようにリズムを口ずさんでいたが、おもむろにアイヒナは唄い始めた。彼女の声が響き始めると、店内のざわめきが消えていく。

朗々と流れるアイヒナの声は、高くもなく低くもなく、人の心にまろやかに染み渡る。吟遊詩人達の唄うバラッドは、珠春宮の宴で

何度も聴いた。拙い者も名人と呼ばれる者も、「神に与えられた声」と称される者もいた。しかしトウージュは「魂に直接語りかける声」というものの存在を初めて知った。あえて例えるなら「精霊の声」が一番近いだろう。

（アイヒナは自分の事を『夢織り・エルーシャ』と呼んでいたな。それはつまり『エルキリユース神に捧げられた者』という意味だ。）
トウージュは唄い続けるアイヒナを見つめながら考えた。彼女が夢幻鏡の持ち主だろうか？　だとすれば、なんと言う幸運だろう。

トウージュが物思いに沈んでいる間に、バラッドの一節が終了した。元々四部構成の長い曲なのだが、一番の山場の節を唄ったようだ。

一呼吸後に、大きな拍手の波がやってきた。

「おお、こいつあ黒い姉ちゃんの言うとおり、金貨一枚の値打ちがあらあな」

「いや、金貨一枚じゃ安いくれえだ」

客達が口々に賞賛の言葉をかける。

「はいはい。言葉じゃなくて、形で表しておくれ」

闇姫が言うと、曲を頼んだ客が

「違えねえや」

笑いながら金貨を投げてよこす。

「次、次、俺。んとよ……そうだ“青鹿毛の騎士”の唄を頼むぜ」

甘く切ない恋歌を奏でていたリユートが、猛々しく力強い、古い勲を紡ぎ始める。

こうして『赤い牡鹿亭』に新しい名物が加わった。

4章 夢渡り・夢織り（前書き）

「神」とは、本当に存在しているのか。

これまで、神話や伝説の中でしか語られてこなかった出来事が、目の前で繰り広げられている。

4章 夢渡り・夢織り

アイヒナのおかげで『赤い牡鹿亭』は大繁盛となり、女将は二人に宿代を半額にする事を約束してくれた。その三日後、なぜか宿を移ってきていたトウージュが女将の顔を覗き込んだ。

「どうした、女将？ 随分と顔色が悪い」

少し早い夕食をテーブルに運んできた女将、笑いながら答えた。

「いや、なあに。大した事じゃないんだがね。このところ、ちよいとばかり夢見が悪くてねえ」

その言葉に、テーブルの三人が三様の反応を見せた。

トウージュの脳裏をよぎったのは、国内の変死事件。いずれも眠ったまま死亡している「死の眠り」の事だ。

ただの疲れさ、と笑う女将に彼が何かを言いかけたとき、アイヒナが割って入った。

「女将。今日は早仕舞いにしよう。今夜の分は明日稼げばいい。それに……夢見が悪いとなれば、それは私の領分だ」

別人のような口調に、女将は目を丸くする。結局、その日はアイヒナの言うとおり店を早仕舞いし、女将を休ませる事にした。厨房の炉の火の始末をトウージュに頼むと、アイヒナと閨姫は女将の寝室へと入っていった。

「どのような状態なのか、出来るだけ詳しく話してもらいたいのだが……」

アイヒナに促されるまま、女将はここ数日間の事を話し始めた。それによると、眠りにつこうとして布団に入ると息苦しく、寝つきが悪い。ようやく眠ったかと思えば妙な夢を見ると言う。夢の内容は覚えていないのだが、とても嫌な何者かに追いかけられたり、まわりつかれていたような気がするらしい。目が覚めて感じるのは漠然とした恐怖感と不安感、そして肉体の疲労感。

実際、話をしている間にも彼女の顔色は酷くなっていく。

アイヒナはテーブルの水差しからグラスに水を注ぐと、荷物の中から取り出した小瓶を振った。液体を二・三滴水に落とすと慎重に掻き混ぜる。

「あんた、お医者様なのかね？」

アイヒナの勧めたグラスを受け取りながら、女将が不思議そうに聞いた。

「いいえ。私はエルキリユース神殿の巫女。夢織りのアイヒナ。女将さんの夢に入り込んだ夢魔を退治します。これは心を落ち着かせ、眠りに導く薬です」

うなずいて、ゆつくりとグラスを干す女将から視線を外し、闇姫の用意したたらいに水を張ると呪符を落とす。水の上で印を切り、聖別されたそれに小振りの鏡を沈める。

「主殿、そろそろだ」

ベッドの上では、女将が静かな寝息を立てていた。 次の瞬間、

闇姫が鋭く振り返った。

「誰ぞ！」

音もなくドアが開き、顔を覗かせたのはトゥージュユだった。

「いや、あの　覗くつもりじゃなかったんだけど、気になっちゃって……」

ため息を吐きながら、アイヒナは彼に入ってくるように示す。

「ここにいるのは構わないが、何があっても騒いだりしないように。女将さんの命に関わる問題だ」

不満気な闇姫に時間がないと告げると、彼女もしぶしぶ引き下がった。

「始めるぞ」

床に座りリユートを抱えたアイヒナが、闇姫とトゥージュユの二人に告げた。

リユートの第一音が響くより早く闇姫の姿がゆらぎ、次の瞬間その場にいたのは黒く巨大な狼。艶やかな毛皮と燃えるような紅い瞳。人一人乗せても何の障りもなく、野を疾駆できるであろうその逞し

い体。

思わず声を上げそうになって、トウージュは慌てて口を両手で押さえた。

アイヒナと闇姫の変じた狼は、たらいに張られた水に見入っている。窓から差し込む月の光が、たらいの底に沈められた鏡に反射する。と、静かな水面に何かの映像が結ばれ始めた。目を凝らしてみると、どうやら『赤い牡鹿亭』の食堂のようだ。しかし、様子が違う。

棺が置かれている。大きな棺と、寄り添うように小さな棺が。その棺に縋り付いて泣き崩れているのは、今よりも若い女将の姿。棺に納められているのは彼女の夫と子供であるらしい。

見ていられなくなつて視線を逸らしたトウージュは、ベッドの上の女将を見て息を飲んだ。彼女の体がドス黒い影に包まれている。

（な、何だアレは？）

トウージュの考えを読み取つたように、アイヒナが静かに言った。「よく見ておくがいい。あれが『死の眠り』の正体、^{パフォナ}夢魔の影だ」
水に映つた景色が揺らいだ。

憎かるう

辛かるう

やめてしまえ

終わらせてしまえ

意味のない生など

声にならない声が頭の中にこだまする。同時に、女将の体を覆つた影が暗さを増す。

疲れただろ

嫌だろ

与えてやろ

夢もない永遠の眠りを
甘やかなる死を……

「闇姫！」

音もなく、闇姫の変じた黒狼がたらいの水めがけて飛び込んだ。
水しぶきを予想して両手で顔をかばったトウージュだが、水滴どころか水面には波紋一つ立たない。

リユートを音高く奏でながら、アイヒナが祈りの言葉を紡ぎ出す。

「遥かなる高みにて在る　いと貴き御神よ

その眠りを妨げる　我を許し給え

御身に捧げられたる　巫女なる我が

その名を呼ぶを　許し給え

清浄の闇もて　悪夢を抜わん

楽の音をもて　我が神に請う

鋭き牙もて　悪夢を倒さん

我に一時　御身の神力　依らせ給え」

韻を踏んだ祈りの言葉が、速やかにアイヒナの心を解き放つ。

水鏡となった水面には、すでに女将の姿はない。そこに映し出されているのは、醜くただれた老婆の顔を持つ巨大な鴉と闘う黒狼・

闇姫の姿。

「あ、あれがバフォナか？」

嫌悪にしわがれた声で、トウージュが呟いた。

夢魔・バフォナ。名前は聞いたことがある。人の夢に憑き、夢で心を惑わし人の精を糧とする。通り一遍の知識はある。しかし、知っているだけだ。「識っている」とは違う。

「元々バフォナは、あのように力ある存在ではなかった。人の精を吸うとはいえ、死に至る事例は稀だった。アレは、バフォナを超えた存在になりつつある姿だ」

アイヒナの声は妙に平坦だった。その黄金の瞳は夜の中で、炯炯^{けいけい}と光を放っている。銀の長髪が、風もないのに波のようにうねる。リユートから不思議なメロディが流れ出した。高く、細く、低く、強く……。側にいたトウージュさえも、体の底から力が湧き上がってくるのを感じる。アイヒナの澄んだ心地よい声が唄っている。いや、祈っているのか。

「夢の鎖 戒めよ

夢の荊 取り囲め

夢の槌 打ち据えよ

夢の波 押し包め

全ての夢を侵す存在よ

その身に 夢の獄屋を与えん

夢の翼 解き放て

夢の牙 貫かん

夢の刃 いざ来たれ

夢の風 吹き荒れよ

全ての夢を 護る獣よ

その身に夢の鋼を与えん

疾く来たれ 護りの力よ

しかして 夢は正しくなりぬ」

闇姫の姿が変化する。鋭い牙が伸び、その背に花咲く様に闇色の翼が開いた。力強く翼を打ち振ると、恐ろしい唸り声を上げている怪物の頭上に飛び上がり、後脚で鴉の体を蹴り落とす。無様な格好で落下した怪物の広げた両翼の上に、闇姫が着地した。その四肢は、しっかりと鴉の翼を踏みつけている。しきりと体を捻って闇姫を振り落とそうとするが、鋭い爪がそれを許さない。

もがく夢魔の周囲に、ビッシリと棘の並んだ荊^{つばき}が現れた。夢魔の身体中に絡みつき、確実にその自由を奪っていく。

狂ったようにもがく夢魔の首筋、醜くただれた老婆のうなじに、閻姫が深々と牙を打ち込んだ。聞くに堪えない、耳障りな叫び声が響き渡る。さらに深く牙を食い込ませた瞬間、アイヒナがそっと呟いた。

「至高なる 御身を讃えん」

＊＊

「私は赤ん坊の頃、エルキリユース神殿の前に捨てられていたんだ
そうだ」

コリヨンの街の人々と『赤い牡鹿亭』の女将に別れを惜しまれながら、旅を再開して三日が経った。

アイヒナと閻姫にいたく興味を惹かれたらしいトゥージュが、新しい面子として加わっている。

「身許を明かすようなものは、一切つけていなかったらしい。ちょうどその年は天候が思わしくなくて不作続きだったそうだから、口減らしのために捨てられたんだろう。そしてその頃、巫女頭を勤めていた夢長様に拾われたんだ」

閻姫は例によって、アイヒナの影に潜んでいる。道中トゥージュと話をしているうちに、いつの間にかアイヒナは自分の身上を語っていた。

「親に会いたいか、思わないのかい？」

「いや。私の親は夢長様一人だし、今さら会ったとしてもお互いに戸惑うだけだろうさ」

淡々と語られるアイヒナの過去に、トゥージュは沈黙で答える。

「なあ。『夢織り^{エルシヤ}』っていうのは、神殿の巫女の事だろう？ どうして旅になんか出ているんだい？」

結局、沈黙に耐えかねて口を開いたのは、トゥージュだった。随分と高くなつた陽を仰ぎ、アイヒナはリズム良く脚を運びながら答えた。

「巫女達全員を『夢織り』と呼ぶわけではない。通常、神殿に使える巫女達は『夢読み』^{エルンド}と呼ばれる。彼女達は神殿で法典を学び、人々の不安を取り去る。他の神殿の巫女と同じで、これは階級が一番下の者達だ。その上になると『夢語り』^{エルクス}と呼ばれ、神殿の行事を司る。そして人々の夢を解き明かす。それより上位が『夢使い』^{エルドーア}。エルキリユース神に直接仕える者達だ。そして『夢長』^{エルミノア}。神意を伝え、全ての巫女を統括する」

冬を迎え始めた街道は、乾いた砂を含んだ冷たい風が旅人の足を急がせる。

コリヨンから王都ハディースまでは馬で十日間。徒歩で行くとなれば、早くても十五日はかかる。

「『夢織り』^{エルシヤ}とは『エルキリユース神に捧げられたる者』という意味だ。宗都サンガルの神殿には、私一人しかない」

そう言つと、街道から離れた木立に目をやったアイヒナが小さく呟いた。

「闇姫、弦が共鳴している」

「では、ここも……？」

足元から闇姫の返事がある。最初は驚いていたトウージュユだが、闇姫がドラムーナと言う伝説の中の生き物だと言う事を納得し始めたらしい。

何の説明もなく街道からはずれ、二人と姿なき一人は木立へ向う。『神に捧げられたる者』。

それが、神殿に仕える巫女達とどれほど違うと言うのか。正直トウージュユには理解できない。一生を神に仕え、乙女である事を誓った女性。神殿から一步も外へ出ずに人生を送る巫女もいる。極めて稀の一環として、請われれば男と枕を共にする巫女もある。極めて稀に還俗して婚姻し、子を成す者もないではない。が、全体から見れば「巫女」と称される者達は「神」の端女^{はしため}であると言えるだろう。

そういえば王宮で執り行われる神事にエルキリユース神にまつわるものがなかった事に、今さらながらにトウージュユは思い当たった。

王族の一人として、国王の代理として、王宮で行われる神事にも、サンガルで行われる神事にも参加した経験のあるトウージュだが、その中にエルキリユースに関係した祭事はなかったように思われる。アイヒナに疑問をぶつけてみようにも、身分を偽っている今、真つ向から質問する訳にもいかない。考えているうちに謎が謎を呼び、彼の頭は「何故？」で一杯になってしまった。

木立の中へ入っていったアイヒナは複雑に絡み合った下生えを踏みしだき、さらに奥へと進んでいく。

人の手が入っていないほど奥まで来ると、アイヒナは耳を澄ますようにして目を閉じた。サワサワと風が枝葉を揺らす。側に立って辺りを見回していたトウージュは、首筋にチリチリする感覚を覚えてそちらに目をやった。

街道から風に乗って届く音は僅かで、木々の壁に吸い取られてしまふ。人工の音は、己の呼吸音と鼓動のみ。不思議な事に、アイヒナからはそういった「音」が感じられない。確かにそこに「いる」のだが、木々の気配に完全に溶け込んでしまっている。

地を這う蟲が立てるカサカサという音。どこかで鳥が飛び立つ羽音。小動物が枝を渡る音。木々が水を吸い上げる気配。木立の奥で生き物が警戒している気配。そういった自然の気配とは相容れない、むず痒いような、不快感を伴う何か。それが、自分の意識を過敏にしている。

トウージュの視線は木立の奥を透かし、一本の樹に行き着く。蔭の絡まったその樹は、樹齢いかほどのものであるうか。ささくれた断面を見せて、中程から真つ二つに裂けている。まるで、恐ろしい程の圧力で内側から破壊されたようだ。そこから漂ってくる気配は、悪意を孕んだ喜びに満ちている。

「トウージュ殿にも判る程、奴は力を取り戻したと言う事か」

耳元で唐突にアイヒナの声がして、トウージュは我に返った。今まで彼女の存在を忘れていたのだ。

「あ、あの木は？」

動揺して上ずってしまった声で、トウージュは質問する。

「私のいくつかある目的の一つ。この国を脅かす者の足跡」

いささかぶつきらばうに答えると、アイヒナは裂けた木に近寄った。内側に抱え込んだモノの力に耐え切れず、力尽きたのが見て取れる。

「これで幾つ目だ？」

「十箇所。ここは一月ほど前かと」

「一向に追いつけんな。いつも後手後手だ」

「確実に近づいてはいる。そう、己を責める必要もないだろう、主殿」

トウージュには理解できないやりとりを交わす主従を見つめ、彼は不思議な既視感を覚える。どこかで見た、彼には馴染みの深い光景。

肩を落とし、ため息を吐くアイヒナの姿が、ふと、兄王コルウインの姿とダブって見えた。

（ああ、病に倒れた頃の兄上と、彼女はとても良く似ているのか）

国の要という立場ゆえ、コルウインは自らを厳しく律してきた。その兄が病に倒れた時、思い通りにならぬ己の身体にどれほど歯がゆさを感じていたのか。常に側にあったトウージュは誰よりも知っている。自分の無力さに歯噛みする兄の表情は、眼前のアイヒナのものと同じだ。そしてその表情は、常にトウージュに「役立ちたい」という気持ちを起こさせるのだ。

「アイヒナ、俺にやれることはないのか？」

口に出してしまってから、苦笑する。自分には、やらなければならない事があるはずなのに。

だが、トウージュには妙な確信があった。彼が追っているものと、この主従が追っているものは同じであると言う確信。

「詳しい話を教えてくれないか？」

目を見開いて振り向いたアイヒナは、トウージュの申し出にしば

し考え込むと、元来た道へと足を進めた。
「今夜の宿を探そう。話はそれからだ」

5章 偽善・偽物の神威（前書き）

国中をおびえさせている「死の眠り」。

その病を打ち払う事が出来るといふ女が現れた。彼女の本当の目的はなんなのか？

5章 偽善・偽物の神威

王都ハディースは、しゅしゅんぐう珠春宮。パーティルローサをぐるりと囲む環状都市で、四つの地区に分けられている。

東のザイル、西のカッパード、南のタリス、そしてここ、北のウィルカ。この街を治める領主はソキア・ベルドナ。瑰国王コルウィンから男爵の称号を賜っていた。

カーティは灰色のローブを身を包み、領主の館の窓から街を見下ろしていた。

「ふ、ん。また邪魔が入ったか。まあ、良い」

桜色の口唇からもれる言葉は、その瞳が窓の外の景色とは別の物を見ている事を物語っている。

「おや、カーティ殿。こちらにおいてでしたか」

でっぷりと太った小柄な男が、甲高い声で話しかけながら部屋に入ってきた。

「ええ、ソキア様。街を眺めておりましたの。ところで、奥方様のお加減はいかがですか？」

「カーティ殿のお陰で、あれも具合が良くなったと喜んでおります。まったく、カーティ殿にはなんとお礼を申して良いやら」

「いいえ。わたくしの方こそ、ウィルカの領主様のお屋敷へ上げて頂けるなんて。お世話をお掛けして、申し訳ないと思っております」

カーティが旅の薬師としてウィルカに到着したのは一週間前。領主ソキアの妻、ターニヤが病に臥せっている噂を聞きつけ、屋敷へやって来た。カーティの調合した薬を与え、介護する事数日。果たして、ターニヤの病は快方へ向かい、カーティはソキアに歓待されている。

「ときにソキア様。妙な噂を耳にしたのですが？」

「と、申されますと？」

物憂い表情でカーティは続ける。

「何でも、不可解な病が流行っているとか。眠りながら亡くなられる方があると、聞き及んでおります」

「各地をさすられる貴女のような方のところにまで、そのような噂が……。いやはや、まったく。どうなっておるのやら、原因がさっぱり判らんですよ。それまで元気でいた者が、ある日、眠ったまま死んでしまうのです。もちろん、医者にも皆目見当がつかない」

ソキアは薄くなった頭に手をやりながら、渋面を作っている。

「神殿の方々は、何かご存知なのではありませんか？」

カーティの瞳に軽侮の光が宿っている事にも気付かず、ソキアは続ける。

「神官連中なんて、何を考えているか知れたもんじゃあない。奴等の頭の中は、それこそ神々のことで一杯で、世俗の噂に耳を貸す者なんかおりやせんのです」

「まあ。ソキア様は神々を信じてはられませんの？」

「いやいや。わしだって大地母神イシュリーンの信徒ではありませんよ。しかしそれは、何事もなく日々を暮らしておればこそこの話というもので。正直なところ祈っても答えのない神なんてもんは、何の役にも立ちはしないものだどつくづく感じましたよ」

現に、と言葉を繋いだ。

「わしの妻の病一つ治せなんだ。神が誠に坐すなら、国王陛下の病だって祈りさえすれば治るはずでしょうに」

その時、部屋のドアが開き灰色のドレスを着た中年の女性が入ってきた。

「あなた」

「おお、ターニヤ。具合はもう良いのかね？」

太った領主の奥方は、すらりとした上品な婦人だった。

「ええ。ご心配をお掛けしました。もう大丈夫ですわ。それよりも、会議のお時間ではございません事？ 皆様をあまりお待たせしてはいけませんわ」

「ああ、そうだな。カーティ殿、申し訳ありませんが失礼させてい

「いただきます」

「どうぞ、お気になさらず」

ソキアが部屋を出て行くと、カーティは椅子に腰掛けフンと鼻を鳴らした。

「大した男でもなさそうだな」

それまでの一歩控えた態度をかなぐり捨て、主人然としてくつろいでいる。

「貴方様がお気にかかる価値などない、愚かな男ですわ」

椅子の背に手をかけ、ターニヤが甘えた声で言う。

「どうだ、体の具合は？」

「ええ。もうすっかり馴染みました。あの男は、何も気付かないでしょう」

ターニヤはニヤリと笑った。それは先ほどまでの上品な笑みではなく、相手を馬鹿にしきった嘲笑だ。

「では、この屋敷から始めよう。我の力もおおかたのところ戻ってきた。これまでのように、人間を殺さずとも糧は集められる」

カーティの髪を愛しげに触りながら、ターニヤが囁いた。

「あの男はいかが致しましょう？」

足を組み、頬杖をつきながらカーティはどうでも良さそうに口を開く。

「ソキアの望みは何だ？」

「さして目新しくありません。権力と金。己の力量も量れぬ、愚昧の輩ですわ」

軽蔑をこめて吐き捨てるターニヤ。口にしているのは、自身の夫の事だと言うのに。

「では、望むままの夢を与えてやろう。奴にはもったいないほどの夢をな」

含み笑いで答えるカーティに、ターニヤがうつとりした眼差しでしだれかかった。

「ああ、我等の誉れ高き御主様。早く私にも獲物を与えてくだされ」

「慌てるでない。これより、我等の宴を始めよう。お前にも存分に働いてもらわなくてはな」

「有り難いお言葉ですわ」

人外の宴の準備が進められていることを、街はまだ知らない。

6章 創世の神話 エルキリユース（前書き）

エルキリユース神殿で語られる、門外不出の創世の神話。

それはトウージュにとって、これまでの価値観・世界観を打ち砕くのに十分過ぎる内容だった。

6章 創世の神話 エルキリユース

その夜、トウージュはアイヒナの部屋を訪れていた。必要以上に絞られたランプの灯りの中で、アイヒナはベッドに腰掛け、リュートの弦を調律している。会話のつかかりを探していたトウージュに、アイヒナがまるやかな声で問いかけた。

「トウージュどの。創世の神話はご存知だろうか？」

突然の質問にやや戸惑いながら、トウージュは答える。

「ラングマールが世界を造り、神々を生んだってやつかい？」

セルギナ大陸に暮らす者ならば、それこそ三歳の子供でも知っているはずだ。

「ではなぜ、ラングマールを祀る神殿がないのだろう？」

「そりゃあ、ラングマールが眠っているからだろう？ この世の最期に目覚めるまで、彼の神が顕現けんげんする事はないって言うし」

アイヒナがうなずいた。

「そう。彼の神は眠っている。それでは“秘められたる御名”と呼ばれる彼の神に、ラングマールという“名”があるのは、なぜなのか？」

考えた事はなかった。

質問の真意が理解できず、トウージュは口をつぐんだ。

「ラングマール。この言葉こそが、遙か神代に失われた古代語で“秘められたる御名”という意味なのだ。そして、眠り続けるかの神には別の名がある」

だが神学上の疑問点と、昼間の会話の接点が見つからない。怪訝な顔をしているトウージュにアイヒナは薄く微笑みかけて、リュートを持ち上げた。

「基本的な知識として、頭のどこか片隅に留めておいてくれればいい。これから語るのはエルキリユース神殿の教典にある神話で、一般的には知られていない。ある理由があって秘されている訳だけど。

今回は例外を認めてもらおう」

トウージュに楽な姿勢で座る事を勧め、静かにリユートを鳴らし始めた。そつと目蓋を閉じたアイヒナは、不思議な声音で語り始めた。それは、これまでトウージュが聞いてきた彼女の声のいずれにも似ており、そしていずれとも異なっている。

全てのものが混沌の中に溶け

未だ始まりなく 終わりもない

一柱の神 目覚めたり

世界の意を受け 世を創造せり

アイヒナが語り始めると同時に、トウージュの意識は肉体の支配を離れた。

目に映る全てのものが輪郭を失い、乳白色のモヤに包まれていく。モヤは渦を巻き、ありとあらゆる存在を呑み込んでいく。渦に意識を集中させた途端、トウージュはその流れに巻き込まれ、感覚を剥ぎ取られていくのを理解した。上下の感覚もなく、浮いているのか沈んでいるのかわからない状態の中で、「自分」という存在が急速に溶け始める。外界と己を隔てていた「個」という殻がなくなり、「彼」は「世界」と一つになる。今や「世界」は「彼」の中にあり、「彼」は「世界」の中にある。

何も見えない乳白色の世界は、「光」がないために明るくなく、「闇」がないために暗くもない。そして「彼」は理解する。「世界」が誕生を望んでいる事を。世界が裡に孕んだエネルギーはあまりにも巨大で、そのまま留め置くには激しすぎた。「彼」はそつと意識の腕を伸ばし、乳白色のモヤを掻き分けた。細心の注意をはらった慎重な動きだったにも関わらず、世界は轟々と「音」をたて、やがて二分されて落ち着いた。深い満足と共に「彼」は二分した世界の一方を「天」と名づけ、また一方を「地」と名づけた。

だが天も地も不安定で、ともすれば分かれた互いを求めて混じ

り合おうとする。「彼」は静かに息を吐き、天を地よりも軽くし混じる事のないようにした。やがて地は冷えて固まり、世界にしつかりと根付いた。

そのまま「時」が流れた。「彼」には有り余るほどの時があつたため、世界を仕上げるのをいそぐ必要がなかったのだ。しかし動き始めてしまった世界は、一層激しく荒れ狂うエネルギーに軋みを上げ、更なる変化を望んでいた。

男神にして女神なる 至高唯一の御神が

その身を分かちて 成したもう

天を統^{おさ}むる シャーリハーン

「彼」は創造を続ける上で、手助けをしてくれる眷族の必要性を感じた。自分を構成しているものの一部を変化させ、「神々」と呼ばれる存在を造り出したのだ。

まず、天に関するものを統括する神として天空神を造り、シャーリハーンと名づけた。神の色として「蒼」を与え、男神とした。

地を統むる イシュリーン

二番目に造り出したのは地に関するものを統括する大地母神で、「緑」を纏った女神イシュリーン。そしてこの二柱を夫婦神とした。

流れを司る神 ケシュ

炎を司る神 ネフティ

風を司る神 バルメツサ

海を護る神 メライーサ

生を与える神 アルスメナ

死を与える神 ラ・ズー

初源の六大地神と呼ばれたり

シャーリハーンとイシュリーンの結び付きは、六柱の神を生み出した。

それぞれの色と属性を纏い、大地を優しく覆っていく。死は生と同じく荘厳で、命ある者達は次の生命のステップへ旅立つ仲間を静かに、祝福さえこめて送り出した。

空の黄金たる神　トラバルーナ

空の白銀たる神　リユス

輝きを造りし　ミュール

輝きを与えし　フォルン

初源の四大天神と呼ばれたり

地の創造が整ってくる中、「彼」はシャーリハーンの部下とも言うべき神々を造り、天の創造にあたらせることにした。

己の右の目から太陽神トラバルーナを、左の目から月神リユスを造り出した。この二柱の神の結び付きから、芸術を司る神ミュールと美の神フォルンの双子神が生まれた。

トラバルーナは昼を造り、リユスが夜を造る。ミュールが雲を造り、フォルンが星を造った。

かくして　創造の環は閉じられたり

至高なる神の　眠りにつかんとする瞬間

遙か遠く　今は存在せざる宇宙より

創造の環を超え　知られざる神の堕ち来たり

「彼」の手による創造は終わった。世界は落ち着きを取り戻し、転地は生命のサイクルを廻し始める。全ては調和の中に動き始めた。満足した「彼」は、限らない慈愛と祝福のうちに世界を閉じた。

しかしその環が閉じられる瞬間、「彼」でさえ予想し得なかった

事が起こった。遙かなる宇宙の果てより、「現在」ではない、別の次元より堕ちて来た者があったのだ。その衝撃は「彼」が造り出したばかりの世界に凄まじいショックを与えた。

海が荒れ狂い、山々が炎の涙を流す。仲良く暮らしていた動物達は恐怖のあまりに言葉を失くし、傷付け合うようになってしまった。大地は安定を欠き、神々の重さに耐え切れずに震えた。

彼方より来る神

世界の法を破壊せんとす

至高なる神 これを憂い

姿と名を与え 世界の環の内に迎えたり

堕ち来る神 激しく抗いたるが

法の環より 飛び立つ事あたわず

来る神 名を邪神アーカバルという

世界の受ける傷を出来る限り小さくしようと、「彼」は狂おしく考えた。堕ち来たる者の存在は、著しく世界のバランスを狂わせた。「彼」の創造物ではないために、「彼」の支配を受け入れないのだ。その存在を抹消しようとすれば、余波を受けて世界そのものが消えてしまう。「彼」が直接働きかければ、生命のサイクルを刻み始めた全てが、成熟を見ないまま終了を迎えてしまう。そのどちらも避けなくてはならない。「彼」は仕方なく招かれざる存在に姿を与え、名を与えて世界の枠に組み込んだ。しかしそれは存在の力を制限する事になるために、激しい抵抗を受けた。「彼」は断固として力をふるい、その存在に「邪神アーカバル」としての枷を与えた。

だが、その代償は大きかった。もはや大地は神々の巨大な力に耐え切れず、神々は愛する大地より去った。生命の回転が途切れ、種は芽を出さず、花は実を結ばず、死は生を造り出さなくなっていた。世界を守る為に「彼」は自身の知覚の一部を切り離し、それに「初源の獣・ドラムーナ」の名前を与えた。この獣に自分の代わりに世

界を監視する役目を与え、獣の姿と「彼」の似姿とに変化する力を与えた。そして「彼」はそのまま静かにゆつくりと知覚の衣を広げ、自らが創造した世界を包み込んだ。これにより「彼」は世界と一つでありながら、世界を内包する存在となった。

世界は廻る 生命の環を

時代は巡る 運命の輪を

彼の神の眠りによる 始まり

彼の神の目覚めによる 終焉

世界の成熟を願う夢を見ながら、「彼」は悠久の眠りにつく。世界は「彼」の夢の中で進化を続ける。

眠りの聖なるかな

夢の安らかなるかな

遥かなる 高みにいます御神よ

我等 常永久に御身を讃えん

世界より秘されたる その御名を

深き畏怖もて 口にせん

神秘なる アーグ 秘されたる ラングマール

至高なる フォン エルキリユースの神よ エルキリユース

御身の グラーベ 深き夢の ヒューグナ

安からん事を ワイトルーフェン 祈るなり アルバン

視点が高くなっていく。グングンと勢いを増し、意識が時間を超えていく。世界を遥かな高みから見下ろし、宇宙の意志さえ感じ取れたと思った瞬間。

眠る巨大な神を視た。いや、感じたというべきか。限りない慈愛に満ち、全てを内包する神。

「それが、私の神。アーグ・ラングマール・フォン・エルキリウス。始まりにして終焉の神」

聴こえてくる、まろやかな声に導かれて今度は下へ下へと降りていく。意識を引きずられるスピードに耐え切れなくなった時、何か優しいクッションに包まれたようにフワリと浮上する感じがして……。

「つく」

トウージュは急激な五感の変化に、堪え切れずに呻いた。

「お帰りなさい。まだ動かない方がいい。体と意識のバランスが悪いのでな」

おずおずと声の方へ目をやれば、アイヒナが壁にもたれかかって彼を見ている。

「いかがだったかな、トウージュ殿。数千年、数万年にも及ぶ、時間の旅は？」

「あれが、本当に起こった事だと？ 世界を創造したのがラングマールではなく いや、厳密に言えば同じだが エルキリウスで、この世界は彼の神の夢だと」

「それが、この神話が門外不出になっている所以ゆえんでな。普通の人間は、自分の立っているこの世界が神の見ている夢だという事を認識すると、非常に神経質になるらしい。ところで、少しは落ち着いてきたかな？」

右手で両目を覆っていたトウージュが、疑わしそくにアイヒナを見る。

「これから本題に入る。まだ先は長い」

壁に寄りかかったまま、アイヒナは話を続けた。

「神々が世界を去った後、世界は成長を続けた。やがて人間が誕生し、文明が築かれた。人間は知恵を持ち、驚くべきスピードで地に満ちた。けれどそれは予想外の問題を引き起こした。神々でさえ、全知全能でなかったという事だ」

アイヒナが辛そうに息をつく。

「大丈夫か？ 随分疲れているようだが」

心配そうに問いかけるトウージュに大丈夫だと手を振って答えながら、アイヒナは大儀そうにテーブルに向かって歩き出した。

「あれをやると、ひどく体力を消耗するんだ。何と言っても世界の黎明期までを遡り、またこの時代まで連れ戻すのは、並大抵の事じゃない。神殿で全ての教義を終えた時、教師役だった姉巫女様方は三日間寝込み、私は一週間ベッドから出られなかった」

水差しから二つのグラスへ水を注ぐと、一つをトウージュに渡して、またベッドに腰掛ける。

「さて、人間とは困ったもので、実に様々な欲望を持っている。金、権力、名誉、地位、愛情さえも欲に変わる。その飽く事のない欲望に、アーカバルが目をつけた」

トウージュは先ほどの堕ちて来た神のイメージを思い出して、身震いしながら魔除けの印を切った。

「そんな事をしなくても、この部屋には悪しき存在は入ってこれない。アーカバルのせいで、地上は大混乱に陥った。本来は地上に介入しないはずの神々も、さすがにまずいと考えたようだ。それぞれに策を練り、アーカバルの不意をつく事に成功した。アーカバルは粉々に吹き飛ばされ、力ある部分は世界中に封印された。力なき部分は夢魔^{バフォナ}となり、人々の夢の隙間に入り込んだ」

「それなら、アーカバルは今、封印されているわけだ」

「……いや。されていた。過去形だ・誰かがそれと知らず、封印を解いてしまったらしい」

いったん言葉を切り、トウージュに目をやる。

「眠り病、または『死の眠り』について、どのくらい知っている？」

「うっ と、まあ、噂話くらいかな」

動揺を表に出さないように、慎重に答える。

「復活したとはいっても、アーカバルに本来の力はない。だから、奴が目覚めて最初にやる事は、精を集める事だ。己の分身であるバフォナを使って、人々の夢に取り憑き、徐々に精を吸い取る。そう

やって、他の封印を破る力を蓄えたんだろっ」

あの事件の背景に、そんなに巨大な事情があったとは。トウージュの背中を、気持ちの悪い汗が流れていった。

「それじゃあ、封印が全部解けたら……」

「理屈では、アーカバルが完全復活するな」

「理屈では？」

「もつとも力のある破片は四つに割られ、それぞれ強固な封印が施された。すなわち、珠春宮パーティルローサ、緑夏宮ツアーイムーラ、樹秋宮スランガルニーナ、澄冬宮グランマイルだ」

そんな！ トウージュは身体中の血が、音を立てて引くのを感じた。

「ふ、封印は、どうすれば解けるんだ？」

震えながら発せられたトウージュの問いに、アイヒナは不思議な目をした。

「なあ、トウージュ殿。私は今、神殿より外には決して漏らしてはならぬ話をした。共に旅をする上で隠し事があつては何かと困ると思ったからだ。そろそろ本当の事を話してはもらえまいか？」

静かな声だった。

この数日間の旅で、トウージュはアイヒナの人となりがある程度は理解していた。今ここで自分の正体を明かすことは、メリットにはなつてもデメリットにはならないだろう。

「俺は。俺の名前は、トウージュ・ラムナ・イルス・瑰。当代国王の弟にあたる」

彼が身分を明かすと、アイヒナはにつこり笑って拝跪はいきの礼をとる。「これまでのご無礼、何とぞお許しください、トウージュ王弟殿下」首を垂れるアイヒナに、トウージュはオロオロと手を振った。

「やめてくれ！ それが嫌だったんだ。ここに居るのは、ただの『トウージュ』だ」

ただの「トウージュ」。それは一部本当で、大部分本当ではない。本人が望むと望まざるに関わらず「身分」はついて廻るのだ。それ

はトゥージュ本人が一番良く知っていた。それでも、アイヒナと闇姫の主従に「王弟」として扱われるのは嫌だった。

「殿下が、さよう仰せなら」

「仰せなのさ」

二人の目が合う。と、同時に笑い出した。ひとしきり笑ってから、アイヒナが目尻に溜まった涙を拭いて言った。

「夜明けまで、あと幾らもない。話を続けてしまおう。四つの封印の存続の条件。それは、各々の王族の直系が玉座にあること。ただそれだけだ」

いささか拍子抜けする答えだった。もつと複雑な何か、儀式的な事があると思っていたのだ。しかし、考えてみればそれは簡単な事ではない。現に魂では国王に世継ぎの御子が無いではないか。万が一の場合にはトゥージュ自身が玉座に就くことになるが、もしも自分が世継ぎを成す前にこの世を去れば……。魂は女性の王位継承権を認めていない。コルウィンとトゥージュがいなくなれば、玉座に就くべき直系の王族は、事実上途絶えてしまうのだ。

「それで、君達はどこまで奴に近づいているんだい？」

「嫌な質問だな。正直な話、あまり成果があるとは思えない。いくつかの情報と、いくつかの兆候だな」

「これからどうする？」

「王都ハディースへ向かう。奴は必ず王都へ行くはずだからな」

息を吐いて前髪をかき上げるアイヒナが、窓の外へ目をやった。

「少々、長話が過ぎたようだ。多分明日　いや、もう今日か

は、半日は動けないだろう。宿の方には頼んであるから、ゆっくり休んでくれ」

ああ、と同意を示してから、トゥージュはふと口を開いた。

「そう言えばアイヒナ。君は何で、男みたいなしゃべり方をするんだい？」

きょんとするアイヒナ。おそらく、そんな事を質問されたのは初めてなのだろう。

「……おかしいか？」

彼女には珍しい、自信なさげな返答に、

「そんな事はない。変な言い方かもしれないけど、俺は似合っていると思うよ」

立ち上がってドアへ向かうトゥージュの背中に、今度はアイヒナが声をかけた。

「殿下。国王陛下に御子がなく、殿下が王位に就けない場合、継承者は誰がお立ちになれるのか？」

それは、ついさっきトゥージュ自身も考えていた事だ。

「先代国王陛下の義弟であられる、ノーヴィア公爵だ。正確には、俺の叔母にあたるイルネア公爵夫人の御夫君だが、魂では女性に継承権が認められていないからな」

質問の真意に対する彼女の答えはなかった。しかし、思案気に揺れるアイヒナの瞳の奥に、トゥージュは正しく答えを読み取っていた。

7章 王都 ハデース（前書き）

旅の薬師・カーティ。彼女は巧みな話術と病を癒す術で、街の権力者に取り入っていた。

一方では病を癒す奇跡の救世主。しかし、もう一方の顔は……。

7章 王都 ハディース

その日、アイナセリヨースはいつものように国王名代として謁見の間で朝議に参加していた。病がちな国王は、美しい王妃の才能を正確に見抜いて、瑰国の共同統治者として声明を発していた。が、その異例の措置に、王宮内は蜂の巣をつついたような騒ぎになったのも事実である。

もう一つの玉座の空白を痛いほど意識しながら、アイナセリヨースは日々の責務を行っていく。訴状の内容を吟味し、重臣達の言葉に耳を傾け、的確な判断を下していく。

彼女を侮る心無い言葉や、視線に含まれる棘にも、もう慣れた。

全ての訴状と報告をさばき、妙に張り詰めた空気の中、朝議が終了する。その内容を伝えるために、アイナセリヨースは王の寝室へと足を向けた。コルウィンが病に倒れてから、国王夫妻の寝室は別々になっている。中庭に面した珠春宮の中でも一番日当たりの良い一室が、現在の国王の寝室だ。

途中で出会った侍女から薬湯と季節の花の載った盆を受け取り、先を急ごうとした彼女の背中に声がかかった。

「王妃殿下」

振り向いた先にいたのは、羊皮紙の束を抱えた宰相のリュフォンだった。

「まあ、宰相閣下」

「これから陛下の御寝所へ？」

「ええ。朝議のご報告と、お薬をお届けに」
リュフォンは王妃の持つ盆へと目をやった。

「そのような事は侍女にお任せになればよろしいのに」

臣の中には、このような王妃の振る舞いに眉をしかめる者もいる。曰く、高貴な身分の者のすることではない。出自が卑しいので、自ら侍女のような真似をする、と。

そんな宰相の言葉に、アイナセリヨースは笑って見せた。

「どれほど生まれが貴くとも、大切な方の看病は自分でやりたいと思うものですわ。違いまして？」

「御意にございます」

リユフォンは同意しながら、羊皮紙の陰で指を立てて見せた。それを見た王妃は明るく提案した。

「あら、わたくしとした事が。無駄話で宰相閣下をお引止めしてしまいましたわ。お急ぎだったのでございましょう？ よろしければ、一緒に陛下の御寝所へ参りましょうか。そうすれば、陛下への御用も一度で済みますし、陛下への負担も少なくて済みますわ」

「お気遣い、ありがとうございます。喜んで一緒にさせていただきます」

二人は並んで国王の寝室へ向かった。部屋の中へ入りドアをピツタリと閉めると、アイナセリヨースは国王に声をかける。

「陛下、お加減はいかがでございますか？」

ベッドに半身を起こして本を読んでいたコルウインは、まぶたの上から目を押しながら答えた。

「まあまあかな。リユフォン、ご苦労だな」

「陛下。お休みのところ申し訳ございません。トウージュ王弟殿下より、書状が届いております」

廊下でリユフォンがアイナセリヨースに見せた合図は、隠密裏の書状が届いたというサインだった。王権が安定しているとはいいたい現在、廊下などでうかつに大事な話は出来ない。貴族たちの放った密偵がどこかで耳をそばだてているのは必至だからだ。

差し出された書状に目を通しながら、病床の国王は呟いた。

「思ったより早かったな。内容が内容なだけに、もう少し時間が掛かるかと思ったのだが」

読み終わると手紙をアイナセリヨースに渡し、代わりに薬湯の力ツプを受け取る。

「まあ。偶然とはいえ、幸運な事ですわね」

王妃の感想にコルウィンもうなずく。

書状の内容は、運良くエルキリユース神殿の巫女「夢織り」と同行する事が出来た事。詳しくは書けないが、流行病の原因が判明した事。創世の秘密に触れた驚き。瑰国の王家の存続が重要な鍵である事。いくつかの注意事項と、愛を込めた結びの文。

「我等に出来る事はなさそうだな。トウージュと神殿の巫女に任せろしかない」

トウージュが王宮を離れ、『死の眠り』について探っている事は、国王夫妻と宰相しか知らない。その他の臣達は、トウージュがまた市井に降りて遊興に耽^{ふけ}っているとしか思っていない。まさか、王弟殿下自らが、密偵の真似事などをしていようとは夢にも思わないだろう。

国政を省みず、勝手気ままに振舞う王弟トウージュ。それがパージェイルローサでのトウージュの評判だ。トウージュ自身が望み、そして操作した噂ではあるのだが、あちこちであからさまに囁かれる弟の陰口を耳にするたびにコルウィンの胸は痛んだ。これ程までに自分を犠牲にして尽くしてくれるトウージュに、コルウィンは何も返すものを持っていないのだ。

「しかし、トウージュ殿下の申される『創世の秘密』とは何でしょうな？ いたく興味を惹かれますが」

物思いに沈んでいたコルウィンの思考を、リュフォンの言葉が引き戻した。

「そうだな。しかし余は、人の住む世界の事だけで手一杯だ。この上、神々の世界の事まで考えるゆとりはないよ」

空になったカップを妻に渡し、コルウィンは苦笑した。

「それに、全てが無事に済んだら、きつとトウージュが話してくれるだろう。あれは、そういった事を黙っていられる性質^{たち}ではないの
でな」

「差し当たって必要なのは、ノーヴィア公爵の動向に気をつけることですね。王都からは、何か報告がありました？」

アイナセリヨースがベッドの乱れを直しながら、宰相に問いかけた。

「はい。ハディースに送った者達によれば、この病による死者はゆるやかに減少しているようです。しかし王弟殿下のご報告に照らし合わせてみますと、これは次の段階へと移行したと考えた方がよろしいでしょう。ノーヴィアにも、手の者を送っておきます」

「わたくし達もしっかりと目を開き、耳を澄ましておきましょう。」

殿下の働きを無駄にせぬよう。そして邪魔にならぬように」

「そうだな。これ以上の面倒事は、勘弁して欲しいからね」

コルウィンは中庭に目をやった。三人の心配も知らぬ気に、天は今日も晴れ上がっている。心に掛かる暗雲を払うかのように頭を振り、国王は気持ちを切り替えた。

「さて、それではいつもの仕事に掛かるうか」

「かしこまりました」

そして陽光差し込む国王の寝室は、魂を支える退屈にして重要な決定を下す、執務室へと早変わりする。

王都ハディースの北地区ウィルカ。領主であるソキア男爵の館は、常ならぬ人の出入りで大層な賑わいを見せていた。

これまで誰にも治す事の出来なかった『眠り病』。その病にかかったソキアの妻ターニヤが、旅の薬師の力により全快したという噂が、枯野を渡る野火の勢いで町中に広がったのだ。噂を聞きつけた人々が、自分も恩恵にあやかろうと詰め掛けてくる。病人を抱える者はもちろん、健康な者までもがやってくる。何しろ、いつ病に倒れるのか判らないのだから。

砂色の髪の謎めいた美女は、静かに人々の話に耳を傾ける。乞われれば相手の家まで赴き、病人に会いもした。不思議な事に、今までどのような薬もいかなる祈りも退ける事の出来なかった恐ろしい

病が、カーティの手によつて癒されていく。人々はカーティに群がり、感謝を捧げ、神に対するように祈った。ウィルカのみならず、東地区のザイルやカッパードからも人の波は押し寄せてくる。ソキアの館はいまや、王都・ハディースで一番の名所と化していた。

屋敷の一番良い部屋に陣取ったカーティの側にはターニヤが控え、ソキアは彼女の代理人のように振舞う。事実上の主人はカーティだった。最後の訪問客が部屋を出ると、ソキアはカーティのご機嫌伺いにやってくるのが最近の日課になっていた。

この太った小柄な男は、金はあるが力のない小貴族の末席に生まれた。幼い頃から権力への憧れが強く、自分には才能があると自惚れていた。決して美男子ではなかったが、彼の金に群がる女たちは多かった。やがて、パーティール・サで行われる新年の謁見の儀で、ヴァルド男爵の娘ターニヤを見初めた。本来ならば成立するはずのないこの結婚が、どうしてまとまってしまったのか。その原因は、やはり金の問題が絡んでいた。

度重なる当主の放蕩で、ヴァルド男爵家は山のような借金を抱えていた。そしてソキア・ベルドアには、その借金を返して余りある財産があつたのだ。つまり、ソキアは自分の立場を最大限に活かし、妻と爵位を金で買ったのだ。人質同然に嫁してきたターニヤは決して夫に心を許さず、彼に子を成す能力がないと判明してからは、ますます夫婦間の溝は深くなつていったのだ。

愛情によつて結ばれた夫婦ではなかったが、ソキアはソキアなりに彼女を愛していた。その想いだけは真実だったのである。ターニヤが倒れた時、ソキアは四方八方に手を尽くし、何とか妻を助けようとした。医者も祈りも役に立たず、絶望の底に落ちた彼の目の前に、砂色の髪 of 薬師が現れたのだ。ソキアにとってカーティは、いまや神にも等しい存在である。

「今日も一日、ご苦労様でございましたな。何か飲み物でも運ばせましょうか、カーティ殿」

ロウソクの柔らかい灯りに照らされて、カーティは机に向かって

いた。

「ああ、ありがとうございます。それでは、お茶を一杯頂けますでしょうか」

にっこりと微笑みながら、ソキアに答える。家令に茶を運ぶように言いつけると、彼はカーティの側に妻の姿がない事に気がついた。

「おや？ ターニヤはどうしました？」

「奥方様は、お加減が優れないとか。もうお部屋へ退られました」

その一言に、ソキアは表情を曇らせた。

「そ、それは、まさか……」

顔色を失くしたソキアに目をやり、カーティアは手を振りながら言う。

「いえいえ。あの病がぶり返す事はありません。このところ人の出入りが激しいので、気疲れされてしまったのではないでしょうか」

少しうつむいて、小声で付け足した。

「長居をさせていただくばかりか、私のためにお屋敷まで使わせていただいってしまった。申し訳なく思っています。このままお屋敷に置いて頂くのもご迷惑でしょう。そろそろ、お暇しようかと考えているのですが」

妻の病が再発しないと聞いてホッとしたのも束の間。今度はカーティが出て行くつもりなのを知り、ソキアは新たに顔色を失くす。

「力、カーティ殿！ 何か至らぬ点がありましたか？ 使用人が無礼を働いたとか？」

領主の慌てぶりは、見ているほうが哀れを感じるほどだった。ソキア自身がカーティをあがめているのは本当だが、それよりも彼女が自分の元を去ることで失われる自分自身の名声を考えているのも事実だ。

「まさか。お屋敷の皆様には、とてもよくしていただいております。ですが私の旅の目的は、私の持っている知識を、少しでも世の為に使えればと思つての事。一つ所に長居するのは、私の本意ではありません」

口調は丁寧だったが、紛れもない本心を感じ取り、ソキアはため息をついた。

「判りました。しかし、今すぐには言わないで頂きたい。街の者達も不安がりますし、何よりターニヤが寂しがりますからな。せめて後一月、この屋敷においでください。その間、ご自分の家のように使っていただいて結構。使用人達にも、よく言い聞かせておきますので。おや、茶がきたようですね。それでは失礼致します。また明日お目にかかりましょう。お休みなさいませ、カーティ殿」

「ええ。お休みなさいませ、ソキア様」

そそくさと部屋を出て行くソキアの背中に、カーティの返事がかぶさる。しかし言葉の中に込められた冷笑には、とうとう気付かなかった。

「今さら言い聞かせるまでもなく、屋敷中の人間は皆、すでに御主様のものだというのに」

香りの良い茶と軽い夜食を用意してきた家令は、閉じた扉を見やりながら、吐き出すように言った。

「まあ、そう言うな。それよりも、頼んでおいた事は？」

カップから漂う香りを楽しみながら、カーティはまるで主人のようには振舞う。

「はい。次の王位に一番近いのは、王弟であるトゥージュ・ラムナ・イルスを除けば、先王の妹であるイルネア・エメス・ノーヴィアの夫、サマル・ビュイク・ノーヴィア公爵です。我々には幸運な事に、この国は女性の王位継承を認めておりません。つまり」

家令の言葉を横から奪ってカーティが言った。

「王家の血筋は、そこで途絶える訳だな」

「御意」

「なるほど。ノーヴィアに子はあるのか？」

「今年、五歳になる息子が一人あるようです。御主様の噂は、ノーヴィアの元にも届いている事でしょう」

「ならば、じっくりと策を練ろうか。我が瑰国の社交界に手をかけ

る絶好の好機だ。万が一にも、しくじりたくはない」

すっかり暗闇に閉ざされた外の景色を窓越しに眺めながら、カーティは茶を口に運ぶ。季節外れの冷たい雨が、街を濡らし始めていた。

「ここもそろそろ潮時だな。居を移したほうが良さそうだ。間もなく、ここにも我の想い人が来る。否、我の方が想われておるのか」

「ソキアはいかが致しますか？」

つまらない事柄の指示を仰ぐように、家令が口を開く。

「我がここを出てから、お前達の好きにするがいいよ。街の人間に慕われた領主、眠り病にて急逝。薬師は旅立った後で、手の打ちようがなかったとな。ソキアも我のお蔭で、一時の夢を見られたであろう。己の名声が上がリ、人間どもに感謝されて」

暗い空から落ちてくる雨は、次々に強さを増していく。

8章 夢魔・神の御技（前書き）

旅先で出会った少年の頼みで、病に取り付かれた家族を救いに行く
アイヒナ。

しかし、そこで起こった出来事は、彼女の胸に暗い影を落とす。

8章 夢魔・神の御技

アイヒナとトウージュ、闇姫の三人は、王都ハディースの城門の前で検問の順番を待っていた。

数日前に降り出した季節外れの雨は、今はジメジメとした霧雨に変わっており、灰色の毛織のマントに身を包んだ人々をさらに憂鬱な気分にしていた。いくら厚手のマントをまとっていても、細かく吹き付ける霧雨は防ぎようがなく、じつとりと身体中が湿ってくる。人の列が緩やかに動き出してから、小一時間も経っただろうか。二人の予想した通り、闇姫の退屈の虫が暴れ始めた。

「いい加減に飽きたぞ、吾は！ まだ中へ入れんのか！」

やっぱりという顔をして、アイヒナとトウージュはため息をついた。

「落ち着けよ、闇姫。ほら、子供がお前の事見て泣きそうになってるぞ」

「大体お前、引っ込んでろっていう人の忠告を聞かずに出てきたんだ。文句言われる筋合いはない」

ガルルルルル　と喉の奥でうなる闇姫を、二人がかりでなだめる。

このところ立ち寄った町や村で、小物の夢魔にしかありつけなかった闇姫は、いたくご機嫌ナナメだった。

「主殿は意地悪じゃ。城壁の中から、夢魔の匂いドラムーナがプンプンしておるのに、こんな所で我慢せよと言われる。吾をいじめて楽しんでおるのだらう」

闇姫が不満気に漏らした一言に、アイヒナとトウージュの顔が強張った。

「王都の中からか？」

かすれた声でトウージュが闇姫に尋ねる。

「吾の言葉を疑うのか？ 吾はドラムーナ。夢魔の匂いを間違えた

りするものか」

噛み付きそうな勢いで闇姫が反論した。

アイヒナが何か言いたそうな表情でトウージュを見やったが、彼は静かに首を振った。

「いや。今はまだ、俺の事を誰にも知られたくない」

確かにトウージュが身分を明かせば、順番を待つことなく王都へ入れるだろう。しかし衛兵やその他の人間にいらぬ詮索をされるだろうし、不必要な厄介事に巻き込まれる可能性がある。やはり大人しくしていたほうが得策というものだ。

ジリジリと焦る気持ちを抑えて検問を抜けたのは、それから更に一時間を過ぎた頃だった。

城門はハディースの四地区に一箇所ずつ設けられており、アイヒナ達が入った街は南のタリスだ。四地区の中で唯一、女性の統治官が治める街でハディースでもっとも清潔な街として有名だった。

ようやく街へ入った闇姫は、濡れた毛織のマントと湿った服について感想を延々と語り、とにかく一刻も早く乾いた場所へ移動したが、他の二人にも異存があるはずもない。とにかく着替えをしたいと手ごろな宿屋を求めて通りを見回したアイヒナは、肩がフツと軽くなるのを感じた。

「え？」

追い抜き様に紐を切られ、背負っていたリュートを袋ごと奪われたのだ。アイヒナがそれに気が付くのと、トウージュと闇姫が駆け出したのが同時だった。出遅れたアイヒナが二人を追いかけて路地を曲がると、濡れた地面に押さえつけられた犯人と、その上に馬乗りになった闇姫。荷物を拾い上げるトウージュが見えた。元から機嫌の良くない闇姫にいたっては、文字通り牙をむき出しにしている。差し出された袋を受け取り、アイヒナは犯人に目をやった。歯を食いしばり、もがいているのは十二・三歳の少年だ。その横にかがみこみ静かに声をかけた。

「なあ、教えてくれまいか。この袋の中身を知っていたのか？」

側で聞いているトウージュが拍子抜けするほど、淡々とした口調と内容だった。

「どうして財布じゃなく、この袋を狙ったんだ？ かさばるし、第一、持ちにくいだろう」

少年は上目遣いに彼女を見ていたが、口唇を舌で湿すと、やっと口を開いた。

「知ってた。リユートだろ、それ」

ぶっきらぼうに答える少年の態度に、闇姫の眉がピクリと動く。

「この小童こわっぱ……！」

更に強く押さえ込もうとする闇姫に、アイヒナは静止をかける。

「やめろ、闇姫。話が出来なくなる。坊や、どうしてこんな物を盗ろうと思ったんだ？」

「だってそれ、エルキリユース神殿の紋章が縫い付けてある」

少年にとつて彼女のリユートは、金貨の詰まった財布よりも重要な意味があるらしかった。

闇姫をどかせると、少年を助け起こしながらトウージュが話しかける。

「おい坊主。なんでリユートが欲しかったんだ？」

「坊主じゃねえやい！ おいらにはウェインって、ちゃんとした名前があるんだ！」

自由になった途端、ウェインと名乗った少年は強気を取り戻したようだ。

「分かったよ、ウェイン。質問に答えてくれないか」

ほんの一瞬ためらってから、ウェインは口を開いた。

「おいらの姉ちゃんが、一週間位前に『眠り病』にかかったんだ。そんな時、父ちゃんがウィルカの領主様のお屋敷にお医者様がいて噂を聞いてきて。姉ちゃんを荷馬車に乗つけて、おいらと二人で連れてったんだ」

話しているうちに、気持ちが昂ぶってきたのだろう。涙ぐんでいる。

「キレイな女の人が出てきて、姉ちゃんの事を治してくれるって。でも、治してるところを絶対に見ちゃ駄目だって言われてたんだ。けどおいら、姉ちゃんの事が心配で。だって、エルキリユースの神殿にも行ったんだ。神殿の女の人達がリユートを弾いて祈ってくれたけど、姉ちゃん、目え覚まさなかったし……」

息と一緒に涙を飲み込んでから、ウェインは話を続けた。

「だけど、おいら見たんだ！ あんな奴、お医者じゃねえ！ 姉ちゃんの口の中に、変なヌルヌルした虫みたいなのを入れやがった。あんなの薬なもんか！ 確かに姉ちゃんの目は覚めたけど、今の姉ちゃんは姉ちゃんじゃない！！」

叫ぶように語り終えたウェインは、とうとう泣き出してしまった。「だ、だから、おいら。エルキリユースの紋の入ったリユートなら、ね、姉ちゃんの中の、変な奴を た、退治できるっておも、思ってた」

言葉が続かない。言葉の代わりに、想いのこもった涙が溢れる。ウェインの頭に手を置くと、トウージュは髪をくしゃくしゃと掻き混ぜた。

「坊主、それならそうと、ちゃんと説明すれば良かったんだ。盗人のような真似をするから、話がこじれる」

闇姫がため息をついてそう言った。

「ぼ、坊主じゃねえやい」

精一杯の強がりと言うウェインに、優しい笑みを見せながら、アイヒナが口を開いた。

「ウェイン。君の話は良く分かった。だが先程も闇姫が言ったとおり、初めからちゃんと話をしてくれていれば、私たちも手荒な事はなかった。第一、このリユートは神聖魔法が掛かっていて、私でなければ音が出ない。だから君が持ち帰っても何の役にも立たなかったんだ」

ウェインはがっかりしたようにうつむき、ポツリと言った。

「……ごめんなさい。お願いします。姉ちゃんを助けて」

「君の家へ、案内してくれるかい？」

降り続ける霧雨の中、三人はウェインに導かれて歩いていく。少年の横を並んで歩きながら、アイヒナは複雑な表情で口を開いた。知らせるのは気が重い。しかし、伝えておかねばならない事だった。「出来る限りの事はすると約束しよう。必ず、君のお姉さんに憑いているモノは退治する。でも、私にも手出しする事の出来ない領域もあるんだ。君の話から察するに、どうやらお姉さんは夢魔の『種』を飲まされているらしい。定着が進んでいれば、お姉さんとの融合を完全に解く事は難しいだろう。ウェイン。本当はこんな事を言いたくはない。しかし、最悪の事態も覚悟していて欲しい」

ウェインはうなずいた後、元気に付け足した。

「だけど、大丈夫だと思う。姉ちゃん、とっても運がいいんだ。他には何の取り得もないけど、これだけは自慢だって言ってたし」

明らかに空元気だと判るこの言葉に、残りの面々は口を閉ざす。

「着いたぜ。ここがおいらの家だ」

石造りのこざっぱりした家が、ウェインの家だった。少年はアイヒナの横を駆け出し、家の中に飛び込む。

「ただいまっ！ 父ちゃん、エルキリユース神殿の人を連れて来たぜ！ 姉ちゃんを助けてもらうんだ！」

遅れて家の中を覗き込んだアイヒナは、椅子に腰掛けた父親に事情を説明するウェインを見た。

「お前、まだそんな事を言ってるのか？ 気のせいだって、何度も言っただろう」

「本当なんだってば！ おいらこの目で見たんだから！ あのカーティって女が、姉ちゃんの口に変なモノ入れてんの」

父親は腕に取りすがっているウェインの手を振り解き、彼の肩をガツチリと掴んだ。

「見ていたのか、お前？」

「何言ってるんだよ。見たから言ってるじゃねえか。痛いよ、父ちゃん」

表情の険しくなった父親の表情におびえながらも、ウェインが告げる。

「あの方の技を盗み見たばかりか、あるうことか神殿の人間まで連れてくるとはな。どこまで愚かなガキなんだろうな」

「え……父ちゃん……？」

「ウェイン！」

「主殿！」

父親の肩が弾け飛び、無数の触手が現れる。

アイヒナが戸口から飛び込み、ウェインを抱え込んでかばう。それらは同時に起こった出来事だった。

「トウージュ！ ウェインを頼む！」

戸口にいたトウージュにウェインを任せ、アイヒナは異形の姿となつてしまった父親と向き合う。

「と、父ちゃん、どうしちゃったんだよ？」

しゃくりあげるウェインの声に、別の声が答えた。

「さつさとお前にも、我等の種を飲ませておけば良かった。そうすれば、余計な奴を連れてくることもなかったのに」

「姉ちゃん」

隣の部屋から姿を現した十五・六歳くらいの娘が、冷たい視線で一同を見回していた。

「トウージュ、ウェインを連れて外へ出ろ」

二人から目を離さずに発せられたアイヒナの言葉に従がおうとしていたトウージュから、焦りを含んだ返事があった。

「駄目だ。見えない壁があつて、外へ出られなくなっている」

「ホホ。逃がすと思うてかい」

敵意に満ちた娘の声に、アイヒナは齒噛みした。ウェインの目の前で、彼の肉親と闘わなければいけない。出来る事ならそれは避けなかった。

「他の奴を心配している暇はないぞ」

父親の肩から伸びた触手が、アイヒナの目を狙って伸びてくる。

もう迷っている時間はない。

「闇姫！」

主の呼び声に応えて、肉のムチを弾き飛ばした闇姫は、そのままスルリと彼女の影に溶け込む。

「ウェイン、目を閉じている」

トウージュの言葉に反して、ウェインは目を閉じる事が出来なかった。体が固まってしまったように動かない。頭が考える事を拒否してしまっている。ただ、壊れたからくり人形のように、同じ言葉だけを繰り返す。

「父ちゃん……姉ちゃん……」

「ホホホ。お前の父も姉も、もうこの世に存在などしてないわ」
姉だった者が、五指の爪を剣のように伸ばしてアイヒナに斬りかかる。髪をまとめていた布が刃を受けて切れ、長い銀の髪が流れ落ちる。

「お前もすぐに、二人の所に送ってやるよ。ラ・ズーの腕の中へな」
父だった者が、縦長の瞳でウェインを見る。

アイヒナは一瞬だけ目を閉じ　硬い声で呼んだ。

「エルキリユース。我が父にして母よ」
彼女の影の中から、細長い棒状の物がせり上がってくる。黒い、刀身までも黒い一振りの剣。柄頭に輝く紅玉がその姿を際立たせている。

娘が昆虫の複眼を思わせる両目を細めて、確認するように呟いた。
「黒塗りの長剣　。銀の髪に黄金の瞳。貴様がエルーシヤか。御主様の敵。あの方のお心を占める者」

「ああ、そうだ。お前達の主人を追う者。夢魔を滅する、夢織りだ」
剣を構え、低い声でアイヒナは告げる。戦わなければ、トウージュとウェインの命もなくなる。

「小賢しい！　お前一人で、何が出来ると言うのだ！」
ダラリと垂れた舌を蠢かせている男の触手が、猛スピードでアイヒナに襲い掛かった。

「一人？ これは心外だな」

軽く振られたかに見えた剣は、その全ての触手を斬り落とす。

「お前達の天敵、ドラムーナの剣だ」

「あああああつ！！」

神経をやすりで擦り上げるような耳障りな悲鳴が発せられ、トウ

ージユの腕の中のウェインが身をすくませた。

「だが、こつちの人間は凡人^{ただひと}だ！」

いつの間にか天井に張り付いていた娘の髪が、無数の蛇の如くに広がった。少年を庇い込んだトウージユにチラリと視線を送り、アイヒナは空にヒュヒュンと印を刻む。サアアツと銀の髪が緑色の光に包まれる。

「イシュリンよ！ 御加護あれかし！！」

その瞬間、二人めがけて伸びていた娘の髪が激しい火花と共に弾かれた。

「お前達の相手はこの私。^{エルーシャ}夢織りのアイヒナだ！ さあ、こつちは名を与えたぞ。どうする？」

グルルルと喉の奥で唸っていた父親が、ガチガチと歯を鳴らして答えた。

「良からう！ 俺はグーマナーンだ！ お前を相手と認めよう」
娘が髪を逆立てて答えた。

「御主様より頂いた名はルカス。私もお前を相手と認めたわ」

二体の異形がアイヒナへ向かって突進してくる。肉のムチを振り立て、残忍に光る爪をかざして。

「ネフティよ！ 宿れ刃に！」

緑の光と赤い光が、瞬きの間に入れ替わる。手にした黒剣の刀身を、灼熱の炎が駆け上がる。

バフォナ・グーマナーンの触手を灼き斬り、かえす剣でバフォナ・ルカスの顔を斬りつける。炎の残像を引いて、アイヒナの剣が印を切る。

「ケシュよ、枷を我が手に！」

柄から左手を離し頭上に掲げる、赤く染まった彼女の髪に、藍色の房が現れた。

「き、貴様！ 一度に二柱の“力”を使えるのかっ!？」

「私には、お前達のように肉体を変化させる芸当は出来そうにないのでな」

掲げた左手に生み出された清浄な水の塊を、グーマナンへと叩きつける。

「そんな水玉なんぞ、飲み干してくれるわ!」

ガツと裂けた口を開いて、グーマナンは投げ付けられた水の塊を飲み干そうとする。その頭部を、柔らかく広がった水のベールが包み込んだ。

「な、何イ!？ ツガ、ゴボツ」

顔面に張り付いた水の膜に呼吸を妨げられ、苦しげに喉元をかきむしるグーマナンの爪が、近寄ったアイヒナの衣服を引き裂いた。目にも鮮やかな白い肌が現れ、まろやかな双丘が露になる。そのふくらみの間には複雑な色彩に淡く輝く神名の刺青。

グーマナンへ向かって突っ込んでいくアイヒナの首に、ルカスの黒髪が絡みつく。

「ぐっ」

「このままでは済まさん。その首、へし折ってくれる」

ギリギリと首を締め上げるルカスの髪に抗いながら、アイヒナは黒剣をグーマナンの胸に埋めた。燃える剣は易々と、男の胸を貫いた。目を見開き、口腔を限界まで広げてグーマナンは絶叫を上げる。しかし水のベールに包まれた口からは、くぐもった音しか漏れてはこない。

「おのれえ」

「バルメツサよ、天風の鎖を」

途端に剣から炎が消え、水の膜が四散する。アイヒナの髪がフワリと浮き、銀とは違う白い輝きに彩られる。首に絡みついた黒髪を切り払い、剣先をルカスに向ける。切っ先から放たれた風が、女怪

の体を縛る鎖となる。そのまま張り付いていた天井から床に叩きつけられた。

崩れ落ちたグーマナーン ウェインの父親 ヘチラリと視線をやり、ウェインへと視軸を移したルカスが口を開いた。

「ああ、ウェイン。助けて頂戴！ この女に殺されてしまうわ！」
哀れな口調でウェインに懇願する。複眼を思わせる目は、いつの間にか人間のそれに戻っている。

「姉ちゃん ！」

風の鎖に捕らえられた姉の姿に、トウージュの腕の中でウェインが身じろぎする。

「駄目だ、ウェイン！ そこから動くな！」

アイヒナが制止する間もなく、ウェインはトウージュの腕を振り解き、守護陣から足を踏み出す。

「ウェインッ！！」

トウージュとアイヒナの叫び声が重なり、集中の途切れた術が消えてしまう。

「ほほほ。そう、ウェイン、いい子ね」

瞬き一つで異形のそれに戻った眼を細めて笑い、自由を取り戻したルカスがウェインに襲い掛かる。信じられない思いに凍り付いて動けない、弟だった存在に。

アイヒナが床を蹴る。

トウージュが腕を伸ばす。

ルカスの爪がウェインの頬をかすめる。

ウェインが両手を広げる。

すべては一瞬の出来事。

姉弟の視線が一点に集中した。ルカスの胸から生えた、漆黒の切っ先。

トウージュは無力感に眼を閉じ、アイヒナは悔いのにじむ眼を閉じる事が出来ない。

ドラムーナの黒剣は、バフォナの命を喰い尽くす。まだ、あどけ

ない少年の目の前で。

「
」

何かを言いかけたようにルカスが口を開く。しかし、ついに言葉は紡がれる事はなかった。夢魔の命を喰らうドラムナーの剣は、現の肉体に傷を残しはしない。床の上に倒れた二人は、まるで眠っているように穏やかな顔をしている。だが、その生命の灯はとうに消えている。グーマナーンとルカス。そういう名前の存在に変わった時点で。

「父ちゃん、姉ちゃん」

ギクシャクと、二人の許へ歩み寄るウェインに、書ける言葉を誰も持つてはいない。

「嘘だろ？ 今朝、おいらとケンカしたじゃないか！ 父ちゃん、眼え開けてくれよお！ 姉ちゃん！ 何とか言えよお！！」

父親の身体に取りすぎるウェインの肩に、トウージュが手を置いた。

「ウェイン……」

「触るな！」

その手を払いのけ、少年が叫んだ。

「助けてくれて言ったじゃないかっ！ 何でだよ！ どうしてだよ！？ 返せよっ！ 父ちゃんと姉ちゃんを返せよ、この人殺し！」

憎悪に彩られたウェインの叫びに、アイヒナの手から剣が落ち、自身の影に突き立った。そのまま静かに影の中へ沈み込んでいく。

「ウェイン、済まない。私には、どうする事も出来なかった……」

アイヒナの言葉は虚ろに滑っていく。何を言っても時間を戻す術はない。

「お前のせいだ！ お前がおいらの父ちゃんと姉ちゃんを殺したんだ！ お前だって、化け物じゃないかっ！！」

その一言が、アイヒナの胸を深々とえぐる。彼女の髪を彩ってい

た輝きが揺らぎ、静かに消えていく。

「行こう、トウージュ殿。私の存在が、ウェインを苦しめる」

口を開きかけたトウージュを促し、まだ霧雨の降り続く表へ出る。隣家の人間に事情を話し、ウェインとその家族だった者達の世話を頼む。必要になるであろう金子を渡してその場を後にした。

「アイヒナ」

「いい、気にするな。慣れているから。人に恨まれるのも、化け物と呼ばれる事にも。だから頼む。下手な慰めや同情は口にしないでくれ」

トウージュの考えを見透かしたように、アイヒナは無表情に言った。ぐつと言葉を飲み込むと、トウージュは眼を^{すが}眇めて空を仰ぎ、ぼつりと言った。

「宿、探そうか」

手頃な宿を見つけて湯を使い、乾いた服に着替えて、温かい食事をして、やっと落ち着く。だが、二人の心は冷え切ったままだった。食堂のあちこちで交わされる会話は、謎の救い主・カーティと、彼女が旅立った後に亡くなったウィルカの領主・ソキアの事ばかりだ。

「ソキア様も運のない方だ。せつかくカーティ様がおいでになっていたというのに、旅立たれて間もなく亡くなられたそうだ」

「今は細君のターニヤ様がウィルカを取り仕切っていいらっしゃるそうな」

話は尽きる事がない。砂色の髪の謎の美女・カーティ。その名前は今や『救世主』と同義である。

トウージュはスパイスの効いた温かいワインをすすりながら、店内の噂話に耳を傾けていたが、向かいに座るアイヒナは虚ろな表情で黙り込んでいる。いつもなら、何かにつけて場を盛り上げてくれる閻姫も、姿を見せようとはしない。沈み込んだ空気だけが、二人の間を埋めていた。カタリ、と椅子を引く音に顔を上げると、アイヒナが立ち上がった。いた。

「済まない。先に休ませてもらうから」

言葉少なにアイヒナは引き上げていく。その後姿に、トウージュは拒絶された気がした。アイヒナが心に負った傷は計り知れない。トウージュには思いやる事は出来ても、痛みを分かち合う事は出来ない。悔しさで歯を食いしばる。自分の無力をアイヒナは恥じている。だが、何の異能も持たない己は、もつと惨めだ。

『慣れている。人に恨まれる事も、化け物と呼ばれる事にも』

数々の神意を依らせ、その力を具現する奇跡のように美しい姿。しかしそれは、力を持たぬただの人間にとっては異様に映る。

物思いに沈んでいたトウージュは、向かいの椅子に誰かが腰掛けた音で我に返った。

「相伴するぞ」

意外な相手に驚きながら、トウージュが口を開いた。

「闇姫？ 何で？ 誰も呼んでないぞ？」

黒い長髪を無造作に流した黒衣の美女は給仕の運んでいた酒を奪い取ると、更に酒を持ってくるように命じ、テーブルに頬杖をついてトウージュを見た。膨れっ面で給仕はカウンターへ戻っていく。

「吾を低俗な使い魔と一緒にするでない。主殿の影に潜んでおるのは、あくまで吾の意思じゃ。出ようと出るまいと、吾の勝手よ」

手にしていたジョッキに口をつけると、まるで水のようにカプカプと飲み干す。

「アイヒナはどうした？」

闇姫の出現で少し心が解れる。何もものにも動じないこの『伝説の獣』は、不思議と人の心を惹き付ける。

「主殿は部屋で勤行中だ。亡くなった二人の御魂を、エルキリユースとラ・ズーへ託すためのな」

「そうか」

ワインを口に運ぶトウージュをジョッキ越しに眺めて、闇姫がおもむろに言葉を発した。

「お前、そろそろ我等から離れた方が良いのではないか？」

いきなり何を言われたのか理解できないトウージュは、杯を持つ手を止めた。

「一国の身分ある者が共に旅をするには、少々、難のある連れだろう。恐らく、今日のような出来事はこれからも続く。人殺しや化け物と呼ばれる者と一緒にいては、後々差し障りがあるぞ」

彼と視線を合わせないようにジョッキの中に話しかける闇姫は、らしくなく沈んでいるかに見える。

「俺は」

乾いた口を湿すために、一口ワインをすすり言葉を続ける。

「俺は他の人間と比べて、少し特殊な環境で育ってきたから。この世の中には、奇麗事ではどうしようもない事があるのを、身に染みてよく知っている。誰に何と言われようと、成さねばならないことがあるのだと言うことも判っている。アイヒナと闇姫のやっている事は、俺達、何の力も持たない者から見れば異質なのは事実だ。しかし、他の誰にも出来ない事を成している」

言葉を身内に探す。どうすれば理解してもらえるだろう？

「俺は、あんた達二人に出会えて良かったと思う。『夢織り^{エルシャ}』がアイヒナで、ドラムーナが闇姫^{クハキ}で良かったと思う。アイヒナがアイヒナである事が、闇姫が闇姫である事が、俺にはかけがえのない真実だ。たとえ誰がなんと言っても、二人の真実は、俺が知っている」

束の間、静かな空気が漂う。杯に残った液体を喉に流し込み、深い息を吐いたトウージュの耳に、低い笑い声が響いてきた。

「フフ。主殿が主殿である事、吾が吾である事、か。吾も思うよ。お前に出会えて良かった。お前がお前である事が真実だ。いかなる肩書きや称号があろうと、真実は変わらぬ」

肩をすくめて闇姫が笑っている。

「お前、主殿をどのように思う？」

不意打ちだった。適当な答えを用意する心のゆとりはない。

「あ、いや、い女だと思っし、結構好みだった。っと、そんなアレじゃなくて、何て言うんだろう？ 守ってやりたいって言う

か、一緒にいたいって言うか」

しどろもどろに答えるトウージュに、闇姫は優しい瞳で語った。

「トウージュ殿よ。立場があるのも判っているが、あえて頼む。主殿を信じてやってくれ。まだ主殿が語っていない事も多い。だが、何があってもトウージュ殿を裏切るような真似だけはしない。だから、頼む」

主殿を信じてやってくれ。普段からは想像も出来ない闇姫の言動に、トウージュも心から答えた。

「俺のすべてにかけて、アイヒナを信じると約束しよう」

9章 野心・反逆の大罪（前書き）

「女性に王位の継承権を認めない」これが瑰国の掟。

しかしその事が、どのような目に転がるのか？

カーティの動きに、アイヒナは追いつけるのだろうか？

9章 野心・反逆の大罪

静かに夜は更ける。ノーヴィア公爵夫人であるイルネア・エメスは、寝付いたばかりの息子、ティルス・グラルの部屋を出た。後ろ手にドアを閉めながら、小さなため息をこぼした。

夫でありノーヴィア公爵でもあるサマル・ビュイクは、今夜も宴に出かけている。最近召した薬師が、噂に名高いカーティという娘だと判明してからというもの、まるで珍しい宝石を見せびらかすかのように彼女を伴い連日の宴に出席する。

五歳になる息子のティルスが『眠り病』に罹患したとき、タイミングを見計らったかのように現れた娘。幸いティルスの病は早期だったこともあり、大事には至らなかった。息子の病を癒してもらった事については、いくら感謝してもし足りないくらいだ。しかし。

自室に戻り、侍女に茶を運んだら休んでも構わないと言いつける。座り心地の良いクッションに身を預け、イルネアはまたため息を吐いた。

何がという訳ではない。だが彼女の裡で、あの娘には関わらない方がよいという気持ち、日に日に強くなっていく。あえて言うなら女の、幼い息子を守るべき母親の「勘」といったところか。夫のサマルにも話しはしたが、自己顕示欲の強い彼は「救世主」を手にした事に夢中で、イルネアの忠告を一顧だにしなかった。

王位継承権第三位という地位は、野心を育てるには近すぎ、現実を理解させるには遠すぎた。当代国王に世継ぎがおらず、女性に継承権がないこの国で、前王妹の自分と現王妃のアイナセリョースが玉座に就くことは不可能だ。当代国王が万が一にも崩御なさり、王弟殿下のトゥージュに不幸が起こった場合、王位は夫のサマル・ビュイク・ノーヴィアの手元に転がり込む。

イルネアは夫の事をそれなりに愛してはいたが、彼が王位に向い

た人物であるとは考えられなかった。しかしサマルが、カーティを側に侍らすようになつてから、「玉座」という夢を大きくしているのが感じられて仕方がない。

最近、習慣になつてしまつたため息と、運ばれてきた茶と一緒に飲み込んだ。

その頃、サマル・ビュイク・ノーヴィアは、公爵領の貴族の館で宴を楽しんでいた。話題はもっぱら薬師カーティの活躍である。どこへ行つても出席者の視線はカーティへ集まり、次いで、その主人であるサマルへ移る。羨望・妬み・崇拜の感情が渦巻き、サマルを満たす。日頃サマルの享樂的な性格を快く思っていない者達が、少しでもカーティに近付こうとサマルに取り入る。何と言つても、いつどこで病に倒れるか知れず、発病したならばカーティ以外に治せる見込みはないのだから。なるべく本人とその擁護者の心証を良くしておきたいのは当然だ。

普段からサマルにすり寄っている数人の貴族達が、酔いの勢いも手伝つて大胆な発言をし始めた。

「大体、国民が眠り病の脅威に耐えておるというのに、神殿の坊主どもは何の役にも立たんではないか」

「パーティルローサからも、何の通達もない。陛下は、国民の心情をお判りでないとみえる。お世継ぎ問題も大事だが、もう少し下々の事にまで気を配つていただかなくては」

声高に交わされる会話の中に、杯を手にしたサマルが言葉をはさんだ。

「これこれ。いくら何でも、それは不敬罪になろうぞ。それでも陛下にとつては、義理とはいえ叔父にあたる。私の立場も考えてはくれまいか」

『不敬罪』の一言に、ハツとしたように口をつぐむ。恐る恐るといった感じで、一人がカーティに向かって言葉をかけた。

「薬師殿の癒しの技を、一般の医者や神官達に伝えて広める訳には

いけないのだろうか？」

サマルの後ろに静かに控えていたカーティは、

「私の技は本来、薬を与えて病を癒す医師の技とは違うのです。病に弱った者達の許へ訪う^{おこな}ラ・ズーの神に祈り、その腕に抱き取る瞬間を先へ延ばして頂く。そうして、調合した薬を与えて目覚めを呼びかける。ラ・ズー神が私の行いを認めてくださっているからこそ、出来る事なのです」

一度言葉を切ると目を伏せ、沈んだ声で告げる。

「しかし、私一人では限界もございます。私の力不足のせいで、多くの方々が命を落とされているのかと思うと」

話を聞いていた貴族達は、力なくうなだれるカーティの姿に慌てて首を振った。

「何を仰るのです。貴女のお陰で助かった者も多い。そんなに自分を責める必要はありません」

「そうですね。むしろ責めを負うべきは、ラ・ズー神への祈りも届けられない無能な神殿と、それをなんとも思わない王宮の人間ですぞ」

「例え不敬とそしりを受けようと、国の命運を握るのが王族。魂に住まうすべての人間が危険に晒されている今だからこそ、国のために命をかけるのが国王としての務めではござらんか」

先程、口を慎めと諭したサマルが、今度もやんわりと水を差す。

「そうは申されても、陛下はご病床の身。余計な心配をお掛けするまいと、城の者達が口をつぐんでおるのやも知れぬ」

だがそれは、火に油を注いだ結果となった。

「知らなかったでは、済まされぬ問題もありましょうぞ」

「大体それならば、陛下の御名代として宰相なり妃殿下なりが手を打たねば。第一、トウージュ王弟殿下はいかがなされたのじゃ？」

「また、いつもの気まぐれを起こされたようだな。珠春宮^{しゅしゅんぐう}にはおいででない」

そこかしこで嘆息が漏れる。

「自国の一大事だというに、王族の方々がこれでは。国が立ち行かぬではないか」

まいったくだ、と同意を示す高貴な面々にカーティが控えめに口を挟む。

「いつその事、サマル公爵閣下がお起ちになればよろしいのに」瞬間、宴の席は水を打ったように静まり返った。

「え、あ、あの……。申し訳ございません。差し出口を致しました」衆目に耐え切れない風情でカーティが詫びる。その言葉に、会場は和やかさを取り戻すかに見えた。

「しかし、カーティ殿の申される事にも理はあるかと。陛下も王弟殿下も国を憂^{うれ}えて下さらぬのであれば、国を思う者が王位に起つは民意に適うのではなからうか」

老齢に差し掛かった地方官の一言が、再び議論に火を点けた。だんだんと熱を帯びてくる宴席を、ようやく静めたのはまたもやサマルの言葉だった。

「^{おののがた}各々方。今夜はお開きという事にしようではないか。余人に聞かれては障りのある話でもある事だ。深酒で身を滅ぼしたくは、なからう？」

それは合図に、出席者達は主催者に暇を告げ館を引き上げていった。

屋敷へ向かう帰りの馬車の中で、カーティと二人きりになったサマルは愉快そうに笑い始めた。

「王家から官位と土地を与えられた者どもが、王家に不満を唱えておる。己が何も出来ぬ力不足を他人に押し付けておきながら、その事に気が付きもせぬ愚か者揃いじゃ！」

公爵位という他に並びのない地位に登りつめた者の、これが本性。閣下。先程の私の言葉は、私の本心でございます。国を旅し病人を直接見知っている私は、魂国内に呪詛の声が響いているのを知っております。当代陛下に力がなく、王弟殿下が国政を放り出した今、真に玉座にあるべきはサマル公爵閣下をおいて考えられませぬ。ど

うぞ、お起ち下さいませ」

カーティはサマルの向い側の席から、不穏な言葉を囁き続ける。
「やけに、私にこだわるではないか。私が玉座に就く事で、そなたに得になる事があるとも思えんが？」

用心深そうに、カーティの本音を探ろうとする。一歩間違えば、一族すべてに累が及ぶ大罪となれば、それも当然の事である。

「損得の問題ではございませぬ。魂国の民の一人として、当たり前
の事を申上げているのです。当代の陛下は決して暗君あんくんではあらぬ
ものの、長く病床に就かれ政もままならぬ有様。ならば王弟殿下が
陛下を助け、国を安らかにされるのが常。しかし、私が噂を聞き及
びまするに、国政を省みず、王宮を抜け出し遊興ふけに耽ふけつていらつし
やるとか。これでは国が立ち行きませぬ」

彼女が言っている事は至極まともで、説得力がある。納得してし
まった瞬間から、サマルの耳に入る言葉はすべて毒となる。

「民は安らかな生活を欲しております。国王を呪う声が溢れ、不安
が国中に広がっております。このまま、みすみす国を傾ける王より
も、と。新王を望む声が高まりつつあるのは事実でございます」

サマルは腕を組み、目を閉じている。カーティの言葉を吟味して
いる様子で、口を挟もうとしない。

「玉座をお望みなされませ。国の民の、そして、幼いティルス様の
ために」

「ティルスの？」

ピクリと眉を動かし、サマルが問い返す。

「はい。考えても御覧なさいませ。このまま不安に落ち着かぬ国で、
ティルス様をお育てするので御座いますか？」

この言葉に心動かされたように、サマルはカーティを見つめる。

「一朝一夕では成せぬ。人も財も要る。民草の同意も必要となろう。
それらを鑑かんがみての言葉なのか、カーティよ」

それは肯定の言葉。サマルの胸中に、野心有りの証。

「玉座をお望みなさい、公爵閣下。私もお手伝い致します。人も財

もお任せください。閣下は正当なる王位継承第三位のお方。登極^{とうごく}なさる資格は十分にあります。国のために、民のために」

カーティが公爵の瞳を覗き込む。王位に就き、至尊の座より瑰を統べる新王サマル・ビュイク・ノーヴィア・瑰の姿を、その夢を、彼の裡に宿すために。

「サマル公爵閣下、否、あえてこうお呼び致しましょう。サマル次期国王陛下」

サマルの瞳に狂夢の光が宿った。

＊＊

降り続いた雨が止み、街は久方振りに清清しく晴れ渡った。

雨に降り込められたアイヒナとトゥージュは、タリスの街に三日間足止めされていた。ウェインの一件以来アイヒナはめつきり口数が減り、側にいるトゥージュが心配するほどの落ち込みようだ。勧めれば食事も摂るし、話しかければ返事もする。だが、自主的に何かをしようとはしない。自室でボンヤリと食事を口に運ぶアイヒナを見つめながら、トゥージュは閻姫に声をかけた。

「なあ、閻姫。アイヒナがあの時言ってた『慣れてる』って、どういう事だ？」

部屋の窓枠に腰掛けて空を眺めたまま、閻姫が静かな声で答えた。「エルキリユース神殿でな。リユートの弾き比べの後に、主殿に神意が下った。主殿の瞳と髪の色は生来のものではない。エルキリユース神の御手が触れた時に、主殿に与えられた色よ。創世の十二神の御色を宿すためにな。しかし人は外見が変わると見る目が変わる。姉巫女や同位の巫女から『神意の名を借りた化け物』と言われておったよ」

他人を救うために己の生まれ持ったものを剥ぎ取られ、欲しくもないものを与えられたアイヒナ。
「それでか」

半分程手をつけた食事を前に、うつむいて座っているアイヒナにトウージュが優しく声をかけた。

「アイヒナ、もういいのか？ もう少し食べておかないと体がもたないぞ」

「ああ。そうだな」

アイヒナがノロノロと上げようとした腕を、険しい顔をした闇姫が掴んだ。

「主殿、いい加減にせぬか。トウージュ殿になぐさめはいらんと言うたは、主殿自身じゃ。なのに、その有様は何事か？ そのような様で、これからも旅を続けるつもりか？ そんな体たらくで、よもやアーカバルに勝てるなどと思っているのではあるまいな！ いつまで甘えているつもりなのじゃ！」

ビクツと体を震わせ、闇姫を見上げるアイヒナ。ギリギリと睨み付ける闇姫からアイヒナを庇うように、トウージュが口を挟んだ。

「闇姫、そんなにキツク言わなくても」

「トウージュ殿。お主にも判っているはずじゃ。やらねばならぬ事がある時に、ふ抜けている暇などないとな。それでなくとも我々は相手に大きく遅れをとっている。我等の遅れで、一体どれ程の犠牲者が出ると思っておるのだ」

目を閉じて闇姫の怒りを受け止めていたアイヒナが、静かに口を開いた。

「そうだな。闇姫、済まなかった。私の甘えだな。トウージュ殿にも世話をかけた」

全身から何かを吐き出すように、深く深く息を吐く。

「この街を、出ようか」

トウージュが提案した。このままこの街にいては、アイヒナの心は軽くないだろう。もっとも、他の街に移ったからといって、どうなるものでもないのだが。

結局、それ以上手を付けられる事のないままになっていた食器を、トウージュが厨房へ返しに行く。奥で女将に盆を渡しながら、宿を

出立する旨を伝えるつもりでいた。

「お連れさん、大丈夫かね？ 随分と具合が悪そうだけど。やつぱり、もつと消化のいいモンにしたほうが良かったかしらねえ？」

半分以上残された皿の中身に目を落としながら、女将が顔を曇らせた。

「いえ、十分に良くして頂いています。彼女の不調は精神的なものですから。御心配をお掛けしたままで申し訳ないのですが、そろそろ出立しようかと思ひまして……」

「おや、そうかね？ もう少し、あの娘さんの具合が良くなつてからの方がいいんじゃないのかい？ いやいや、別にあたしゃ、足止めて銭稼ごうってんじゃないんだよ。宿代が不安だつてんなら、あの娘の具合が良くなるまで宿代なしでもいいんだ。旅の途中で倒れられたりでもしたら、こちらら寝覚めが悪いじゃないか」

流し場でガシガシと皿を洗いながら、女将が心配そうに視線を送つてくる。言葉通り、金が目的でないのは理解できた。が、このまま宿に留まる事が彼女に最善だとも思えない。

「ご好意はありがたいのですが、旅の行程も大分ズレ込んでいますから。あまり遅れる訳にはいかない旅なんですよ」

角が立たないように、何とか言い繕つてその場を去る。部屋に戻ると、アイヒナが荷物をまとめている最中だった。闇姫は主の影に戻つたらしい。

「ああ、トウージュ殿。雑用などお願いして申し訳ない。もう間もなく、私の準備は整うので」

以前のような表情でアイヒナが振り向いた。心の中のわだかまりが消えた訳ではないだろうが、とにかく前へ進もうと思ひ始めたらしい。全体としてみれば、良い傾向なのだろう。しかしトウージュにしてみれば、それは崖の上を目隠しをしたまま歩いていくような危うさを伴つた前進だ。

「アイヒナ……。どうして君は、そんなに頑張ろうとするんだ？ たまには、周りにいる人達に頼つてもいいんじゃないのか？ 闇姫

だって俺だって、君の力になりたいと思っている。もつと頼ってく
れても」

「トウージュ殿」

アイヒナの声がトウージュの言葉を遮った。

「貴方の思いは、正直言っておりがたい。しかし私が誰かに頼ると
いう事は、その誰かを私の戦いに巻き込むという事だ。本来なら、
私と閻姫で片付けなければならぬはずの出来事に、貴方を巻き込
んでしまったのは 私の甘えなのだろう。誰かに理解して欲しか
った。誰かに頼りたかった。けれど、それでは奴に勝てない。エル
キリユースが私を選んだのであれば、私は神に恥じない自分でいた
い。だから、トウージュ殿。貴方とはここで別れようと思う」

荷物の口をしつかりと縛りながら、変わらない口調で続ける。

「貴方には、貴方に課せられた使命があるはずだ。だからこそ、珠
春宮パーテイルローサではなく、ここにいるんだろう。私は私に課
せられた使命を果たそう。貴方と私の道は、ここで分かれる。互い
の道を行こうではないか、王弟殿下」

何も言えず、立ち尽くすトウージュの傍らを、アイヒナが通り過
ぎる。荷物の詰まった荷袋。リュートの入った紋章付きの袋。長い
銀の髪を隠した頭布。風邪と雨を防ぐ毛織のマント。何が変わ
ったわけでもない。そして決定的に、何かが変わってる。

「貴方が側にいると……頼ってしまいそうになる、自分が怖いんだ

」

ドアの閉まる音に消えてしまいそうなアイヒナの呟きは、トウー
ジュの耳に届いたのか……。

10章 旅の行方・国の行方（前書き）

この国はこれから先、一体どうなってしまうのか？
そんな人々の声が高まっていく。

一方、アイヒナはようやく、トゥージュと共に旅を続けていく決心をする。

10章 旅の行方・国の行方

トウージュが自分の荷造りを終え、宿を出たのはそれからしばらくしてからだった。すでに支払いを済ませ、アイヒナの姿はない。自分の支払いを済ませて宿を出たトウージュは、通りの角に小さな影を見つけた。

「？」

建物の影に隠れるようにして、ウェインが宿の方を伺っている。

「ウェイン……」

トウージュが声をかけると、弾かれたようにウェインが顔を上げた。反射的に逃げ出そうとするウェインの腕を掴んでしまっただけから、慌てたように手を離す。

「ウェイン、どうしたんだ？」

うつむいて唇を噛んでいたウェインが、意を決したように顔を上げる。

「あの、あの神殿の女の人は？」

「え？ アイヒナ？ 彼女なら、もう宿を出たけど」

「どこ、どこに行ったの？」

今度はウェインがしがみついてくる。トウージュを見つめる瞳が、必死で何かを訴えていた。

「ウェイン、君はアイヒナを恨んでいたんじゃないのか？ 彼女は

街を出る。もう、そつとしてやってくれないか……」

「違うっ！ 違うんだ！ おいら、あの人に謝りたいんだ。あの人のやった事は間違いじゃなかったって！」

激しく首を振り、ウェインが叫んだ。

「ちょ、ちょっと待て。そういう事なら、それ以上は俺が聞くわけにはいかない。まだ、そう遠くへは行っていないはずだ。一緒に彼女を追いかけよう」

ウェインにうなずきかけ、トウージュは足を踏み出した。

「とりあえず、門へ向かってみよう。アイヒナは、タリスの街から出るつもりでいる」

「来て、こつちだ。おいら近道を知ってる。絶対こつちの方が早い」
細い路地を曲がると、ウェインはそう言って駆け出した。トウー
ジユもウェインの後を追う。

三日間降り続いた雨は路地のそこかしこに水たまりを作り、晴れた空に浮かぶ雲を映している。それらを蹴散らしながら二人は走り続けた。

王都ハデースの四つの街は明確に区切られているわけではない。ただ、珠春宮パーティルローサから放射状に伸びた水路が街を横切っており、水路に架かった橋が街と街との区切りになる。その橋を便宜上「門」と呼ぶのだ。街を出る者も、街に入る者も、必ずその門を使う。

「はあ、はあ、見えてきた」

橋を渡る人々が見えてくる。トウージユはせわしなく辺りを見回した。息が苦しい。胸が空気を求めている。自分の心音が耳障りでうるさい。

息を整え、側を通りかかった通行人を捕まえて尋ねてみる。

「ここを、銀髪で金色の瞳の目立つ女性が通らなかったか？ もしかしたら、黒尽くめの連れがいるかも知れないんだが」

通行人を捕まえては、同じ事を尋ねていく。ウェインも同じようにアイヒナを探していた。

「ここを」

「トウージユ殿？ 何をしている？」

背後から聞き間違えようのない、アイヒナのまろい声が聞こえてくる。

「アイヒナ」

闇姫の姿はない。アイヒナ一人だ。トウージユの後ろからウェインの姿が現れると、アイヒナの表情が曇った。

「ウェイン。トウージユ殿、どうして？」

顔を背けて立ち去ろうとするアイヒナの腕を、トウージュユがしっかりと掴んだ。

「待てよ、アイヒナ。なぜ逃げるんだ。ウェインが必死で君を探していたんだ。話しくらい、聞いてやったらどうだ」

アイヒナがゆっくりとウェインの方へ顔を向ける。脇に垂らした両手を握ったり開いたりして、懸命に言葉を探しながらウェインが口を開いた。

「あ、あの……。おいら、あんたに酷い事、言っちゃったと思って……」

「ウェイン？ 何を？」

怪訝そうに眉を寄せるアイヒナの視線を正面から受け止めて、ウェインは続ける。

「あんたはちゃんと、おいらに言ったんだ。どうにも出来ない時があるって。その時はゴメンで。おいらが、それでもいいって言ったんだ。それなのにおいら、あんたにすごく酷い事言ったんだ。ごめん。悪かったよ」

必死になって涙をこらえながら、ウェインが訴える。

「どうしようもなかったって、あんたは言ったんだ。済まない、って謝ってくれたんだ。あの後、おいら一生懸命考えたんだ。本当に悪いのは誰かを。悪いのはあんたじゃなくて、カーティって女だ！ 姉ちゃんは病気になった時にいなくなってたんだ。姉ちゃんも父ちゃんも、あの女に殺されたんだ！」

肩を振るわせるウェインをアイヒナはそつと抱き寄せた。しばらくそうしてから、アイヒナは静かに口を開いた。

「一度に家族を失ったんだ。その家族を助けられなかった、私を恨むのは仕方のないことだ。本当に済まなかった。でも、ありがとう、ウェイン。その一言でどれだけ私が救われるか」

閉じられたまぶたの下、アイヒナの黄金の瞳から涙が転がり落ちた。しゃくりあげるウェインの声が、彼女の腕の間から聞こえてくる。

「アイヒナ」

「トウージュ……」

かけられたトウージュの声に、アイヒナが顔を上げた。

「なあ、アイヒナ。俺には俺の道があつて、アイヒナにはアイヒナの道がある。俺は眠り病についての情報を得るために、兄上から依頼を受けて探索の旅に出ている。俺は病の真相を知りたい。一人でも多くの民を救いたい。それは王宮の兄上も義姉上も同じ考えた。だけどそれはどうやら、俺の考えているよりも複雑な様相を呈しているし、何よりも俺には理解出来ない事が多すぎる。頼む、アイヒナ。俺に力を貸してくれないか？ 俺には、君の力が必要なんだ。しばらくの間、一緒に旅をさせてもらえないか？」

「主殿。ここは主殿の負けではないか？ 詰まらん意地を張っても、可愛くないぞ」

トウージュの後ろから、いきなり闇姫の声がする。驚いて振り返ると、腕組みをした闇姫が三人を眺めている。

「お前はまた、そういう出現の仕方をする。美味しいところを、全部一人で持っていくつもりか？」

そう言ったトウージュの呟きは、当然の事ながら無視された。

「よう、坊主。よく、謝りに来たな」

ウェインの髪をくしゃくしゃにかき混ぜながら、闇姫が笑った。

「うるせー。坊主じゃねえぞ、ウェインだい！」

「ああ、そうだったな。悪かったよ、坊主」

＊＊

ウィルカの街では、領主の館に人々が集まっていた。ソキア亡き後ウィルカの街を統治していたターニアが孤児院を設立するというので、その説明会を開いたのだ。

「まこと、ソキア様には残念な事でしたな。街の人間は皆、ソキア様に感謝しておりますぞ。あの病に倒れた者を館に招き入れ、カー

テイ様の治療を受けさせて頂いて。その恩を返せるのなら、どんな事でもさせていただきますと」

「カーテイ様が、もう少しいて下さりさえすれば」

街の世話役の面々が、口を揃えてターニアに訴えかけてきた。領主の椅子に腰掛けたターニアは、広間に集まった人々を見渡すと言葉を発した。

「皆さん、ありがとうございます。夫ソキアも、ラ・ズーの宮殿にて喜んでいる事でしょう。あいにく、わたくしとソキアの間には子供がありません。そこで、眠り病で親を亡くした子供たちを引き取り、我が子同様に育てて行きたいと考えました。そのための孤児院設立には、皆さんの協力が不可欠なのです。どうぞ御理解、ご協力いただけませんか？」

ターニアの言葉に人々はうなずき、協力を約束して帰って行く。

「御主様からの命には沿いそうかね？」

別のドアから入ってきた家令が、領主の座についたターニアに問いかける。

「いよいよ御主様が動き始める。この街を足がかりにして国盗りを仕掛けるために、金と人間が必要になる」

満足気に答えたターニアに、唱和する声がある。

「そのために孤児院を設立する名目で金を集め、親を亡くした子供を引き取り、我等の種を飲ませる」

「時を見て彼等をノーヴィア公爵領へ送り込み、あの見栄っ張りの公爵殿下を祀り上げる。玉座に直系の王族でない者が座れば、自動的に封印は解ける」

開けたままのドアから、館の使用人達が部屋の中に集まってくる。まるで砂糖水に引き寄せられる蟻の群れのように。

「そう。そして封印が一つでも解ければ、他の封印など意味を成さない」

「御主様が復活なさる。そうすれば、無能な神々なぞ物の数ではない」

部屋の中に、神々を呪う声がこだまする。

「ルカスとグーマナンがやられた。夢織り^{エルーシャ}とドラムーナは、思いのほか早く我等に迫っているらしい。やがてはこの街にも辿り着くだろう。御主様のお心を占める、憎むべき敵。御主様のお心は、我等、^{バフオナ}夢魔のものだ」

ターニアが憎憎しげに吐き捨てた。

「御主様のお心を取り戻せ」

部屋中にあふれる不気味な瞳の群れを見回して、家令が宣言した。
「まずは当代国王コルウインを、珠春宮^{バーテイルローサ}の玉座より引き摺り^{ひきず}下ろせ
！」

領主の館は、いまや魔界と化している。

11章 孤影・一人きりの戦い（前書き）

立ち寄った先で、夢魔に遭遇する一行。

逃げ出した夢魔は、こともあろうくに妊婦の胎内に宿る胎児の夢に入り込んだ。

闇姫の助けもなく、アイヒナは一人立ち向かわねばならない……。

11章 孤影・一人きりの戦い

「まったくよお。この国はどうなっちまうんだか」

「城の貴族達は見て見ぬふりか」

「知っているか？ カーティ様は王都を出られたそうだ」

「それでは、眠り病にかかったら死ぬしかないってのか？」

耳に入ってくる言葉に明るい話題はない。誰もが皆、病への不安と貴族達への不満を抱いている。

南地区のタリスを出て、東地区のザイルへ入る。北地区のウィルカを目指したいのだが、タリスからは正反対の方角。どうしても東のザイルへ向かうか、西のカップパードへ抜けるしかない。

「不満が高まってきたな」

「ああ、わが事ながら、耳が痛い」

当代国王コルウィンへの不信。何も出来ない愚鈍な王。病弱を理由にして政をおろそかにして、国を傾ける暗君。民衆を恐れ病を恐れ、宮城深く隠れ暮らしている卑怯な王。

「なあ、アイヒナ。今、国政としてできることは何かないのか？」

トウージュのもつともな問いに、アイヒナは考え込んだ。

「現在、眠り病で亡くなる人は、僅かずつではあるが減少しているはずだ。しかしそれは、バフォナ達が糧を集める必要がなくなった事を意味している。そして、カーティという薬師の治療を受けた者は、バフォナの種を飲まされている可能性がある。夢魔を滅ぼす唯一の手段は、ドラムーナによって食い尽くす事……」

呟きながら思索しているアイヒナの横で、路商から買った鶏の脚の焙り焼きに食いついていた闇姫が、思いついたように口を開いた。「のう、主殿。バフォナの種を飲まされて、とり憑かれてしまった可能性のある者を一ヶ所に集めておいてもらうわけにはいかんのだろうか？ 早い段階の者ならば神殿の巫女達の力で夢魔を取り除き、封印しておく事も可能であろう？」

「なるほど。兄上の勅命で各街に治療院を造ればいい。そこにエルキリユース神殿から巫女を派遣して、夢魔を封印してもらえば」

「確かに私の負担も減る。もはや夢魔の種がどれだけばらまかれたのか、私にも見当がつかない。奴等が次の段階へ移行したからこそ、使える方法だが。それでも、神殿の姉巫女様方に手伝ってもらえるのなら、心強い」

通りを歩きながら、そちこちで囁かれる会話に耳を澄まし、周囲に目を配る。露店の並ぶ通りを過ぎると、噴水を設えた広場に出る程よく間隔を開けて植えられた街路樹が、心地良い木陰を提供している。

鶏の脚を骨ごと噛み砕いて飲み込んだ闇姫が、指をなめながら言った。

「主殿。路銀を稼ぐついでに、この街の状況を知っておいたほうが良くないか？」

「ほほう。つまり、ここで私に歌えというのだな？ 路銀を食い潰す一番の原因が」

「何を申されるか、主殿よ。路銀がなくて困るのは主殿のほうであらう？」

アイヒナは根負けしたかのようなため息を吐くと、肩から袋をおろした。荷物をトゥージュに任せると、噴水の縁に腰掛ける。

「さてと。それじゃあ、お客さん。何を歌おうかね？」

アイヒナがふざけて声をかけた。

「明るい歌がいいねえ。ここんトコ、暗い話ばかりだからね」

主の隣に腰をかけると、長い脚を組んだ闇姫が注文をつける。

「明るい歌ね。はいはい。それじゃ『トワラ海峡の海賊』でもやろうか」

リユートをにぎやかにかき鳴らす。周囲の視線がアイヒナに集まった。伸びやかな、心を浮き立たせるアイヒナの声。曇り空を掃き清めるさわやかな風のような声。

九つの海を走りぬけ その名も高き キャプテン・ハノーグ
黒漆の太刀 鞘に煌く真珠の飾り 八つの船と 百の手下
夢は輝くお宝と 綺麗な姫君その涙
荒れ狂う波 竜の息吹 災難 苦難を乗り越えて
宝は盗つても 命は取らぬ
海の男の そいつが掟
いつかは行こうぜ この空の下 誰も知らない 神秘の海へ
隻眼の霸王 キャプテン・ハノーグ

続々と人が集まってくる。木漏れ日の下で、人々はアイヒナの美声に酔う。このところの不安に満ちた生活の中で溜まっていた緊張が、彼女の声で柔らかくほぐれていく。曲が終わると、周囲から拍手の波が湧き起こった。

「よお、姉ちゃん。『暁の騎士』だ。次はこれをやってくんな」

「いや、待ってくれ！ 『紺碧のドレスの貴婦人』だろ、やつぱり」
「ちよつとちよつとお。勝手に決めないでくれよ。あたしゃ『マルティスの戦歌』が好きなんだ。あの曲にしておくれな」

あちこちから注文が殺到する。このままでは、乱闘でも始まりそうな勢いだ。トゥージユが言葉を失くしているうちに、闇姫が客の注文をさばき始める。

「はいはいはい。そこそこ、けんかおしでないよ。タダでは歌わないからね。一曲につき、金貨一枚。それで良ければ、頼んでおくれ。おや、旦那、何かね？ はいよ、お次の曲は『雪山の精霊』で決まりだ」

おいおい……。闇姫、お前、遣り手婆みたいだぞ……。本当に、伝説の獣・ドラムーナなのか？ トゥージユの心の声は、幸いな事に闇姫には届かない。噴水の周りは、即席の歌劇場となっている。熱狂する観衆を操作しながら、闇姫は注意深く人々を観察している。

「おい、闇姫。何か気になる事でもあるのか？」

トウージュがそつと近寄って、彼女に小声で尋ねる。

「ああ。トウージュ殿は知らんのだな。主殿の歌は、ただの歌ではないのだ。夢や眠りに問題を抱えている者にしか聞こえない、エルキリユースの『呪歌^{じゅか}』が織り込まれている。耳に入れば、必ず反応がある」

群集から目を外さず、闇姫がトウージュに答えた。

曲は順調に進んでいき、もはや何曲目なのかも判らなくなっている。その中で闇姫の目が、一人の男の姿を捉えた。素早くアイヒナに目配せする。その視線を受け止めたアイヒナがリユートを高くかき鳴らした。

「さて、皆さん。陽もだいぶ傾いてきた。今日はここまでと致しましょう。また明日、この場所で」

名残惜しげに去っていく人々の表情は、皆一様に笑顔だ。

人気のなくなった広場には、アイヒナ、闇姫、トウージュの三人が残る。いや、険しい目付きの人物が一人。

「おや、お帰りでない方がいらつしやるようだな」

アイヒナの黄金の瞳には、その体がリユートで紡がれた呪音に絡め取られているのが見て取れる。

「いかなされた？ 本日の演目は全て終了いたしました」

音の呪力にがんじがらめにされた男は、ギリギリと三人をにらみつける。

「主殿、ここでやるのか？」

闇姫が瞳を光らせて問いかける。

「呪歌に反応したという事は、融合がまだ初期の段階だという事だ。上手くいけば剥離も可能だろう。トウージュ殿、荷物の中から夢幻鏡を出してもらえまいか」

アイヒナの視線が、ほんの僅か男から逸れる。その瞬間、男の両目が裏返り体が痙攣を始める。悲鳴ともうめき声ともつかない、くぐもった声をあげながら男が口を開くと、タールのようなドス黒い粘液があふれ出した。夕暮れに染まる広場が突如として異界となる。

「闇姫、気をつける！ トウージュ殿、その男を頼む！」

くたくたと崩れ落ちた男の体をトウージュに任せ、アイヒナと闇姫が飛び出す。闇姫の姿が瞬時に黒狼へと変じ、男の体内から抜け出した粘液は移動しながら徐々に子鬼の姿を形作っていく。

「大地母神イシュリンよ！ この地を護りたまえ！」

アイヒナの髪が柔らかな緑色に彩られる、ほんの一瞬前。路地から広場に一人の女性が現れた。子鬼の姿をしたバフォナが女性に向かって飛び掛る。アイヒナの結界が完成する。それらが同時に起こる。

叫び声をあげようとして開かれた女性の口の中に、バフォナが吸い込まれるように入り込んでしまった。

「まずい！ 主殿、この女、孕んでおるぞ！」

「何だとっ！？」

闇姫の叫びに、アイヒナの愕然とした叫びが重なる。

バフォナの入り込んだ女性は、体を硬直させて昏倒する。黒狼の闇姫が間一髪で、女性の体が地面に激突する前にその体の下へ滑り込む事に成功した。

「何だ、どうした！」

様子の良く判らないトウージュが、二人に向かって怒鳴った。

「バフォナが妊婦にとり憑いた。腹の子供に乗り移った可能性がある」

苦々しく吐き出したアイヒナの言葉に、トウージュが顔色を変える。

病に倒れた人間に夢魔がとり憑く場合、弱った人間の精を糧とし、内側を喰らい尽くしてから人間の外見を被る。つまり、人間の外見を衣服のようにまとうのだ。

しかし人間として未熟な胎児の場合、人間と夢魔の意識が溶け合い、その結果、肉体を持ったバフォナが生まれてきてしまうのだ。

「どうするのだ、主殿！ もう時間がないぞ」

焦る闇姫の声に、アイヒナは天を仰いだ。

「トウージュ殿、夢幻鏡をくれ」

意識を失った男の体を支えていたトウージュは、荷物の中から出したままになっていた夢幻鏡を彼女に向かって投げた。クルクルと宙を飛ぶ夢幻鏡は引き寄せられるようにアイヒナの手に納まる。闇姫の支える女性の額に右手をかざすと、夢幻鏡の中に玄妙な色彩が踊る。その色彩の中に、虫食いのように黒いシミが現れる。それを見たアイヒナの顔に険しい表情が浮かんだ。

「闇姫」

黒狼の姿の闇姫が、人間の姿の変じる。

「これより、夢を渡る。私の身体を頼む」

そう言うなり、アイヒナは夢幻鏡の鏡面に両手を当てる。

「エルキリユース 我が父にして 我が母よ

我に力を貸し与えたまえ

世界を内包する我が神よ

どうか この子供の生命を 世界はこの子の誕生を願っている

どうか どうか我が神よ 力を――！」

目を閉じて天を仰ぎ全身全霊を掛けて叫ぶ。そのまま、まるで凍りついたように動かなくなった。

「っ？ アイヒナ？ アイヒナ！ どうしたんだ！？」

男の身体を投げ出し、トウージュがアイヒナに駆け寄った。動揺のあまり彼女の身体を激しく揺さぶろうとする。

「よさんか、馬鹿者！ 動かすでない！」

横から闇姫に羽交い絞めにされる。

「今、主殿を動かしたりすれば、夢の中から戻れなくなるのだ。触るな」

「どういう事だっ！？」

闇姫の腕を振りほどき、トウージュは彼女に詰め寄った。アイヒナは、傍らの二人の騒ぎにも動く気配を見せない。

「主殿は今、子供の夢の中にいる。夢を渡る夢幻鏡を使って、バフォナのとり憑いた子供の夢の中に入り込んだのだ。うかつに動かせば、主殿の意識を繋ぐ糸が切れて抜け出せなくなる。落ち着いてみておれ」

一方、夢幻鏡を使い夢を渡るアイヒナは、意識を肉体から切り離して胎児の夢を漂っていた。様々な夢がアイヒナの傍らをすり抜けていく。誕生に対する期待、希望。安全な母親の胎内から離れる不安。人間に成長する以前の古い記憶。空を飛んでいた世代の、海を泳いでいた世代の、地を這っていた世代の記憶。そして、徐々に侵食されていく未来への夢。

「うかつには、動けん」

迷路のように絡み合った複雑な夢の中を、アイヒナはバフォナの痕跡を辿りながら進んでいく。閻姫の変化したドラムーナの剣は、今の彼女の手元にはない。バフォナに辿り着いたとしても、アイヒナ一人の力で切り抜けなくてはいけない。もともとドラムーナの剣があつたとしても、胎児の夢の中で使うわけにはいかないのだが。

まるで抽象画のような、つかみ所のない景色の中で、アイヒナは子供の夢を壊したりしないように、細心の注意を払う。

泡のように漂ってくる巨大な夢の塊が、周囲をうかがうアイヒナの傍らをかすめた。淡い色彩がにじむ夢の塊に、突如ドス黒いシミが現れた。内側から皮膜を突き破るように、鋭い突起が飛び出してくる。ピタリと揃えられた五指の爪。振り返ったアイヒナの頬をすすめ、千切れた銀の髪が視界を遮った。

「ヒヤアハハハ。どうするんだよ、^{エルシヤ}夢織り！ 僕を捕まえるんだろ？ 早くしないと、コイツの夢は僕のモノになっちまうよあ」

塊の中から醜い子供の姿をした夢魔が飛び出してくる。ふざけた物言いで、アイヒナを挑発する。

「知ってるよあ、知ってるよあ。お前はこの夢の中じゃ、力が出せないんだよねえ。ヒヤハハハハ、ハア」

舌を出し、おどけた仕種で醜悪な踊りを披露する。

「メライーサ 海の営みを司る神よ

巡る海流を護る力を 我に貸し与えたまえ」

アイヒナが印を切るのと同時に、彼女の髪が鮮やかな紫に染まった。外界でも同じ変化が、彼女の肉体に起こっているはずである。その髪が、風もないのにフワリと宙に舞う。アイヒナと夢魔の周囲に分厚い水の壁が現れた。深い海の底を思わせる、穏やかな紫がかった水の色。いかなる障害物も、いかなる自然現象も邪魔する事の出来ない不可侵の領域。それが海。それが海流。

「私はアイヒナ。エルキリユース神殿の夢織りだ。さあ、私は名を明かしたぞ。お前の名を私に渡せ」

目元に嫌悪のしわを寄せながら、アイヒナはバフォナに告げた。

「ああ、そうだね。お前は僕に名前を明かしたさ。でも、僕がお前に名を渡すわけないだろう？ 馬鹿じゃないの」

アイヒナにヒラヒラと手を振っておどけていたバフォナの腕が、いきなり伸びて彼女を襲う。すんでのところで攻撃をかわしたアイヒナのチュニツクの袖に、大きなかぎ裂きが出来た。

「どうも、バフォナという奴等は、私の服を駄目にするのが好きらしいな。互いに戦う相手を認めるために、名を明かすのが流儀ではなかったのか？ お前が私に名を明かさぬと言うのであれば、こちらとしては、力尽くで奪い取るまでだ」

袖を押さえていた手を離し、アイヒナは素早く印を切った。

「ミニールよ 真白き翼の女神よ

羽ばたきにて舞い散る羽根を綴り つなぎ 連ね 投げかける

全ての運命を捕らえ 絡め取る」

早口で芸術神ミニールへの聖句を唱えたアイヒナの背中に、輝く

光の翼が開く。紫だったアイヒナの神宿る頭髮が、熟れた柑橘系の
橙色を宿す。

「どうすんのさあ。そんなモノで僕を捕まえようっての？ 笑っちゃうね」

神経を逆撫でする甲高い声。しなびた肌は青黒く、枯れた樹木を連想させる。まぶたはなく、ギョロギョロとした眼球は黄色く濁っている。鼻のある場所には、二つの穴が開いているだけだ。口は粘土にナイフで切れ目を入れたかのように薄く、乱杭歯が並んでいるのが見て取れる。なまじ子供の姿をしているだけに、なおさら嫌悪感が募る。

アイヒナの背中に開いた光の翼が音もなく膨張し、網のようにバフォナに覆いかぶさる。網の隙間をかいぐり逃げ出そうとしていたバフォナだが、光で紡がれた網は自在に動き、相手の逃げ道を絶つて行く。

「な、なんだよ、これ！ 離せよ！ 離せつてばあ！」

身動きのとれなくなったバフォナが、ジタバタともがき暴れている。

「悪いな。お前に指摘されるまでもなく、時間がないのは私が一番良く知っているんだ。さあ、お前の名前を渡してもらおうか」

「誰が。御主様から頂いた大切な名前を、お前なんかには渡すもんか」
そっぽを向いた夢魔へ歩み寄り、アイヒナの指がミュールの聖印を切る。夢魔を捕らえている光の網が、鋭い刃となつて相手の身体に喰い込んでいく。バフォナの口から、凄まじい苦鳴があがった。

「名乗れ！ この状況を見れば、お前と私の力の差は理解できるだろう。お前は私に、名前を渡さなければならない」

さらに一歩近寄ったアイヒナ目掛けて、夢魔が唾を吐きかけた。予想外の動きに、彼女の反応が一瞬遅れる。

「っ、くうっ！！」

吐き出された唾は、アイヒナの剥き出しの首筋にかかる。焼けた鉄板に水をかけたような音がして、皮膚の焼ける異臭が漂った。

「はっはああ、間抜けなエルーシャ！ お前なんかに、僕を捕まえられるもんか！ この人間の夢を壊す事を恐れて、何も出来やしないくせに！」

全身を走る激痛に、バフォナを捕らえている集中が途切れそうになる。涙でかすむ目を見開き、アイヒナは叫んだ。

「ラ・ズーよ！」

“死”に際して 全ての罪を暴く峻厳しゅんげんの神よ！

その真実を見抜く瞳を我に ひと時貸し与えたまえ！！」

橙色の輝いていた彼女の髪が、瞬時にくすんだ灰白色に変化する。終焉を示す最期の色。それは死者を迎える神、ラ・ズーの神色。

「真実と虚構を見分ける瞳持つ神よ

我に宿れ 我に示せ 我の求める真実を明かせ

汝 バフォナよ お前の名は ジークハース」

神の貸し与えた瞳で、アイヒナは夢魔の名前を奪い取る。静かに名を告げられた瞬間、バフォナ「ジークハースは苦しげに顔を歪めた。無理矢理に名を剥ぎ取られた苦痛が、ジークハースを襲ったためだ。

「畜生！ 御主様から頂いた名前を、よくもっ！！ いい加減にしろよ アイヒナ！！」

憎しみを込めて呼ばわれた名前は、アイヒナの精神体を支配した。時間にして一秒にも満たない、僅かな時間。だが、確かに彼女の心臓は動きを止めたのだ。

「あ……がつ、はっ……！！」

胸を押さえてアイヒナがよろめく。粘ついた気持ちの悪い汗が、彼女の全身から噴き出した。苦痛のあまり、集中が切れたのだらう。ジークハースを戒めていた光の網が、輝きを失い四散していく。

「キヤハハハハ！ いいザマだな、エルーシヤ。僕から無理矢理、大事な名前を奪った報いだ。思い知れ！」

ジークハースの鋭い爪が、左右からアイヒナを襲う。攻撃をかわそうと、アイヒナが聖印を切るために指を動かした。

「だめだよ、アイヒナ。じっとしてなよ」

名前を呼ばれた途端に、身体が凍りつく。アイヒナの意に反して動こうとしない手足に、ジークハースの爪が突き立った。

「ぐあっ！！」

アイヒナのチュニツクと袴に血が滲む。夢の世界だからといって、甘く考えてはいけない。夢の中で精神体が傷を負えば、現実の肉体も傷を負う。精神体が血を流せば、もちろん肉体も血を流すし、万が一の時には死に至る事もある。また、長時間にわたる夢渡りには別の危険もあった。夢幻の世界では、夢渡りをしているアイヒナの精神体よりも、夢を見ている本人の精神体の方が上位にあたる。アイヒナを「異物」として排斥しようとする力が働く場合もあるし、逆に取り込まれて「同化」してしまうという事もあり得るのだ。特に「人間」としての進化途中にある胎児の場合は、取り込まれてしまう危険性が高い。

「ヒヤハハハア！ 夢織りも大した事ないねえ。なあ、夢織り。僕がこのままお前を倒したら、御主様は僕を褒めてくださるよね？ そしたら、タリスにいるあんな奴より僕の事を信用して、お側に置いてくださるかも知れない。そしたら、なんて素敵なんだろう！」
うつとりと言葉を続けるジークハースに、アイヒナが荒い息を吐きながら言った。

「妄想に浸っているところ申し訳ないが。夢織りを、そうそう舐めてもらっても困るんだ」

手足から流れる血で赤く染まった衣服は、あちこちが破れ、無惨な姿である。しかしその金色の瞳はまだ闘志を失ってはいない。

「私が背負っているものの重さなど、貴様には到底理解できない。貴様達が御主様と呼ぶ、招かれざる神・アーカバルのせい、私が

失ったものの重さなど貴様には量れもせぬわ!!」

アイヒナの長い髪が舞い上がり、破れたチュニツクの間から覗く白い肌に刻まれた神聖文字の刺青が五色の光を放って輝いた。

同様の変化は、閻姫とトゥージュの待つ外界でも起こっていた。

二人の目の前で、動かなくなったアイヒナの身体に傷が開く。何の前触れもなく彼女の首筋の皮膚がただれ、嫌な臭いが漂う。アイヒナの表情も苦痛に歪む。

「お、おい、アイヒナ!」

「じゃから、主殿に触れるなど言うておろうが! この虚け者め!」

大慌てでアイヒナを抱き起こそうとしたトゥージュの側頭部を、閻姫が拳で殴りつけた。

「お前、主殿を死なせるつもりか? 落ち着いておれ」

そうは言われても、目の前でいきなり傷が開くのだ。落ち着けようはずもない。トゥージュが殴られた頭をさすっているうちにもアイヒナの身体が硬直し、全身に汗が噴き出す。

「俺達には、何もできる事はないのか? このまま見ているだけなんて、耐えられない」

「吾とて同じ思いじゃ。しかし、我等は現^{うつ}、主殿は夢幻。そう易々とは手が出せぬ。焦らず待て。必ず何かあるはず。反撃に出る機会が、必ずあるはずじゃ」

閻姫の鋭い犬歯が口唇を噛み締める。そんな二人を知らぬ気に、アイヒナの手足から鮮血が流れ出す。

「主殿。頼む、主殿。何でもいい。教えてくれ。このままでは焦るなど言っていた閻姫本人が、実は誰よりも一番焦っていたらしい。無意識なのだろうが、十指の爪が伸び、ギチギチと鳴っている。側にいるトゥージュとしては、かなり怖いのでやめてほしいのだが、そんな事を言い出せるような雰囲気でもない。閻姫から目を逸らした彼は、アイヒナの胸元からもれる光に気がついた。

「おい、閻姫。これは」

アイヒナのチュニツクの胸元に手を伸ばしたトゥージュを見て、

闇姫が彼に掴みかかる。

「この大戯おおたわけ者が！　このような非常時に、何を考えておる！　喰い殺すぞ、貴様！！」

喉元を締め上げられたトゥージユは、もがきながらアイヒナを指さす。

「ち、ちが……。勘違いするな。あれだよ、あれ」

その指差すほうを見て、闇姫はトゥージユを放り出した。王弟殿下の情けない声を見、闇姫はアイヒナの胸元をはだける。

12章 アイヒナ・捧げられたる者（前書き）

ようやく胎児の夢からバフォナを取り除き、現実の世界へ戻ってきたアイヒナ。

しかし、これで終わりというわけにはいかない。

アイヒナと闇姫に、とんでもない頼まれ事をされてしまったトウーシュはどうする？

12章 アイヒナ・捧げられたる者

闇姫の指の間から、アイヒナの白い胸元がのぞく。トウージュの視線は自然にそこへ吸い寄せられる。そしてその事にはっと気付き、慌てて目を逸らす。

白い肌、その双丘の間には神聖文字による神名の刺青。それが今は、五色の光を放っている。

「闇姫、これは一体？」

トウージュの声にも答えず、闇姫は爪を噛みながら考えている。

「主殿、何をやらかすつもりなのじゃ？」

そう呟いた瞬間、闇姫の紅眼が見開かれ思わず声がもれた。

「まさか」

「何だ、何なんだよ、闇姫」

「主殿は、子供の夢に入り込んだ夢魔バフォナを自らの裡に取り込むつもりだ。主殿の精神体と夢魔が、一度融合する。その状態で外界にある肉体へ戻り、その後にバフォナを抜き出すのじゃ。しかし、それには多大な精神力を必要とする」

そこで言葉を切り、闇姫はトウージュを見つめた。

「お主の本心を訊くぞ。トウージュ殿、主殿が助けを求めている。」

主殿を助けられるのは、お主と吾の二人だけだ」

「馬鹿野郎！ そんな事をグダグダ言っている場合か！ アイヒナを助けられるんだったら、何でもやるから早くしろ！」

珍しく闇姫の言葉を遮り、トウージュが怒鳴った。そんな彼を見やり、闇姫はニヤツと笑った。

「よし。その心意気、しかと受け取った。お主には、主殿の苦痛を引き受けてもらおう」

「って、おい、苦痛って何だあ！？」 トウージュの心の叫びを無視して、闇姫は素早く印を切った。

「トウージュ殿、手を貸せ。我等の生命力を主殿に移すぞ。余計な

事は考えず、主殿を助ける事だけを考えろ」

いまだに訳も判らず、まごついているトウージュの手を引き寄せると、アイヒナの手を握らせた。

「お、おい、闇姫。助けるつたって、一体どうやって？」

「祈れ。いずこの神にでも良い。とにかく、主殿の無事を祈るのだ」闇姫に言われて、トウージュは目を閉じた。一瞬だけ迷ったが、やはりエルキリユースの加護を祈る。その隣で同じようにアイヒナの手を握り、一心に祈りを捧げる闇姫がいる。

「アイヒナ。戻ってくるんだ、アイヒナ。俺と闇姫のところへ、戻ってくるんだ」

握り締めた手に額を付けエルキリユース神へ祈りを捧げていると、身体の中から、すうっと力が抜けていくのを感じる。その感覚が、自分の生命力がアイヒナに流れ込んでいる何よりの証拠だと、トウージュに教えてくれる。その感覚に励まされ、彼は身体の底から力を奮い立たせた。

「エルキリユースよ。あなたの巫女が戦っています。あなたの代わりに、あなたの造ったこの世界を守るために。どうぞ、あなたの巫女をお護り下さい！」

＊＊

これ以上手間取る訳にはいかない。血の気の失せた顔のアイヒナは、自分自身に言い聞かせた。このままでは、アイヒナの精神力も切れてしまう。本当は捕らえて外に引きずり出したかったのだが、そうも言っていられない。とにかく一刻も早く、ジークハースをこの夢から離さなくては。

輝き始めたアイヒナの刺青を見て、ジークハースが引きつった笑いを浮かべる。

「今さら、何しようってのさ夢織り？^{エルーシャ} 割と往生際が悪いんだねえ」

「ああ、そうだ。私が諦めたものの大きさを考えれば、そうそう簡

単に引き下がる訳にはいかないのさ！」

尻込みするジークハースの腕を、アイヒナが捕まえる。

「何するんだ！ 離せよ！ 離せたら！」

逃げ出そうともかく夢魔の爪が、捕えて離さないアイヒナの体を傷付ける。バフォナの鋭い爪がひらめくたびに、アイヒナの髪が、衣服が、肌が切り裂かれていく。体中のあちこちを鮮血で染めながら、アイヒナはジークハースの体を抱え込んだ。

「離せって言ってんだろ！ はーなーせーよー！！」

傷口から力が抜けていく。だが不思議な事に、体の奥深くから力が湧いてくるのだ。両手のひらが温かい。まるで、誰かがしっかりと握り締めてくれているような、人肌の温もり。そこから流れ込んでくる、アイヒナを勇気づける強い力。

「闇姫と……トウージュ殿か」

思い当たったアイヒナは、唇の端にかすかな笑みを浮かべた。そして夢魔に意識を集中させる。

「何するつもりなんだよ！ 離せよ、馬鹿野郎！」

「さあて、何をするんだろうな。お前にとって楽しい事でないのは確かだよ、ジークハース」

ジタバタと暴れるジークハースを、しっかりと抱え込む。黄金色の瞳が炯炯^{けいけい}と光を放ち、胸の神聖文字も輝きを増す。

自分の体を見て、ジークハースが悲鳴をあげた。まるで氷が溶け出すように夢魔の形が崩れていく。指先などの末端の部分から、体が光の雫となつて滴り落ちていく。雫はアイヒナの刺青が放つ光と同化し、彼女の体内へと吸収されていく。

「あああああ ! 僕の体が！ 御主様から頂いた、僕の体が溶ける！ よせ！ やめろよ！ 離せ！」

抵抗するジークハースの体を押さえ付けながら、アイヒナも苦痛に耐えていた。夢魔の体を吸収するたびに、煮えたぎった熱湯を浴びせかけられるような苦痛がアイヒナの全身を襲うのだ。

「もう、遅い。この技は一度発動したなら、途中で止める事は出来

ないんだ。残念だったな」

齒を食いしばり、次の激痛に備えたアイヒナは、予想していたよりも苦痛が小さい事に気が付いた。

「まさか」

しかし、それを気にしている余裕はない。バフォナの解体にも加速がかかる。

「お前なんかにお前なんか、この僕が！！」

腰の辺りまで溶けてしまったジークハースは、最後の足掻きとばかりにアイヒナの肩に噛み付いた。

「ああああああ　！！」

強酸の唾液によって肩の皮膚と肉が焼ける。胎児の夢の中にアイヒナの絶叫が響き渡る。それでもその痛みは、外界にいるどちらかの仲間によって軽減されているはずなのだ。自分の生命力を分け与え、アイヒナの苦痛を引き受けてくれている彼らのためにも、彼女がここでくじける訳にはいかない。

痛みのせいで意識が遠のく。粘つく汗が目に入る。そして、さらなる苦痛で覚醒する。

「そ、創世の神々よ」

痛みに耐えるアイヒナの口から、神々への聖句が紡ぎ出される。

「創世の神々よ　世界を守護する神々よ

生ける者　死せる者　生まれ来る者　去り逝く者

巡り廻る　時空の環よ

世界のあるべき姿へ戻せ　この世の法に従がわぬ者達を
神々の定める律の許へ　あるべきものを　あるべき形へ」

アイヒナが聖句を唱え終わる。

「嫌だ！　嫌だあああ！　御主様あああ！！」

ジークハースが最期の叫びをあげた。そしてその残響が消えないうちに、夢魔の体は全て溶け崩れた。ジークハースの体を形作って

いた光の分子がアイヒナの刺青に吸い込まれていった。

「　　っ、くう　　」

己の肩を抱き締め、その場にアイヒナが崩れ落ちる。襲い掛かってくる痛みと疲労感に、そのまま意識を手放してしまいたい、そんな誘惑にかられる。だがそれでは意味がない。早くこの胎児の夢の中から抜け出さなくては、これまでの事が無駄になってしまふ。

震える指先でエルキリユースの印を切る。何度もなぞったことのある印が、恐ろしく複雑で困難なものに感じられる。目がかすむ。外界から力を送ってもらっていて、これ程までに苦しいのだ。もしも一人であつたなら、果たして、やり遂げる事が出来たかどうか。「結局、私一人では、何も出来ないという事が……」

そしてアイヒナは、ゆっくりと目を閉じた。

＊＊

アイヒナの手を握り締め、エルキリユース神への祈りを捧げていたトウージュは、突然全身を貫いた激痛に、呻き声をあげた。

「な、何だ、この痛みは　？」

思わずもれた言葉に、闇姫が答えた。

「その痛みは、今、主殿が感じている痛みだ。少しでも主殿の負担を軽くしたい。じゃから、お主に苦痛を引き受けてもらっておるのだ」

マジですか？　トウージュの反論を許さず、闇姫の叱咤が飛んだ。

「気を散じるな！　お主と吾の行動に、主殿の命がかかっておる。意識を集中せよ！」

慌ててアイヒナに意識を戻す。途端に、凄まじい痛みが流れ込んでくる。

「ぐ、ううっ」

これまでにトウージュが経験した事のない痛み。本能的に痛みか

ら逃げ出そうとする。握り締めたアイヒナの手を見る。この手を離せば、この痛みから解放される。ついそう考えてしまうのも、無理からぬ程の苦しみ。

だが、トウージュには判っていた。この手を離す訳にはいかない事も。

「アイヒナだって、この痛みに耐えているんだ。俺が逃げ出して、どうする」

一層強く、彼女の手を引き寄せた。顎から汗が滴り落ちる。噛み締めた口唇が破れる。

「戻って来い……。戻って来るんだ、アイヒナ。俺達のところに、戻って来るんだ」

呪文のように繰り返す。トウージュ自身がその言葉にしがみつくように。

アイヒナはすでに満身創痍だ。その体に次々と口を開く、新しい傷を見ていると恐ろしい思いに囚われそうになる。ただ、容赦なく吸い取られていく生命力だけが、最悪の状況ではないと教えてくれている。

全身を強張らせて痛みに耐えていたトウージュは、苦痛の波が途切れた事に気付いて、そっと目を開けた。アイヒナに変わった様子はない。

「……アイヒナ？」

呼びかけてみる。だが、反応はない。一体どうなったのか、闇姫に尋ねようと顔を上げた時。

「え？」

トウージュの手を柔らかく、しかし力強く握り返す、アイヒナの手。

「おい！ アイヒナ！ 聞こえるか？ 目を開けるんだ！ アイヒナ！」

トウージュの必死の呼びかけに、アイヒナの目蓋が震えた。

「く、闇姫！ アイヒナが！」

その声に促された闇姫が、己の主人の顔を覗き込む。

「主殿！　しっかりせよ！　主殿！」

アイヒナの目蓋が、ゆっくりと開く。口唇が僅かに開き、深い息がもれた。

「ああ……戻ってきたんだな　」

いつの間にか神聖文字の刺青は光をなくし、その代わりに黒々とした斑紋が刺青の周囲に浮き上がっている。

「アイヒナ、良く頑張ったな」

トウジユの言葉にアイヒナは痙攣のような笑いを浮かべた後、闇姫の方へ顔を向けた。

「闇姫。母親の様子は？」

「大丈夫だ。主殿のお陰で、胎^はの子供も守られたぞ」

「そうか……。それは、良かった」

荒い息の中から、安堵の言葉がこぼれた。

「傷の事もある。もう休め。俺が運んでやるから」

トウジユからかけられた言葉に、アイヒナは体を起こそうとした。

「そういう訳にも、いかないんだ。そこに倒れている男と、この母親を運ばねば。このままにしていく訳にもいくまい」

すっかり忘れ去られていた男をトウジユはやっと思い出した。

その男の許へ駆け寄ると、抱え上げて引きずっていく。噴水の縁にもたれるように座らせた。顔を覗き、目蓋をめくって眼球の様子を見る。懷から手巾を取り出すと噴水に浸し、投げ出した時に出来たコブにあてがう。

「これで、良し　　と」

それを見ていた二人の許に戻ると、闇姫に言った。

「闇姫、アイヒナを背負っていけるか？」

「それくらい、容易い事だが……」

「なら、彼女を背負って先に行ってくれ。俺はこの人を知っている街の人を捜してくる」

傷と疲労のために立ち上がる事も出来ない主人を、闇姫が軽々と背負い上げる。

「判った。先に宿を決めておく。決まったら、宿の入り口に主殿の頭布とこふを掛けておくからな。それを目印にせよ」

「ああ、判った。アイヒナの頭布だな。それを目印にして探すよ。あ、それからアイヒナ。悪いが、結界を解いてくれるか？」

闇姫の背中であざ笑ったアイヒナが、小さく指を動かす。それだけで、広場に街の喧騒が戻ってくる。

「ありがとう。さ、闇姫、行くんだ」

アイヒナを背負った闇姫の姿が路地へ消えると、トウージュは女性を抱え上げた。

「これは、腹が大きくなって、助かったと言うべきかな？」

確かに、女性の腹が大きくなっていれば、このように抱え上げる事は不可能だっただろう。注意深く歩を進めながら、トウージュは広場から通りに出た。

「どなたか、この女性の事をご存知の方はいらっしゃいませんか！？」

その言葉に、近くで荷車を曳いていた、初老の男性が近寄ってきた。

「おいおい、こりゃドルトナーんとかのおかみさんじゃねえか？」

「その広場で倒れてたんです。どうも、男の人とぶつかってしまったらしくて。噴水の所にも男の人が倒れていたんで、そちらも見えて頂けるとありがたいんですが」

街の人間が数人集まってくる。トウージュの説明に、何人かが広場へ向かっていった。

「お若い。この荷車に、おかみさんを乗せな。ドルトナーの家まで送ってやってやるよ」

男に言われてトウージュは礼を言う。女性を荷車に乗せると、通りの外れにあるという家まで送っていく事にする。家では、夫であるドルトナーが帰りの遅い妻を心配していた。

ようやく目を覚ました女性の意識がもうろうとしているうちに、道すがら考えていた話を説明する。ありのままを話しても、到底、信じてもらえるとも思えない。

妻を送り届けてくれた事に感謝するドルトナーがしきりと引き止めるのを、連れが待っているからと、丁寧に断って家を出た。広場まで戻ると、闇姫が消えていった路地へと向かう。すでに陽は落ち、通りの街灯には灯が入れられている。店に掲げられている看板を、ひとつずつ確認しながら歩いて行く。遠慮のない宿の客引きや、酔客相手の娼妓達をかわしながら、闇姫とアイヒナのいる宿を探す。

「ん？ あれか？」

『人魚の涙』という看板の脇に、アイヒナの頭布がはためいている。エルキリユース神殿の紋章が染め抜いてあるものだ。間違いないだろう。その布を解くと、宿の中へ入っていった。

「主人。こちらに、女性の二人連れが来ているはずなんだが？」

酒場で客の対応をしていた主人が、トウージュの言葉に顔を上げた。

「おお、あんたがお連れさんかい？ 上で休んどるよ」

闇姫が二部屋頼んでくれたらしい。主人が鍵を渡してくれながら、隣の部屋に二人がいると教えてくれた。どうやら、近くに住む薬師を呼んだらしい。

主人に礼を言つと、階段を上がって行く。あてがわれた部屋に荷物を置くと、早速、二人の部屋を訪ねた。ドアを開けると、ちょうど薬師が帰るところだった。見送りに出てきた闇姫と一緒に薬師に礼を言う。そのまま階下へ降りて行く闇姫を見送り、トウージュは部屋の中へ入った。

「具合は、どうだい？」

アイヒナは、窓際にあるベッドで横になっていた。意識は、はっきりしているらしい。彼の方へ顔を向けると、ふわりと笑って見せた。

「ああ、トウージュ殿。あの二人は？」

「大丈夫だ。男性の方は、街の人達が連れて行ってくれた。女性も家まで送り届けてきたよ。それよりも、休まなくていいのか？」

「まだだ。まだ休む訳には、いけない。私の体の中には夢魔^{バフォナ}を封印しているのな。コレを抜き取るまでは、私は眠る事が出来ないんだ」

薬師を送ってきた闇姫が戻ってきた。

「主殿が眠らぬ事で体内の夢魔を封じておるのだ。これから吾がそのバフォナを滅する訳なのだが、それにはお主の助けがいる。手を貸してはもらえまいか」

思いもかけない闇姫の申し出に、トウージュは目を丸くした。

「俺が？ 何か出来る事があるのか？」

「本来ならば、私が自分でやらねばならない事なのだが。情けない事に、この様ではいかんともしがたい。トウージュ殿に手伝ってもらえると、私としてもありがたい」

「いや、俺で役に立つなら、何でもするさ」

「それは助かる」

それで、何を？ と聞き返したトウージュは、アイヒナと闇姫から教えられた方法に自分の耳を疑った。

「それは そんな……」

「そんなに難しい事を頼んでいるだろうか？」

トウージュの驚きようを見て、アイヒナは怪訝そうな顔をした。

「いや、難しいとか、そう言う問題ではなくて……」

「ならば、何が問題だというのじゃ？ 煮え切らん奴め」

闇姫がイライラと詰め寄ってくる。

「何がって言われても」

トウージュが尻込みするのも、無理はない。

アイヒナと闇姫が、彼に頼んだ事。それは『黒剣に姿を変えた闇姫を、アイヒナの胸に突き立てる』というものだった。いくらアイヒナを傷付ける事はないと言われても、そう簡単に引き受けられるものではない。

ぐずぐずと思い悩んでいるトウージュに、闇姫が噛み付く。

「ええい、もう！ 先程、何でもすると言ったは、あれは嘘か？ 男のクセに思い切りの悪い奴よ」

闇姫に責められて、言葉を失くしているトウージュに、アイヒナが助け舟を出した。

「やめよ、闇姫。これは元々、私達の仕事なのだ。トウージュ殿に無理強いはい出来まい。私が何とかしよう」

そう言うなり、ベッドから身を起こそうとする。

「ま、待て待て！ 判った、判ったよ。やりますよ！」

首筋に巻かれた包帯が痛々しい。無茶をしようとするアイヒナを制し、トウージュが根負けしたように叫んだ。

「やれやれ。手間のかかる男だの。駄々などこねておらんで、さっさと引き受ければ良いのよ」

不平タラタラの闇姫に、トウージュはため息をつくしかない。

「もう一度訊くが、絶対に、アイヒナを傷付けたりする心配はないんだな？」

上目遣いに闇姫を見やり、再度確認する。

「お主。実は吾に喧嘩を売っておるであろう？ 吾は初源の獣ぞ。
夢魔を喰らう吾が、生身の人間を傷付けてなんとする！ しかも、主殿を？ 吾が？ お主、本気で言っておるのか？」

済みません。ごめんなさい。トウージュはひたすらに謝るしかなかった。そんな二人の背後から笑い声が響いた。振り向くと、アイヒナが笑っている。

「アイヒナが 笑っている」

「主殿が 笑っておる」

異口同音に、驚きの声もれる。アイヒナが声をあげて笑う姿を、トウージュは初めて目にした。それは闇姫も同じだったらしい。二人の肩から力が抜けた。

「……それでは、始めようかの」

「……ああ、判った」

闇姫はベッドに近寄ると、掛けられていた毛布をめくった。肌の露出している部分は、ほとんど布が巻かれている。

「主殿、失礼するぞ」

チュニツクの胸元をはだける。

「お主、余計な事を考えるでないぞ」

そう言つと、アイヒナの作つた影の中に身を沈める。そして代わりに現れたのは、柄頭に紅玉を嵌め込んだ刀身までも黒い剣。恐る恐る柄に手をかけ、影の中から引き抜く。妙にトウージュユの手に馴染む長剣は、その姿形から想像するよりも軽くて扱いやすそうだ。だが、刃の輝きは珠春宮の武器庫の中にある、いずれの剣よりも鋭い切れ味を思い起こさせる。

「そ、それじゃ……」

チャキツ。

黒剣を構え直すと、ベッドのアイヒナに近寄る。

「手間をかけるな。気にする事はない。この刺青の部分に、その剣を突き立ててくれ」

黒剣を構えたまま、トウージュユは生唾を飲み込む。心臓が口から飛び出しそうな程、脈打っている。今までに、これほど緊張した経験はない。

何が悲しくて、ホレた女の胸に剣なんか……。俺、何やつてんだろう？

なかなか動こうとしないトウージュユの手に、じれたような震えが伝わってきた。闇姫がイラついているのだろう。意を決したトウージュユは、大きく息を吐いた。

「トウージュユ殿。本当に、心配なくていいんだ」

アイヒナは薄く微笑み、自分の目の前に掲げられた黒い長剣をまるで迎え入れるかのように両手を差し伸べる。

そして、しっかりと目を閉じたトウージュユが、構えた黒剣を振り下ろした。

13章 玉座・国政を担う者達（前書き）

冬の訪れが間近い珠春宮パーティルローサ。

宰相のリュフォンはトウージュからの手紙を受け取り、国王・王妃と共に国の行く末について検討を始める。

三人の胸の中に在る想い……「国を、民を救いたい」……ただそれだけ。

13章 玉座・国政を担う者達

王都の珠春宮しゅしゅんぐうパーティルローサにある、宰相の執務室。各地から上がってくる報告書に目を通しながら、瑰国宰相であるリュフォン・デュバルは午後の執務を行っていた。

読んでいた羊皮紙の束を執務机に放り出し、椅子に深々と身を沈める。疲れた目頭をもんでいると、コツコツと窓を叩く音に気が付いた。目をやれば窓枠に留まった一羽の鳩が、そのクチバシで窓の玻璃はりをつついているのだ。

立ち上がったリュフォンが窓の玻璃を持ち上げてやると、鳩は室内へ舞い込み、執務机の脇に設えられた止まり木に羽を休めた。その細い足には金色の通信筒が取り付けられている。鳩の足から通信筒を外すと、中から小さく丸められた書状を引っ張り出した。

「トウージュ殿下からだな」

書状には確かに、トウージュの花押かおつが記されている。文面にザツと目を通すと、リュフォンはその内容を吟味するように、宙の一点を見つめて思案を巡らせた。執務室の壁にかけられた巨大な瑰国の地図に視線を注ぎ、無意識のうちに指先で机を叩いている。思考の深域に沈み込んでしまったリュフォンを現実の世界に引き戻したのは、不満そうに泣き声をもらした通信用の鳩だった。

「ああ、済まない。忘れていたよ、悪かったね」

止まり木の鳩を拳に乗せ、窓の外へと放してやる。鳩は大きく羽ばたくと、宮城内にある鳩舎へ戻って行った。それを見送り、玻璃を降ろしたリュフォンは、書架から数冊の本を抜き出して抱える。トウージュから届いた書状を隠しに仕舞い込んで、机の上のベルを鳴らした。控えていた従者が扉を開けると、いくつかの指示を与えながら執務室を出る。

「アイナセリョース王妃殿下は、どちらにおいでか？」

「はい。先程、御自室へお退がりになりましたが」

「そうか。私は、至急に陛下に奏上申上げたい草案がある。御裁可頂きたいので、妃殿下にも陛下の御寢所へお出でいただけるように、お伝えしてくれ」

「かしこまりました」

従者は一礼すると、リュフォンが通り過ぎるのを見送った。本を抱えたまま、瑰国宰相は国王の寢所へと向かう。回廊から見上げる空は薄雲に覆われ、鈍色に光っている。パーティルローサの中庭を渡ってくる午後の風は、湿り気を帯びて肌に生温かい。一雨来るかもしれない。これから瑰は、本格的な冬に向かう。雨は降ることに冷たくなる。風は吹くたびに厳しくなる。

「せめて、寒さの到来の前にお戻りになられば良いのだが……」

思うのは、この空の下。国のために旅を続ける、気の優しい王弟殿下。体の弱い兄王を気遣い、国政を代行する王妃を気遣い、病に憂える民を気遣い。珠春宮パーティルローサの重臣達の中で、これ程までに「瑰」を思っている者が、果たして幾人いるというのか。だが、それ程に身を削り、国のため、兄のためと働く彼は、自分自身の幸福を考えているのだろうか。国王コルウィンも王妃のアイナセリヨースも、トゥージュの幸せを願っている。自分達のために彼が己の幸せをないがしろにする事を、決して望みはしないだろう。それはリュフォン自身とても同じ思いだ。共に旅をしているというエルキリユース神殿の巫女とは、どのような人物なのか。お互いに使命を抱える者として、トゥージュが自分を思う良いきっかけになつてくれれば。そう願わずにはいられない。

だが瑰国宰相リュフォン・デュバルとしては、今、優先すべきは瑰の国民の行く末だ。物思いを振り切るかのように、大きく頭を振って国王の寢所の前に立つ。ノツカーを使い、室内へ声をかけた。「陛下、リュフォンでございます。火急に御裁可頂きたい草案をお持ちいたしました」

中から、静かな返答があった。

「入りなさい」

部屋に入ったりリュフオンは、窓際に立つてこちらを見ているコルウインの姿を認めた。ここ数ヶ月、コルウインがベッドから起き上がっている姿を、彼は見た事がなかった。驚いたリュフオンは抱えていた本を取り落とし、思わず国王に駆け寄って行く。

「へ、陛下。お加減はよろしいのですか？ ご無理はなさらずに」

そんな宰相の姿に、国王は軽く笑って答えた。

「それ程、驚かせてしまったかな。心配はいらぬよ。この二、三日、とても体調が良いのでね」

病のせいでやつれてはいたが、かつて玉座にあり、政を執っていた頃の面差しはそのままだ。コルウインが原因不明の病に倒れて三年。それ以来どのような医師も、どのような薬師も、どのような祈りも、彼を癒す事は出来なかった。正直リュフオン自身も、心のどこかで思っていたのかも知れない。コルウインが玉座に戻る日は、もしかしたら、もう来ないのではないかと。だが、こうして立っている国王の姿を目にし、リュフオンの胸に明るい光が差し込むような気がした。

「陛下、よろしゅうございましたな」

不覚にも、目頭が熱くなる。それはまるで、冬の曇り空から覗く暖かな陽の光のようだ。大丈夫。この国には、この方がおられる。この方を支えようとして、力を尽くそうとしている人々がおられる。大丈夫だ。瑰の玉座が沈む事はない。

「それより、何やら急ぎの用があったのではないのか？」

「さようでございました。すっかり、忘れておりました」

コルウインにガウンを着せ掛けると、椅子を勧めながらリュフオンは苦笑した。床に散らばった本を拾い上げようと腰をかがめた時、寝所の扉をノックする音が響いた。

「陛下、アイナセリヨースでございます」

リュフオンが口を開くより先に、笑いを含んだコルウインが声をかけた。

「お入り」

扉を開けて室内へ足を踏み入れようとしたアイナセリヨースは、床の上に散乱した本をかき集めている瑰国宰相の姿に、目を丸くして立ち止まった。リユフォンはアイナセリヨースと目が合ってしまった、不安定な形のまま固まってしまっている。

「まあ、宰相閣下。お声掛け頂ければ、お待ちいたしましたのに」
「い、いえ、あの」

顔を赤くしてうつむいたリユフォンは、背後から笑い声が聞こえてくるのに気が付いた。

「宰相殿のそうに困り果てた顔など、なかなか見られるものではないからな」

「陛下……」

リユフォンを手伝おうと腰を落としかけた王妃は、その声の軽やかさに驚いた。もう随分と長い間、国王の明るい笑い声など聞いていなかった。いつもの習慣でベッドに目をやるが、そこにコルウインの横たわる姿はない。慌てて部屋中に視線を走らせる。その視線が中庭に面した大窓の前、差し込む薄明かりを背に、椅子にゆつたりと腰掛けているのは。

「陛下……？ お加減は……？」

恐る恐る、アイナセリヨースがコルウインに近寄った。

「余が起き上がると、そんなに驚くか。では広間に顔を出したりすれば、皆、卒倒するかも知れんな。ずっとベッドに入っていた方が良いかの？」

いたずらっぽくかけられた言葉に、アイナセリヨースは泣き笑いのような表情を浮かべた。コルウインの前に膝をつき、震える手で国王の両手を包み込む。いつもは血の気が薄く、ひんやりと感じるコルウインの手が温かい。

「お戯れを。でも、随分と久し振りに耳にいたしましたわ。陛下がご冗談をお口にされるのを」

「そうだな。今日は特別に、気分が良いのでね。それに、そう寝て

ばかりいると気が滅入る。気だけでも明るくせねば、と思うてな」

民にしてみれば、不謹慎極まりない話かもしれぬが。コルウインはアイナセリヨースの手を握り返すと、抱え直した本を小卓の上に置き二人を見つめているリュフオンに向かって呟いた。

アイナセリヨースのために椅子を用意した宰相は、上着の隠しからトウージュの書状を取り出し、国王へと手渡した。

「先程、トウージュ王弟殿下より青鳩が参りました。鳩が運んできたのは、こちらの書状でございます」

「ああ、ありがとう」

コルウインは手渡された書状に目を通し、複雑な表情でそれを王妃に渡した。

書状の内容は、国を脅かし続けてきた「死の眠り」が確実に次の段階へ移行したという事。それに伴い、^{バフォナ}夢魔が人間の精神を乗っ取るようになったという事。バフォナを滅する事が出来るのは天敵であるドラムーナだけだが、被害を最小限にするために国に治療院を設立して欲しいと言う事。そしてそこにエルキリユース神殿から巫女を派遣して欲しいという事。限られた大きさの紙面に、細かい文字でビッシリと書き込まれている。

「おそらくこれでは、伝えたい事の半分も伝えきれては、いないのでしょうね」

アイナセリヨースの感想は、コルウインとリュフオンのそれと同じだ。

「予想していたとはいえ、実際に動きがあつたとなると少々堪えるな。しかも、夢魔が人の心に乗っ取るとは……。もはや、我等の手出しできる範疇を超えたようだ」

中庭に向かって視線をやりながら、コルウインは腕を組んだ。

「治療院とは。もっと早くに、わたくし達の中の誰かが考え出していてもおかしくはなかったのに。やはり、閉じられた世界の中で生きていると当たり前の事が見えなくなってしまうのかしら」

ため息と共に紡がれた王妃の言葉に、国王は驚いて問い返した。

「閉じられた世界？」

「あ……ら。陛下はお考えになられた事はございませんの？　いかに国のため、民のために政を布いてはいても、本当にそれが実になっているのか。この高みからでは、知り得る術がございません。我等の耳に届くのは、与えられた領地を治める貴族・諸侯の声ばかり。これ程近くにあると言うのに、王都ハディースに住まう民の声さえ聞こえてはこない。王宮と民との間にある距離は、それだけ遠いという事ですわ」

語られた王妃の言葉に、国政を司る二人の男は驚嘆した。黙り込んでしまったコルウィンに気付き、アイナセリヨースは小さく息を飲んで口許を手で覆った。

「申し訳ございません。差し出口をいたしました。お許しを」
慌てて立ち上がった頭を下げようとするアイナセリヨースに、構わないと手を振ってコルウィンはアゴに手を当てた。

「なる程な。確かにこれでは、閉じられた世界と言われても仕方あるまい。しかも、それを妃の口から聞くまで気付きもせぬとはな」

ポットと茶器をワゴンに載せ二人の前に運んできたリュフオンが、香り高い茶を淹れながら同意した。

「その通りでございますね。まさにこの問題こそが、我等の弱点とも言えるのかと」

差し出されたカップには、琥珀色の液体が揺れている。立ち昇る湯気と共に、香りを胸一杯に吸い込む。

「だからこそトウージュのような存在が、我等に民の声を届けてくれる存在が、この王宮には必要なのだ。少なくとも余にとつて、トウージュは弟という以上に、かけがえのない存在なのだ」

まあ、本人に向かっては言えないがな。そう言って笑うと、カップに口をつけた。

「そのトウージュ殿下より頂いた、貴重なご提案です。ぜひ国のために活かさねばなりますまい」

リュフオンは小卓を二人の側へ運んでくると、重ねられた本の上

に地図を広げた。魂国全土の地図を縮小したものだ。

「治療院の設立は、国庫でまかなう事が可能です。が、建てる場所などはどのように？」

「そうだな。王都だけの問題ではないからな」

地図を覗き込み、額をつき合わせている国王と宰相に、王妃が意外だとも言つうように声をかけた。

「まあ。陛下も閣下も、これから治療院を建てるつもりでいらつしやいますの？ それでは治療院が出来上がるまでに、何ヶ月もかかってしまいますわ」

その言葉に、コルウィンは不審そうな顔をした。

「それでは貴女には、何か良い案があると？」

澄ました顔でカップの茶をすすり、アイナセリヨースは答えを口にする。

「新しい建物を造るのではなく、今ある建物を使えばよろしいのですわ。そうすれば国庫への無用な負担も減らせますし、不安を感じている人々が一日でも早く利用できるようになりますでしょう」

「なる程。妃殿下の仰る通りですな。空き家になっている建物や、使われていない店先を利用すれば、経費や日数の大幅な削減になりますぞ」

「それだけではございませんわ。使用する建物を、国で買い上げてしまえば良いのです。そしてそこに医術に長けた者や薬師を遣わして、人々が病を癒せるようにする。王立の治療院にするのです」

「それは良いお考えかと。王立の治療院が出来れば、これまでのように薬師を呼びに行ったり、相手の都合に合わせる必要もない。そこへ行けば、皆等しく治療を受ける事が出来るという訳ですな」

アイナセリヨースはニツコリ笑って、カップを置いた。それを見たコルウィンは、リュフォンに向かって満足げに微笑んで言った。

「リュフォン。これが余の愛した妃の聡明さだ。そなた、気付いておったかな？」

「おそれながら、これ程までに御聡明とは。このリュフォン・デユ

バル、感服いたしました」

おどけて頭を下げるリュフォンに、コルウィンとアイナセリヨースは声を立てて笑った。ひとしきり笑った後、コルウィンは表情を引き締めた。

「では、そのように通達を。余の勅命として宣下せよ」

「御意にございます。早速、文官に命じて書簡を作成させましょう」
国王の言葉に宰相が同意を示した時、王妃が口を挟んだ。

「申し訳ございません。少しよろしいでしょうか？」

形の良いアゴに指を添え、瑰国の地図に視線を注ぎながら、アイナセリヨースが言葉を続ける。

「このように国中に不安が蔓延している時です。陛下が各地に勅使にて命を下されるよりも、貴族・諸侯を宮城に集め、直に陛下より宣旨せんじを下される方がより人々の心に響くのではないのでしょうか。それに、わたくしや宰相閣下が陛下の名代として詔みことのりを発するよりも、陛下御自身がお姿を見せられた方が諸侯への牽制にもなるかと」

そこには明らかに、ノーヴィア公爵に対する含みがある。なる程、とコルウィンは考えた。勅使を遣わして命を発するのは簡単な事だが、各地の諸侯・領主達に対して『国王いまだ健在』を強調するには、アイナセリヨースの言う通りコルウィン自身が姿を見せて宣旨を下した方が効果的だろう。

「リュフォン。早急に書簡を作成し、貴族・諸侯・領主を珠春宮しゅしゅんぐうに招集するように。治療院の設立について、余から皆に話をしよう」
「御意」

「かしこまりました」

アイナセリヨースとリュフォンが、国王の言葉に頭を下げた。

慌しく書簡が作成され、勅使が各地へ向けて派遣されたのは、その日の夕方の事だった。

14章 宮城・女達の決意（前書き）

イルネアは迷っていた。夫を諫めるには、最後の手段しか残されていないのか？

彼の心に少しでも「家族」への想いが残っていれば……。

イルネアは辛い決断を迫られる。救うべきは「夫」か「国」か……？

14章 宮城・女達の決意

イルネア・エメス・ノーヴィアが国王の書簡を受け取ったのは、勅使が城を發つた翌日の午後だった。

「陛下も今更、何をなされようと言うのか」

豪華な長椅子じゅうしに身を沈め、サマル・ビュイク・ノーヴィアは皮肉気に呟いた。

「陛下には陛下のお考えがおりなのでしょう。知らせを受け取り次第、パーティーLOORサへ向かうようにとの仰せですわ」

窓から差し込む陽光でコルウィンからの親書を読んでいたイルネアは、サマルに書面を渡そうとしたが夫に振り払われてしまった。

「陛下のお考え？ そんなものは、ありわせぬわ。どうせ、あの小賢しいアイナセリョースか、宰相のリュフォンが名代としてしゃしゃり出てくるのだろうよ」

馬鹿にしたように鼻先で笑うと、ノーヴィア公爵はグラスを干した。そんな夫の姿に、イルネアは悲し気に目をやる。以前から確かに野心家ではあったが、こうもあからさまに態度に出したりはしなかった。

「いいえ。この書状は、妃殿下からのものでも、宰相閣下からのものでもありませんわ。正真正銘、国王陛下からの勅書に間違いございません」

くるくると羊皮紙を巻いてしまうと、王家の紋章の付いた封環で閉じた。

「陛下からのお召しです。夫婦でパーティーLOORサへあがるようにと。王族として筆頭の地位にあるノーヴィア公爵家は、これに従わなくてはならない義務がございます」

書状を戸棚に仕舞いながら、イルネアが夫の様子を伺った。妻の言葉に面白くもなさそうに返事をし、繊細な彫刻の施されたクリスタルのデキャンタから酒をグラスに注ぐ。

「好きにせよ」

イルネアはそつとため息を落とすと、使者に返答を預けるために部屋を出て行った。その後ろ姿を見送りながら、サマル・ビュイクは吐き捨てるように呟いた。

「ふん。王族の義務とやらを後生大事に抱えているがいいさ。コルウインの治世も長くはない。せいぜい玉座を温めておくが良い。やがては玉座も国も、すべて私のものになるのだからな」

グラスになみなみと注がれていた酒を、一気にあおる。

「この、サマル・ビュイクのものにな」

だが、その言葉を聞いていたのはサマル一人ではなかった。扉の外でサマルの言葉を聞いていた者。それはイルネア・エメスだった。目を伏せ、静かに扉から離れる。

「謀反……。そう……。あなたは決意してしまったのですね。己の野望のための、大逆を」

廊下を歩きながら、イルネアは悲しい顔付きで考え込んでいたが、やがて何かを決意したようにキツと顔を上げ、厳しい表情で足早に歩き出した。

＊＊

留守中の事を執事に任せ、ノーヴィア公爵夫妻は馬車に乗り込んだ。そして、まだ幼い公爵家嫡男であるティルス・グラルも一緒である。

「ティルスも一緒なのか？ パーティルローサにあがるのは、私とお前の二人で良かったのではないのか？」

怪訝そうな顔のサマルに、イルネアは答えた。

「ティルスも、もう五つです。ノーヴィア公爵家の跡取りとして、陛下にご挨拶申上げるのに良い機会でございます」

確かに貴族の子息が、国王に謁見を賜るのは珍しい事ではない。ティルスの肩を抱きながら、イルネアは波立つ心が少しでも顔に出

ないようにと、努めて平静を装っていた。今ここで、自分の決意を夫に知られるわけにはいかないのだ。しかしイルネアの心配をよそに、サマルは『そうか』と言っただけだった。そう。すでにサマルの心の中には、イルネアもティルスもないのだ。それを知って、彼女は悲しそうに目を伏せた。

三人を乗せた馬車は公爵領を出て、王都を目指す。使者が早馬で駆け抜けた道を、薔薇を抱いた隼の公爵家の紋章を掲げた馬車が、二日をかけて辿って行った。

「お母様！ ハディースの街が、見えてきましたよ。間もなくですね」

初めて王都ハディースを目にしたティルスは、馬車の窓に張り付いて歓声を上げた。

「大きな街並みだなあ」

街道を辿り王都に入った馬車の中で、ティルスは口を開けたまま街並みから目が離せずにいる。

「ほらほら、ティルス。そんなに大きくお口を開けていると、鳥さんがやってきて巢を作ってしまうですよ」

「はい、お母様」

母から注意されて返事はしたものの、相変わらず窓にへばり付いて口を開けたままだ。そんな息子の姿に微笑むと、イルネアは向かいに座る夫に視線を移した。しかしサマルは、はしゃいでいるティルスに目をやるでもなく、一人、分厚い書物に没頭している。家族の事などまったく意識していない夫の姿に、イルネアは口唇を引き結んだ。もっとも、家族の事を考えていれば、大逆を企てたりはしないだろうが。

それぞれの思いを乗せた馬車は、王都ハディースの中心である、珠春宮パーティルローサの堅牢な城門の中へと吸い込まれていった。

魂国の全土に広がる貴族の領地は山岳地帯や辺境も含まれる。通常、情報の伝達には青鳩や早馬を使うが、それらの手段で十日以上の日数がかかる地域も少なくない。王宮への召集の場合、伝令が到着して領主が王都に出発するまでに時間がかかり過ぎる。また、長期に渡り領地を留守にさせる訳にもいかない。そのため、地域を限定して代理人を王都に置く事が許されていた。

ノーヴィア公爵家一向がパーティルローサに到着した後、まだ揃っていない貴族達を待つために、公爵家専用の部屋へと通された。

「うわあ、素敵なお部屋ですね」

初めて見る宮城は、外も中も珍しいものばかりだ。ティルス目は大きく見開かれたまま、色々な物を同時に見ようとしてキョロキョロと休みなく動いていた。

「お父様、僕、お城の中を見てきてもいいでしょうか？」

好奇心を刺激されて、ウズウズした顔付きでサマルを見上げた。頬を上気させて尋ねてくる息子に、父親は一瞥をくると、そつけなく答えた。

「公爵家の息子ともあろう者が、みつともない。そのような様では、いずこの田舎者かと侮られようぞ」

その言葉に、ティルスの瞳から輝きがみるみる消えていく。期待を裏切られて元気を失くしているティルスを顧みる事もなく、サマルは部屋の扉に手をかけた。

「あなた、どちらへ？」

「到着のご挨拶をな。まあ、どうせ陛下にはお会いする事もかなわんだろうが」

なんの感情もこもらない いや、皮肉の混じった 声音でイルネアに告げると、扉を開けて案内を呼ばわった。部屋を出て行く夫の背中を見つめ、イルネアは何かを吹っ切るように頭を振った。まるで、胸の奥に抱えていた最後の大切なモノに決別するかのよう。そんなイルネアの耳に、最愛の一人息子の声が聞こえた。

「僕は何か、お父様のお気に触る事をしてしまったんでしょうか？」

「このところのお父様は、変わってしまったようです」

大きな目に涙をためて、ティルスは母を見上げてくる。息子は息子なりに父の変化を感じ取り、その幼い心を痛めていたのだ。イルネアは優しく微笑むと、ティルスの前に膝をついて息子を抱き締めた。

「あなたが悪いわけではないのよ、ティルス。お父様は今、大変な事を考えてらっしゃるの。だから、気持ちが少し苛ついておられるだけ。さ、機嫌を直してちょうだい、可愛い子ちゃん。お母様が、お城の中を案内してあげるわ」

母に鼻の頭をつつかれて、ティルスは笑い声を上げた。袖でグイッと涙を拭くと、嬉しそうにうなづく。

公爵家に嫁いで十数年。イルネアにとっても久し振りに訪ねる王宮だ。元我が家とはいっても、降嫁した身であればそうそう戻ってくる訳にもいかない。

ティルスの手を引きながら廊下を歩けば、見知った顔が挨拶してくれる。新しい顔もあるが、総体的に見て、それ程の人員の入れ替えはなかったらしい。につこりと笑って頭を下げてくれる皆の顔を見てみると、ここ数日間の張り詰めた精神が和らいでいくのが判った。自分の手を握り締めている、ティルスの小さな手の温もりが嬉しい。自分が何を守らなくてはならないのか。自分の決意は正しいのか。それらが、ストンと心の中に落ちた。

「イルネア様！ お戻りになられたんですね。お久し振ります。お元氣そうで」

廊下の角を曲がると、そこで初老の女性と出会った。

「まあ、マルガーテ。あなたも元氣そうね」

ニコニコと笑顔を浮かべる女性を不思議そうに見上げているティルスに、イルネアは彼女を紹介した。

「ティルス。女官頭のマルガーテよ。マルガーテ、息子のティルス・グラル。ティルス、ご挨拶は？」

息子はうなずくと、母親の手を離して一歩前に出た。

「初めまして。ティルス・グラル・ノーヴィアです。よろしく、マルガーテ」

ぺこりと頭を下げたティルスの姿に、マルガーテは破顔した。まるで、太陽に向かって咲くヒマワリのように、大きくて温かな笑顔だ。

「まあまあ、ティルス坊ちやま。マルガーテでございますよ。なんて利発なお子様なんでしょう」

そんなマルガーテに、イルネアはそつと声をかけた。

「マルガーテ、アイナセリョース王妃殿下はおいでかしら？ もしもお時間がありなら、ご報告上げたい事があるのだけれど」

「妃殿下でございますね。本日はまだ、執務室においでかと存じますが」

「そう。それでは、そちらへ伺ってみましょう」

マルガーテに礼を行って、ティルスと共に執務室へ向かうとした。そんなイルネアにマルガーテが言った。

「ご一緒にいたしますよ、イルネア様。妃殿下へのご挨拶がお済みになりましたら、テュルス坊ちやまはマルガーテと一緒に厨房へ参りましょう。おいしいお菓子をご馳走いたしますよ」

お菓子の一言に、ティルスの顔がほころんだ。長い廊下を辿り、王妃の執務室の前まで来ると、マルガーテが扉をノックした。

「執務中失礼致します、王妃殿下。ノーヴィア公爵夫人をお連れ致しました」

「お入りなさい」

扉の内側から柔らかないらがあつた。扉を開くと、簡素なドレスに身を包んだアイナセリョースが穏やかな表情で立っていた。

「ご無沙汰しております、王妃殿下。到着のご挨拶にあがりました。こちらは、息子のティルス・グラル・ノーヴィアでございます」

ドレスを持ち上げて一礼したイルネアは、自分の後ろの隠れるように立っていたティルスの背中を押し出した。少し緊張した面持ちのティルスは、一歩踏み出すと、ぎこちなく頭を下げた。

「は、初めてお目にかかります、王妃殿下。ティルス・グラル・ノ
ーヴィアでございます。以後、おみ…おみ…」

ティルスが言葉に詰まって、耳まで赤く染まった。そばによつて
きたマルガーテが、そつと耳打ちしてやる。

「『お見知りおきを』、でございますよ、ティルス坊ちゃま」

パツと顔を上げたティルスは、彼女を見てから再度頭を下げた。

「以後、お見知りおきを」

「ご丁寧な挨拶、恐れ入ります。ようこそ、珠春宮パーティルロー
サへ。小さなノーヴィア公爵閣下」

ニツコリと笑ったアイナセリョースが挨拶を返した。ティルスは
大きく息を吐き、マルガーテの方を向いてペコリと頭を下げた。

「助けてくれて、ありがとう。マルガーテ」

「お礼なんて、よろしいんです。それよりも、お許しい
ただけるんですたら、私とティルス坊ちゃまはお話が終わるまで、
厨房へ行っておりますが」

「そうね。ティルス、これからお母様と大切なお話があるの。少し
の間、お母様をお借りしてもよろしいかしら？」

ティルスはほんの一瞬だけ寂しそうな顔をしたが、マルガーテに
肩を叩かれて「お菓子」の一言を思い出したようだ。途端に明るい
表情になって返事をした。

「はい。お母様のお話が済むまで、僕、マルガーテと一緒に厨房で
待ってます」

「さ、ティルス坊ちゃま。参りましょうか」

マルガーテに促されて、ティルスは扉の前で一礼すると部屋を出
て行った。それを見送り、アイナセリョースは優しく笑って言った。
「良いお子におなりですね。お母様の愛情が、きちんとあの子の心
に伝わっている証拠ですわ」

「恐れ入ります」

イルネアに椅子を勧めると、アイナセリョースが「ああ、そうだ
つたわ」と手を叩く。

「マルガーテに、お茶の用意を頼めば良かったわ」

そう言って、テーブルの上にあるクリスタルのベルを鳴らした。澄んだ高い音が室内に響き渡る。控えの間から顔を覗かせた女官に、二人分の茶を用意するように言い付けたアイナセリヨースは、自身も椅子に腰掛けると改めてイルネアに向き直った。

「ここからは、社交辞令は抜きということで。よろしいでしょうか、叔母上」

「もちろんですわ。でも、その『叔母上』と呼ぶのはやめてちょうだいね、アイナセリヨース。どうぞイルネアとお呼びになって」

「はい。そうお望みであれば。イルネア様」

二人は顔を見合わせると、口許を隠し声をあげて笑った。女官の運んできたワゴンから茶を注ぎ分け、しばし立ち昇る香りを楽しむ「リユコス産の香茶ですね。なんていい香りなんでしょう」

「ええ。心が落ち着くので、気に入っております」

イルネアはカップを皿に戻すと、笑みを収めてアイナセリヨースを見た。

「今日うかがいましたのは、実は我が夫、サマル・ビュイク・ノーヴィアの事なのです」

「承りましょう」

背筋を伸ばし、姿勢良く座るアイナセリヨースに、イルネアは夫の事を語り始めた。旅の薬師・カーティと名乗る、謎の娘と出会ったからの夫の変化。公爵としての職務も半分放棄し、昼間から取り巻きの貴族達と一緒に遊興に耽るようになった。そこでサマルは、妻であるイルネアに隠れて何やらコソコソと話をしているのだ。最初は夫が何を画策しているのか、イルネアにも判らなかったのだが。

「ようやく、私にも理解できました。夫は……サマル・ビュイク・ノーヴィアは玉座を狙い、王位の篡奪さんだつを決意したようです」

「大逆を　！　一族のすべてを巻き込むというのに。幼いティルススのことは考えなかったのでしょうか？」

沈痛な面持ちで発せられたアイナセリヨースの言葉に、イルネアは痛々しく笑って答えた。

「あの人の心の中には、もう私も息子もいないのです。あるのは至尊の御位に就いた、自分の姿だけ」

「イルネア様……」

何と声をかけていいのか判らず、口をつぐんでしまったアイナセリヨースに公爵夫人は威厳をまとうて頭を上げた。

「どうぞ、サマル・ビュイクを止めてください。不安に満ちたこの国に、愚かな戦禍をもたらす訳には参りません。公爵家の存続を考えるよりも、まずは珠春宮にお知らせせねば、と」

その凜とした^{つよ}勒さに、一国の妃としてではなく一人の女性として、自然と頭が下がった。

「サマル・ビュイク殿は、イルネア様が篡奪の計画に気付いておられるのには？」

「ふふ……。私があの方の思いに気付いているなどと、毛程も思い至ってはおりませんでしょう」

イルネアの声からは、サマルに対する^{れんびん}憐憫がうかがい取れる。自身の夫であるサマル・ビュイクが、甥である国王コルウインの地位と命を狙っているのだ。その事をアイナセリヨースに伝えようと決意するまでの葛藤は、余人には計り知れない。そして今、彼女の裡にあるのは夫を止める事の出来ない己への無力感と、サマルの行く末を思つての憐みの情なのだろう。

「イルネア様、これからはどうなさるおつもりのですか？ わたくしに公爵の事をお知らせ頂いた今、これまで通り、サマル・ビュイクと共にいらっしゃるのはお勧めできませんわ」

王妃の言葉も、もつともだ。イルネアが自分の計画に気付き、しかもそれをアイナセリヨースに教えてしまったとあつては、彼女の身の保障はないだろう。そしてそれは、幼いティルスの子も安全ではないという事だ。

「ええ。もう公爵領へは戻れないでしょうね。私はとにかく、ティ

ルスの事もありますし」

眉をひそめて顔を曇らせたイルネアに、アイナセリヨースが身を乗り出して告げた。

「実はわたくしも、イルネア様をお願いしたい事がございますの」

＊＊

「ああ、ティルス様。襟が曲がっておりますよ」

ノーヴィア公爵一家が珠春宮に到着した二日後、それぞれの領地からの使者が揃った。余程の事情があり、領地を離れる事の出来ない者だけが代理を立てる事を許されたが、それ以外は領主自らが王宮に上がるように通達されていた。パーティルローサに集った面々が、こたびの召集は一体何事なのかと思案をめぐらせていた。

当代国王であるコルウィンが病床についてから、貴族達をパーティルローサに召集したことはなかった。何か通達事項がある場合には、宰相リユフォンもしくは国王名代アイナセリヨースの名で、各地に布されていたのだ。異例とも言える今回の召集に、皆、複雑な心境だった。

領主達に通されたのは、謁見の間ではなく大会議のための長卓の間であつた。上座から順に爵位に合わせて着席していく。

「一体、こたびのお召しはどうした事なのでしょううか」

「ジルドラ伯爵も、ご存知でない？ 貴殿ほどの情報通でも、何も入ってはきませんか」

「いやいや。私などよりも、ノーヴィア公爵の方がお詳しいのでは？ 何せ奥方殿は先の陛下の妹御であられるからな」

各々の前に用意された真鍮製のゴブレットを口に運びながら、あでもない。こうでもない。と憶測が飛び交う。ザワザワと波のようにざわつく室内に、侍従の先触れが響き渡った。その場にいる者すべてが起立し、儀礼に則って頭を下げる。

微かな衣擦れの音がする。当然そこには、王妃アイナセリヨース

がいるものと思い込んでいた領主達は、頭上から降ってきた声に一樣に驚きの表情を浮かべた。

「皆、こたびの召集に対し、遠路よりはるばる大儀であつた。顔を上げよ」

信じられないという面持ちで、皆が顔を上げた。一段高くなつた略式の王座にいるのは、姿を見せなくなつて久しい現国王コルウィン・イルス・ダルム・瑰その人だ。

長年にわたつて身を蝕む病のために、やつれて一回り小さくなつたように感じられるが、穏やかな微笑みは変わっていない。手を振つて一同に席に着くように合図をすると、設えられたもうひとつの椅子に座した王妃と視線を交わした。

「陛下の健やかなご尊顔を拝し、恐悦至極に存じます」

改めて立ち上がったサマル・ビュイクが、コルウィンに挨拶の口上を述べた。

「うむ。余の体調の事では、皆の無用の心配をかけた。申し訳なく思っている」

長卓に着いた一同を見回し、コルウィンが目を伏せた。そんな夫を見やり、アイナセリヨースは胸にこみ上げてくるものを感じていた。このように玉座にあるコルウィンを、幾度夢に見ただろうか。病は癒えた訳ではない。こうしている今も、体は相当に辛いはずである。しかしそれを顔には出さず、領主達と向き合っている。海千山千の貴族達を前に、弱つているところを見せる訳にはいかないのだ。……特に今、この場は。

「陛下。もしお許しただけでしたら、我が公爵家の嫡男からもご挨拶申上げたいのでございますが。よろしいでしょうか？」

父に促されて、おそろしく緊張しているティルスが立ち上がった。そんな息子の手を、イルネアがそつと叩いてやる。

「許す。そなたがノーヴィア公爵家の嫡男か。名は何と申す？」

国王から直接に言葉をかけられ、幼い次代の公爵はぎこちなく礼をとつた。

「お、お初に御目文字つかまつります。ティルス・グラル・ノーヴィアでございます。以後、お見知りおきくださいませ」

最後まで口上を述べられた事に、自分自身で安心したのか、ティルスの口許に小さな笑みがのぼった。そんなティルスの様子に、コルウィンは慈愛に満ちた微笑を浮かべて礼を返した。

「ようこそパーティルローサへ、ティルス・グラル。そなた、年齢はいくつにおなりだね？」

「はい。今年の木蓮の月に、五歳になりました」

「そうか。これより先、様々な困難が待ち構えているだろう。良き友、良き先達に導かれて、領民の想いをくめる領主になれるように、努めて励めよ」

「はい、ありがとうございます！」

国王より賜った言葉に、ティルスは頬を紅潮させて答えた。幼いノーヴィア公爵家の嫡男に向かってうなずきかけると、王は扉近くに控えていた侍者を呼んだ。

「いかに利発なお子とは言え、この先の話は長くつまらないものだろう。外にマルガリーテが控えておる。侍女を何人かお貸しするゆえ、王都ハディースを散策なさるが良からう」

それを聞いて、緊張に強張っていたティルスの顔に、歳相応の笑顔が浮かんだ。

「もちろん、父上母上のお許しをいただいてからだ。いかがかな？」

一瞬、心配そうな表情をしたティルスの耳に、父母の「是」という返事が聞こえた。

「よろしい。さあ、行きなさい。自分の知らない世界を見る事は、そなたの成長に大切な糧となるだろう。ティルス・グラル・ノーヴィア。そなたに会えて、嬉しかったよ」

「はい。失礼致します、陛下」

待っている侍者の許へ向い、扉の前で振り返った。

「ありがとうございます、陛下」

そう言つて深々と頭を下げ、侍者が支えてくれていた扉を抜けて出て行つた。それを見届けると、コルウインは改めて一同を見渡し、表情を引き締めて宣言した。

「これより本日の議題に入る。リュフオン、皆に説明を。尚、皆に言い渡しておくが、これは余の勅命である」

議場に集つた面々は、一斉に頭を垂れた。

＊＊

「やれやれ。陛下が勅命などと申されるので、一体何事かと思つてみれば。あのような話、わざわざ領主・諸侯を召してまで伝えるべきものかのう」

部屋に戻り、正装を解いてくつろいだ姿のサマルは、飾り棚からワインのボトルを取り出しゴブレットに注いだ。暗赤色の液体を揺らし、鼻先で香りを楽しむ。

「さすがは王宮。良い酒を揃えておるわ」

暖炉の前の椅子に腰かけ、ゴブレットを口に運ぶ夫にイルネアが言葉をかける。

「しかし、こたびの召集には大きな意味があつたと思いますわ。皆の前に陛下がお姿をお見せになつた事で、諸侯への牽制となつたはずですわ。王が玉座にお着きでないと、良からぬ事を考え付く者もございますゆえ」

もちろん、その言葉がサマルにとってどのような意味があるのか、充分に判つていての発言である。コルウインが己の存在を誇示して見せた事で、サマルが反逆を思い止まってくれれば……。そんな、儚いイルネアの想いは夫には届かなかつたらしい。眉間にシワを刻むと、残つたワインを一気に飲み干して話題を変えた。

「それよりも、ティルスはどうしている」

イルネアは小さくため息を吐くと、手にしている計画書をめくりながら答えた。

「ハディースの街が、余程楽しかったのでございましょう。はしやぎ疲れて眠っておりますわ」

会議が終了して間もなく、マルガーテに付き添われて戻ってきたティルスは、頬を上気させて部屋に駆け込んできた。

「ただ今、戻りました！」

興奮冷めやらぬ様子でハディースで見聞きした事をしゃべっていたが、先程、ようやく眠りについたのだ。

「何がそんなに面白いのやら。子供という奴は、良く判らぬわ」

ゴブレットにワインを注ぎ足し、サマルは興味もなさそうに言い捨てた。

「あなたが判つておられぬのは、何も子供に限った事ではありませんまいに」

「ん？ 何か申したか？」

「いえ、何も」

皮肉を込めて呟かれたイルネアの声も、やはりサマルには届かなかった。

「それよりも、明日の昼には領地へ戻るのだ。支度しておくようにな」

サマル・ビュイクの頭の中にあるもの。それは「魂」という国を統べる至尊の御位に就いた己の姿。それだけは何としても阻止しなくては。イルネアは計画書に目を落としたまま、呼吸を整えた。

ティルス。お母様に、力を貸してちょうだい……。

「私は公爵領へは戻りません。どうぞ、お一人でお戻りください」

言えた。サマルが驚いた顔をして振り向いた。まだ、この人の耳に届く言葉があったのか。そんな事を思つて、イルネアは少しおかしくなった。

「何だと？ それは一体、どういう事だ？」

椅子から立ち上がると、妻に詰め寄ってくる。目を通していた計画書を閉じて膝の上に置くと、自分の事を見下ろしている夫に視線をやる。本当に、何を言われているのか理解できていないようだ。

「私は帰らない、と申上げました。アイナセリヨース王妃殿下より、今回の治療院設立に当たり、総責任者の任を拝命いたしました。テイルスと二人で、珠春宮に残ります」

15章 誘惑・アーカバル（前書き）

気が付いてみれば、そこは邪神・アーカバルの造った「夢の檻」の中。

執拗に彼女を求めてくるアーカバルに、アイヒナは全力で抵抗する。そして常々疑問に感じていたある問題に、彼女は答えの糸口を発見する。

だが、邪神の「夢の檻」から逃げ出す事は出来るのか？

15章 誘惑・アーカバル

音がしない。普段、無意識に聴こえている雑多な音が、まったく耳に入ってこないのだ。異変に気がついて、アイヒナがそつと目を開く。視界に飛び込んでくる全てが、そこが現の世界ではないと教えている。

夢の中にいる者は、果たしてそれが、夢だと認識できるものなのだろうか。それでも。

「私に『夢』は訪れない。エルキリユースの神によって、私の『夢』は取り上げられたままだからな」

四方へ油断なく視線を配りながら、誰かに語りかけるように言葉を紡ぐ。

「一体エルキリユースという神は、そなたからどれだけのモノを奪えば気が済むのか。それでもそなた、彼の神に仕えて行くつもりかえ？」

砂色をした髪的女性が、まるで湧き出るように現れた。

「不憫な。エルキリユースに仕える限り、そなたに安穩は訪れぬぞ」
髪を結い上げ、シンプルな黒いドレスに身を包んだ女性が、アイヒナに笑いかけながら近寄ってきた。

「それが、今のお前の姿か、アーカバル？ お前にしては趣味がいんだろうな。だが、それはお前の身体ではないだろう。身体の本来的持主はどうした？」

「この姿は気に入らないのか、我が想い人よ。なかなか見目良い娘である。それでも、そなたの美しさには敵わぬのう」

アイヒナは嫌悪の表情で、伸ばされた手を払い除けた。

「黙れ。いつから私が、お前の想い人になったと言うのだ。その娘の魂はどうした？」

「おお、つれないのう。そんなに、この娘の事が気になるか？ たかだか、人間の小娘一人。どうなろうと、そなたには関わりあるま

い。だが、そなたがそれ程に気になると言つのであれば、教えてやらぬでもない」

カーティは 否、カーティと呼ばれていた娘は、世にも邪惡な笑みを浮かべた。アイヒナの胸に去来する思いは、果たして……？「この娘、我に全てを捧げると言つのでな。文字通り、身も心も捧げてもらったのだ」

事もなげに言い放つアーカバルに、アイヒナは齒噛みする。

「きつさま……。その娘の魂、喰つたな。私の前に、その姿で現れるな！」

エルキリユースの巫女の怒りが、刃のような波動を放つ。カーティの姿を、無数の“カマイタチ”が襲つた。片手を挙げ、圧縮した空氣の盾を作り出したアーカバルが、涼しい顔でやり過ごす。

「我が想い人は、この姿がよほどお気に召さぬと見える。やはり女の姿ではの。見目麗しい男の身体でもあれば、そなたも気に入つたかも知れぬな」

「やかましい。黙れ、耳が汚れる」

カーティの姿がユラリと揺れ、まるで陽炎のようにその“場”が歪んだ。

「ふふ。そなた、怒りに満ちた顔の方が美しいのう。いつまで、あのような創世の神々に尽くすつもりじゃ？」

言葉とともに、アーカバルが本来の姿で現れた。真黒の髪、大理石のような肌の長身の美丈夫。額にかかる髪から覗く眼は、アイヒナの相棒・闇姫と同じく、紅い。だが、彼女の紅眼は生き生きと輝いているのに対し、彼の瞳にあるのは深い悪意。満々とたたえられた、限らない悪逆。この世界に対する、尽きる事のない憎悪。

「奴等が、そなたに何をしてくれた？ そなたから奪う一方で、何一つ与えようとはしないではないか」

穏やかに浮かべられた微笑みに、底知れぬ悪念が見て取れる。一歩一歩近寄ってくる暗黒神から、アイヒナは耳をふさいで後退つた。「黙れ！ 聞きたくない！」

そんなアイヒナに構わず、アーカバルは彼女との距離を縮めていく。

「そなたの髪の色を奪い、瞳の色を奪い、眠りから夢を奪った。人としての楽しみも知らず、ただ、使命とやらにがんじがらめにされて」

「やめろ！」

カーティの姿の時とは比べ物にならない、圧倒的な威圧感。エルキリユースのもっとも近くに侍るアイヒナでさえ、気を抜けば屈してしまそうな程だった。

極彩色の夢の中で対峙する二人。伸ばされたアーカバルの細い指が、アイヒナの絹糸の髪に触れた。ビクリツと彼女の身体が震えた。「我はそなたが不憫でならぬ。人のために、誰かのためにと、そなたは身を削り力を振るう。だがそれに対して、そなたに与えられるのは感謝か？ 答えは“否”だ。誰もがそなたを恐れる。その身を、その力を恐れる。そなた、人間に何と言われた？ 『化け物』か？ 『怪物』か？ かような言葉を投げ付けられてまで、守ってやらねばならぬ程の者達か？」

しっかりと耳をふさぎ、目を閉じるアイヒナ。必死になってアーカバルの暗い誘惑の言葉を心から締め出そうとする。そんなアイヒナの努力を嘲笑うかのように、容赦なくアーカバルの言葉が忍び込んでくる。

「それだけの神意を宿らせる器を持ちながら、もつたいない事よ。我ならば、そなたに辛い想いをさせたりはせぬ。我の許へ来よ、愛しき想い人よ。奪われたそなたの夢を取り戻し、そなたに自由を与えてやろう。そなたが諦めた願いさえ、我ならば叶えてやる事もできる」

巧みにアイヒナの心の隙を突いて来る。彼女の髪に指を絡め、アーカバルはそれに口唇を寄せる。

「我は知っておるぞ。そなたが真に願っている事を。あのトゥージユとかいう若造のことも」

髪に絡めていた指を離し、その滑らかな頤おとがに手をかけた。くいつと自分の方へアイヒナの顔を向かせる。そつと形の良い耳へ毒を注ぎ込む。

「そなたが隠している秘密もな」

ハツと目を見開いたアイヒナの唇に、アーカバルのそれが落ちてくる。

「ん　っ！？」

反射的に逃げ出そうとする眠りの神の巫女を押さえつけ。暗黒神はより深く彼女の息を盗む。アイヒナは嫌悪感に身をよじり、何とかアーカバルの腕から抜け出そうとしていた。

「ん　んう　んっく！」

「つつ　！」

アーカバルが端整な顔をしかめて、唐突にアイヒナから顔を離した。

「いつまでも、私がお前の思い通りになると思うな！　この手を離せ！」

彼女の背中に回された手が、長く美しい髪をわし掴みにした。グイツと後ろに引かれ、アイヒナの白い顔かんぱせが不自然に仰向く。にらみ付けてくる彼女を見下ろしたアーカバルの、三日月の形に吊り上げられた唇の端からは鮮血が鮮やかな色を残していた。

「ふふ。それでこそ、我が想い人よ。そなたがそう易々と、我が物になるとは思っておらぬ。焦らされれば焦らされるだけ、手に入れた時の喜びも大きいというものじゃ」

空いていた手で口許の血を拭くと、アーカバルは邪悪な笑みを浮かべた。

「どれだけそなたが抗おうと、ここは我の夢の中。瑰国の王弟も、頼みのドラムーナも、そなたを助けに来る事は出来ぬ。大人しく我の言葉に従ってはどうか」

二人の周囲が暗くなる。偽りの輝きを放っていた邪神の夢が、その本来の顔を覗かせ始めたのだ。極彩色の絵の具をブチまけたよう

だったあたりの景色が、まるで氷が溶けていくようにドロドロと流れ、グロテスクな様相を呈している。

「余計なお世話だ。これは神を与えられた道ではない。私が、自身で選んだ道だ。お前を滅するために、この私が選んだ道だ。私の事を『化け物』と呼びたければ、勝手にそう呼べばいい。『私』を知ってくれている相手がいる限り、私の真実は揺るがない」

アーカバルを見据え、きつぱりとした口調でアイヒナが告げた。すでに周囲は雷を孕んだ黒雲のような闇が垂れ込め、煤けた灰色と澱んだ黒が渦を巻いている。

「『私の真実』 か。そなたの秘密を知ったとき、あの若造は何と思うかのう？ 一途にそなたを見つめる、瑰の王弟は」

その言葉に、一瞬だけ、痛みにも似た色が彼女の瞳に浮かんで消えた。

「それは私と彼の問題だ。お前が気にする筋はなかるう。彼が何と思おうと、私は全てを受け入れる覚悟だよ」

「それは、見上げたものだ」

作り物のように、表情の動かないアーカバルの笑み。それを見上げるアイヒナの顔は、今は穏やかだ。

「前から不思議に思っていたんだ。アーカバル、お前なぜ、この世界に来た？」

そう。アーカバルさえ堕ちて来なければ、今起こっている全ての事はなかったはずなのだ。

「我が、この世界に来た理由だと？」

「そうだ。何か目的があつて、この世界にやって来たのか？」

邪神の顔から笑みが消え、何かを思い出そうとしているような表情になる。アイヒナの髪を掴んでいた手から、力が抜けた。不意に頭部が自由になり、少しよろけるアイヒナ。

「いつの頃からか、時の狭間を漂っていたか。我がいた『世界』が滅びを迎え、我は永遠とも思える時を彷徨^{さまよ}っていた」

静かな声だ。これまで、幾人もの夢長や姉巫女達が知ろうとし、

ついに手の届かなかった問いの答え。世界創造における、最大の謎。「虚無と実質の狭間を行き来しながら、我はあるものに惹き付けられた。それが、エルキリユースの創造した、この『世界』だ。まだ生まれたばかりの世界は、エルキリユースの造り出した神々の祝福を受け、生命の輝きに溢れていた。我はその輝きに魅せられ、引き寄せられ、囚われたのだ」

そつと視線を落とし、邪神は己の両手を見つめる。

「あの輝き、あの力強さ。全てが欲しかった。この世界なら、我を受け入れてくれるかも知れぬ。そう思うのだ」

ふつ、と笑うとアイヒナに視軸を移し、限らない渴望をこめた瞳で彼女を見つめる。

「そなたも同じだ。神々の祝福を一身に受け、この世に生を受けたエルキリユースの娘。何ものをも受け入れる、奇蹟の器。その美しさ、神の力を具現する器の力、神々に愛された魂の輝き。そのどれもが、我を惹き付ける。そなたこそが、我に相応しい」

熱を込めて語るアーカバルを見返しながら、アイヒナは妙な感覚を覚えていた。まるで、真つ暗な夜道で両親とはぐれた迷子と出会ったような……。

「アーカバル、お前……？」

そんな彼女の表情から、何かを感じ取ったのだろう。アーカバルの瞳から感情が消えた。

「無駄話はここまでだ。知らず、余計な事まで口にしてしまったわ。そなた、油断ならぬのう」

急激に周囲の闇が濃くなった。邪神の威圧感、前にも増して強くなる。

「我は是が非でも手に入れる。魂の玉座から国王を引き摺り下ろし、我の身のかけらを取り戻す。この国に混沌を撒き散らし、他の三国を呑み込み、我は暗黒神としての『我』になるのだ。そして、この世界を手に入れる」

再びアイヒナの額おこがいに手をかけ、自分の方へ向けた。

「そして　そなたも、な」

暗黒神アーカバルとエルキリユースの巫女の視線がしつかりと絡み合う。

「……言っただけだ。私はお前を滅ぼす道を選んだと。お前のモノになるつもりはない。もう、私の心の隙を突き、誘惑しようとしても無駄だ」

今度はアイヒナの心に動揺はない。アーカバルから発せられる、禍々しい威圧感にも屈する事無く、凜と立っている。その姿を、邪神は眼を細めて見つめている。

「さすがは、神々の巫女。エルキリユースが己の器に求めただけの事はある。この世界と同じく、そなたの存在そのものが我を惹き付ける。その美しさも、その魂の輝きも」

渴いた者が全霊をかけて水を求めるように、アーカバルがアイヒナを求めてくる。まるで親鳥の庇護を求める雛鳥のように。

「悪いな。私はお前の求めに応じる事は出来ない。無駄話は終わりと云ったな。私もそろそろ帰らせてもらおうか」

「帰る？　一体どうやって？　この場合は、^{まづ}我の夢。夢幻鏡もドラムーナもなしで、どうやって現に戻るといふのだ？」

小馬鹿にしたように笑うアーカバルに、アイヒナも妖艶に微笑んで魅せた。その笑みに邪神の眼が吸い寄せられる。神をも惑わす美しさ。

「私は、私がそう決めた時に戻る。たとえば、お前が邪魔しようともだ。それに、私の相棒は　お前が思っている程、甘くはないぞ」

何の前触れもなく、アイヒナの胸元から黒い刃が飛び出してくる。不意を突かれたアーカバルの白い腕を浅く切り裂いた。

スルスルとアイヒナの胸から抜け出ると、その全身を頭す。^{あいつ}ドラムーナである闇姫の黒い長剣。剣の切っ先が彼女の足下に触れるや否や、瞬時にその姿を変える。怒りに毛を逆立てた、巨大な黒狼だ。口唇をめくり上げ、牙も露わに唸り声を発している。

「意外なところから出てくるではないか。驚かせてくれる」

傷付いた腕を押さえもせず、アーカバルは闇姫に目をやった。闇姫は主人と邪神の間に割って入ると、アーカバルに対して言葉を発した。

「おのれ　！　貴様、よくも吾の主殿に手を触れたな。その、闇に染まった、汚れた手で！」

一声高く吼えると、巨大な黒狼がアーカバルに踊りかかった。鋭い爪と牙が邪神を襲う。アーカバルは片手を挙げ、圧縮した闇の塊を放ちながら闇姫の攻撃をかわして行く。

「やれやれ。二人の逢瀬を邪魔する、無粋な奴め」

アーカバルの言葉に、闇姫が噛み付く。

「黙れ！　主殿の精神体を勝手に呼び出し、このような所に留め置くな」という狡い手^{ずる}を」

素早く襲いかかる闇姫の攻撃をヒラリヒラリとかわし、アーカバルはアイヒナに告げた。

「我が想い人よ。いずれまた、邪魔者の入らぬところで逢うとしよう。それまで息災でな」

「何を　。貴様、又ケ又ケと！」

飛びかかろうと姿勢を低くした闇姫を、アイヒナは制止した。

「お前に心配されるまでもない。出来る事なら、ここでケリをつけたいがそうもいくまい。お前の影を消したところで、何にもならぬしな」

それを聞いて、アーカバルはニヤリと笑った。

「やはり気が付いておったか。さすがは、我が想い人よ。それでは、またな」

そう言うなり、アーカバルの姿は消え、周囲の景色も歪み始める。胃がひっくり返るような不快感。

「闇姫、戻るぞ。こんな場所に長居は無用だ」

足許に寄って来た黒狼の背に飛び乗り、神の巫女は写真の夢を後にした。

＊＊

意識が戻って、最初に気が付くのは眉間の痛み。余程、眉根に力を入れていたのだろうか。アイヒナはそつと眼を開く。まず視界に入ったのは、差し込む陽光と。

「ああ、良かった……。アイヒナ、大丈夫か？」

大きく安堵の息を吐くトウージュの顔だった。彼に向かって、そつと微笑みを浮かべた。

「心配をかけたようだな、トウージュ殿」

その吸い込まれそうな笑顔に、魂国の王弟はしばし見蕩れてしまふ。自分で知らず、自然と互いの距離が近くなる。

ぐあしっ……

音も気配もなく、背後から忍び寄って来た闇姫の右手が、トウージュの頭を掴む。しかも、かなり痛い。

「いや、あの、闇姫、痛いんですけど　頭……」

顔中にダラダラと冷や汗をかきながら、トウージュが引きつった表情で闇姫に訴える。

「貴様、何をしようとしておったのじゃ？　吾は今、最高に機嫌が悪いのでな。お主、一度吾にむしられてみるか？」

グググ……と、闇姫の手に力が入る。毛根が悲鳴を上げている。

一度つて、お前……。一回むしられたら、大変な事になるだろうがよ。

トウージュは心密かにそう思ったが、賢明にも声に出す事はなかった。ガウガウと不機嫌に唸っている闇姫に、彼は恐る恐る聞いてみた。

「一体、何だつたんだよ？」

その問いに対して、闇姫は牙をむき出して吼えた。

「アーカバルの奴めが卑怯にも、主殿の精神体を自分の夢に取り込んで縛っておったのじゃ。しかもあやつめ、主殿の唇を　……」

「闇姫……」

アイヒナの静かな声に、感情的にわめいていた闇姫はハツとして口をつぐんだ。そんなの、俺に八つ当たりしたって仕方ないだろー、などと思いつつ話を聞いていたトウージュは、不自然なところで断ち切られた会話の『唇』という単語に過剰反応を示した。

「え、唇？ 何？ 唇がどうしたんだ？」

キヨロキヨロと二人を見比べ、少し血の気の引いた顔で発せられた王弟殿下の問いは、主従に見事に黙殺された。

何だよー。気になるじゃないか、教えろよー。気になるぞー。

一人頭を抱えて悶々としているトウージュを一人放置し、闇姫は主人に近寄った。アイヒナはベッドから起き出し、マツトレスに腰かけている。

「場を特定するのに時間がかかってな。遅くなって申し訳ない」

「気にするな。相手はあのアーカバルだ。そう易々と破れるような結界を張ったりはせぬだろう。それよりも造作をかけたな。だが、お陰で、常々不思議に思っていた事の答えが見えてきたよ。ようやくな」

自分には理解できない主従の会話を、トウージュはどこか遠い所で聞いていた。

16章 始まりの地へ・匠都ホステル（前書き）

「眠り病」が最初に認められた場所。それは匠都ホルテス。

アーカバルの思惑を挫く材料を探すために、トウージユはアイヒナ・闇姫と別れて行動する。

彼の見つける「真実」とは？

16章 始まりの地へ・匠都ホテル

「アイヒナ、鳩が来たぞ」

宿の食堂で遅い朝食を摂っていたアイヒナの所に、羊皮紙の切れ端を手にしたトウージュがやって来た。食後の香茶を楽しんでいたアイヒナが顔を上げる。御前会議の様子をパーティルローサに問い合わせてもらっていたのだ。

「闇姫発案の治療院設立は受理されたぞ。総責任者は、イルネア・エメス・ノーヴィア。俺の叔母にあたる女性で、現在のノーヴィア公爵夫人だ。彼女は信用できる」

「そうか。では、治療院に関しては珠春宮しゅしゅんぐうに任せて良さそうだな。しかしノーヴィア公爵と言え、例のアレだろう。夫人が側で目を光らせておかなくていいのか？」

アイヒナの質問ももつともだ。リュフォンから送られてきた手紙に、トウージュはざっと目を走らせる。

「ん。サマル・ビュイク・ノーヴィアについては、王宮から密偵が出ている。リュフォンの話によれば、叔母上は御前会議の前に、義姉上にサマル・ビュイクの謀反を告げたらしい。そうなればむしろ、叔母上はサマル・ビュイクと一緒にいない方がいいだろう、という判断だそうだ。それに、治療院設立というような大きな事業には、女性の細やかな采配さいはいが必要だからな」

「なるほどな。身の安全も保証出来るという訳か。一石二鳥だな」

いつの間にか二階から降りて来た闇姫が、テーブルに着きながら相槌を打った。

「トウージュ殿。頼んでおいた事はどうだ？ 聞いておいてもらえただろうか？」

アイヒナに注いでもらった香茶で喉を湿すと、改めて羊皮紙に視線を戻した。

「ああ。御前会議の直前になって代理をたてた人物がいないか、と

いう事だったよな？」

指で紙面を辿っていく。

「どうしても外せない事情や健康上の理由意外で会議を欠席したのは、ウィルカの領主だったソキア・ベルドアの妻、ターニア・ベルドアだけだ。出席の旨、届けが出されていたが、パーティーローサに入城してすぐに具合が悪くなったらしい」

「一人だけか。急に具合が悪くなったんだな？」

再度トウージュに確認する。

「詳しい事は判らないけどな。直前になって御前会議を欠席したのは、ターニア・ベルドア一人だけだ」

「そうか」

アイヒナは形の良いアゴに手を当てて考え込んだ。

「闇姫。イシュリン神殿から返事はあったか？」

珠春宮だけではなく、宗都サンガルのイシュリン神殿にも何かを尋ねていたようだ。

「それで大神宮殿は何と？」

テーブルにあるポットから自分のカップに香茶を注ぎ、その香りを楽しみながら闇姫が答えた。

「サンガルのイシュリン神殿に一番最初に『眠り病』の被害が届けられたのは、匠都ホルテスの工匠ギルドからだ。ギルドに所属していた工匠は数名、同時期に発症して亡くなっている」

「ホルテス。工匠ギルドか……」

そう呟くと、アイヒナはしばらく黙り込んだ。匠都ホルテスは王都ハディースから馬車で十日程の距離がある。

「匠」の都と言うだけあって、街の実権を握っているのは工匠ギルドだ。瑰国のあちこちにある玉泉や鉱脈から産出された玉の原石は、街道を通じて匠都ホルテスに運び込まれる。そこで、ギルドに所属する職人達の手によって、美しく細工を施される。加工された玉石は再び街道を辿り、今度は商都スガンに運ばれる。大河に面したスガンは商人の街だ。この街で商品価値を付加された玉石は各地

へ散っていくのだ。商用船により、魂国外へも運ばれる。また、ホルテスに持ち込まれた原石の中に、特に質の良い美しい玉が見つかった場合、珠春宮に献上する事になっていた。この時、献上する玉石を細工する事が出来る職人は、最高の腕を持つと認められた事になる。

「トウージュ殿。頼みがあるのだが」

「ん？ 何？」

アイヒナから頼み事を言い出すのは珍しい。いつもは閻姫に、問答無用でコキ使われているトウージュはアイヒナに向かって笑顔で答えた。それがまるで、主人を見つけた仔犬のようだと思いながら、アイヒナはトウージュに頼み事を告げた。

「これまで街のあちこちで聞いた話や、王宮からの情報をまとめると、どうやらウィル力を支配しているのはバフォナらしいな。実際にウィル力に行ってみないと詳しい事は判らないが。私と閻姫は、これからウィル力に向かう」

え？ 私と閻姫？ じゃ、俺は？ 肩透かしを食ったような表情でアイヒナを見つめているトウージュに、彼女は苦笑しながら言葉を続けた。

「トウージュ殿には、ここから別行動をとってもらいたのだ」

その一言に、トウージュが抗議の声を上げようとする。それより一瞬早く、閻姫が彼のアゴを掴んだ。アガガガともかくトウージュに向かって、鋭く一喝する。

「黙って聞く。いいな？」

彼が了承の印にうなずいたのを確認して、ようやく閻姫は手を離れた。両頬に手を当てパクンパクンと口を開け閉めし、アゴの関節を調整しながらトウージュは思った。

俺、いつから閻姫の子分になったんだろう？ 俺ってば確か、王族なんだけど……。

そこまで考えてから、彼は頭を振った。この二人と行動を共にするようになって、王族を意識する事は少なくなった。完全に忘

れる事は出来なかったが。アイヒナが、彼女が今、トウージュに伝えようとしている事。それは「トウージュ」として行動しても、魂国の「王弟」として行動しても、結果に矛盾はないだろうと思える。この際、自分の個人的な感情はひとまず脇へ置き、彼女達の言葉に従がってみよう。

「別行動で、俺は何をどうすればいい？」

「いつも無理ばかり言って、済まないな。実はトウージュ殿には、匠都ホルテスへ行ってもらいたいのだ。すべての元凶はホルテスにあるような気がする。そこで、一番始めに病を発症した人物を捜し出し、その身边を調べて欲しい」

アイヒナの言葉の内容を吟味し、トウージュはうなずいた。

「誰が最初に発症したのか、そしてどうやって広まったのか。それを調べるんだな」

「その通りだ。アーカバルが姿を装っている、あのカーティという娘。偶然に行き会ったわけではあるまい。必ず、一番最初の被害者と接点があるはずなんだ。彼女がアーカバルを受け入れるきっかけとなった、何か原因が絶対に。それが判れば、少しは打つ手があるかもしれない」

「判った」

神妙な顔で返事をするトウージュに、閻姫は右手を差し出した。条件反射的に身を引いてしまったトウージュは、閻姫に物凄い目付きでにらまれてしまった。

「お主。何を逃げておるのだ」

「いや……。また、何をされるのかと思って、つい」

胸の前で手を振りつつ、愛想笑いで逃げ切ろうとしていたトウージュの目の前で、閻姫は握っていた右手を開く。その白い掌にあるのは、銀と黒の二色の髪で編まれた腕輪。

「主殿と吾の髪を編みこんだ護符じゃ。この髪が全部切れてしまうまでは、お主を夢魔から守ってくれる」

彼の左手首に腕輪を巻きながら、仏頂面で説明をする。腕に巻か

れた銀と黒の髪を介した二人の想いが、トウージュを温かく包む。
「私達が一緒にいない間は、その髪がトウージュ殿を守ってくれる。
ホルテスに夢魔がいらないとは限らないからな」

トウージュは腕輪に手を当てると、心から二人の女性に礼を言った。

「ありがとう。大事にするよ」

そして三人は二組に分かれ、影に潜んだ闇姫を伴いアイヒナはウ
イルカへ。街の馬方から馬を借りたトウージュは、一人、匠都ホル
テスへ向かった。姿の見えない、敵の手がかりを掴むために。

＊＊

冬の訪れを告げる冷たく厳しい風がファムウル山脈から吹き降ろ
してくる。馬上のトウージュは風に持つて行かれないように、体に
マントを巻き付けた。出発してから三日が経過した。馬車でなら十
日の行程だが、スピードに重点を置いて進める馬を選んだ事で、予
定よりも時間を稼ぐ事が出来た。

「さて、今晚の宿は……」

季節柄、日が落ちるのが早い。長時間冷たい風にさらされていた
体からは、あつという間に熱が奪われて行く。馬から降りたトウー
ジュは、強張った足で古びた宿屋へ向かった。厩舎に馬を繋ぐと、
扉を開けて主人を探す。

「親父！ まだ部屋は空いているかな？」

食堂で酒を飲んでいた数人の客が、その声に一齐に振り向いた。

「おい、おやっさん！ お客さんだよー！」

客の一人が奥へ向かって声をかける。

「あいよー！」

帳場の置くから、赤ら顔の太った男が姿を現した。

「お客さん、お一人かね？ 部屋？ ああ、空いてるともさ」

宿帳に名前を記入し、部屋の鍵を受け取る。そのまま荷物を抱え

て食堂へ移動する。ガクガクの膝で、何度も階段を昇り降りしたくはなかった。ドカッと椅子に座ると、トウージュは大きく息を吐き出した。

「大分お疲れだねえ、お客さん。何にするかい？」

「あはは。さすがに一日中馬に乗っているよね。食事とワインをもらえるかな？ あと、良ければ明日の朝、井戸を貸してもらえるとありがたいんだが。代金は支払いのときに併せて」

女性は宿で湯を借りる事が出来るが、男性は表にある井戸を借りるのだ。たいがい是有料で、代金は宿泊料に加算される仕組みになっている。

「井戸だね。ああ構わんよ。そいじゃワインを持って来よう。体が芯から温まるように、スパイスをたっぷり効かせてな」

吹き降ろす風にさらされて冷えた体には、それが何よりありがたい。宿の主人はカップにワインを注ぎ数種のスパイスを入れる。仕上げは焼けた火箸をカップの中へ。チュンツという音とともに煙が上がる。

「はいよ、お待ち」

主人の差し出したカップを受け取ると、礼を言ってからトウージュはワインを口にした。口腔に満ちる液体は、ピリツと効いたスパイスと熱さが心地良い。飲み込むそばから、身体中に熱が広がっていく。

「ああ、生き返った気分だ」

大きく満足気に息を吐く。チビチビとカップを口に運んでいると、主人が食事を載せた盆を持ってやって来た。

「お客さん、どこまで行きなさるかね？」

トウージュの目の前に皿を並べながら、主人が尋ねてきた。

「匠都まで。ギルドに用事がありましてね。ところで、最近は『眠り病』はどんな感じですか？」

「そうさねえ」

主人はトウージュの正面に腰かけると、少し考え込みながら語り

始めた。トウージュは口をフル稼働させながら、主人の話に耳を傾けた。

「一時期に比べりゃ、減ったかねえ。まあ、まったくなくなっちゃった訳じゃないがな。最近じゃ治療院を作るってんで、領主様んトコから、お使いの方が来ていなさるよ。正直言わしてもらやあ、もう少し早くやって欲しかったって感じがするけどね」

確かに、遅すぎると言われても仕方がない。トウージュは胸の中で頭を下げた。

ザイルを出てから街道沿いのあちこちで、治療院の設立を始めている人々の姿を見かけた。不安に満ちた生活を強いられていた街や村の住人達は、王家が中心となって勧める治療院の開設におおむね歓迎の意を表した。中には病で家族を失ったものが、対応が遅すぎると関係者に詰め寄る場面もあつたりしたが、比較的スムーズな滑り出しと言えるだろう。

「この町でも、お医者先生やら神殿の巫女様方がいらしてな。暮らしていくのに少しは気が楽になるってモンさ」

口の中の食べ物を必死になって咀嚼そしゃくしながら、トウージュは食堂にいる人々の表情を観察していた。以前に立ち寄った宿で目にした不安と恐怖の中で生活していた、暗い虚ろな表情とは違う。暗闇の中で光を見出したかのような、希望を信じる明るい顔をしている。それを見て、彼の胸の中に嬉しさが波のように押し寄せてきた。無理を承知で、兄王コルウィンに進言した甲斐があつたと言うものだ。目の前にある皿の中身をすべて平らげて体中が心地良く温まる頃、話し込んでいた主人は酔客に呼ばれて席を立つた。空腹が満たされれば、まぶたが重くなるのは当然の事。次々と襲い掛かってくるアクビを噛み殺し、トウージュは食事の代金をテーブルに置くと立ち上がった。酒を注ぎに厨房の奥へ行った主人に声をかけ、与えられた鍵の部屋へ向かう。階段を上がって左右に分かれた廊下の左側。奥から二番目の部屋がそれだ。

「へえ、わりとキレイじゃないか」

さほど広い部屋ではないが、掃除が行届いていてこざっぱりと片付いている。旅装を解いてベッドに腰かけ、息を吐く。手首に巻いた護符の腕輪が揺れる。少し火照った体を冷やそうと、立ち上がった窓を開き夜風を室内へ導き入れた。

トン　トン

ノックの音に返事をし、トウージュがドアを開けた。

「あの、お水をお持ちしました」

年の頃十五・六の少女が、水差しの載った盆を手にして立っている。

「ああ、ありがとう」

トウージュが盆を受け取っても、少女はモジモジしながら立っている。

「どうかした？」

彼が問いかけると、顔を赤くしながら少女が答えた。

「えっと……あの……。お客さんの名前、『トウージュ』って。王宮の王子様と同じ名前ですよ」

ああ、そうか。とトウージュは苦笑した。彼は普段、市井に出て宿に泊まる時にも本名を記す事になっている。国民の間に王宮にいる『王弟殿下』の姓名までは浸透していかないだろうという考えと、たとえ気付かれても、まさか本物だとは思わないからなのだが。しかし稀に、目の前の少女のように『もしかしたら』と考える者もいる。大体は、夢見るお年頃の少女達なのだが。

「やっぱり気になるよね？　僕の祖母がパーティルローサで下働きをしていたんだ。僕とトウージュ殿下は生まれ年が一緒だね。祖母が殿下にあやかりたいと、恐れ多くも同じ名前にしてしまったと言う訳さ」

トウージュの口からでまかせの言い訳を聞いて、少女はさらに赤くなりながら謝った。

「ご、ごめんなさい！　あたしったら、失礼な事を。そうですね。王宮にいらっしゃる王子様のような身分の高い方が、うちみたいな

安宿に泊まる訳ないですよ。本当に済みませんでした！」

ピヨコンッ、と頭を下げると少女はパタパタと去って行った。水差しの載った盆を手にしたまま、トウージュは複雑な表情で呟いた。
「……いや、本物だけどね」

＊＊

人は眠りを眠りと、夢を夢と認識するのだろうか。

トウージュは唐突に、己が夢の中にいる事に気が付いた。目に映る景色は珠春宮の大広間。高い天井とシャンデリア。細かな装飾が施された壁面。揺れるロウソクと松明に照らされた空間は、彼の記憶にあるがままの荘厳さを保っている。広間から一段高くなった二つの玉座。姿の見えない楽団の演奏する音楽が、どこからともなく聞こえてくる。

「ま、俺が寝ぼけて自分でも知らないうちに戻ったんでなけりや、これは夢だと考えて間違いないわな」

大広間を見回していた彼を、背後から呼ぶ声がする。

「トウージュ・ラムナ・イルス・瑰王弟殿下」

艶を含んだその声に応じて振り返ると。

「え？ あ、アイヒナ？」

そこには豪華なドレスに身を包み、輝く銀髪を結い上げたアイヒナが、トウージュに微笑みかけながら優雅に立っている。

おいおい。俺ってば、夢でまでアイヒナの事を考えているのかよ？ そう思ってトウージュは、少し気恥ずかしく感じた。そんな事はお構いなしに、美しく装ったアイヒナが近寄って来る。

「殿下。私と一曲踊っていただけますか？」

たおやかに白い手を差し出して、アイヒナはトウージュをダンスに誘う。頭で何かを考えるよりも先に、彼は目の前の白い手をとっていた。互いの手を携え、二人は大広間に滑り出す。腕に伝わる温もりと確かな重み。鼻腔をくすぐる、微かな香り。

「殿下」

トウージュの胸に頭をもたせかけ、アイヒナが甘い声で囁く。その身を彼の腕に委ね、艶やかに微笑んだ。

「このまま、時が止まってしまえばいいのに。そうすれば、ずっと殿下と一緒にいられる。戦いも神も、何もかも忘れて」

その言葉を聞いた時、トウージュの脳裏を違和感がかすめた。

「戦いを忘れるのか？ 夢魔バフォナの事やアーカバルの事、エルキリユースの事も忘れると言うのか？」

「それがいけない事でしょうか？ 私にだって、女として幸せに生きる権利がございます。なぜ私一人が、こんなに苦しい使命を負わなければならないのか。ドラムーナに選ばれさえしなければ、私はこんな思いをせずに済んだのに」

ドラムーナ 閻姫くわんき。そうだ、閻姫はどこにいるんだ？ 二人が離れる事など、あり得ない。

「ねえ、殿下」

アイヒナの指が、トウージュの頬に触れる。

「私を、私だけを見てくださいませ。何もかも忘れて、ただ楽しい事だけを思っトウて生きてゆけばよろしいではないですか。あんな初源ハナの獣の事など、考える必要はないのです」

トウージュはダンスの足を止めた。違う。どれだけ容姿を似せようと、中身は全く違うものだ。

「アイヒナは、男に媚を売ったりしない」

うつむいた彼の口から、低い声がもれた。

「私も女ですわ」

余裕を含んで発せられる言葉。だが、その微笑が強張った。トウージュが、己の頬に触れる細い指を払い除けたのだ。

「アイヒナはそんなしゃべり方をしない。彼女は自分の使命を否定したりしない。バフォナを、アーカバルを、エルキリユースを忘れたりしない。戦いから逃げたりしない」

あの凜とした美しさ。己を厳しく律し、決して甘える事をしない

横顔。そんな彼女が時折見せる、心からの笑顔がたまらなく愛しい。それに比べれば目の前にいるアイヒナの美しさは本物の持つ清浄さからはかけ離れた、うわべだけの俗っぽいものだ。

トウージュは相手のドレスの胸元に手をかけた。もしもこの場に閻姫がいれば、間違いなく、彼は遠いお空のお星様になっている。

「アイヒナは俺を　　胸に小さな痛みを伴いながら　　『殿下』とは呼ばない」

胸元のレースを握る手に力を込め、一気に引き裂く。

「閻姫の事を、絶対に『ドラムーナ』なんて呼ばないんだ！」

布の裂け目から覗く肌に、エルキリユースの御名を刻んだ神聖文字の刺青はない。アイヒナの姿をした何者かは、顔を醜く歪めて飛び退る。本性を現した相手は、ガチガチと牙を鳴らしながらトウージュを嘲笑した。

「愚かな男よ。至福の夢の中に閉じ込めてやろうと思っておったに。大人しく我が術中にはまっておれば良いものを」

「やかましい。その姿は目障りだ。正体を現せ」

これ以上、一秒たりともその姿を見ていたくなかった。夢魔がアイヒナの姿をしている。その事が彼女を穢けがしているような気がしてトウージュには許せなかった。

「我とて、このような姿であるのは本意ではない。言われずとも御主様しゅさまより賜った我本来の姿になるさ」

アイヒナの姿がボヤけて消え、そこに現れたのは藁色の髪を獅子の様に逆立てた、小麦色の肌をした小柄な女性。

「どうだい。あんな女の姿より、御主様の下さったこの体の方が余程良かるう？」

自分の両腕をうつとりと見つめて、女は低い声で告げた。

「さあ、我が姿を目に焼き付けて死んでいくがいい」

冗談じゃねーよ。アイヒナの姿をしたバフォナにたぶらかされた、なんて閻姫にバレたら、何を言われるか判ったモンじゃないぞ。

そんな事が頭をよぎった瞬間、バフォナの髪がザワツと波打った。

チカツと何かが光ったかと思うと、空中を無数の針がトウージュ目掛けて飛んで来る。

「っ！」

彼が反射的に目を庇おうと、両腕を上げた時。

「え……？」

左手首に巻かれた銀と黒の腕輪が光を放った。トウージュの体を包み込んだ光が、飛来する針を弾き飛ばす。それを見たバフォナの顔色が変わる。

「お、お前、そこに何を持っておる！？ こんな所まで、ドラムーナを連れて来たというのか？」

顔を背け、恐怖に満ちた声は震えている。

「おのれえ、貴様一人かと思つて油断したわ。貴様に警告しておくぞ。これ以上、御主様の邪魔をするようなら、貴様もただでは済まされぬぞ！」

まるで腕輪の光がその身を焼いているかのように悶えながら、トウージュに向かって吐き捨てる。だがバフォナの言葉に反応するように腕輪の輝きが強くなり、相手は悲鳴を上げながら後退った。

「お、お、おおおお……」

少しずつバフォナの姿が薄くなり、消えていく。それと同じく、大広間の景色も薄れていった。何かに意識を引っ張られるような気がして、トウージュも夢から現へと戻っていく。

＊＊

「ああ、やっと見えて来た。ホルテスの門だ」

疲れた声で、トウージュは馬上から呟いた。王都を出て七日。予想外の早さで匠都まで辿り着いた。

「悪いな。もう少しだけ、頑張ってくれよ」

トウージュが乗馬の首を軽く叩いてやると、応えるようにブルルツと鼻を鳴らして歩き始めた。ホルテスの関所までは、まだ短くな

い距離が横たわっている。小高い丘から続く均された道を馬に揺られながら、手綱を握る左手の腕輪に目をやった。

バフォナの襲撃を受けたあの翌朝、彼の夢を守ってくれた腕輪に編み込まれていた銀と黒の髪が、無惨に千切れた状態でシーツの上に散らばっていた。二人の言葉通り、腕輪はトウージュをバフォナから守ったのだ。感謝を込めて腕輪に手を当てた。

緩やかな下り坂を抜けると、匠都の入口である関所はもう目の前だ。今は玉石の搬入時期を過ぎているので、さほど待たされる事もなく手形を見せて街へ入る事が出来た。

相変わらず風は厳しいが、今日の日差しは穏やかだ。馬から降りると、トウージュは馬方を探す。強行軍で疲れ果てている馬を休ませてやらなくては。通りで果物を売っている露店に声をかけ、馬方の場所を尋ね、ついでに赤く熟れた果実を買った。教えてもらった通りの外れの馬方に、幾分くたびれてしまった馬を預ける。

「ギルドの場所だけ確認しておくか」

匠の都と言われるだけあって、細工物の店が多い。魂の玉だけではなく、金や銀、宝石、木彫り細工まで幅広い。さすがに商人の都スガンには負けるものの、それでも大層な賑わいである。先程の露店で買い求めた果実を齧りながら、街の中心へ向かって歩いて行った。果肉が歯に当たるたびに、口腔一杯に広がる甘い液体が疲れた体に優しい。この街でも『眠り病』は下火になってきているのだろうか？

「ちよいと、お兄さん！」

威勢の良い掛け声にトウージュは足を止めた。自宅らしき建物の軒に布を張り出した店舗で、細工物を売っている女性がニコニコと笑っている。

「お兄さん、旅の人だね。どうだい、このクシ。見事なモンだろう？ 故郷の彼女に買っていったおあげよ。お安くしとくからさ」

手の中に残った果物の芯を近くに繋がれている口バに投げ与えると、店に近寄っていく。

「おや、お兄さん。近くで見ると、結構男前じゃないか。亭主がいなけりや、あたしが放つとかないよお」

……そんな事言われたって、俺にどうしろって言うんだよ？ あいまいに笑って、トウージュは台の上に並べてある品物に目をやった。乳白色のまるやかな月柱石と海の碧さを写し取ったかのような碧水晶の飾られた、銀製の美しいクシ。

「これ……アイヒナに似合いそうだな」

思わず手にとって呟いたトウージュに、女性は嬉しそうに言った。
「それが気に入ったのかい？ 月柱石をこうまで見事に磨けるのは、うちの亭主とバンクスさんくらいのもんさ」

「へえ、そうなんですか」

どうしよう？ それ程高価でないのなら、アイヒナへのお土産に。

「そのバンクスさんの細工も見てみたいなあ。どこに行けば会えますか？」

だが、トウージュの問い掛けに、女性の顔が曇った。

「バンクスさんはねえ……。亡くなっちゃったんだよ」

「それは、またどうして。やはり『眠り病』ですか？」

「いや、それは……。あたしの口からは、ちよつとさ」

気になる。なぜこんなに口が重くなるのだろうか？ ギルドの支配するこの街で、住人が口を閉ざす必要があるのは、それがギルドの内部事情に絡んでいる事だからだろう。渋る女性の前に、財布から金貨を一枚出してみせる。

「おばさん、このクシもらうよ」

「あら、ありがとさん。でも、金貨じゃもらい過ぎだわよ」
「いいんだ、とつといてよ。でね……」

女性はクシを包みながら、小声でトウージュに告げた。

「あたしはね、あんまり詳しい事知らないのよ。街の噂では、献上品を横領したとかって言ってたけど……。腕のいい職人だったんだけどね。事の次第を知りたけりや、ロドーニユさんの所へ行ってご

らん」

そうして道順を教えてくれた。女性に礼を言って商品の包みを受け取ったトウージュは、それを懐へしまうと歩き始めた。が、しばらく行くと足を止め、小走りに店に戻ってきた。

「おばさん、これと同じようなクシ、もう一つあるかな？」

＊＊

教えてもらった場所へ、迷いながらも近付いていく。通りがかる人に道を尋ねるたびに、どんどん街の外れへと導かれて行った。

「ここら辺のはずなだけどなあ……」

キヨロキヨロと辺りを見回しながら歩いて行くと、通りの端に研ぎ師の看板を見つけた。教えられたのは、この店のはずだ。

「こんにちは。こちらにロドーニユさんはいいでですか？」

入口から声をかけると、白髪混じりのくすんだ髪をした老人が顔を出した。

「ロドーニユは、私ですが。どちら様ですか？」

「初めまして。私はイシュリーン神殿からの遣いで参りました。『眠り病』の調査をしている、トウージュと申します」

「ほう、イシュリーン神殿の。まあ、立ち話もなんですからな。中へお入りください」

ロドーニユはトウージュを中へ招き入れた。薄暗い室内には、ロドーニユの仕事道具が散らばっている。奥にある椅子を勧めると、部屋の隅に置いてあったテーブルと椅子を運んできた。

「年寄りの一人暮らしですのでな。何のおかまいも出来ませんが」
そう言いながら、炉にかけられていたポットからカップに茶を注いだ。目の前に出された茶を有り難く受け取り、一口飲んでからトウージュは本題に入った。

「実は、現在『眠り病』についてイシュリーン神殿に寄せられている報告で、最初の患者がここホルテスから出ていると」

「それが私と何か？」

「ロドーニユさんは、バンクスさんの事をご存知だと伺いました」
彼の一言にロドーニユは眉間にシワを寄せた。

「バンクスは『眠り病』で亡くなった訳ではない。関係はないと思うがな」

「それは調べてみないと判りません。お願いです。バンクスさんの事を教えて下さい。一番初めの患者は、工匠ギルドの人間です。もしかしたら、バンクスさんと関わりのある人かもしれません。辿っていけば、病気の出所が判明するかもしれないんです」

ロドーニユはテーブルの上で手を組み合わせ、何事かを思案している。

「バンクスさんについて、こんな話を聞きました。彼は献上品を横領していたと」

「それは嘘だ！ 彼は横領なんてしていない！」

ロドーニユが顔をあげて怒鳴った。

「何が始まりだったのか、知らなくてはいけません。もしかしたら、関係ないのかも知れませんが、でも万が一、何かの手がかりがあれば、そこから辿っていく事が出来るんです」

身を乗り出して説得するトウージュの言葉を聞き、老人は立ち上がると仕事場から出て行った。やはり話を聞くのは無理なのかと、トウージュが諦めかけた時。数冊のノートを抱えて老人が戻ってきた。

「トウージュ殿とか申されたか。この話がどのように『眠り病』に結び付くのか、私には判らん。だが、まったくの無関係とも思えないのじゃ」

テーブルの上にノートを置き、その中の一冊を差し出しながら言った。

「バンクスはな。ギルドによって、殺されたんじゃないよ。献上品を横領したと言う、濡れ衣を着せられてな」

17章 妖魔の支配する街・ウィルカ（前書き）

アーカバルの企みの根源を探るため、アイヒナと閻姫は珠春宮の膝元・ウィルカの街を訪ねる。

そこで彼女達が見たものは、活気に溢れ笑顔で生活する人々。しかし街は、静かに人外の者達に侵食されていた。

17章 妖魔の支配する街・ウィルカ

王都ハディースの北、ウィルカの街に入ったアイヒナは、大氣中に漂うそこはかとな違和感を肌感じていた。ピリピリと微かに肌を刺す、ごくごくわずかな不快感。

「どうやら私は、歓迎されていないようだな」

「ああ、そのようじゃ。そちこちからバフォナの匂いがプンプンしてくるわ」

足元に落ちた彼女の影から、アイヒナにしか届かない闇姫の答え。ぐるりと見回してみれば、街の人々は活気に満ちて明るい。だがその明るさは、どこか躁^{そうてき}的な騒がしさだ。通りを歩きながら、他の地区に比べて治療院の設立作業が進んでいない事に、アイヒナは気が付いた。作業されている建物も、申しわけ程度に手が着けられている状態である。

「これは、どこかで話を聞いた方が良さそうだな」

露店の立ち並ぶ通りの一角に、果物を搾って飲ませる店を見つけ入って行った。通りを見渡せるその店の入口付近の席に着いたアイヒナは、店員に飲み物を頼んだ。

陽光は温かいが、肌を感じる風は確実に冷たくなっている。店員が差し出したカップには、搾ったレモンの果汁にハチミツを加え、熱い湯で割ったものが入っていた。一口すすると、身体中に心地良い熱が広がった。

「ああ、美味しい」

思わずこぼれたその言葉に、若い店員はニッコリと笑った。まだ少年とも言える店員に笑いかけると、彼は真っ赤になって客の顔に見とれた。

「この街は活気があって、いい感じだね」

アイヒナのかけた言葉に、ハッと我に帰った店員はモゴモゴと口を動かした。

闇姫が見たら『シャッキリせんか！』とか何とか怒鳴りつけそうだな。そんな事を思いながら、アイヒナは店員に語りかけた。

「私は各地を旅して回っているんだが、この街ほど活気のある所は珍しい。さぞかし、御領主が立派なのだろうな」

通りを眺め渡ししながらアイヒナが言っていると、ようやく普通に口が動くようになったらしい店員が話しに乗ってきた。

「ええ。ターニヤ様は、本当に立派な方です。前領主のソキア様の時は、正直、あまり住みいい街じゃありませんでしたけど」

「ほう。現領主のターニヤ様とは、見事な手腕の持主なのだろう」
自分の街を住み良くしてくれた領主、その領主をほめられて悪い気はしないのだろう。店員はますます饒舌^{じせつ}になっていった。

「そりゃあ、そうですね。ソキア様が亡くなった時だって、自分の事は後回しにして街のために働かれたんですから。パーティルローサが何も出来ないうちにターニヤ様は病で親を亡くした子供のために、孤児院を設立なさったりして」

「孤児院？」

「ええ。両親を『眠り病』で失った子供達が大勢いたんです。その子供達を孤児院で預って、働き口を世話したりしてるんですよ」

「成る程、働き口ですか……。ちなみに、どちらの方へ？」

「実はですね。ノーヴィア公爵様が、ターニヤ様の孤児院の噂を聞きつけて、援助を申し出てくださいったんですよ。おかげで子供達も安心して暮らせるようになりました」

そこで店に入ってきた客に呼ばれ、店員はアイヒナの側から去って行った。

「ノーヴィア公が絡んだか」

足元から闇姫の声が答えた。

「実に興味深い話じゃな。もう少し、聞いて回ってみるか？」

「その必要がありそうだな」

代金をテーブルの上に置き、アイヒナは店を出た。闇姫は相変わらず、主人の影に潜んだままである。これだけ夢魔の気配が強いと、

闇姫の意識に関わらず、力が暴走してしまう可能性があるのだ。本能のみで暴れる闇姫は、さすがのアイヒナでも止められない。

露店の途切れた一角に、通行人が休めるようにベンチが設えてある。陽光を遮る木陰を作る張り出した枝は、今はまばらに葉を残しているだけだ。

「これだけ数が多いと、うかつに呪歌じゅかを紡ぐわけにもいかんな。情報を集める目的だけにしておいた方が良さそうだ」

荷袋からリユートを取り出すと、弦の調律を始める。組んだ足の上にリユートを固定すると、高く和音をかき鳴らした。路行く人達の足が止まり、視線が集まる。目を閉じたアイヒナの紅唇から、朗々とした声が流れ出た。

湖のほとり 緑の丘の森に住む

純潔の乙女が恋をした

森の奥深く 人を寄せ付けぬ

神秘を宿した美しい獣

白銀の毛並み 漆黒の瞳

額に輝く 長き角

流れる絹の尾を持つ

麗しの獣 一角獣

アイヒナの歌声に人垣が出来る。いつもは隣にいて、軽妙な語り口で客を沸かせる闇姫も、少し離れた所で彼女を見守ってくれているトウージュの姿もない。一人。一人だ。確かに闇姫は、アイヒナの影の中にいる。会話をする事も可能ではある。だが、ここで歌っているアイヒナは、一人だ。無意識に人垣に二人の姿を探してしまう。果たして自分は旅に出て、闇姫とトウージュと出会った事で強くなったのか、弱くなったのか。

そのような想いは、アイヒナの歌声に切ない色を添え、哀愁漂うバラッドに臨場感を与えていた。

乙女の命を救うために、その神秘の角を失った一角獣は森の奥深くへと姿を消した。後に残された乙女はそれから一角獣を愛し続け、一生純潔を守り通した。変わらぬ愛を見届けた湖に風が吹き渡り、アイヒナは締めくくりの和音を奏でた。

余韻が消えた瞬間、周囲から雷鳴のような拍手が沸きあがった。

歌いながら自分の世界に浸っていたアイヒナは、突然の拍手に驚いて目を開いた。周りに人がいる事を、すっかり失念していたのだ。

「いや、素晴らしい」

「良い歌声をお持ちだ」

曲に聞きほれていた人々から、口々に賞賛の声がもれた。

「ありがとうございます。お耳汚しではございますが、よろしければ、もう一曲」

アイヒナは微笑むと、リユートをかき鳴らした。先程のもの悲しい曲とは打って変わり、ウキウキと踊り出したくなるような明るい曲だ。

ガルバンチュアラの山の上

笛吹き男は目を覚まし

笛を吹き吹き 歩き出す

オイラの大事な ヒツジはどこだ

おいしいチーズを作るんだ

美味しいミルクも飲めてえな

オイラのヒツジは どこ行った？

陽気なアイヒナの歌声に合わせて、観客からも歌う声が聞こえてきた。

小屋の裏から聞こえてくるぞ

笛吹き男のヒツジの声が

誰か何とかしてくれよ

あいつの笛は 困りもの
下手くそな曲をピーヒャラと
おかげでミルクも出やしない

自然と手拍子が沸き起こり、人々は楽しげに体を揺らして歌っている。アイヒナは、そんな人々の姿を、注意深く見回した。一体この中にいるどれだけの人間が、バフォナの種を植え付けられているのだろうか。バフォナが顕在化したとしても、見た目の容姿が人間と著しく異なる訳ではない。バフォナ自身がその正体を明かし、異能の力を振るう時に、人の肉体もそれに相応しく変貌するのだ。

ヒツジは笛から逃げ回る
笛はヒツジを追いかける
オイラのミルク オイラのチーズ
笛吹き男は気付かない
下手くそな笛を ピーヒャラリ
オイラの笛は世界一
なんてめでたい その頭

リュートに合わせて陽気に歌い騒ぐ人々を、建物の陰から見つめている者達がいる。無表情で冷たい目をした少年達だ。鋭い視線で人垣の中心にいるアイヒナを見据えていた少年は、ギクツとして身を引いた。ほんの一瞬ではあるが、夢を司る神の巫女・夢織り^{エルーシャ}と目が合ったように気がしたのだ。

まさか。これだけの距離をとり、気配も絶っているのに、気が付いたというのか？ 否、そんなはずはない。リーダー格らしき少年は考え込んでいたが、やがて、連れの少年達に向かつてうなずいた。音もなく、その場にいた者達が移動を開始する。

アイヒナは街の人々と談笑しながら、少年達が潜んでいた建物の方へチラツと視線を投げかけた。相手がどれだけ気配を絶ったつも

りでいても、夢魔の匂いを嗅ぎ付ける闇姫をごまかす事は出来ない。ましてや、覚醒している夢魔を闇姫に察知するなと言う方が難しい。影の中に身を隠している闇姫が、いち早くバフォナの気配を感じ取り主人に伝えたのだ。

放っておいても、相手の行く先は二つに一つだ。領主の屋敷が、噂の孤児院だろう。敵の陣地に乗り込む前に、出来る限りの情報が欲しい。アイヒナは人垣をグルリと見回すと、声をかけた。

「ああ。本当にこの街は活気があって良い所ですね。先程ちらりと伺ったのですが、こちらの街はノーヴィア公爵様が何かと援助して下さっているとか。大したものですよ」

彼女のその言葉に、街の住人達は待つてましたとばかりに、一斉に街の自慢話を始めた。わいわいと四方八方から押し寄せる言葉の波に、アイヒナは閉口した。少しだけ、腰が引けている。それ程に人々の勢いはすごかった。

これは、本気であと二人分の耳が欲しい。アイヒナは切実に、闇姫とトウージュの存在を恋しく思った。

＊＊

「やはりやって来たか」

館の一室で報告を受けたターニヤは、立ち上がると窓辺に歩み寄る。玻璃はりから見下ろす街並みは、王都ハディースのいずれの地区よりも活気に満ちている。病で親を失った子達のための孤児院。万が一発症した時に患者を収容するための施設。ノーヴィア公爵からの金銭的・人的支援。それらのおかげで、街の人々の心は現国王から離れている。バフォナの種を飲み、すでに定着している者達も増えた。裏から手を回し入手した多数の武器と共に、ノーヴィア公爵領入りしている。

「ここで私が夢織エルーシャりに討たれたら、街にいる人間共は何と思うかしら。国王よりも信用のあるウィルカの領主、ターニヤ・フィルナ・

ヴァルドが神殿の巫女に殺される。素敵な演出ではなくて？」

振り返ったターニヤは、酷薄な笑みを浮かべている。

「今際いまわの際に、感動的な言葉でも残せば完璧だな」

腕を組んで壁に寄りかかっていた家令が、楽しそうに言葉をつなげた。

「『ああ、皆さん！ 彼女を責めないで！ これは彼女の意志ではありません。彼女は神殿と、そして国に命じられただけなのです』とね！」

「ウィルカの街のために尽くした、領主ソキアの妻、ターニヤ・フイルナ・ヴァルド。人々にその信用在るを妬まれて、国王に討たれる。ですか。面白いシナリオですね」

夢織りの到着を知らせた少年が、冷たく呟いた。

「そう。そして反逆の烽火のうしは、ここから、このウィルカの街から上がるの。ノーヴィア公爵であるサマル・ビュイクが現国王を弑しいするための」

街の人間達は信じている。たとえ国の中央が救ってくれなくとも、ターニヤが必ず何とかして自分達を救ってくれるはずだと。また、ターニヤとその仲間も、人間達にそう思わせるように仕向けてきた。「いまやウィルカの権力者の半数は、我等の言いなりだ」「そして残りの半分も。すでに我等の仲間」

ターニヤ達は時間をかけ、街の権力者を抱き込んで行った。少しでも自分達の計画に難色を示す者には、容赦なくバフォナの種を植え付けていった。おかげで、今やターニヤ達の思惑を邪魔しようなど考える者はいない。

「サマルが大義の旗印を挙げるための、この国に混乱を招き災厄をもたらすための捨石に、私は喜んでなりましょうとも」

「御主様が復活を果たされるために」

控えていた少年に視線を移し、ターニヤは笑いさえ含んで口を開いた。

「何もせずとも、あの夢織りは我等の前にやって来る。それまで、

せいぜい好きにさせてやろう」

少年もニヤリと笑って同意を示した。

「判りました。ただ、動きだけは見張らせておきましょう」

「ええ、そうしておいて」 怪人達の謀は続く。はかりごと

＊＊

「はあ」

宿に着き荷物を下ろしたアイヒナは、疲れの溜まった手足を伸ばした。長い髪をまとめていた頭布を解き、頭を振って髪と頭皮の間の熱を逃がす。

ホトホトと、控え目にドアを叩く音がする。アイヒナが返事をすると、一人の中年女性が遠慮がちに顔を覗かせた。

「お客さん。湯殿の準備が出来たんだが、いかがかと思つてね」

女性は、宿の主人の妻だ。

「こちらには、湯殿があるのか。すごいな」

思わずこぼれた感想に、女性は自慢気に微笑んだ。

「ウィル力でも、湯殿のある宿は少ないね。うちのその中でも、一番広いんだ。今の時間なら、まだ他のお客は入ってないからゆつくりできるよ」

長旅を続ける身にとって、たらいに張った湯ではなく、ゆつたりと全身を浸せる湯殿を使う機会はそうそうあるものではない。女性の勧めに、ありがたく湯殿を使わせてもらう事にした。

案内された湯殿は、帳場の奥を抜けた離れになっていた。中に誰も入っていないことを確認し、アイヒナは衣服を脱いだ。浴衣よくいを羽織ると、入口を隔てているドアを開けた。とたんに、立ち込める湯気と湿った熱い空気が押し寄せてくる。滑りやすくなっている板張りの床を、注意しながら歩いて行く。岩を削り出して造られた湯舟には、魚の形をした噴出口から湯が絶え間なく流れ込んでいる。

一段高くなつた場所に積まれていた桶で湯を汲み上げ、足元に流

しかけて温度を確かめてみる。ゆつくりと湯の中に身を沈めれば、身体の隅々にまで染み渡る熱が心地良い。湯舟の縁に身体を預け、アイヒナは深々と息を吐いた。

「閻姫、お前もどうだ。今なら、誰もいないぞ」

両手に湯をすくいながら、己の影に潜む相棒に声をかけた。一瞬ざわりと水面が揺れ、ザブリと湯が盛り上がった。

「ぶっは」

顔を出したのは、長い黒髪を湯に散らした閻姫だ。

「これだけたつぷりと湯を使えるのは、滅多にない事だからな。うむ。心地良い」

「って、お前。湯に浸かっている時くらい、その衣服を消したらどうだ？」

そう言われて、閻姫は紅眼で自分の姿を見下ろした。揺れる湯の下に見えるのは、いつもの黒い装束だ。

「おかしいか？」

「おかしいだろう。着衣のまま湯に浸かるっていうのは、あり得ないぞ」

「仕方あるまい。これは吾^{われ}の毛皮なのじゃから」

不満そうに口を尖らせて、閻姫は主人に答えを返した。最近ではどうも忘れがちになってしまっただが、閻姫の場合、身につけている衣服は実際の服ではない。彼女の本来の姿である、巨大な黒狼の毛皮が変じたものなのだ。

「ああ　そうか。そうだったな」

苦笑してアイヒナが告げると、閻姫はトプンツと湯舟に潜る。次に顔を出した時には、閻姫の姿は本来の黒狼になっている。

「これで良からう？」

「そういう問題でもないんだがな……」

しばらくの間、主従は存分に湯を楽しんだ。

「お客さん、湯加減はいかがかね？」

不意に入口から声をかけられ、アイヒナは少なからず驚いた。温

かな湯に浸る事で、緊張感まで緩んでしまったと言うのか。

「ええ、大変いいお湯です」

浴衣をかき合わせ、胸の刺青を隠す。

「それならちよいと、背中でも流して差し上げましょうかね」

「えっ、いえ、結構です」

「まあまあ、そう遠慮せずに」

否、ただの遠慮ではない。アイヒナには、自分の身体を見られる訳にはいかない理由が存在するのだ。

「いえ、本当に。遠慮なんかじゃないですし、もう出ますから」

慌てるアイヒナの返事に構いもせず、湯殿の入口を開けて女性が入ってくる。閻姫はすでに姿を消している。アイヒナはどうしようもなく、湯舟に深く身を沈めた。

「あらあら、お客さん。女同士なのに、何をそんなに恥ずかしがっておられるかね」

宿屋の女房は湯舟の縁を回り、自分に背を向けているアイヒナの後ろに立った。

「それとも」

わずかな違和感に、アイヒナの眉根が寄せられた。

「見せられない理由でも、あるのかね？」

それは、どちらが早かったのか……。アイヒナの首筋目掛けて走る緑色の閃光。そして、それを阻むように湯舟の中から伸びた、漆黒の輝き。

ギイイーンッ！

耳障りな音を立てて、緑色の刃が弾き飛ばされた。閻姫の変じた黒剣の柄を握り締め、アイヒナは湯のしずく雫をまとわりつかせて立ち上がった。身体のラインにピッタリ張り付いた浴衣から、わずかに五色の刺青が透けて見える。

「湯に浸かって、ご自慢の勘も鈍ったようだな」

皮肉を込めて放たれた言葉に、アイヒナは苦笑するしかない。

「ああ、確かにそのようだ。正直、気付くのが遅ければ危なかった。

以後、気を付けるとしよう」

黒剣についた水滴を払い除け、アイヒナはチキリと構え直す。

「さあ、それはどうだろう。貴様に『以後』は来ないかも知れんぞ」
背中の皮膚を突き破り、緑色をした四本のカマキリのような鎌を生やした元・宿屋の女房が告げた。

「私の名はランゲル。初めまして、^{エルシャ}夢織り。そして、さらばだ！」

ぐんつと鎌が伸び、アイヒナに向かって四方から襲い掛かってきた。黒剣をふるって応戦するアイヒナだが、湯舟の中では足にまとわりつく湯の抵抗で、いつのもように素早く動く事が出来ない。しかも上下左右から繰り出されるバフォナの攻撃に、神意を降ろすための印を切る余裕もない。

「それぞれ、どうした？　これまで数え切れぬ程の夢魔を平らげて来たのだろうか？　それしきの力量で、御主様に盾突こうと言うのか。笑わせるな、痴^しれ者め！」

ランゲルは憎憎し気に吐き捨てる。上段二本の鎌が、彼女の胴体を輪切りにせんと左右から迫った。緑色の凶刃が、アイヒナの細い身体を捕えたかに見えた瞬間。

「なにいつ！？」

驚きに目を見開く夢魔の眼前を、不自然な長さに断ち切られた神殿の巫女の銀色をした髪^{かみ}の残滓^{ざんし}が流れた。

思い切り深く沈み込んだアイヒナは、湯舟の底を勢い良く蹴り付けた。派手な水しぶきを撒き散らし跳躍した彼女の白い足が、交差したランゲルの二本の鎌を踏み付け、さらに高く飛ぶ。湯殿の天上をかすめ、アイヒナは洗い場の床に着地した。姿勢を低くしたまま、黒剣をしっかりと固定して突っ込んで行く。

真っ直ぐに伸ばされた切っ先を下段二本の鎌で弾き、上段二本の鎌を振り下ろしてくる。返す刀でそれを^{しの}凌ぎ、足許に力を込めた瞬間……。

「！？」

水分を含んだ板張りの床の上で、アイヒナの足が滑った。とっさ

に膝をつき、転倒する事だけは免れたが、崩れた姿勢はどうしようもない。勝利を確信した笑みが、ランゲルの顔に刻まれた。四本の凶刃がアイヒナを床に縫い止めようと、上下左右からうなりを上げて襲い掛かってきた。

だがその攻撃に、ほんのわずかな隙が生じた。勝ったと思ったが故の慢心か。無防備にさらけ出された本体の心臓を、アイヒナの投じた巨大な黒剣が貫いていたのだ。

「が……はっ！」

信じられないと目を見開いた夢魔は、そのまま勢い良く床に崩れ落ちた。スピードを殺し切れなかったランゲルの四本の鎌が、急所を庇うアイヒナの腕を切り裂いていった。

閻姫の変じたドラムーナの黒剣は、容赦なくバフォナの命をすすんで行く。緑色をした異形の鎌は、徐々に、解けるように形をなくしていった。荒い息を繰り返しながら、アイヒナも立ち上がる。浴衣はあちこち切り裂かれ、湯ではなく汗で身体に張り付いている。濡れた布地が、アイヒナから熱を問答無用で奪い取っていく。

今は穏やかな表情を浮かべ、意識を失くして倒れている女性の傍らに立ち、その胸に突き立った黒剣を抜き取る。足許の影に黒剣を落とす。音もなく沈み込んでいった剣は、黒装束の美女となって現れる。

「融合して間もなかったようだな。無事にバフォナを消し去る事が出来た」

女性の胸は、規則正しく上下している。

「だが、融合の進んでいる者も多いだろう。私はどれだけの人を救えて、どれだけの人を救えないのだろうか」

憂いを含ませた表情で、ポツリとアイヒナが呟いた。閻姫が主人に言葉をかけようとした途端、形の良い眉を寄せてクシャミをした。「つくしゅん！」

ブルツと震えて肩を抱く。

「大丈夫か、主殿。そのままでは風邪をひいてしまうぞ」

心配そうにアイヒナを覗き込む闇姫に、アイヒナは苦笑して答えを返す。

「とは言うものの、この人をこのままにしておく訳にもいかないだろう」

確かにその通りだ。バフォナを抜き取られた人間は、記憶が混濁する傾向にある。それだけでなくパニックを起こしやすい状況下にある人物を、湯殿に置き去りにする訳にもいかないだろう。

「仕方がないの」

闇姫は肩をすくめると、倒れている女性を担ぎ上げた。

「吾がこの者を、いずこかの部屋に寝かせてくるとしよう。主殿は湯に浸かって、身体を温め直すが良からう」

「ああ、そうしてもらえると助かる。だがこの状態は、お前にも辛いだろう。早く戻って来い」

「そうさせてもらおうとしよう」

スタスタと入口の扉を開けて歩き出しながら、闇姫は背中越しに手を振った。そんなドラムーナを、アイヒナの連続クシャミが見送った。

18章 揺れる選択・下された決断（前書き）

アイヒナは、領主が設立したという孤児院に潜入する。

ウィルカの領主と対面したアイヒナは、彼女から告げられた事実
に激しく動揺する。

果たして、彼女の決断するべき道は！？

18章 揺れる選択・下された決断

翌日、闇姫のおかげで、どうにか風邪をひかずに済んだ。宿屋の女房はと言えば、闇姫に運び込まれた食堂のテーブルで目を覚ましたらしい。前後の記憶が曖昧になっているために、しばらくの間は混乱していたようだが、どうにか今は落ち着いたように見える。不思議そうに首を傾げながら、宿の仕事をしていた。

「どうやら、大丈夫そうだな」

そんな彼女の様子を、窓の外から伺っていたアイヒナは、安心してように呟いた。

「さて、今日はどうするのだ？」

朝の日差しに照らされて、足許に伸びる影から声がかかる。

「そうだな。今日は、件の孤児院くたんを覗いてみようかと思っている」

「この街の領主が設立したと言う、あの孤児院じゃな」

「ああ」

窓から離れると、にぎわい始めた通りへ足を進める。

アイヒナの目指す孤児院は、ウィルカの領主・ターニヤ・フィルナ・ヴァルドの屋敷に近接して建っていた。他の建物と比べ壁の色も新しいそれは、なぜだか周囲に溶け込めずに、浮いているようにさえ見える。いっそ、痛々しい程だ。

「ここか」

街の喧騒から離れ、少し小高くなった場所に建つ孤児院を見上げ、アイヒナの目が細くなる。

「どうするのだ？ このまま乗り込むのかえ？」

足許から聞こえるかすかな囁きに、アイヒナは少し考えてから答えた。

「いや、ちょっと様子を見よう」

しばらく通りに佇み、建物の様子を伺ってみる。その間にも、数人の子供達が出入りを繰り返している。だが不思議な事に目に入る

子供達は幼い者達ばかりだ。街の人間の話のよれば、成人に満たない子供達もいるはずなのだが。そんな事を考えていると、背後から声をかけられた。

「うちの院に、何か御用でしょうか？」

振り返ってみれば、年の頃十七・八の青年。手には買い物袋を抱えている。

「あ、いえ。旅の途中でこの街に寄ったのですが、噂で孤児院の事を聞きました」

「ああ、見学の方ですね。どうぞ」

苦し紛れのアイヒナの言葉に、青年は笑って答えると先に立って歩き出した。どうしたものかと一瞬迷ったが、意を決してアイヒナも歩を進める。案内された孤児院の中は、幼い子供達がいるというのに、とても静かだ。最前アイヒナが感じていた通り、視界に入るのは十二・三歳以下の子供達ばかりだ。

「こちらの孤児院には、年齢制限があるんですか？」

先に立って歩く青年に、アイヒナは質問を投げかけてみた。青年は彼女の方へ視線をやりながら、ちよつと笑って答えた。

「年齢制限ですか？ いいえ、ありませんよ。自力で生活出来ない歳の子供を、こちらで保護しているんです」

「年嵩としかさの子供達はいないようですね」

「ええ。この孤児院で現在暮らしているのは、十三歳以下の子供達です。それ以上は、院の財政を助けるためと、自身の自活のために働きに出ています。孤児院を援助して下さっているノーヴィア公爵様のご領地に」

「ノーヴィア公爵領へ」

なるほど、街頭で仕入れた情報に、間違いはなかったようである。公爵にどのような思惑があるのかは不明だが、ここウィルカの領主との結び付きは、なかなか深いらしい。

「それにしても、随分と静かですね」

話が本当なら、今この孤児院にいるのは十三歳以下の幼児だけの

はずだ。それなのに、幼い子供達特有の騒々しさが聞こえてこない。「みんな、見知らぬ人がやって来たので、驚いて静かにしているんでしょう」

軽く笑いを含んだ声で、青年は何でもない事のように言った。

「そうなんですか」

そう答えては見たものの、この静けさは尋常ではない。

中庭に面した廊下を歩きながら、アイヒナが辺りに視線をやると、いくつもの小さな瞳とぶつかる。柱の影から、中庭の隅から、少しだけ開いたドアの隙間から、じつと彼女をうかがっている。そこには、歓迎の意もなく敵意もない。感情の色の見えない、空洞のような瞳がアイヒナに向けられている。

「ところで、あの」

「はい、何でしょう？」

「一体、どこまで行くんでしょうか？」

ほんの少しだけ固くなった彼女の声を受け、青年がチラリと視線を流す。

「警戒してらっしゃるんですか、神殿の巫女様？　大丈夫ですよ。

この建物は、隣にあるウィルカのご領主、ターニヤ・フィルナ様のお屋敷とつながっているんです。旅の巫女様には、ぜひターニヤ様に会って頂きたいと思ひまして」

返された言葉には、楽しい感情が読み取れる。アイヒナは緊張の糸を張り巡らせ、油断なく周囲を探る。

「なぜ、私が神殿の巫女だと？」

「簡単な事です。あなたが持ちのその荷物。刺繍されているのは、エルキリユース神殿のものですからね」

そのまま会話も途切れ、アイヒナと青年は隣接する建物に入って行った。

「こちらの部屋です。どうぞ」

荷物を抱えたまま、空いている手でドアを開けた。

「ターニヤ様。お客様をお連れしましたよ」

「ありがとう、イーギム」

中から響いてきたのは、落ち着いた女性の声だ。

「あなたはもう、よろしくつてよ。お買い物帰りだったのでしょう？」

「ええ、それでは」

イーギムと呼ばれた青年は、アイヒナへ向かって一礼すると、今来た廊下を戻って行った。

「お客様、こちらへどうぞ」

高台になっている領主の館の窓からは、ウィルカの街並みが見渡せる。その窓辺に立っていた婦人が、室内へ足を運んだアイヒナを迎えた。

「ようこそ、ウィルカへ。この街は、いかがかしら？」

栗色の髪を上品に結い上げた、小柄な女性。小豆色をした簡素なドレスに身を包み、女性はアイヒナにソファを勧めた。

「活気に満ちた、素晴らしい街だと思いますよ」

注意深く視線を送りながらアイヒナが答えを返すと、ウィルカの支配者ターニヤ・フィルナ・ヴァルドは微笑を浮かべた。

「神殿の巫女様にも、気に入っていただけましたか？ それは良かったですわ」

サイドワゴンに用意された茶器から、カップに茶を注ぐ。

「そうだな。ただ一つ問題があるとすれば、それは、この街を支配している者達だ」

軽く目を閉じ小さく息を吐くと、アイヒナは口調を戻した。

「この街には、バフォナの気配が多過ぎる。特に孤児院の中に入ってから、人の気配を探る方が難しい。一カ所にこれ程まで、バフォナの気配が集中しているのは珍しいな」

淡々と言葉を紡ぐ旅装の巫女。その黄金色に光る瞳を見つめ、ターニヤは薄く笑う。

「それで？ バフォナの巢食う館に招き入れて、どうしようと言うのだ？」

「話をしてみたかったですよ。我らの御主様がこだわる、夢織りに興味がありましたの。あら？　どうぞお座りになつてくださいな」優雅にカップを持ち上げて、ウィルカの支配者が促す。それに応じて、夢神の巫女もソファに腰を降ろした。

「お茶をいかが？　心配しなくても、夢魔の種も毒も入ってはおりませんわ」

「ああ、頂こう」

目の前に置かれた白磁のカップの、滑らかな取っ手に指を絡める。狩る者と狩られる者。夢魔と夢織り。あり得ない対峙が、今ここに実現していた。

「それで？　私と何が話したかったんだ？　こんな危険を侵してまで」

カップ越しに視線を送り、アイヒナはもつともな問いを口にした。「色々ですわ。あなたも、知りたい事がありでしょう？　例えば、この孤児院の事ですとか」

穏やかに聞こえてきた返答は、およそ穏やかさからはかけ離れたものだった。

「ほう、それを教えてくれると言うのか」

ソーサーにカップを戻したターニヤは、テーブルに頬杖をついて宿敵を見やる。その瞳に浮かんでいるのは、相手に対する興味。そして挑戦的な敵意。

「この孤児院は、我らの振り撒いた病によつて、親を亡くした子供達を集め保護しています。珠春宮しゅしゅんぐうからの通達がある前に、病人を収容する場所も作りましたわ。お陰で、ウィルカの住人達は私を敬ってくれるのです。私の感謝しているですよ」

「だがそれは、人のために為した事ではなからう？　お前達の、真の目的は何だ？」

「もちろん、人のためなどであるはずありません。すべては、御主様に忠実な兵士を作るため。魂の玉座を転覆せんがための布石ですわ」

口角をキュウウツと吊り上げ、ターニヤはアイヒナに語って聞かせた。

「それを私に聞かせて、一体どうするつもりだ。ここまで話しておいて、笑って別れられるとは……まさか思ってはおるまい」

目を細めてターニヤを見やる、アイヒナの表情は限りなく厳しい。さもあらん。人ならざるウィルカの支配者が告げたのは、アーカバルによる世界への宣戦布告である。

「わたくしとて、それ程愚かではないつもりですわ。これだけ話しておいて、何事もなく済むなどと虫のいい事を考えているはずありません」

「ならば、なぜだ？」

「申し上げたでしょう。あなたに興味がありましたのよ。御主様が執着なさる、神殿の巫女。我らが盟主の想い人」

「その呼ばれ様は、不愉快だな」

アイヒナは形の良い眉を寄せ、眉間にシワを刻んだ。

「我らの慕う御主様がそれ程までに欲するあなたを、自分の目で見ておきたかったのですわ。確かに、御主様を虜にするだけの事はあるようですわね。器の美しさもさる事ながら、その性の健やかな事。さすがは『神威』を依らせる巫女」

ターニヤの浮かべた笑みは、冷たく薄い。

「あくまで、己の興味で私を招いたと？ それで、私にこんな企てを話して、どうするつもりなのだ？ 大人しく消されるつもりもないのに、どうして話した？」

「間違えて頂いては困りますわねえ。あなたには、わたくしを消す事は出来ませんのよ」

「……どういう意味だ？」

ドレスの裾をさばき、上品な仕種で立ち上がる。その堂々たる姿は、まさしく支配者に相応しい。

「今この館の中にいるのは、あなたの考えている通り、すべての者が夢魔バフオナですわ。それさえも、あなたに従うドラムーナや忌々しい神

の力をもつてすれば、大した事はないのでしょうか。でも、良くお考えになって。わたくしはこの街にとって、必要不可欠な『人間』ですわ」

「お前を倒せば、ウィルカ中の人間が敵に回ると言う事か……」

足許 現世の視界には映らない次元で、挑発にしびれを切らせた闇姫がザワつき始めている。それを抑え付けるようにブーツの足先に力を込めながら、アイヒナはターニヤを睨みつけた。

「わたくしが死ねば、街中の人間が蜂起する事でしょう。ウィルカだけではありませんわ。時を同じくして、ノーヴィア公爵領へ送り込んだわたくしの子供達も声を上げるのです。『保身のために民草を見捨てた、無能な王を討て！』と。その声に推されて、サマル・ビュイクが叛旗^{はんき}を翻す手^{ひるがえ}はずになっております」

ひじ掛けを握り締めるアイヒナの手が、力を込め過ぎて白くなっている。

「つまり、夢織りとしての使命と魂国の安定を、秤に掛けると言うのだな？」

「わたくしは、夢魔としての本性を隠したまま倒されましょう。民に信用された領主として。その信頼の篤^{あつ}いを危険視されて、国王に謀殺された悲劇の領主として」

うつむいて、アイヒナも席を立つ。

「私がもし。もしもお前を お前達を見逃したとしたら」
かすれた声をようやくしぼり出し、アイヒナはターニヤの正面に立った。

「主殿！ 何を言っておるのじゃ！ 気でも違ったのかっ!？」

堪え切れずに、アイヒナの足許から闇姫の怒声が響いた。

「あらあら。ご主人様の許しもなく、勝手におしゃべりするなんて驕^{おご}がなっておりますのね、あなたのドラムーナは」

「なんじやとっ!！」

アイヒナの意識下の制止を振り切り、彼女の影から漆黒の獣が姿を現した。怒りに眼をギラつかせ、まくれ上がった口唇からは、凶

悪な長さの牙がのぞく。

「やめるんだ、闇姫！」

今にも飛びかかろうと、四肢に力を込めて身構える闇姫を、厳しい声で主人が制する。

「なぜじゃ！　なぜ止める！　主殿がなさねばならぬ使命は、夢魔を滅し、アーカバルの脅威より世界を守る事であろうが！　忘れたのか！」

火を噴かんばかりに紅眼を燃え上がらせ、ドラムーナ神代の獣は主人を糾弾した。

「判っている！　そんな事は、私が誰よりも良く判っているんだ！　だが今ここで、私達がこいつを倒したら　。　瑰国に戦が起こってしまう。よりもよって、珠春宮の足許から叛乱の火が点いてしまっんだ！」

握り締められた拳が震えている。食いしばった歯のすき間から、しわがれた声を押し出したアイヒナの表情は、影になっていて伺えない。

「答える、バフォナ。もしもここで、私がお前を見逃せばどうなる？」

血のにじむような言葉に、ターニヤが答えを返した。

「今すぐに、どうこうという事はなくなるでしょう。ただし、この先どうなるかまでは、わたくしの関与するところではありませんわよ」

「……くっ」

確定要素と不確定要素。アイヒナが夢魔を倒せば、確実に戦への導火線に火が点く事になる。仮に今ここでターニヤを見逃せば、ウィルカから叛乱の烽火のろしが上がることはなくなる。だが、ノーヴィア公が企てる謀叛むはんは　。

アイヒナが退いたとしても、それは国の寿命を数ヶ月延ばすだけなのかも知れない。否、数週間か、数日間か。それでも、何の情報も準備もないまま、国内に火の手が上がるよりまだマシのはずであ

る。

「どう……したらいいんだ……」

噛み締めた口唇から、一筋の朱が流れた。

「主殿よ。吾に、エルキリユースより承った命を、ないがしろにせよと言われるのか？ 目の前にいる夢魔を、みすみす見逃せと言われるのか？ 吾と主殿がこれまで成して来た事のすべてを、なかった事にされるつもりかっ！？」

視軸は標的に固定したまま、闇姫の鞭のようにしなる声が激しくアイヒナを打った。

「今こうしている間にも、アーカバルが復活を目論んでおるのだぞ！ 主殿がこやつを見逃したとて、あの邪神が魂の玉座を諦めるはずもなかるうが！ あやつが完全に復活するためには、玉座に正統な国王が就いていては困るのだからな！」

「っ！」

アイヒナが弾かれたように顔を挙げた。

「トウージュが何のために、国中を走り回っていると思うておるのじゃ、主殿。主殿は吾やエルキリユースの神だけではない。トウージュの努力まで、無駄にしようとしておるのじゃぞ。判っておるかっ！」

柔らかそうな光をたたえた蜂蜜のような金髪と、その下の深い緑の瞳。いつでも彼女を見守ってくれていた、魂国の王弟殿下。

「あの男を、それ程までに侮^{あなづ}っておられるのか？ 大丈夫じゃ。魂^{いしすえ}の礎は、これしきの事で揺らぎはせぬわえ」

アイヒナの胸の中に浮かんだ男は、この国を救おうと必死に駆けずり回っている。魂という国を守りたい。玉座の兄王を助けたい。少しでもアイヒナの力になりたい。トウージュの瞳の中から、真剣な光が消えることはなかった。

そうだ。あれだけ強い想いを持っているのだ。あれだけ国を憂えていたのだ。その彼が、ただ手をこまねいていただけのはずがない。そんなトウージュの兄が、何の手段も講じていないはずがない。

「はっ。こんな簡単な事にも気付けないとはな」

しっかりと前を向いたアイヒナの瞳は、すでに迷いに揺れてはいない。

目の前に立っている相手を、はつきりと敵だと認めている。そこにいるのは、突き付けられた選択に苦悩していたアイヒナではない。与えられた使命を果たすべく、伝説の獣を従えた『^{エルシヤ}夢織り』だ。

「決心がついたようですね」

窓辺から差し込む光の届かない、影の中から声がする。その声音は、どこか愉し気ですらある。

「そうでなくては困ります。さあ、宴の始まりですよ」

ターニヤの言葉を合図に、部屋の扉が開く。廊下から、隣の部屋から、ゾロゾロと虚ろな眼をした子供達が入って来た。

「どうぞ、ゆっくり楽しんでらしてね」

19章 仕組まれた戦い・叛乱の烽火（前書き）

サマル・ビユイクの屋敷に招かれた貴族達。

そこで彼等に告げられた言葉は、耳を疑うものだった。

自分達が従おうとしているものの正体は？

逃れる事のできない戦いが始まるうとしている。

19章 仕組まれた戦い・叛乱の烽火

「閣下」

長椅子にだらしくもたれかかり、手にした杯を口に運ぶサマルは声の聞こえてきた方へ視線を流した。

「カーティか。何用だ？」

酒で濁ったサマルの視線を受け止めたのは、灰色の簡素なドレスをまとった砂色の髪の薬師だ。

「まだこんなに日も高つございますのに、ご酒が過ぎるのではありませんか？」

室内へ足を進めながら、カーティがサマルの姿に眉をひそめた。

「ふん。イルネアのような事を申すな。ようやく、こうるさいアレから解放されて、せいせいしておるのだから」

口唇の端に憎憎しげな笑みを刻み、サマル・ビュイクは手の中の杯を干した。

「やれ、王族としての務めだの、領主としての心得だのと、まったくうるさい事を言う女であつたよ」

「それでも、愛しておいでだったのでございましょう、奥方様の事を」

「愛して？ ははっ、私がイルネアを？ 私がこの地位に登りつめるために、あの女の持つていた『王族』の肩書きが必要だったただけだ。私が愛していたのは、イルネアの『前国王妹』という肩書きだけなのだよ」

長椅子に寝そべったまま、サマルは杯を掲げて嘲笑った。

「また、そのような憎まれ口を申されて」

カーティは薄く微笑み、サイドテーブルの上にある銀の酒瓶を手にとった。

「イルネア様が珠春宮に残られて、お寂しいのではございませんか？ それにティルス様まで」

カーティに酒を注がせながら、サマルは吐き捨てるように毒づいた。

「ティスルだと？ ふん、あのように不甲斐無い奴。覇気というものが、まったく感じられんのだからな。まったく、一体誰に似たのやら」

長椅子から起き上がり、テーブルに杯を叩き付けると、ガウンの裾をひるがえしながら室内を行きつ戻りつし始めた。

「何が治療院設立の責任者だ。どうせあの小賢しい王妃と宰相のリュフォンが、要らぬ知恵をつけたに違いないわ」

親指の爪を噛み、頭上に振り上げ、体の前で両腕を振り回し、サマル・ビュイクは昂ぶった感情を吐き出し続けた。

「落ち着いて下さいませ、サマル閣下」

「落ち着けだ！ これが落ち着いていられるかつ！ あれから一体、何日が過ぎたと思うておる。まったく、最近ではコルウインの奴まで、生意気に意見をして来おる。大人しく、珠春宮の奥でふせ臥せておれば良いのじゃ。ここに来て、偉そうに国王面などしおって」

「お言葉ですが、閣下。コルウイン陛下はまだ、至尊の御位みくらいから退かれた訳ではございませんもの。国政に口をお出しになるのは、当然の事かと」

なだめるように言葉を紡ぐカーティに、サマルは噛み付かんばかりに怒鳴り声を投げ付けた。

「何が至尊の御位だ！ 何が国政だ！ 国を動かすべき国王が、あのような体たらくで何とする。国の先頭に立つ者は、もつと心強く身健やかでなくてはならん。一日の大半を寢所にこもって過あごす彼奴やつに、この魂を導いて行く事など出来るものか！」

「いかにも。この国を率いて行くべきは、閣下のような聡明にして壮健な方。サマル・ビュイク・ノーヴィア閣下こそが、国王陛下に相応しいのです」

「黙れっ！ そのような戯言、聞き飽きたわっ！！」

テーブルの上の杯を鷲掴みにすると、サマルは壁に向かって投げ

付けた。精緻な透かし彫りを施したガラス杯はカーティの頬を掠め飛び、その背後の壁にぶつかって碎けた。杯は満たされていた酒を撒き散らし、粉々に碎け散った破片と共に、毛足の流い絨毯を汚した。

「落ち着かれませ、閣下。そのように気を乱されては、大いなる野望へ続く途への障りとなりましょう」

サマルの様子を楽しむように、カーティは艶やかな声で告げた。「閣下には、長い時間をお待たせしてしまい、大変心苦しく思っております。お喜び下さい。とうとう時が到来いたしましたわ」

「何っ!? それは本当か! それでは?」

「はい。ウィルカより、叛乱の火が挙がりました。いよいよでございます」

「待ち侘びたぞ、その報せを! 確かなのだろうか?」

カーティに詰め寄るサマル・ビュイクの瞳には、凶悪な光が灯り始めている。それをいなすかのように、女薬師は微笑を浮かべて身をひるがえした。

「ウィルカに残しておきました、イーギムから昨日連絡が参りました。ターニヤ殿が、王家の密命を受けた神殿の巫女に」

「ふん、こしやくな事を。己の手を汚さぬつもりらしいの。いかにも王族連中の使いそうな方法よ」

「あれ程、街の人々のために慈悲深くあられた方です。そのターニヤ殿が亡くなられ、しかも、それが王家よりの命令であったとなれば、ウィルカの者達も黙ってはおりませぬ。これまでの不満も相まって、一気に爆発したのでございましょう」

カーティが冷たい印象を与える笑みで告げた言葉に、ノーヴィア公爵も酷薄な笑いを浮かべて答えた。

「すべては、お前の書いた筋書き通りと言う訳か。そのためにウィルカの領主・ターニヤの命、そして何も知らぬ街の者達の命を使うとは。つくづく恐ろしい女よの」

先程までの激昂した様子は嘘のように鳴りを潜め、サマルは長椅

子に身を沈めて、満足そうに息を吐いた。まるで満腹になって喉を鳴らす猫のようだ。

「何を申されます、閣下。すべては、あなた様のためでございますように。サマル・ビュイク閣下が、この瑰と言う国を手に入れられるため。その野望を果たさんがため、瑰の人間達の命をお使いになられる閣下こそが、まさに王者に相応しいのですわ」

長椅子に深く腰かけ、脚を組んでふんぞり返るサマルの背後に、不吉な兆しを告げる天使のようにカーティが位置を移す。

平穏な時代、戦歴の乏しい貴族諸侯は怠惰な生活に慣れ切り、美食と享樂によつて弛んだ精神と、それに見合つた体付きになつてゐる。

だがサマル・ビュイクは、ガツチリとした壮健な体付きをしていた。まさかこの謀叛を想定していたわけではあるまいが、多くの高位貴族の中では珍しく鍛錬を欠かしたことがない。いかに享樂にふけようと、日々剣を振る腕に衰えはない。

その鍛えられた腕に白い手をかけながら、燃え上がる陰火に甘言と言う名の油を注ぎ続けるのは、砂色の髪をした美女だ。

「閣下は瑰の国主となられるお方。民草は主の持ち物でございますもの。閣下が民をいかにお使いになろうと、誰はばかる事のありませんうや」

「いかにも。王座の礎となるのだ。無血で手に入れられる栄華など、この世にありはせぬ。我が至尊の位への踏み台となるのだからな。大局のために流される多くの血が、我が王座をより輝かしいものにしてくれるだろう」

「では閣下。同志の方々にお集まり頂き、輝かしき栄光への第一歩を」

「うむ」

熱にうかされたように紅潮した顔で、サマルは獰猛な笑みを浮かべた。

「早速、各地に布令を出し、同志の方々をお屋敷にお呼び致します

わ」

「そなたに任せる」

「御意に」

カーティは恭しく頭を下げると、静かに部屋を出た。閉じられた扉の向こう側から聞こえてくるのは、サマル・ビュイクの高らかに笑う声。その凶夢の中では、至尊の御位に就き、栄光の宝冠を戴いた己の姿に酔いしれているのだろう。

「御主様」

背後から若い声がかけられる。振り返ったカーティの表情は、先程までの女薬師のそれではない。倣岸ごうがんな嘲笑を張り付けた、冷酷な支配者の顔をした砂色の髪の美女は、声の主を従えて廊下を進む。

「首尾はどのようになっておる？ ウイルカの様子は？」

「はい。御主様の御命令通りに。ターニヤはバフォナとしての本性を顕現けんげんする事無く、あくまでも『ウイルカの領主』として討たれました。街の人間には、孤児院の者達が報せております」

「そうか。手抜きはないようだな」

「巫女は逃げおおせたようですが、ウイルカの人間共は、王家とそれに関わりの深い各神殿から送り込まれた、密命を受けた刺客ではないかと疑っております。ここでサマル・ビュイクが声を挙げれば、くすぶっていた民衆の不満に一気に火が点くかと」

「ご苦労だったな、イーギム」

肩越しに流して寄越した視線の先で、無表情で頭を下げている若者。それはウイルカの街で、領主の館でアイヒナを案内していた青年だ。

「ターニヤも、見事に役目を果たしたな。後は、ほんの少し背中を押してやるだけだ。いよいよ幕が開く。血塗られた宴の幕が、な」

冷え冷えとした気配をまといながら、衣擦きぬすれの音をさせてカーティが歩む。

「さて。サマル・ビュイク・ノーヴィア公爵閣下のための舞台を整えてやるとうしょうか。我等にとって大切な、操り人形のための大舞

台を」

「心得まして」

廊下の先の凝った闇の中に、人にあらざる者二名の不吉な足音が溶けて行く。

＊＊

「今宵お集まりの同憂どうゆうの士よ。各々方に問いたい。今、真実この国を憂えているのは、誰なのかと言う事を！」

月のない夜。領地を見渡す、小高い丘の上に建つ堅牢な館。コルウインの父親である前国王より公爵位を拝命し、前国王妹の夫として王家と姻戚関係を結んだ男の声が、静かな夜を貫く。

「この国は現在、未曾有の危機を迎えている。民は死と眠りにおびえ、人心を安らげるはずの現王陛下は、ご病床の身であられる。ならば、王弟殿下が陛下をお助けし、国を治められるのが筋と言うもの。だがトウージュ王弟殿下は珠春宮を空けられたまま、未だお戻りではない」

現国王コルウインの叔父という肩書きを持つ、サマル・ビュイク・ノーヴィア公爵は、大広間に設えた席に集った面々を見回した。テーブルに置かれた、繊細な飾りを施した銀の燭台がろうそくの柔らかな光を反射し、大広間を仄明るく照らしている。

妙にギラついた視線で熱弁をふるうサマルを見つめるのは、いずれも目許を仮面で隠した男達だ。揺れるろうそくの灯りに照らされて、どの顔もいびつに歪んで見える。

「今、我々がこうしている間にも、この国を己の思うがままに牛耳ろうとする宰相リユフォンや、身の程もわきまえぬ佞臣ねいしん達が、主を裏切り魂を傾けようとしておる。王妃とは名ばかりの妖婦、アイナセリヨースがリユフォンと結託し、魂を乗っ取ろうとしているのだ」

拳を固め、自分に集まる熱をさらに高いものへと変じていく。サマル・ビュイクは自分のその姿を想像し、酔いしれた。これまで夢

に見ながら、口外する事をはばかられた望み。王位継承権第三位という、近いようでいて遠い玉座への道。

当代国王のコルウィンが病に臥してからは、本当に悔しい思いをしてきた。国王の叔父として、国政に思うさま腕をふるおうと、密かに熱意を抱いてきたのだ。だがコルウィンは、己の妃アイナセリヨースと宰相であるリユフォンに国政を任せ、サマルの口出しを許さなかった。

領地にくすぶっているのではなく、中央で存分に力を発揮したいと考えていたサマルの望みは、あえなく潰えたのだ。

（私を所領へ押し込め、中央から遠ざけようと言っのか。若輩者の分際で、ノーヴィア公爵であるこの私を）

「もはやパーティルローサには、国を憂える者はいないのだ。魂を導いて行く事の出来ぬ王は必要ない。当代陛下には玉座より退いて頂こう。魂の玉座には、真実、国を支えるに相応しい人間が就くべきと考えるが、各方いかに!？」

長広舌をふるい終わったサマルは、満足気に大広間を見渡し、己の言葉の浸透していくのを待った。

「それで、新王には御自分が起たれると？ 要するに、我等に王座篡奪の手伝いをせよと、こう申される訳だな？」

サマルの位置から中程の席に座った男が声を挙げた。白髪混じりの男性は、鳥を象ったシルクの仮面。

「そのように理解して頂いて結構。何か不満な点でもございますかな？」

傲慢に頭をそらし、仮面の男を見下しながらサマルが問うた。

「この実情を憂う我々同志が立ち上がり、新たな国を造り出す絶好の機会であるのだ。そして、お集まりの諸侯の中で、私程に国を思っている者はおらぬと自負しております。私はただ、不安と恐怖におのく民を救いたい。魂という国を安らかにしたいだけなのだ。私よりも王となるに相応しい者がいるというのであれば、喜んで従おう」

両手を広げて熱く語ったノーヴィア公爵に向かって、仮面の男が冷たく言葉を投げ付けた。

「それは詭弁きへんというものではございませんか、ノーヴィア公。確かにワシも、当代陛下のなさり様には不満もある。国の進み行く先が、このままで良いとも思つてはあらぬ。だが陛下は、正統なる継承者である事に間違いはないのだ」

「なる程。では卿けいは、正統であれば政をないがしろにしても構わぬと、こう仰る訳か」

「そのような事を申上げる気は、毛頭ござらん。だが、公が仰るほどに、リュフォンや妃殿下が国を欲しいままにしておるとも思えんのだ」

「ならば卿は陛下の側に立たれると、こう申されるわけですね」

「いや。ワシは陛下の側にも、あなたの側にもつきはしませんぞ。

陛下の御見方をする程、ワシはあの方を認めてはあらん。じゃがノーヴィア公。ワシは一族の命運とこの身を賭ける程、あなたを信用もしておらん」

仮面の男の発言に、大広間にざわめきが広がった。

「お集まりになられた諸侯等も、今一度、よくお考えになるべきだ。自分が足を踏み込もうとしている沼が、どれ程深いものなのかと言う事をな」

そう言うと、目の前に置かれていた杯を手に取り、満たされていた酒を飲み干した。テーブルに杯を戻すと、仮面の男は立ち上がり決別の言葉を口にする。

「それでは、ワシは下がらせて頂くとしよう。ノーヴィア公。あなたの計画を、中央に報告する気はございませんので、どうぞご安心を」

サマル・ビュイクに向かって一礼し、部屋を出て行こうと身をひるがえした瞬間。

「む……？」

いぶかしそうな声を挙げて、仮面の男は硬直した。

「うつ……がつ……。がはっ！　ぐ……あ……」

酸素を求める魚のように、口をパクパクと開閉させて、男はあえぎながら喉をかきむしる。

「ぐああ……あ……ノーヴィ……ア……公……。あな……たと言う……人は……」

もがいた拍子に、鳥の仮面が外れた。その下にあったのは、驚愕と恐怖と苦痛に見開かれ、醜く歪んだ眼。

「がつ！はっ……あ……」

右手を喉に、左手をサマルに向かって伸ばした男は、血の混じった泡を吐きながら崩れ落ちた。

「これはこれは。ガウンディ伯ではありませんか」

口唇に冷たい笑みを張り付けて、サマルは事切れた男に近寄り、妙に冷めた瞳でその亡骸を見下ろした。

「あまりにも偉そうな口をおききになるので、どこのどなたかと思いましたぞ」

「ノーヴィア公爵！　これは一体、いかなる所業でございますか！？」

「まさか、そなた……。酒の中に毒を！？」

大広間に集った仮面の群れから、怒声と悲鳴があふれた。立ち上がって叫ぶ者。サマルを指差して糾弾する者。彼から少しでも遠ざかろうと、大広間の隅へ逃げる者。自分の目の前にある杯が、まるで蛇にでも変じたかのように恐れおののく者。

「ご安心召されよ。各々方の杯に、毒など仕込んでおりませぬよ」

サマルはそう言うと、自分の手近な所にあった杯を持ち上げ、やおら中身を飲み干した。周囲に立つ者達が固唾を飲んで見守る中、ノーヴィア公爵は大きく息を吐き、杯をテーブルに戻した。

「これ、この通り」

おどけた仕種で肩をすくめ、サマル・ビュイクが人々を見回す。

「だ、だが現に、ガウンディ伯爵がこうして……」

震える声で告げた人物の方へ、笑える公爵はゆっくりと向きを変

えた。

「私が……このノーヴィア公爵である私が、何の保険もかけずに、このような重大事を諸侯等に打ち明けるとでも？　今の話を聞いて私に賛同せずにおる者が、無事にこの館から戻れるとでも？　それは少々、考えが足らんじゃないかな」

「閣下に従い、裏切らず、共に魂の玉座を目指す限り、皆様方には何の障りもございませんわ。ですが」

いつの間に現れたのか、砂色の髪をしたカーティがサマル・ビュイクの傍らに寄り添いながら、怯える面々を睥睨する。

「ですが閣下を裏切り、正義の在処を判じえず、我等に背を向けると言われるのであれば、必ずやその者の上に不幸の翼が広がる事でございましょう」

「く、薬師殿！　そなた、一体何を申しておるのだ！？」

「あら、お判りになりませんかしら？　わたくしは、どこまでも閣下に一緒致します。ですから、閣下やわたくしの邪魔をなさろうという方々は、いかなる理由があろうとも、敵と見なします。そしてわたくしは、敵に対して容赦いたしませんわ。先程のガウンディ伯爵のように、特定の方の杯に毒を仕掛けるなど容易い事です」

ザワリ、と空気が動いた。

「あなたは、我々を恐喝なさろうと言うのだな、ノーヴィア公」

「恐喝？　これは異な事を申される。私はこの国の行く末を見据え、共に道を歩もうと申上げているのですよ。そしてそのために、わずかばかりの保険を掛けさせて頂いたまで」

「なる程。当代陛下を弑し奉り、貴公が王冠を戴くための道をすると言う訳ですか。貴公と共に行く限り、我等に害はないと」

「その通り。我が栄達の暁には、卿等には相応の地位をお約束しよう」

黒いドレスを身にまとったカーティに寄り添われ、サマル・ビュイクはハイエナのような笑みを浮かべた。

「さあ、皆様方。新たな魂国のために、我等が力を一つにしようで

はありませんか」

カーティが合図をすると、新しい杯を載せたワゴンを押して小姓達が入ってくる。

「どうぞ、杯をお取下さいませ。もちろん、この杯には何も入ってはおりませんので、ご安心下さいませ」

人間を悪事に誘い込む悪魔は、きつとこんな笑顔をしているのだろう。艶めく微笑に促され、仮面の群れは杯に手を伸ばした。

後戻りの出来ない道を、命がけで進むために。

20章 トウージュ・決意新たに（前書き）

旅先でアイヒナからの報せを受取ったトウージュは、その内容に動揺する。

時間はあまり残されていない。昼に夜に馬を走らせ、彼は王都を目指す。

そこで瑰国の王弟殿下が目にした、耳にしたことは、彼にどのような決断を迫るのか？

20章 トウージュ・決意新たに

街道にけたたましい、馬の蹄の音が響き渡る。

アイヒナからの鳩が届けた情報は、トウージュに大きな衝撃をもたらした。

『ウィルカの領主、やはり夢魔なり。これを倒すも、ウィルカの領内に叛乱の火種まかれたり。ノーヴィア公爵が王都に向けて、挙兵する可能性あり。急ぎ珠春宮に戻られたし』

小さくたたまれた羊皮紙の最後に、彼女の几帳面な文字でこう記されていた。

『私の力が足りず、すまない』

なぜ？ とも思う。烽火^{ほうか}を避ける事は、出来なかったのか、と

。そう考えて、トウージュは自分の考えを恥じた。あのアイヒナが、何も考えなかったはずがない。相手が相手だ。ウィルカの街や王都、あるいは魂全体を質に取る事だつてするだろう。そうなった時、果たして己ならばどうするか？ 彼女は決して、自分の使命の事だけを優先したりはしない。ギリギリまで悩んでの決断だったに違いないだろう。ならば。

「ならば俺は、その決断を信じるまでだ」

手紙には、パーティルローサとエルキリウス神殿にも報せを送ったとある。リユフォンとアイナセリヨースの許に事態の情報が届けば、トウージュが戻るまでの時間を有効に使ってくれるはずだ。

今はただ、一刻でも早くパーティルローサへ、兄の許へ戻る事だけを考えよう。

焦る心を抑え、トウージュは手綱を握る手に力を込めた。

「ウィル力で、治療院が住人達に襲撃されたという報せが入りまし

た。制止に入った黒官こっかんに対して、投石があつたようにも報告されております」

国王の寢所で宰相からの報告を受けたアイナセリヨースは、疲れたように額に手を当てると、深々と息を吐いた。

「恐れていた事が、とうとう現実になつてしまいましたわね」

痛々しい様子の王妃を氣遣つて、イルネア・エメスが声をかけた。「大丈夫なの、アイナセリヨース。顔色が良くないわ」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます、イルネア。こんな時ですもの。わたくしがしっかりしなくては」

氣丈に振る舞うアイナセリヨースに、イルネアは言葉を続けようとして　結局、口を閉じた。そんな二人の姿を見て、ベッドの中の若き王は思う。

辛いのは、イルネアも同じだ。ウィルカの街で民衆が蜂起した。それは取りも直さず、夫であるサマル・ビュイク・ノーヴィアが国王である甥に向かつて兵を挙げた、と言う事だ。この後の続く悲劇を思えば、コルウィンやアイナセリヨース以上に胸が痛むだろう。

それらの感情を押し殺し、今日の前に差し迫った危機に立ち向かうとする二人の女性に、コルウエンは己の不甲斐無さを痛感した。「ともかく、事の次第を神殿の巫女が報せてくれたのは、我等にとつて不幸中の幸い。騒ぎが大きくなる前に、何とか手を打たねばなりませんまい」

エルキリユースの巫女からの手紙をたたみ直し、リュフオンは室内に揃つた顔触れを見回した。

「この書簡によりますれば、トウージュ殿下もこちらへお戻りになつておられるようです。殿下がお戻りになられるまでに、我々に出来る事をしていきましょう」

「うむ。リュフオンの言う通りだな。苦しい胸の内を明かしてくれ、た、エルキリユースの巫女のためにも。我等は、この報せを無駄にしてはならぬ」

ベッドから半身を起こした国王の言葉に、王妃、前王妹、宰相は

表情を引き締めた。

「我等の勝手な政治の思惑に、罪のない国民を巻き込む訳にはいかぬ」

「サマル・ビュイクの動向は？」

イルネアがリユフォンに向かって問いかけた。

「はい。こちらの放った密偵によれば、ノーヴィア公は領内に留まっております。屋敷への人の出入りが激しくなっておりますので、本格的な挙兵までそれ程の時は残されておらぬかと」

そう答えた宰相は、痛ましげに公爵夫人を見つめた。イルネア・エメスは、未だにサマル・ビュイクと離縁してはいない。このままノーヴィア公爵が兵を出せば、もちろんイルネアも息子のティルスも罪の問われる事になる。

「イルネア様……。こんな時とは思いますが、やはり、ノーヴィア公爵家とは縁をお切りになられた方が……」

心配そうな視線がイルネア・エメスに集中する。国王の寝所に差し込む光を背に受け、影になった彼女の表情はうかがい知れない。

「お心遣い、ありがたく存じます。陛下にも、妃殿下にも、わたくしの今後の処遇について、お心を煩わせてしまいました。ですが、今は我が身の身の保身よりも、国の大事を優先しなくては。今回のサマルの事につきましても、もとはと言えば、夫を止められなかったわたくしの責任。ならば、わたくし一人が責めを逃れる訳にはまわりませぬ」

「しかしそれでは、幼いティルス・グラルも罪に問われる事になってしまいますわ」

「ええ。ティルスの事を考えれば、胸が痛みます。しかし公爵家の跡取りとして生まれた以上、負わねばならない責任がございます。それは幼きと言えど、ないがしろにしていいものではありませんまい」
そこにあるのは、公爵家を支え続けてきた妻としての、幼子を想い導く母としての、そして、国を担う王家の人間としての決意。イルネアの強い想いを目の当たりにして、それ以上の言葉をかける事

は誰にも出来なかった。

「そうだな。全てが終わった。そうしたら、ゆつくり考える時間があるだろう。それまでは保留という事だ。確かに、今優先されるべきは民の安全と、叛徒^{はんと}への対応。王都の他の三地区の動向は？」

「はい。今のところ、目立った動きはないようです。しかし、ノーヴィア公率いる叛徒の群を目にすれば、人心がどのように動くかは想像に難くありません」

王都の地図を広げて、ウィルカの街を指でなぞりながら、アイナセリヨースが口を開いた。

「現在ウィルカの治療院に遣わしている者達を、一旦こちらへ戻しましょう。薬師はこれから必要になります。この騒ぎの後には、必ず彼等の力を借りる事になるのですから」

「御意」

「万が一にも気持ちを抑えられた人々が、誰かを傷つけたりする事のないようにせねば。彼等に罪はないのだから」

「早速、そのように取り計らいます」

リユフォンは頭を下げると、手続きを進めるために王の寝所を退がった。

ベッドの中で軽く咳込んでいる国王に、手ずから淹れた薬湯を渡すと、部屋の窓を開けて空気を入れ替えようと王妃は立ち上がった。

「神殿にも、これと同じ報せが届いているのでしょうか？」

イルネアがワゴンに用意されていた茶器で、自分とアイナセリヨースの茶を淹れる。ささくれ立った気持ちを穏やかに静めてくれる効能があるはずの香茶も、さすがに魂を支える二人の女性の心を和ませる事はなかった。

「わたくし達は、少しでも相手より先んじているのでしょうか……？」

臣や民達には見せた事のない、否、何があっても見せてはならない、不安そうな王妃の顔。

「トウージユ殿が届けてくださった報せを、わたくし達は活かせて

いるのかしら……」

「あの者は……薬師のカーティは、抜け目のない人物です。わずかでも、あの者と過ごした事のある人間であれば、判ります。あの者は あれは、とても冷たく残酷な顔を持つ、何か得体の知れないモノです。わたくし達が知りえている事ならば、相手も知っていると
思っ
て間違いないでしょう」

白地に金の装飾を施されたカップを両手で包み、そこから伝わる温もりを感じる。まるで凍えてしまった自分の体を、両手の間の小さなカップから伝わる頼りない温度で温めようとしているかのようだ。

「それでも。それでも、わたくし達は守らなければなりません。魂を、この国に住む者全ての命を、わたくし達は託されたのですから」

己に言い聞かせるように、アイナセリヨースはカーテンを握り締め、呟いた。

「まったく……余は役に立たぬ国王だな。自分の治める国の一大事だと言うのに、先頭に立つて指揮をとる事も出来ぬ。皆を救う事が出来るのであれば、余は玉座など、くれてやつても構わぬというのに……」

力なく自嘲の表情で、コルウィンが口を開いた。上掛けの上で握り締められた両手は、白く色が変わっている。

「陛下、それだけではありません。何かあっても、玉座をサマルに渡してはならぬと、神殿の巫女も申しております。サマルなどに玉座を渡しては、それこそカーティの思う壺。決してそれだけではありません
せぬ」

まなしり
瞋を吊り上げ、イルネア・エメスが年若い甥の考えを退けた。

「何のために、巫女殿やトウージュ殿下が奔走ほんそうなさっておられるのです。陛下がそのようにお心弱くあられては、初めから負けを認めているようなものでございますわ」

叔母からの厳しい言葉に、コルウィンは苦笑した。

「変りませんね、叔母上。幼い頃は、トウージュと二人で良く叱られたものだ。この年になって、叔母上から叱って頂けるとは思いもしませんでしたよ」

喉に絡んだしつこい痰を振り切るように、二、三度咳込むと、静かに顔を挙げた。自分の裡にある弱さと迷いを見据え、決意を固めた国王の顔がそこにはある。

「いかに叔父上と言えど、国を荒らし戦禍を招こうとする者を、このまま見逃す訳にはいかぬ。間もなくトウージュも珠春宮に戻るだろう。それまでに、我等にできる事をするのだ」

「御意にございます」

「かしこまりました」

魂国を支える二本の柱、王妃アイナセリヨースと公爵夫人イルネア・エメスは、王の言葉に優雅に頭を下げた。

＊＊

匠都ホルテスから、真っ直ぐに王都を目指す。

日を徹し夜を費やし、トウージュは馬を走らせて来たが、ついに人も馬も疲労で動けなくなってしまった。

とにかく目についた宿に馬を止めると、フラつく足で文字通り転がり込んだ。

「オ、オヤジ……水を……水をくれ」

カウンターにもたれかかり、宿の主人が慌てて差し出してくれたカップを奪い取るようにして一息におおった。

「は、ふー。助かった……オヤジ、少し休ませて欲しいんだが、部屋はあるかな？」

やつれてヨレヨレのトウージュの姿に、主人も哀れをもよおしたのである。すぐに部屋と湯を用意すると伝えた。

「あとそれから、表に馬がいるんだが、水と飼い葉を頼む。俺にも何かもらえるか？」

それだけを口にすると、トウージュは力尽きたようにカウンターから滑り落ちた。

「お、お客さん！ 大丈夫かい、あんた？」

「俺より、馬を……」

「自分よりも馬の心配をするなんざ、お客さん、余程の馬好きかい？」

這いずって何とか食堂の椅子に辿り着くと、坐面によじ登って息を吐いた。

「いや、そういう訳じゃないんだ。随分と無理をさせたからな。休んだら、また頑張ってもらわないといけないんだ」

突っ伏したテーブルからわずかに顔を挙げ、宿の主人に告げた。しかし、馬の心配をする前に、トウージュ自身もボロボロだ。

「おい、トム！ 表の馬を厩舎に連れてって、水と飼い葉をやっといてくれ！」

ちょうど階段を降りて来た息子らしき少年に、前掛けを締め直しながら主人は言いつけると、急いで厨房へ入って行った。

しばらくすると、皿とジョッキを持った主人がトウージュの前に立った。

「ほいよ、お客さん。急いで作ったから、こんなモンしかねえが、食ってくんない」

テーブルの上に出された皿には、スライスしたパンの間に野菜と肉をはさんだものが載っている。ジョッキの中身は酒ではなく澄んだ液体で、清々しいライムの香りがする。

「そんなヨレヨレの状態じゃ、かえって酒は毒だからな。良く冷えた水に、ライムの果汁を合わせたもんだ。疲れた体にや、それが一番さ」

一口含むと、口腔一杯に豊かなライムの香りが広がる。乾いていた体中の細胞に、水分が浸透していくのが分かる気がした。

「ああ、美味い。こんなに美味しい水は、初めて飲んだよ」

「だろう？ この辺りの水は、昔から名水だってんで有名なのさ。」

最高の水が湧く泉があつてね。山脈の雪解け水が、地下を流れているんだ」

宿の主人は、水を褒められた事が嬉しかったらしい。顔をほころばせて、自慢を始めた。

側のテーブルにいた者達も、ジョッキを掲げて口々に自慢をし始めた。

「国王様だつて、こんなに美味しい水は飲んじやいねえだろうよ」

「違エねえや」

「この水は、俺達の街の誇りだもんなあ」

「けどよお……」

その中の一人が沈んだ声を出した。

「戦が始まったら、俺達の泉も荒らされちまうんだろうなあ」

途端に、男たちの顔付きが変わった。

「まったく、何考えてやがんだろうな、貴族の連中は。ようやく眠り病が落ち着いて、安心して眠れるようになったてえのに」

「ふん。貴族なんて、そんなもんさ。俺等平民の事なんざ、虫ケラ以下にしか思つてねえんだろ」

苦々しく吐き捨て、男はジョッキをあおった。

「国民からむしり取った税金で贅沢三昧しておいて、自分の都合で戦を起こし、そのために俺達に死ねと言う。一体、貴族様つてのは何モンなんだろうな」

やはり叛乱の噂は、ここまで届いている。人心が不安と恐怖に揺れ動き、様々な流言が飛び交っているのだ。

（これは、一刻も早く王宮に帰り着かなくては。不安にかられた者達が、ノーヴィア公爵に賛同する可能性もあるかもしれない）

だが、いくら心が急いても、体が回復しなければどうしようもない。馬もここで休ませてやらなくては、残りわずかも走れまい。

「大丈夫だあな。いざという時には、国王様が何とかして下さる。だからワシ達は、戦いを仕掛けようとしている連中の話に、惑わされないようにすりゃいいんさ」

厨房の奥から樽を運んで来た老人が、嘆く男達を諭すように静かに言葉をはさんだ。

「そんな事言つてもよ、父つつぁん……」

「当代の国王様は真面目な方だ。ワシ達の事を忘れて、戦争を始めるような方じゃねえよ」

空き樽を店の外に運ぶのだろう。宿の主人の父親とおぼしき老人は、ゆつくりとした歩調でテーブルの間を進む。

ジョッキの縁に口をつけたトウージュの耳に、老人の小さな声が届いた。

「トウージュ王弟殿下でございますね。身分をお隠しとお見受け致しましたので、礼はとりませぬ。お許しを」

突然の事に驚きながらも、それを顔には出さず、トウージュも小声で応じた。

「俺の事を知っているのか？」

「はい。四年前の国王様の国内視察の折り、同行なさっておいでのお見かけ致しました。それでお顔を覚えていたのです」

「俺に何か伝えたい事があるのか？」

「どうか国王様にお伝え下さい。この街は大丈夫です。いかに反乱者が攻め入ろうとも、決して国王様を裏切る事はございません、と」

「……陛下への御伝言、確かに預った。必ず陛下にお伝えする」

「有難う存じます。直に言葉を交わします御無礼、何とぞ御容赦を」
「構わぬ。気にするな」

老人はわずかに頭を下げると、再び樽を抱えて歩き出した。トウージュも表情を変えずに食事を終え、テーブルを立った。

用意されていた部屋に入ったトウージュは、旅装のまま寝台に倒れ込んだ。疲労と睡魔が波のように押し寄せ、彼の全身を包み込む。朦朧とするトウージュの脳裏に、先程の老人の言葉が浮かんた。

『国王様を裏切る事はありません』

皮肉なものだな、とトウージュは思う。王都に近い程、人の心は国王から離れている。それとは逆に、中央から遠くなるにつれ、人

々は国王への忠心を見せる。

やはり、権力の近さと関係があるのかも知れない。なる程、中央から離れた土地に住む者にとって、貴族達の利権争いなどどうでもいい事なのだ。あるのは、ただひたすらに、国王への信仰にも似た忠誠心。

「彼等の暮らしを……壊す訳には……」

「いけない」と言う呟きは、そのまま寝息の中に紛れてしまった。

＊＊

夢も見ず、泥のように眠ったトウージュは、すっきりとした頭で目覚めた。

まだ幾分疲れは残っているものの、昨日のように動けなくなることはないだろう。

井戸の冷たい水で顔を洗うと、体もシャンとした気がする。

食堂では宿の主人が、早発ちの客のために朝食を用意していた。

「おや、お早うございます。良くお休みになりましたかな？」

にこやかに声をかけてくる主人に勧められて、トウージュはテーブルに着いた。

「夕べは、大したモンが出せなかったんでね。その様子からすると、今日も大変な一日になりそうなんでしょうよ。しっかり食って、体力つけてもらわにゃ」

そう言って、テーブルの上に朝食にしては豪勢なメニューを並べていく。

産み立て卵のチーズオムレツに、野菜サラダ、バターに焼き立てのパン。新鮮なカブのスープ、焙^{あぶ}ったベーコン、香りのいいコーヒ

！。

「おおつ、こりゃ美味そうだ」

食事に含まれる『生命の源』が、トウージュの体の隅々に行き渡るのを感じられるようだ。

「夕べあの後、父つつあんから聞きましたよ。お客さんは大事なご用で、王都まで急ぎで行きなさるって。だから明日の朝は、うんと精のつくモンを用意しろって言いつかったんですよ」

主人は前掛けで手を拭きながらやって来ると、空いた皿を片付けながらトウージュに語った。

「それは……。気を使わせてしまって、悪かったかな」

彼が恐縮すると、主人はカラカラと笑って手を振った。

「なあに、大した手間じゃねえんで、気にしなさらず。それより、急いで出立なさるご予定なんでしょう？ 馬の用意をしておきますんで」

「ああ、願います」

皿を抱えて厨房へ戻る主人の背中を見送り、トウージュはテーブルから離れた。

部屋に戻り、放り出してあった荷物をまとめる。とは言っても、それ程荷物がある訳でもない。

麻袋から財布を取り出し、中身を確認する。旅装を整えて階下に降りると、昨夜、馬の世話をしてくれたトムと呼ばれた男の子が、食堂の掃除をしていた。

「えーと、その君。支払をしてしまいたいんだが」

テーブルの下を掃いていた少年は、トウージュの声に上体を起こそうとして、椅子につまづいてバランスを崩した。

「おおっと！ 大丈夫かい？」

駆け寄ったトウージュが、すんでのところでトム少年を抱き止めた。

「悪かったな、急に声をかけて。驚いたか？」

「す、すみません。大丈夫です」

照れたように笑うと、ちよつと待ってて下さいね、と言いついて外へ駆けて行く。待つ事しばし、開け放たれたドアから主人が入って来た。

「お待たせしちまって」

ニコニコとやって来た宿の主人に支払を済ませ、荷物を抱えて馬が用意されている厩舎へと向かった。だが、トウージュはいぶかしげに厩舎の中をキョロキョロと見回した。

「あれ？ 俺の馬は？」

夕べ宿の前まで乗り付け、預けたはずの馬が見当たらない。

「親父さん、俺の馬がないんだけど？」

後ろにいるはずの主人を振り返ると、目の前に支度を整えた馬を牽いてニコニコと笑顔でトウージュを見ている姿があった。

「いやあ、驚かそうと思ってね。お客さんから預った馬は、疲れがたたったのか、足を痛めてしまいました。急ぎの旅には耐えられそうにないってんで、今朝早く、父っつあんが馬市で選んできたんですよ」

轡くわを牽かれた青毛の若駒は、首を振って、走り出したい気持ちを抑えているように見えた。

「いい馬だ。だけどいいのか、こんな事してもらって？ 代価を払いたいけど、生憎と持ち合わせがないから、何も渡せないしなあ」

戸惑ってしまったトウージュが、頭をかきながら困り顔で言うように、主人が表情と口調を改めて語り始めた。

「代価なんて、何もいらねえですわ。夕べ、父っつあんから聞きました。ご身分を隠しておいでなので、礼をとっては逆にご迷惑になると言われたので、このまんまで申し訳ねえです。あの馬じゃ歩く事は出来ても、走る事は無理ですわ。どうぞ遠慮なく、この馬を使つて下さいまし。そいでしょうか、戦を止めて下さいまし。お願いします」

深々と頭を垂れる。その姿にトウージュは何も言う事が出来なくなつた。

これから始まるうとしている戦は、この国に住み、生活している人々にとって何の関係もないものだ。

国王位を奪わんと目論み、兵を挙げて謀叛を企てるノーヴィア公。そして、それを後ろで操り、己を縛る封印を解こうと画策するカー

テイ、否、邪神アーカバル。

彼等の思惑は、ただこの国に混乱のみを引き起こすだろう。穏やかに、憤まじやかに暮らす人々の上に、災と禍わざわいしかもたらさない。今、目の前で頭を下けている男の上にも、酒を酌み交わしながら笑い合っていた、昨夜の男達の上にも、そして彼等が『誇り』と胸を張った泉の上にも、間違いなく降りかかるのだ。

「戦なんか……。戦なんか、起こさせない。そのために行くんだ。絶対に間に合って見せる」

それは王族としての矜持。守らねばならぬもののある、人としての信念。

「どうぞ、この馬を。お願いします。この街を、この国を、守ってくださいまし」

再度、深々と頭を下げた主人の手を、トウージュはしっかりと握った。

「約束する。きっと守るから」
きつく握り合わせていた手から、手綱がトウージュに引き継がれた。それは、国を託されたと同じ事。

瑰国の王子を背に乗せた馬は、有り余る力を示したくて、しきりと地面をかいている。もう主人は何も言わなかった。トウージュも語る言葉はすでない。無言で視線を交わすと、青毛の脇に拍車を当てた。

背中に宿の主人の真摯な想いを負って、トウージュは街道をひた走る。

絶対に間に合わせなければならない。自分が守るのは『国』ではない。そこに暮らす多くの『人』の過とがごす日々。

「間に合わせて見せるさ」

食い縛った歯の間から、絞り出すように発せられた言葉。それが、トウージュの真実。

瑰国の王弟殿下を乗せて、まるで風のように青毛は疾走する。

21章 守るべきもの・守りたいもの（前書き）

いよいよノーヴィア公爵が兵を動かした。

それを迎え撃つ為に、トウージユは將軍達を説得して戦略を巡らせる。

この世界をかけた戦いの幕が気って落とされようとしていた。

21章 守るべきもの・守りたいもの

トウージュが珠春宮に帰り着いたのは、泉の街を出発してから五日後の事だった。宿の主人が用意してくれた青毛の若駒は、トウージュの焦りを知るかのように良く走った。

通り抜けた村や町は不穏な空気に包まれ、人々は浮き足立っていた。ただその中でトウージュの目に不思議に映ったのは、設立されただばかりの国立治療院の前に行列する人々の姿だ。最小限の休息で王都を目指していたトウージュには、その理由を探る暇はなかった。急ぎに急いで、それでも珠春宮パティルローサへ戻り着いたのは深夜を回っていた。

「開門！ 開門！」

絞り出すようにして張り上げられたトウージュの声に、パティルローサの城門は慌しく開かれた。

門扉が開ききる前に、すり抜けるようにして城門内に走り込んだ騎馬の姿に、周囲にいた物達は急いで飛び退いた。正門前に騎乗したまま乗りつけたトウージュは、鼻息も荒く首を振っている青毛の馬から飛び降りた。

「殿下！ トウージュ王弟殿下！」

夜番の兵士から報告を受けたのだろう。宰相のリュフォンが、城の正門まで王弟を迎えにやって来た。

「よくぞ、ご無事でお戻りになりました」

「リュフォン、挨拶は後だ。兄上は？」

階段を上がり、松明に照らされた回廊を早足で進みながら、二人は会話を交わす。

「陛下は、すでにお休みでございます。妃殿下とノーヴィア公爵夫人が起きておいでですので、お知らせしておきました」

「義姉上と叔母上が？ このような時間まで」

「はい。神殿の巫女より報せが届いてから連日遅くまで話し合っ

おいです。あまり根を詰められてはお体に障ると、私共も申し上げていますので」

眉根を寄せて顔を曇らせたリュフォンに、強行軍で薄汚れてしまった王弟殿下は労いの言葉をかけた。

「そう言うお前だって、大した顔色だぞ。義姉上や叔母上の事を心配する前に、自分の身を労わるんだな。お前が倒れたりしたら、それこそ一大事だ」

長い回廊を抜け、瑰国王妃の私室前に立つ。

「妃殿下、公爵閣下夫人、失礼致します。トウージュ王弟殿下が、お着きでございます」

静かなはずの深夜。なのにどこか浮ついていて、耳に不快な空気の流れる夜。部屋の扉は内側から開かれた。

「トウージュ殿、お久しぶり」

「叔母上」

王妃の私室に通されたトウージュは、地図と書類に囲まれたアイナセリヨースに一礼した。

「義姉上、ただ今戻りました。長い間、留守をお任せしてしまって、申し訳ありません」

「トウージュ殿下。よくご無事でお戻り下さいました。お待ちしておりましたわ」

立ち上がったアイナセリヨースが、トウージュに近寄り、汚れたマントの上から抱き締めた。

「あ、義姉上！ 汚れてしまいます！」

あたふたと慌てるトウージュに向かって、アイナセリヨースは少しだけ笑って見せた。その瞳がいたずらっぽく光っている。

「だってこれは、殿下が急いで戻ってきて下さった証ですもの。構いはしませんわ」

「トウージュ殿がお戻りになられて、私共がどれだけ心強く思っているか」

ノーヴィア公爵夫人イルネア・エメスが、瞳をうるませながら声

をかけた。

「有難うございます。叔母上もお変わりなく」

「ええ、お蔭様で、本当はこんな形で再会したくはありませんでした……」

「叔母上のせいではありませんよ。あまり、ご自分を責めないで下さい」

苦しげに顔を歪めたイルネアの肩に手をかけ、トウージユは叔母を覗き込みながら口を開く。

埃にまみれたマントを受け取り、ドアの脇に控えていたリュフオンが頭を下げた。

「まだお話になられるのでしょうか。それでは、何か軽いものとお茶を用意して参りましょう」

「リュフオン。あなたも気を使わずに、休んで頂戴」

地図の広げられたテーブルの前に戻ったアイナセリヨースの言葉に、瑰国の宰相は苦笑した。

「それは、皆様方も同じ事でございますよ。軽食のご用意が出来ましたら、私も休ませて頂きます。夜が明ければ、陛下もお話を聞かれないと思われそうですでしょう。皆様方もどうか、少しはお休みになられて下さいませ」

「ああ、約束しよう。話が終わったら、お二方には必ずお休み頂くよ」

トウージユがリュフオンの言葉にうなずくと、宰相は温かく微笑んだ。

「お二方だけではなく、殿下もお休みになって下さいまし。お願い致しますよ」

そう言い置いてリュフオンが部屋を意出て行くと、頭をかきながらトウージユは椅子に腰掛けた。

「リュフオンにも、心配ばかりかけていますね」

「国の大事なのですもの。リュフオンも判っておりますわ」

テーブルの上に広げられた地図は、四方を水晶の原石を加工した

置物で押さえられ、所々に赤いインクで描かれた印と大理石の駒で飾られている。

「ノーヴィア公爵の動きは、いかがですか？」

地図を確認しながら、トウージュはアイナセリヨースに尋ねた。

「公爵領を見張っている者からの連絡によれば、サマル・ビユイクと賛同する貴族達は、周辺の者達を集めて武器を与えているようですね」

「自分の事を、瑰国の正統なる次期国王と称して、人々に命令を下しているのですわ」

ノーヴィア公爵領には赤いインクで大きく囲まれ、黒大理石の駒が置かれている。

「最終的には、どれだけの軍勢になるのでしょうか……」

ため息と共に発せられた問いは、事態に関わるもの全てが抱えている不安でもある。

トウージュは公爵領から王都までの道を辿り、周辺の地形を確かめながら口を開いた。

「相手を王都に入れる訳には、いけないな。だが、珠春宮を空にする訳にもいかない。城が空になった隙に、ウィルカの住人をそのかした連中に攻め入れたくはないからな」

カジカジと爪を噛むトウージュに、夜食のワゴンを押してきたリユフォンが、湯気の立つカップを差し出した。

「昔の癖が出ているようですね、殿下。深爪をしてしまいますよ」

「あ、ああ、悪い……」

受け取ったカップには、たっぷり目のミルクと砂糖を入れた熱い茶。

「疲れた頭では、良い知恵も浮かばぬでしょう。しっかりとお休みになられて、それからに致しましょう。何か動きがありましたら、必ずお伝え致しますから」

リユフォンの懇願に、三人は一樣に息を吐き出した。

「ええ、判っているわ。判ってはいるのだけど……」

椅子の背もたれに身を預け、アイナセリヨースは両の目蓋まぶたを押さえた。

「このお部屋にいらっしゃるのは、瑰国の要。倒れれば国が傾く柱でございます。どうぞ、お体をおいとい下さいませ」

「私達が休まねば、リュフォン殿も落ち着かないでしょう。ちゃんと休みますから、安心してくださいな」

イルネア・エメスが穏やかに伝えた。宰相は静かに一礼すると、王妃の私室を後にする。

「きつと　もう時間は残されていないのでしょうかね」

噛み締められた朱唇の間から、苦しげな言葉が押し出された。

「アイナセリヨース。リュフォン殿が申される通りですよ。今のうちに、少しでも休んでおきましょう。どうせすぐに、休みたくても休めなくなってしまうのですから」

苦悩するアイナセリヨースの肩に手を置き、そつと寄り添いながらイルネアは声をかけた。

「立ち向かうのは、義姉上だけではありません。俺も戻って来ました。必ず、この国も兄上もお守りします」

トウージュの言葉に、アイナセリヨースはかすかに微笑んだ。

「守れるかしら？」

「守ります。絶対に守ります」

義弟の力強い返答を聞くと、瑰国王妃は立ち上がった。

「夜明けまで、大した時間ありませんが……。陛下の御前で、居眠りしたりしたら大変ですものね」

「そうですね、アイナセリヨース。さあ、少しでも休んでおきましょう」

王妃に寄り添う公爵夫人の姿を見て、トウージュも席を立った。

「叔母上、義姉上をお願い致します」

自分がいては、アイナセリヨースも休みにくかろう。トウージュは王妃の私室を出ると、自分の部屋へ向かった。

季節は本格的な冬を迎えようとしている。雪が降り始める前に、

すべてを終わらせなくてはならない。寒さの厳しい北の大国・瓊。長く振り続く雪の中での戦いは、敵味方・双方の軍勢に多大な犠牲を強いるだろう。そしてそれは、どちらもこの国の民なのだ。

「サマル・ビュイクも、まさかのこの時期に戦いを仕掛けてこようとは……。いや、今、この時期だからなのか？」

まともな指揮官ならば、冬へと向かう時期に戦闘を始めたりはしない。何か目算があるのか。それとただ単に、季節など気にもならないという事か。

「宮城を空にせず、サマル軍を迎え撃つ……。駐留させる兵に、どれだけの人員を割けるのか」

解決しなくてはいけない問題は山積みで、しかもそれが、増殖する兆しすら見える。

大きく息を吐くと、途端に重くなったような気がする足を引きずり、ようやく自室に辿り着いた。ドアを開ければ、留守中にもキッチンと掃除され、手入れの行き届いた空間が広がっている。

「けど……安宿の方が居心地がいいと思っちまう俺は、何モンなんだろうね？」

毛足の長いカーペットを踏み、天蓋付きの巨大なベッドに歩み寄る。とにかく着ている服を脱ぎ捨て、ブーツを放り出してシーツに潜り込んだ。ふかふかの布団と枕にうずもれながら、トウージュは自分自身の適応能力の低さに呆然と呟いた。

「ベッドが贅沢すぎて、眠れねー」

＊＊

柔らかな朝の日差しが部屋を照らし、早起きの鳥達がエサを求めて飛び交っている。

軽いノックの後、部屋のドアが静かに開かれた。

「殿下、お目覚めでございますか？」

うつらうつらとしていたトウージュの耳に響いたのは、近侍きんじの声

ではなくリュフオンのものだった。

「んん、ああ。お早う、リュフオン。でも、これは宰相の仕事じゃないだろう」

のっそりと起き出したトゥージュの言葉に、カーテンを開きながらリュフオンが答えた。

「それはそうなんですが……。実は、陛下がお話を聞きたいと仰せで。誰かに言いつけるよりも、私がお呼びした方がよろしいかと思いましたが」

それにしても、リュフオンはいつ眠っているのだろうか？ そんな事を考えながら、トゥージュはベッドを抜け出し、用意されていた水盤で顔を洗う。差し出されたタオルで水を拭い、苦笑しながら振り向いた。

「リュフオン。もう小さな子供じゃないんだ。自分の事くらい自分でできるようになったよ」

宰相の顔にも笑みが上る。

「左様でございましたな。久し振りに殿下がおいでになるものですから、つついとお世話を焼きたくなってしまふのですよ。またいつお出かけになられるか分かりませんからな」

「当分の間は、姿をくramしたりしないよ。それどころじゃないからな」

手早く身支度を整え、トゥージュはリュフオンと共に国王の寢所を目指す。

「兄上のお加減は？ 落ち着いていらつしやるのか？」

「ええ。この頃は落ち着いていらつしやいます。殿下がお戻りになられるのを、心待ちにしておられましたよ。夜中に殿下がお帰りになったとお聞きになり、ぜひとも一緒に朝食を摂りたいと仰せになられましたので」

久し振りに見る兄王コルウィンは、最後に見たときよりも、随分と顔色が良いように感じられた。

「久しいな、トゥージュ。元氣そうなお前の顔が見られて、嬉しく

思うよ」

「兄上もお元気そうで安心しました。戻るのが遅くなってしまつて、申し訳ありません」

「さあ、挨拶は終わりだ。余と共にテーブルについてくれるな？」

トウージュはコルウィンに近寄り、ベッドから起き上がる兄に手を貸した。テーブルへと向かうコルウィンの足取りも、思ったより力強い。それは、暗く沈んでいた彼の心を幾分か軽くした。

朝食を口に運びながらも、コルウィンは旅の様子を聞きたがつた。自分の足で知る事のできない、王都ハディースの、地方の村や町の、魂国の様子を知りたがつた。

「兄上。全部終わつて、魂という国が変わらずにあつて、兄上の体が快癒なさつたら、一度行つて見ませんか？ 美しい山や美味しい水や、優しい人々に会いに。兄上にも知つて頂きたいのです。この国に住まう人々の、本当の生活というものを」

「アイナセリヨースにも言われたな。閉じられた世界の中では、見えるものも見えないと。余は『王』であるだけで、国の事を何も知りませぬのだな……」

「これまでの時間は、国の基盤を固めるためのものだったので、きつと。知らなかつた事を知るのに、遅過ぎるという事はないはずです」

「まだ、余は間に合うであろうか？ 民達はまだ、余を見限らずにいてくれるであろうか？」

スーパの皿の中に銀のスプーンを落とし込んで、コルウィンは窓の外へ視線を投げた。手にしていた食器を下ろし、トウージュは優しい目で病身の兄を見た。

「兄上。ある人から、言伝を預っております。『我々は誓つて、国王を裏切る事はありません』と。国王は真面目で民の事を思つて下さる方だとも言っていました。兄上を信じている者が、この国にはまだまだいるのです。どうぞ、お心を強く持つて下さいませ」

久し振りに兄弟での朝食を済ませると、食器の片付けられたテー

ブルに、魂国の地図が広げられた。

「サマル・ビユイクの軍が、王都に入り込む事だけは避けなくてはなりません。ただでさえ不安定な人心が、反乱軍を目にしてどうなってしまうか、想像に難くありません」

「その通りだ。この戦は民には関わりなき事。万が一にも王都や近隣の街村に害の及ぶような事があつてはならない。我が方の軍を動かすにしても、場所は慎重に選ばねば」

地図の上を指で辿り、コルウィンとトゥージュは額を突き合わせて相談をする。そんな中、慌しく寝所の扉を叩く音が響いた。

「陛下、良くない報せでございます」

眉を曇らせたリュフォンが、室内の二人に頭を下げた。

「サマル・ビユイクの軍が、公爵領を出たという報せが参りました」
「動いたか……」

トゥージュは地図に視線を走らせた。王都と公爵領を結ぶ街道。

「兄上。今からなら、オーガスベルの平原で迎え撃つ事が可能なのではないでしょうか？ あそこならば、森に兵を隠す事も出来ます。木立ちの影に射手を配置すれば、相手は防ぐ手立てはないでしょう。地形的にも有利です」

アゴに手を当てながら、トゥージュはコルウィンに提案した。その意見にコルウィンの顔に、驚きと誇らし気な表情が浮かんだ。

「トゥージュ、我が弟よ。そなたが戻つて来てくれて余がどれ程心強く思つておるか。そなたにも分かるまいよ」

その言葉にトゥージュは、照れたように微笑んだ。

「俺の命は、この国と兄上のためのものです。どうぞご存分にお使い下さい」

「それはならんぞ。確かに魂王家の人間として生まれたからには、我等の生命は国のものだ。だがそれ以外は、誰のものでもない。そなたはそなたのために生きなければ」

静かな声で、しかし厳しく諭されて、トゥージュは深い愛情が胸を支配するのを感じた。

「それでも俺は、兄上のために生きたいと思いますよ」

兄であるコルウィンが、自分に対して抱いている愛情が流れ込んでくる。しかし、それ以上に、トゥージユはこの実直な兄王を愛しているのだ。己の身を捧げてもいいと思えるほどに。

「リュフオン。すぐに動かせる軍勢はどれ程あるのだ？」

「陛下の身边を警護する近衛隊が二隊。王宮警邏のための常駐軍が七部隊。街道警邏に十二部隊。地方・辺境へ出ている三十四部隊です。そのうち地方・辺境での三十四部隊は、行軍中に合流出来るでしょう」

手許の書類からそれだけの事を読み上げると、宰相は国王と王弟を見た。

「叛乱軍は、ノーヴィア公爵の私兵が五部隊。賛同している貴族達の兵が二十部隊。数の上ではこちらの方が上回っておりますが、行軍中に群集が合流するかもしれません。最終的に、どの位の数になるかは不明です」

リュフオンの説明を聞きながら、トゥージユの視線は忙しく地図の上を動き回っている。

「オーガスベルは一方が湿地になっている。地方・辺境部隊は、今から動いても合流するまでに時間の差が生じるな……。だとすれば……。いや、それには、少なくともこちらの数が三分の一、最低でも四文の一は上回っていないくては……」

親指の爪を噛みながら、自分の考えに没頭している。地図上のオーガスベルの地形をなぞり、頭の中で陣形を組み立てては崩し、崩しては組み立てる。

「数だ……。せめて公爵軍より四分の一、こちらが上回っていれば……」

トゥージユが苦々しく呟いた時、部屋の扉が開いた。

「その事でしたら、わたくし達が解決して差し上げられると思いますわ」

入ってきたのは、若草色のドレスに身を包んだアイナセリョース

と、臙脂色えんじのドレスのイルネア・エメスである。

「義姉上、叔母上」

立ち上がった二人を迎えたトゥージユに微笑むと、広げられた地図の上に書類の束を置いた。

「義姉上、これは？」

不思議そうに一枚を取り上げる義弟に、アイナセリヨースは厳かに宣言した。

「国中から集められた、国王軍への志願者名簿ですわ」

「志願者？ 余は戦のための志願者を募った覚えはないぞ」

コルウィンも羊皮紙の一枚を手についた。眉間にシワを寄せて書面を確認する国王に、イルネアが答えを与えた。

「これらの者達は、自ら志願してきた者ばかりです。一人として、無理強いした者はありません」

「自ら？ なぜだ？ これは余とノーヴィア公爵との戦いであろう。どうしてこれ程の民達が戦のために立ち上がるのだ？」

年若い国王は不思議そうな表情で、羊皮紙から顔を挙げた。

「余はこの戦に、魂の民を巻き込むつもりはないのだ」

「兄上。これは民の戦でもあるのです。この魂に暮らす者として、いや、この世界に生きている者として、戦わなくてはならないという事なのでしょう」

「国王の座を狙う公爵の叛乱などと言う、この世の道理で割り切れるものではないのです。あのカーティという娘は、私達には及びもつかぬ巨大な力を持つ存在である事は間違いありません。そのような存在に立ち向かうには、私達だけでは力が足りません」

「もはや、余一人の問題ではないと言う事だな……」

手にしていた羊皮紙をトゥージユに渡し、コルウィンは弟に声をかけた。

「どうだ、トゥージユ。作戦は立てられそうか？」

「ええ、これだけの人員があれば、思った通りの陣形がとれそうです」

「ですが、トウージュ殿下。志願してきた者達は、農民や商人といった者ばかりです。武器を持って戦場で戦った事などないのではありませんか？」

リユフォンの疑問も、もつともだ。これまで武器を持った事の無い者達を訓練し、戦場に立てるようになるまで何日もかかる。それ以前に、志願者達の命を危険にさらす事をコルウィンが許すはずもない。

「大丈夫だ。戦を職業としない、軍人ではない者達を最前線に送り出す訳にはいかないからな。それには俺なりの考えがある」

地図から顔を挙げたトウージュは、自分を見つめる面々を見返した。

「すぐに將軍達を集めて下さい。あとは、時間との戦いです」

その言葉を聞いて、王妃と公爵夫人、宰相は王の寝所を飛び出して行った。一分一秒が重要となる。まさに「時間との戦い」である。会議室に各部隊の將軍が顔を揃えたのは、トウージュの召集から十分後の事だった。部屋中央にある巨大なテーブルには、オーガスベル周辺の地図が広げられ、黒檀の駒が置かれている。

会議室に入ったコルウィンとトウージュは、集った將軍達の顔を見渡した。

「卿らも聞き及んでいるだろう。ノーヴィア公爵が兵を動かした。これらの者達を王都に近づける訳にはいかない。我等はこれを、オーガスベルで迎え撃つ事とする」

指揮杖で地図を示しながら、トウージュは將軍達に説明を開始した。

「恐れながら、殿下。それは賢明な事でしょうか？ オーガスベルは木立ちや湿地があり、陣形を展開するには不向きなのでは？」

説明を聞いた將軍の一人から、不信気な問いが発せられた。

「地形的に見て、オーガスベルは陣形向きではないと思われます」
王宮に居場所を定めない王弟殿下の存在は、將軍や軍人達にとって扱いに困るものだった。『王弟』という身分は無視するには大き

過ぎる。しかし、フラフラと気ままに王宮を抜け出すこの王族は、果たして信用するに足る人物なのか？

「戦の専門家である卿らからしてみれば、俺の言葉に不信を抱くのも無理からぬ話だ。俺自身、王宮内で信用がない事も良く判っている。だが、国の大事を思う気持ちは卿らと同じだ。とりあえず、話を聞くだけは聞いてくれ」

トウージュが訴えると、隣りに腰掛けていたコルウィンが立ち上がった。

「余の偉大な將軍達よ。卿らは、余の言葉の如く、トウージュの言葉を聞かねばならぬ。なぜなら、彼は余の目であり、余の耳であるからだ。今この場にいる者の中で、彼程正しく事態を認識している者はおらぬだろう。余は我が弟の言葉に、全幅の信頼を置くものである」

病がちな年若い国王は、自分の意見を強く前に出す事はない。將軍達はともすれば、国王の判断ではなく己の判断を優先してしまうのだ。政に積極的に参加する事の出来ないコルウィン差し置いて、自分達が国を動かしているかのような錯覚に陥ってしまった。それ故に、国王の発言をないがしろにする傾向があったのだ。

「こたびの戦は、単なる王位の篡奪ではない。ノーヴィア公爵の背後には、我等には及びもつかぬ大きな力が働いているのだ。そして我等は、この戦に是が非でも勝たねばならぬ。でなければ、瑰国のみならず、世界に闇がはびこる事となる」

コルウィンは強い決意を宿した瞳で一同を見回す。常にはない国王の姿勢に、会議室に集った面々は息を飲み込んだ。今この場に立っているのは、病弱で控え目な青年ではなかった。命令する事に慣れた、生まれながらに人の上に立つ事を運命付けられた者。まさに『王』の姿がそこにはあった。

「人として、今こそ立つとき。余の偉大なる將軍達よ。迷う事無くトウージュに従うのだ。我等の働きが光と闇の雌雄を決する。それを心に刻み置け」

初めて聞くコルウインの厳しい言葉に、鎧を鳴らしながら一人の男が立ち上がった。

「陛下。我等は陛下のお言葉に従いましょう。陛下とこの国をお守りするのが我等の務め。ぜひともこたびの戦、勝たねばなりませんまい」

その相手の顔を見て、トゥージュは微苦笑を浮かべた。

「ライナス元帥……」

灰色の髪をした初老の軍人は、トゥージュが子供の頃から苦手に感じていた人物だ。生真面目な表情と冷たく光るアイス・ブルーの瞳は昔と変わらない。

「トゥージュ殿下。殿下のお考えになった策を、我等に教えて頂きたい。陛下のお話から察するに、残されている時間はあまりないのだろう。こうしている一分一秒が惜しい」

中身も、トゥージュが知っているライナスのままだ。

「よし、話を続けよう。ライナス元帥が指摘した通り、時間はあまり残されていないからな」

トゥージュは指揮杖を構え直すと、改めて地図に視線を落とした。
「それでは作戦を伝える」

オーガスベルの地形を利用して考案した陣形を將軍達に説明していくと、軍人達の目に理解と驚きの色が浮かんた。

「殿下。これまで、このような戦略を用いた者はおありませぬ。いかようにして、思いつかれたのか……。これならば、奴等の度肝を抜いてやる事が出来ましょう」

一通りの説明を聞いた將軍達が、興奮気味に言葉を交し始めた。

「この作戦を元に、部隊の編成を急いで欲しい」
「御意」

王弟から示された作戦を踏まえて、各部隊が配置を検討している最中、会議室の扉が慌しく叩かれた。

「何事だ！ 今は大事な作戦会議中だぞ！」

「も、申し訳ありません……ですが……」

「許して上げて下さいな。わたくしが無理を言ったのですから」

上官に怒鳴られて小さくなっている兵士の後ろから、柔らかな声がかけられた。兵士の背後から現れたのは、アイナセリヨースとイルネアの二人だ。このところ二人は、行動を共にする事が多くなっていた。

「これは、妃殿下！ 公爵閣下夫人！」

二人の姿を認めた將軍が、慌てて非礼を詫びようとするのを押し止めて会議室に入って行った。

「義姉上、叔母上、いかがなされたのですか？」

立ち上がるうとする一同を制止し、アイナセリヨースはドレスの裾をさばいた。

「先程、宗都サンガルのイシュリン大地母神殿大神官殿からの密使が到着しました。瑰国にある全ての神殿からの書簡を携えて」

王妃の言葉を継いで公爵夫人が口を開いた。

「瑰国全土の各神殿は、この戦に僧兵を派遣するとの事です」

神殿を守る僧兵は、行動力に長けた兵士であるだけではない。各神殿で修行を積んだ神官でもあるのだ。

「それは有り難い。僧兵達がいてくれるのであれば、バフォナの事を心配せずに戦いに集中できるぞ」

トウージュが嬉しそうに口へのぼらせた言葉に、ライナスが眉をひそめた。

「こたびの戦に、何故、神殿が関わってくるのでしょうか？ 宗教的な問題はないはずですが。それに、殿下が今口にされた『^{バフォナ}夢魔』とは、一体何者なのですか？」

何もかもを見透かすようなアイス・ブルーの瞳が、トウージュを正面から見つめた。ここで適当な事を言つてごまかす事も出来た。だが、わずかに考え込んだトウージュは、その考えを打ち消した。
「卿らにも知っておいてもらいたい。今この世界では、二つの異なる戦いが進行している。そのうちの 하나가、我々が関わっている戦いだ。そしてもう一つは、神々の次元での戦いなのだ。我々とは別

の次元で戦っている者がいるのだという事を覚えていて欲しい」

「我等の他に、と言う事ですか？」

「そうだ。我々の戦いも負ける訳にはいかない。そして彼等が関わっている戦いも、絶対に負ける訳にはいかないものなのだ」

トウージュの話に、ライナスは苦笑した。トウージュが覚えている限りで、ライナスが笑ったのを見たのはこれが初めてだ。

「我等のような軍人には、及びもつかぬ話でございますな。ではもしや、敵陣の中に人外の力を持つ者が？」

「そうなるだろう。だから各神殿が僧兵を出してくれるのであれば、我等は目の前の戦いにだけ専念すれば良いと言う事だ。剣を交えている最中に、余計な心配をしたくはないからな」

地図の上に置かれた黒檀の駒を並べ直しながら話し込む二人に向かって、イルネア・エメスが声をかけた。

「ライナス元帥。私と王妃殿下も、オーガスベルへ参りますわ」

思いもしなかった言葉を聞いて、王弟と元帥は弾かれたように顔を挙げた。いや、二人だけではない。部屋に集った將軍達も、弟と臣下の話に耳を傾けていた国王も同じ行動をとった。

「叔母上！ 何をおっしゃっておられるのです！ これは戦なのですよ！」

焦ったトウージュの言葉に答えたのは、アイナセリョースだ。

「判っています。何も最前線に立って、武器を持って戦おうと言うのではありません。戦いになれば、多くの怪我人が出るでしょう。

例え、それが敵陣の人間だとしても、瑰国の民である事に違いはありません。ましてや、邪なる力によって目を曇らせているとなれば、なおさら放っておく訳にはまいりませんわ。わたくしとイルネア公爵閣下夫人は、後方で怪我人の治療を指揮します」

夫の言葉も義弟の言葉も、元帥の言葉も將軍達の言葉も、二人の女性の決意を揺るがす事は出来なかった。

22章 夢神の使徒 起つ・エルキリユ―神殿（前書き）

もはやこれは、世界に住む者全ての戦いである。

宗都サンガルのエルキリユ―ス神殿では、夢長であるメルベリツサがある決断を下していた。

何があっても、負ける訳にはいかない。この世界を守る為に。

22章 夢神の使徒 起つ・エルキリユ―神殿

「各神殿に使者を送っておきましたよ。早急に珠春宮へ報告が届けられる事でしょう」

ロウソクのオレンジ色の柔らかい光で照らされた室内に、艶のあ
る声が響いた。

「瑰国中の神殿が僧兵を派遣すれば、人員的にも戦力的にも劣る事
はないでしょう。良くそれに気が付きましたね」

光の輪の中に立っているのは、白くなつた髪を複雑に結い上げた
老婦人。

「私のわがママを聞き入れて下さり、ありがとうございます、夢長
様」

ロウソクの作り出す光の影に、静かに立っていた人物が口を開い
た。

「何を言っているの、アイヒナ。これはすでに、あなた一人の戦い
ではないのよ。皆が力を合わせなければ、全てが失われてしまう。
そのために今起たずして、いつ起つと言うのです？」

エルキリユ―ス神殿五百人の巫女を束ねる夢長は、厳しい表情を
ふつと緩めると、慈愛に満ちた微笑を浮かべた。

「それからね。二人の時には『夢長』ではなく、義母か名前で呼ん
でちょうだいね。この神殿の中では、あなたぐらいしか私の名前を
呼んでくれないのよ。私、自分の名前を忘れてしまひそうよ。メル
ベリッサって言う名前をね」

光の輪の中へ遠慮がちに足を踏み入れてきたのは、疲れた表情の
夢織り・アイヒナだ。

「まだ『義母上』と呼ぶ事を、私に許して下さいるのですか……」

「まあ、何を言っているの。アイヒナ、私の愛しい子」

エルキリユ―ス神に仕える最高位の巫女は、執務机ではなく、白
い毛皮のかけられたベンチへアイヒナを誘った。座り心地のいいベ

ンチに並んで腰かけ、夢長・メルベリツサはアイヒナの手を取った。
「あなた一人に重荷を背負わせてしまつて、申し訳ないと思つて
いるのよ。出来る事なら、私が替わつてあげたい。でも私では駄目な
の。私では、神々の御力を依らせるだけの器の大きさが無いのよ」
語りながら、メルベリツサはアイヒナの手を握り締めた。その手
は長年に渡る『夢長』と言う重責に耐え、深いシワが刻まれている。
重ねられた肌から、彼女の温かな心が流れ込んで来た。

「そんな、義母上……」

「あなたがエルキリユース神殿の前で泣いているのを見つけて、私
は不謹慎だけど、嬉しくなつたの。神に身を捧げた私にとって、誰
かに嫁ぎ子を成すのは許されぬ事。そう諦めていた私の前に、あな
たが現れたのよ」

アイヒナの金色の瞳をのぞき込みながら、優しく語り続けるメル
ベリツサ。

「あなたがいてくれたお陰で、私は子供を育てる喜びを知る事がで
きたわ。諦めていた夢を叶える事ができたの。ありがとう、私の愛
しい娘」

握ったアイヒナの白い手を、夢長は軽く叩いた。

「良くお聞きなさい、私のかわいい子。あなたは神殿の夢織りであ
る以前に、私の大切な養い子なのよ。あなたのためなら、何でもす
るわ。この命を投げ打つてでもね」

アイヒナはうつむくと、垂れた前髪の下から小さな声で義母に詫
びた。

「申し訳ありません、義母上。本来ならば、私が自分で何とかしな
ければならないのに、トウージュ殿下ばかりか、義母上まで巻き込
んでしまつて」

肩を落とす義理の娘の言葉に、メルベリツサは苦笑した。

「私の娘は、思った以上にお馬鹿さんね。どう言えばあなたに伝わ
るのかしら。私はね、アイヒナ。あなた一人の背中に重い荷物を負
わせてしまった事を、ずっと心苦しく思っていたの。だから、こう

やってあなたを手助けできる時が来るのを待っていたの。アイヒナが気に病む必要はないわ。私は喜びを持って、あなたの仕事に関わったのだから」

さあ、顔をおあげなさい、とメルベリッサに促され、アイヒナはゆつくりと義母と視線を合わせた。

「まあまあ、なんて顔をしているの。シャンとなさい。あなたを信じて戦いに赴く人々のためにも、しっかりなくては。大丈夫よ。あなた一人で全てを負っているわけではないのよ。あなたには閨姫がいるわ。そしてトウージュ殿下や私もね」

「はい。ありがとうございます、義母上」

「これはすでに、夢織りと夢魔の戦いではないのです。世界の存続をかけたと言っても過言ではないでしょう。私達がアーカバルに屈すれば、人は心安らかに暮らす場を失うのです。絶対に負ける訳には、いきませんよ」

義理の娘の手をシツカリと握り締め、メルベリッサはその明るいブラウンの瞳に決意を浮かべた。

「そのために共に戦いましょう、アイヒナ」

夢長としての責務を負って、そして、自らの育てた娘を守る母親として、メルベリッサは戦場に立つ事を決めた。全身から漂うオーラが、強く輝きを増す。アイヒナには、それが目に見えるようだった。

「もう もう迷いません。私は、私のなすべき事を行うだけです」
ウィルカの街での出来事は、アイヒナを動揺させた。バフォナであった、領主のターニヤを倒した事に悔いはない。あの時、ターニヤを討たなければ、確かに目の前の戦闘は避けられたかもしれない。だが、バフォナの種を飲まれた人々は増え続け、ノーヴィア公爵の勢力は確固としたものになっていただろう。だが。

彼女は苦々しく思い出した。

戦いの終わった室内には、くず折れたターニヤの姿、そして意識を失った子供達が数人。息を整える間もなく、扉を蹴破って部屋にかけ込んで来たのはウィルカの住人達だった。

「ターニヤ様！」

倒れた領主に駆け寄る者、子供たちを助け起こす者、ただオロオロと室内を歩き回る者。そんな中から、鋭くしなう声が飛んだ。

「あいつだ！ あいつが領主様を殺したんだ！ みんな、あいつを捕まえるんだ！」

住人達の間から、アイヒナを指差し叫んでいるのは、先程この部屋へ彼女を案内して来た青年だ。

その声に、部屋中の視線がアイヒナに集中した。ウィルカの者達の殺気立った意識が渦巻き、うなりとして聞こえて来そうだ。

「お前が、領主様を殺したのか」

「何者だ、お前？」

「こいつ街で、領主様の事を聞き回ってた奴だぞ」

陽炎のように殺気を揺らめかせた人々の後ろで、まるでマリオネットを操るように青年が言葉の操り糸を紡ぎ続ける。

「見ろ、あの袋を！ あれはエルキリユース神殿のものだ！ 神殿の人間だぞ！」

「きつと、領主様の人気を妬んだんだ！」

「国王の差し金だ！ そうに違いない！」

激情に駆られた人々はその言葉に乗せられ、アイヒナに向かってにじり寄って来る。そんなウィルカの住人達から主を守ろうと、闇姫がアイヒナの前に立ちはだかった。唇をまくり上げ、牙をむき出しにしてうなる闇姫の姿に、人々の足がわずかに鈍る。

「主殿！ ここは一旦、退くが良からう」

「だが……」

「状況を良く見る！ 話をして通じる連中か！」

主人の反論を抑え込み、闇姫は自分の背に彼女を乗せると一声高

く吠えた。

「神の怒りを恐れる者は、どくが良い！ 我が道をふさぐ者に容赦はせぬ！」

その怒声に人々が思わず後退った隙について、闇姫はアイヒナを乗せて床を蹴った。窓枠に体当たりすると、玻璃の破片を撒き散らしながら外へ飛び出した。

響き渡った破砕音に、我に返ったウイルカの住人達が部屋の外へ走り出すのを見送り、倒れているターニヤへと視線を移した青年が呟いた。

「あなたの役目は無事に終わりましたよ。ご苦労様でしたね」

薄笑いを浮かべた青年・イーギムは夢織り主従の逃げた窓をなぐめ、次の瞬間、その場から消えた。

そこまでを隣りの建物の屋上から見届け、闇姫は宗都サンガルのエルキリユース神殿へと足を向けた。

＊＊

これ以降、ウイルカにおける王家への不信感は大くなり、今や、大つぴらに叛旗を翻す^{ひるがえ}までになっている。

「アイヒナ。まだ起こってもいない事を思い悩んでも、何の解決にもならないでしょう。これからは忙しくなるわよ。今のうちに休んでいらつしゃい」

自分の考えに沈みこんでいた義理の娘に、メルベリツサは声をかけた。物思いの海から浮上したアイヒナは、何かを言おうと口を開きかけた。だがメルベリツサが、それを制止する。

「『でも』も『だって』もなしよ。私には私の務めがあるように、あなたにもあなたの務めがあるのでしょう。そしてその務めは、オーガスベルの戦いではないのよ。あなたにしか出来ない事をするために、今のうちに体を休めておきなさい。これは夢長としての命令ですからね」

さすが義理とは言え、アイヒナの母親である。彼女の性格を読み、『夢長からの命令』という形でアイヒナの反論を封じ込めたのだ。不満そうな顔をしていたアイヒナだが、結局は義母の言葉に従う事にした。

別室で休むためにアイヒナが退室すると、メルベリツサは表情を引き締めた。

「さあ、私達も動き始めましょう。娘一人に重荷を負わせ続けて来た償いをしなくては」

執務机の上に置いてあったクリスタルのベルを持ち上げた。澄んだベルの残響が消える前に、夢長付きの巫女が顔を出した。

「お呼びでしょうか、夢長様」

「皆を大拝堂に集めて下さい。此度こたびの戦について、私から話をしましょう」

恭しく頭を下げた巫女の姿が消えると、メルベリツサは己の位階を示す黒のサツシュを締め、オニキスの原石で飾られた錫杖を手に取った。

その顔に、先程までの穏やかさは微塵も感じられない。全身から発せられる気迫は、エルキリユース神殿最上級位に座する『夢長』のものだ。

夜と眠りを司る神・エルキリユースを祀る大拝堂には、見習いの巫女である夢読エルドみから上級位の巫女である夢使エルドニアいまでが集っている。各地の治療院へ派遣されている者達を除く、神殿の全ての巫女が大拝堂に立ち並んでいた。しんと静まり返った大拝堂を、かすかな衣擦れの音をさせながらメルベリツサは進む。

主神であるラングマールと同じく、エルキリユースにも神像はない。と言うよりも、ラングマールとエルキリユースが同じものである以上、神像の造りようがないのだ。大拝堂の正面には閉じられた世界を表している、鋼とオニキスで造られ環が掛けられている。メルベリツサは正面を向いて一礼すると、説教台へ上がった。目の前に並ぶ面々を、ゆっくりと見渡した。

「急な事で驚いているでしょうね、皆さん」

夢長の口から紡がれた言葉は、決して大きな声ではなかったが、大拝堂にいる全ての巫女の耳に届いた。

「世俗から切り離された生活をしている皆さんの耳にも、この国で始まるうとしている戦について、様々な噂が届いている事でしよう」

数人の巫女達の頭が、不安そうに揺れた。

「我がエルキリユース神殿は国王軍に従い、総力を挙げて、これを支援することとします」

夢長の宣言に、波のようにどよめきが起こっては引いて行つた。

「夢長様、それは果たして賢明な事でしようか」

「私達エルキリユースの巫女は、世俗に関わらぬのが身上。ましてや戦になど」

夢使いの位階にある巫女の一人が、メルベリツサの発言に異を唱えた。

「俗世界の煩わしき事柄は、夢織りである妹巫女のアイヒナに一任してあるはずです。なぜ、私達が神殿の外に出なくてはならないのですか？ 戦など、やりたい者同士が勝手に戦っていればいいのです」

大方の巫女達も、その言葉の主と同意見らしい。メルベリツサは大きくため息を吐くと、毅然と頭を挙げた。

「あなた方は、自分達がこの世界に生きる多くの命の一つだと言う事を、すっかり忘れていているようですね。確かにこれが『国盗り』を目的とした戦であるならば、私もあなた方の修行修練を邪魔しようとは思いません。ですが、今回はかりはそうもいかないのです」

「どうしてですか、夢長様。何が違ふとおっしゃるのです？」

「あなた方は夢神に仕える巫女でありながら、世界の異変は気にならないと言つたのね？ エルキリユースの法典を修了してエルドニアの位階に進んだと思つたのは、どうやら私の勘違いだったようですね」

メルベリツサの言葉は、居並ぶ高位の巫女のプライドをいたく傷

付けたらしい。儼然とした面持ちの彼女らに、メルベリツサは厳しく言葉を続けた。

「世界に背を向けて、己の修練のみに明け暮れるのも良いでしょう。しかしそのような者は、いつの間にか眠りを奪われ、自由を失くし、闇に閉ざされた世界を知り、この日の事を思い出し、そして悔いるでしょう」

一語一語を区切りながら、頭の固い夢神の娘達に語りかけた。大拝堂の床に打ち付けられる錫杖の飾りが、細やかな音を立てて夢長の言葉を強調する。

「国王軍がこの戦に負けるような事態になれば、邪神アーカバルがこの世の覇権を握る事になるでしょう。その先の世界がどんなものになるのか、私にさえ想像が付きません」

「そのために！ 邪神の復活を阻止するために、妹巫女アイヒナは夢織りとなったではありませんか！ ここまで事態が悪化したのは、彼女に責任があるはずです。その責任はどうなるのです！」

鋭い声が大拝堂の空気を裂く。

「巫女ハルベラ。何が言いたいのですか？」

老いてなお、力強さを失わないメルベリツサの瞳が、アイヒナを糾弾する者の姿を認めて硬質なものに変じた。

「夢長様は、あの娘をかばい過ぎます。いくらアイヒナが養女だからとは言え、それでは神殿の他の巫女達に示しがつきません。今回の事が戦争にまで発展してしまったのは、明らかにアイヒナの責任です。本人が責任を取らず、そのための尻拭いを私達にさせると言うのは、いかなるものでしょう」

発言したのは上級位の巫女・夢使いの中でも、最も次期夢長に近いとされている、ハルベラという名前の女性だ。年の頃は三十路を半ば過ぎ、痩せぎすで顔立ちの険しい者である。

「そもそも、あのような若輩者に『夢織り』などと言う大役が、務まるはずもなかったのです。それを夢長様をが皆の反対を押し切つて」

「なる程。私の養女であるアイヒナの非をあげつらって、彼女共々、私をここから追い落とそうと言う腹ですか。ご注意なさい、ハルベラ。その嫉妬の心と夢長への野心が、いつ何時、アーカバルを誘い込むかもしれませんよ。それに……」

メルベリツサは一步脇へ退き、オニクスと鋼の環が良く見えるようにした。

「アイヒナをエルーシャに、と求められたのはドラムーナの閻姫であり、それを決定なされたのはエルキリユース神です。あなたの頭は、もう忘れてしまったのかしら？」

投げ付けられる夢長からの言葉に、ハルベラの頬が紅潮した。

「あなたにそれ程の自信があるのであれば、私は喜んで、あなたをエルーシャとして邪神との戦いに送り出しましょう。神意を依らせるための器として行動し、その異能により人々に石持て追われ、己の持てる物を捨て去る覚悟があるのなら、の話ですが」

神に仕える巫女ではあっても、所詮は人間。しかも、そこに集っているのは「女」ばかり。衝突の起こらぬはずがない。

穏和な性格のメルベリツサと、それを生温いと考えるハルベラの間には、決定的な溝が存在した。自分には充分な力があると思っているハルベラにとって、夢長の位に居座り続けるメルベリツサ、そして夢織りとなって神殿を出たアイヒナの二人は非常に邪魔な存在なのだ。生まれも不明な孤児のアイヒナが夢織りとして選ばれた。それはエルキリユース神によって、自分よりも彼女の方が優れていると証明されたように思えてしまったのだ。

「私は戦いへの参加を、あなた方に無理強いする気はありません。異議のある者は、速やかに神殿より立ち去りなさい。それについて私はあなた方に対し何等の責任を問いません」

夢長からの静かな言葉に、大拝堂に集った巫女達が一斉に膝を折った。だが、ハルベラと数人の巫女は、挑戦的な目をして立っている。

「夢長様のお言葉に従い、私達はこの神殿を去る事と致します。皆

様の御武運をお祈りしますわ。御機嫌よう」

そう言い放つと、長衣の裾をさばいてメルベリッサに背を向けた。
「あなたの方の上にも、エルキリユース神の安らぎのありますように」
背中にかけられた言葉に、ハルベラは冷たい一瞥でもって答えた。
「よろしいのでしょうか、夢長様」

メルベリッサの側に控えていた、夢長付きの巫女が小さな声で尋ねた。

「良いのです。今は団結を強くしなければならぬ時。それを内側から崩すような要素は、一つでも少ないに越した事はありません。それに――」

ハルベラとその一派の出で行った先を見つめて、メルベリッサは少し笑いを含んだ声で続けた。

「あの娘は遅かれ早かれ、ここを出て行ったことでしょう。今回の事は、私にもハルベラにも良いきっかけとなりました」

「しかし、何もこの時期に……」

「いいえ。この時期で良かったのですよ。戦場に出てからでは、いくら私でも対処に困りましたからね」

その冷静な物言いは、長くエルキリユース神殿を束ねてきた「夢長」としてのものだ。

「さあ、私達に出来る事をしましょう。国王軍をバフォナから守れるのは、私達、エルキリユース神に仕える者の務めです。何としても、アーカバルの復活を許してはなりません」

23章 決戦の地・オーガスベル（前書き）

ついに国王軍がオーガスベルへ行軍を開始した。
対峙する両陣営に緊張が漂う。

太陽神の黄金の舟が中空にかかる時、避けようもない戦いが始まる。

23章 決戦の地・オーガスベル

ライナス元帥が編成した国王軍が、オーガスベルへ向かって行軍を開始した。

王都ハディースを出て東へ五日。瑰国を南北に横切るクレイモア山脈の麓。うつそうと茂る木立ちが開けると、目の前に広がるのは膝丈まである草原と湿地だ。

人里からは離れ、国王軍と反乱軍がぶつかり合っても里が荒らされる心配はない。そのためにも、このオーガスベル以外の地で戦が始まる事だけは避けたかったのだ。

オーガスベルへの道すがら、近隣の住民達が国王軍への参加を求めて集って来た。ライナスはトウージユから指示されていた通り、女性と成人に達していない若者は送り返した。国王軍に参加する事を許された者は、行軍の最中に適正を判断した大佐達によって組み分けされ、手渡された武器の訓練をする事になった。とは言っても元々は田畑を耕す農夫であったり、商いをする商人であった者達だ。戦いに参加するとは言え、これまで剣を手にした事もない素人を最前線に立たせる訳にはいかない。

視力の良い者には小型の弓を与え、的を狙う練習をさせた。それ以外の者に与えられたのは、スリングと呼ばれる投石器だ。柔らかくなめした細長い革紐で、中央がやや幅広になっている。中央部に石などを包み、紐の両端を握って頭上で振り回して使用するものだ。これならば、武器に不慣れな市民達にも扱えるだろう。

そして、もう一つ。戦場をオーガスベルに定めた理由があった。オーガスベルの平原は、草地、林、岩地、湿地が混在している珍しい土地だ。そのため、一見すると戦場には不向きに思える。トウージユが將軍達の反対を押し切り、この地を選んだ理由もそこにあった。岩地や湿地のために、大型の兵器である破城槌や投石器を運び込む事が難しいのだ。これらの城攻めの兵器を、何としても王都へ

運び込ませる訳には行かない。

病み上がりであるコルウインは、家臣達の制止を振り切り先頭に立った。

『国を、民を守るための戦いである。王である余が一人、安穩としている訳にはいかぬ』

そう言われてしまつては、誰も国王を止める言葉を持たなかった。国王が自ら軍を率いて戦場へ向かう。当然のように、トウージュもコルウインに従つてオーガスベルへ赴くつもりでいた。しかし兄王からの思わぬ反対にあい、それは実現しなかった。

「なぜです、兄上？ どうして一緒に行つてはならないのですか？」まさか反対されるとは思つていなかったトウージュは、シヨックのあまり顔面蒼白になっている。

「どうぞ俺も、オーガスベルへお連れ下さい。俺の剣は、この国と兄上をお守りするためにあるのです」

だが弟の言葉にも、兄は首を縦に振らなかった。

「許せ、トウージュ。お前の気持ちは、本当に嬉しい。だがそれでも、オーガスベルへお前を連れて行く訳にはいかぬのだ」

「どうしてですか！？」

「お前にはここ珠春宮^{しゅしゅんぐう}に残り、城を守ってもらわねばならぬ。余も王妃も、そして叔母上も戦場へ出向く。城を空にする訳にはいかぬのだ。ウィルカの街には、いまだに不穏な風が吹いておる。余が戦場にいる間、背後を守ってくれる信用できる者が、どうしても必要なのだ」

コルウインの留守中、パージェイルローサには近衛隊と二小中隊が残る事になっている。ウィルカの住人達の事だけを考えるならば、残された兵力だけで十分である。その事を兄王に告げると、コルウインは優しく笑んで弟に言った。

「兄を困らせないでおくれ、弟よ。確かにお前の言う通りかも知れぬ。だが、考えてみるが良い。これまでの報せから思えば、その力ーティとか申す女薬師が大人しく勝敗の結果に従つとも思えん」

カーティの存在を兄に指摘され、トウージュは言葉を飲み込み、表情を引き締めた。

「余は前線にて国を守る。お前は後方で城と王座を守る。余には、お前以上に頼める者を思い付く事が出来ぬ」

考えてみれば分かる事だ。カーティであり、アーカバルである敵にとって、本来、戦の勝敗など関係はない。相手にとって関心があるのは、魂国の王座が空になる事だ。何と言っても、己の魂の破片が封印されており、王家直系の血筋を持つ者以外がその王座に就けば、封印の力は効力を失うのだから。

アーカバルの手下に煽動^{せんどう}された、ウィルカの街の住人達の事もあつた。パーティルローサの警備が手薄になるこの機を、奴等が見逃すはずもない。城に残る兵達を指揮する者が必要だ。

「判りました、兄上。お言葉通り、俺はここに残って城を守ります。兄上が背中を気にせず、目の前の戦いに専念できるように」

「頼むぞ、トウージュ。同じ戦場には立てずとも、我等の心は共にある。余は余の戦いを、お前はお前の戦いを勝ち抜こうぞ」

甲冑に身を固めた兄と、トウージュは抱擁を交わした。触れ合う虚ろな金属音が無粋に響いたが、兄弟の心を伝えるには充分だった。パーティルローサを出た兄コルウィン^{コルウィン}は東へ向かい、残った弟トウージュは城を守る。背中に弟の視線を受けながら、コルウィンはオーガスベルヘ馬を進めた。彼の隣で轡^{くつわ}を並べるのは、革の胴鎧で身に包んだ王妃のアイナセリヨースだ。

「陛下、お加減はいかがですか？」

長い髪を編み込み、頭に巻きつけたアイナセリヨースは少し幼く見えた。

「ああ、心配はいらぬ。これまでにない程、気分が良いのだ。今から戦に赴く事を思えば、少々不謹慎な程にな」

確かに、城の居室にある時よりも、具合は良さそうに見える。馬を進めながら、コルウィンの頬には笑みが浮かんでいる。

「不思議な気持ちだ。これから危険な戦場に出向こうと言うのに、

清々しさすら感じる。今まで頭の上にのしかかっていた、重苦しい何かを取り払われたようだ」

「陛下のそのように晴れやかな顔、拝見するのは久し振りですわ」「きつと、王座に未練が無くなったからであろう。余はこの戦で、命を落とすかも知れぬ。だが瑰の国は、トゥージユがきつと導いてくれるはずだ」

二人の後ろから馬を進めていたイルネアが、呆れ気味に声をかけた。

「陛下。戦から戻られぬ事を前提にお話をされていますわ。命をかけるお覚悟は素晴らしい事です、生きて戻る強い思いがなければ、勝てる戦も勝てなくなってしまうす」

その言葉の中に含まれた叱責に、コルウインは表情を改めて答えた。

「いかにも、叔母上の申される通りだ。我等は勝つために、戦に赴く。負ける訳にはいかぬのだから。気を引き締めてかからねば」馬上から後方を振り返れば、そこには国王の旗印を掲げた兵士達が付き従う。そしてその兵士達の大半は、戦い方も知らぬ平民なのだ。

「余には、この者達を無事に家族の元へ返す、その責任があるのだな。皆が、己と、己の大切に思う者のために戦地へ向かう。一人でも多く連れ帰るためにも、余は死ぬ訳にはいかぬ」

オーガスベルは人の手の入っていない土地だ。開拓するには、手間がかかり過ぎる。うつそうと茂る木立ちの奥に天幕を張り、コルウインは將軍達を集めて綿密な打ち合せを行い、新米の兵卒らを鼓舞して回った。その精力的な動きは、病弱な国王の姿を知るものにとって、ひどくハラハラさせられるものであり、眩いものでもあった。

木々の間を透かして見れば、草原を挟んで敵側にも何やら動きがあるのが分かる。

「いよいよだな」

生粋の軍人であるライナスは、王弟トウージュ・ラムナ・イルス・槐の立てた作戦に沿って兵士達を配置して行った。

トウージュの提示した作戦を聞いた時、ライナスは正直、あり得ない話だと思った。戦を生業とする兵士達と、神殿を警護する僧兵、武器を手にした事すらない市民達。これらの集団をまとめる事は、一見、不可能に思えたからだ。だが話を聞いて、ライナスは考えを改めた。それぞれがピタリとくる配置であり、役割を与えられていた。作戦そのものも斬新なもので、これまで正面からぶつかり合う戦法しか知らなかった將軍達は、かなり驚いたようだった。もちろんライナスも例外ではない。

しかし実際にオーガスベルの地に立ったライナスは、トウージュの作戦の有効性に確信を持った。

地形と兵士の特性を最大限に活かす戦略を、トウージュ・ラムナ・イルス・槐は与えてくれたのだ。それは、既成の概念に捕われないトウージュだからこそ立てられた作戦なのだろう。

王妃アイナセリョースと、前王妹であり現ノーヴィア公爵夫人であるイルネアが設けた治療用の天幕の周囲に、警護のために兵士と僧兵の一団を配すると、ライナスは空を仰いだ。

冬特有の澄んだ空を渡る太陽神トラバルーナの黄金の舟が、中空にさしかかろうとしている。戦の作法にのつとれば、双方の使者が戦場の中央に進み出、お互いの剣を合わせる。その使者が両陣営に戻り付いた時をもって、開戦の合図とするのだ。

伝令の一人が左手に槐国王家の旗、玉を抱く四葉の翼を持つ王冠を戴いた鷲の紋章を掲げ、開戦の使者である肩章をなびかせながら戦場の中央へ馬を進めた。同じようにノーヴィア公爵軍からも、開戦の使者が進み出る。

本来であれば、このまま剣を交差させるだけなのだが、国王軍の使者は旗竿をあぶみに固定すると、胸元から書簡を取り出した。

「槐国王コルウィン・イルス・ダルム・槐の御名において、ここ

に勅旨を申し渡す。本日この時をもつてサマル・ビュイク・ノーヴィアの爵位を剥奪し、瑰国王座に対する反逆者としてこれを討つものなり。また、サマル・ビュイクに従う者達も同じく、その爵位を剥奪し反逆者とするものである」

朗々と勅書を読み上げた使者は書簡を巻き取り、相手方の使者に差出した。書簡を手渡し、剣を合わせると、双方の使者は馬首を返して互いの陣営へと駆け戻った。

「愚昧なる王、コルウインよ。瑰国に住まう多くの者が、そなたが玉座にある事に不満を持つている事を知るが良い。無駄に抗い、血を流さずとも、そなたが素直に王位を退けば済む話。あくまで年長者に逆らうと言うのであれば、力を持って悪政を正してくれよう」

サマル・ビュイクは使者から書簡を受け取ると、それを広げて剣で貫き、高々と掲げて嘲笑った。

「力なき王よ。正義の前に頭を垂れるが良い。己の不甲斐無さを悔やめ！」

冷笑を浮かべてコルウインを挑発するサマルに向かって、醒めた表情をした国王が言った。これまで誰も聞いた事もないような、氷のような声で。

「弱い犬ほど良く吠える、と言うが、それは真のようだ。なにやらキャンキャンと騒がしい」

風に乗り、己の陣営に届くコルウインの声に、サマル・ビュイクの顔が強張った。自分の絶対的な優位を信じて疑う事をしなかった者が、初めて何か間違いを犯したかも知れないと不安を抱いた瞬間である。

「余は前国王より王座を譲り受けた、正統なる瑰の国主である。汝は余の叔母であるイルネア・エメスとの婚姻により王家の末席に籍を受けたに過ぎぬ。最早その方は爵位を剥奪され、公爵ではない。ただの無頼者である。公爵家は我が叔母イルネア・エメスを後見とし、ティルス・グラルに与える。汝には、もう何も残ってはおらぬぞ。公爵の地位も、家族も、玉座もだ。そしてこれより汝の命も、

その方の手の内より零れ落ちるであらう」

厳かに告げられた国王の言葉に、サマルの顔は怒りでドス黒く変化し、額に血管が浮かび上がった。

「大人しく聞いておれば、世迷い事をべらべらと。若輩者が生意気な事をほざきよつて。ええい、無駄話は終いじや。コルウインの首を取れ！ 正義は我等にあるぞ！」

血走つた目で、上ずつた声で、サマル・ビユイクは付き従う者達に命令を下した。ただ恐怖でもつてのみサマルに従う、地方貴族達とその兵士団に。

サマル・ビユイクの叛乱軍が動き出したのを見て、コルウインも静かに剣を振り下ろす。最前列に配されていた弩隊が、敵陣から攻め来る人馬に向かつて矢を放つた。

血腥い午後の始まりである。
ちなまぐれ

24章 珠春宮の攻防・それぞれの真実（前書き）

兄王コルウインの留守中、王都・珠春宮の警護を任じられたトウ・ジュ。

そして時を同じくして、ウィルカの街に火の手が上がる。

民との衝突に退路を断たれたトウ・ジュの前に、懐かしい人物が現れた。

24章 珠春宮の攻防・それぞれの真実

主のいない謁見の間は、ガランとして寒々しかった。階の下から二つの玉座を見上げ、トゥージュは戦場にある兄コルウィン思った。

「こんなに、広がったけかな……」

呟いた言葉さえ、虚ろに響く。

いつも兄の背中を追いかけて来た。異母弟でありながら、自分を実の弟のように可愛がってくれたコルウィン。兄が国を継いだ暁には、自分が兄の耳目となり、手足となり、剣となり盾となつて槐国を盛り立てて行くのだと、幼い頃から心に決めていた。

『君がトゥージュ・ラムナだね。よろしく、トゥージュ。僕はコルウィン・イルス。君の兄だよ』

母が身罷り、父である前国王の正妃に引き取られたトゥージュは、王太子であるコルウィンとの初めての出会いに緊張していた。そんな幼いトゥージュに、コルウィンは太陽のように微笑んだ。

『ようこそ、トゥージュ。僕はずっと、弟が欲しかったんだ。仲良くしようね』

そう言つて、槐国の王太子は異母弟の両手を握り締めた。その瞬間に、心細さに震えていた小さな王子の心を救い上げた事も知らずに。あの日から、トゥージュの気持ちに変わりはない。それが兄のためになり、槐のためになる事であれば、トゥージュは迷わず命をかけるだろう。戦場で兄の盾になる事も厭わ^{いと}ない程に。しかし、それは許されなかった。どうして兄が、自分を珠春宮に残したのか。告げられた理由だけではない事に、トゥージュは薄々気が付いていた。城を守る以上に、兄は国を、そして弟を守りたいのだと。

コルウィンは、この戦いで命を落とす事も覚悟している。たとえば戦場で倒れずとも、生来病弱なコルウィンの事。慣れない行軍や戦闘によって、命を縮める可能性は大きい。だからこそ、コルウィン

はトウージュを城へ残したのだ。国を支える者が、二人とも倒れる事のないように。自分に何かあっても、弟が国を継いでくれる事を信じて。

「トウージュ殿下。ウィルカで何やら動きがあるようです」

物思いに沈んでいたトウージュの背中に、兵士が報告した。彼はゆっくりと瞬きをすると、手にしていた剣を握り直した。

「よし、様子を見てみよう」

謁見の間を出て城牆^{じやうじやう}へ向かう。高みから見下ろす王都の街並みは作り物じみっていて、そこに暮らす人々の息吹きを感じられない。彼がこれまで自分の足で歩き、自分の目で見、自分の手で触れて、自分の心で感じてきたはずの街が、まるで別の場所のようだ。もしもトウージュが国を継ぎ、為政者として同じ場所に立った時、街を見て何を思うのだろうか。そして、何を思わなくなるのだろうか。

（つくづく、国を治める立場には向かない人間だな、俺は）

胸の中で苦笑しながら呟くトウージュを、側に従う兵士が促した。その声に視線を転じて見れば、ウィルカの街のそちこちらから不吉な煙が上がっている。

「すぐに一団を出して消火にあたらせよ。出来るだけ、街の人間との衝突は避けるように」

「はっ！ かしこまりました」

兵士はトウージュに敬礼すると、駆け足で城牆を降りて行った。

「さて……。俺もここからが正念場だな」

この国の別の場所で戦っている、彼が大切に思っている相手がいる。彼らもまた、トウージュの事を思っていてくれているのだろう。ならば自分は、彼らの期待を裏切る訳にはいかない。

「馬を用意せよ！ 俺も出る」

城内にトウージュの声が響き渡った。

ウィルカの街は、トウージュがアイヒナ達と一緒に訪れた時から
は考えられない程、短期間のうちに荒れていた。

『ターニア』という自分達の指導者を失った事で、人々の心は急速
に安定を欠きつつあった。そんな心の際に入り込み、不安を更に煽
つていったのはもちろん夢魔^{バフォナ}達だ。ターニア亡き後も人々の間に紛
れ、サマル・ビュイクの動きに合わせて活動を始めたのだ。

膨れ上がった市民達の不安・不満は、目の前にある王家を象徴す
るものへと向かった。すなわち、王立の治療院である。ウィルカに
数ヶ所ある治療院は、怒りに支配された人々の格好の標的となり、
焼き討ちをかけられていた。治療院に詰めていた医師や薬師、神殿
から派遣されていた者達は、アイナセリョースとイルネアの判断に
より安全な場所に移されている。入院していた患者達も然りだ。

だが人がおらず閉じられているとは言え、つけられた火をそのま
まにしておく訳にはいかない。周囲に燃え広がれば、風向きによっ
てはウィルカ全地区が炎に包まれてしまう。否、運が悪ければウィ
ルカのみならず、王都全域に燃え移る可能性もあるのだ。

トウージュは兵士達を分散させると、治療院の消火にあたらせ
た。戦術的には各員を分散させるのは間違いだ。しかし今は火を鎮める
のが先だ。

「まさか、これを見越して騒ぎを起こしたのか？」

ウィルカで騒ぎを起こせば、珠春宮の警備を削つてもそれを収
拾するためにトウージュは兵を出さざるを得ない。敵にしてみれば、
騒ぎが大きければ大きい程、目的を達し易くなるのだ。それを狙っ
ているのだとすれば、バフォナ達の目論みは見事に当たった事になる。
「ちくしょう……。奴等の方が上手ってか」

苦々しく吐き出された言葉の先で、必死に火を食い止めようとし
ている兵士達と、手に石や棒を持った人々の衝突が繰り広げられて
いる。

オーガスベルに行かず城に残った兵達の中には、ウィルカ出身の
者もいる。いかにトウージュの命令とは言え、親兄弟や友人・知人

に向かつて行かなくてはならないその心中は、かなり複雑なものだろつ。

口々に怒声を挙げながら詰め寄ってくる街の住人を、押し留める為に盾を掲げた兵士達の顔が苦しそうに歪んでいた。

「ターニア様を殺したくせに！ 人殺し！」

一つの罵声と共に投じられた、拳大の石がトゥージュの肩を打った。

「殿下！」

「トゥージュ殿下！」

肩を押さえたトゥージュの姿に、幾人かの兵士が剣の柄に手をかけた。

「ならん！ 抜刀は許さん！」

その様子に、瑰の王弟は声を挙げた。

「しかし！」

「駄目だ。剣を抜けば、誰かを傷つけてしまう。ここにいる者達の大半は、何も知らず踊らされているだけなんだ」

周囲を見回し、火が鎮まっている事を確認すると、トゥージュは決断した。

「このまま撤退する。街の者達を不要に刺激せぬように、出来るだけ静かに退くんだ。お前達も、自分の見知った顔とやり合いたくはないだろう」

兵士達は盾を掲げ、トゥージュの周囲を固めながらジリジリと撤退を始める。住人達の怒声罵声を浴びながら、ゆつくりと広場の方へと退いて行く。

街の数ヶ所に散っていた兵達も合流して来たが、トゥージュは絶対に剣を抜く事を許さなかった。

「抜刀するな！ 盾で押し戻し、防ぐだけにするんだ」

投げ付けられる石や棒切れ、野菜屑などが頭上に降り注ぐ。

「俺達が病気におびえて苦しんでいた時、何もしてくれなかったくせに！」

「あたしの家族を返してよ！」

「お前達は、何もしてくれなかったじゃないか！」

「そうよ！ 私達を助けてくれたのは、カーティ様とソキア様、そしてその後を継いだターニア様だった。あんた達は安全な所で、ただ見てただけじゃないの！」

浴びせかけられる言葉の数々に、トウージュは返す言葉を持たない。なぜなら、それらの言葉はある意味、正しいからだ。自分は、ただ手をこまねいていた訳ではない。彼なりに病を鎮めようと、原因を探し回った。だがしかし、それを言ったところで群衆の怒りは収まるまい。

「どうして、ターニア様を殺した!?」

「自分達よりも、ターニア様の人望が篤いのが妬ましかったんだろ
うがっ！」

こんな時、トウージュは思い知らされる。いくら市井に紛れてみせても、所詮は王族。民とは住む世界が違うのだ、という事に。

「お前達が殺したんだ！ この人殺しめ！ 死んでいった者達に、お前の命で詫びてみるっ！」

掲げられた盾の列を抜け、鋭く尖った石が彼のこめかみを襲った。鈍い衝撃と痛み、そして肌を伝わる生温かい感触。

「つつ！」

思わず膝を折り、傷を押さえる。

「殿下！」

「トウージュ様！」

兵士達が色めき立つ。険しい顔をして柄にかけた手に力を込めた。

「だ、駄目だ……やめ」

くらくらする頭を振って、制止の声を挙げようとした瞬間。
。

「おめーら、いい加減にしろよっ!!」
甲高い声と同時に、群衆の一部に背後から水がブチまけられた。虚を衝かれた形の市民達は、呆然とした顔で背後を振り返った。

「いい歳した大人が、みつともないと思わねえのかよ！」

そこに立っていたのは、水を滴らせた桶を手にした初老の夫婦。強張った顔をした数人の者達。そして、頬を紅潮させたウェイン少年。

「……ウェイン……？」

一瞬、傷の痛みも忘れて、トウージュはぼんやりと呟いた。

「この、クソガキ！」

「お前がやったのか、この野郎」

「何て事しやがるんだ！」

口々に罵る声が、広場に満ちる。

「うるせーっ！ 何も知らねーで利用されてるくせに、偉そうな事言ってるじゃねー！」

変声期を迎えていない少年独特の高く澄んだ声は、周囲の大人達の声を押しのけて響いた。

「子供が生意気に、大人の事に首を突っ込むんじゃないよ」

「何も知らないんだから、子供はすっこんでおいで」

だが、浴びせかけられる怒声の中、ウェインはすくと立っている。そんな少年の姿に、群衆の方がひるんでいるような印象を受ける。

「子供、子供、子供。子供だからって、馬鹿にすんなよ。大人には見えてないものが、子供には見えてる事だってあるんだ！」

臆する事無く投げ返される少年の言葉に、大人達は気圧されたように互いの顔を見合わせた。振り上げられた拳が迷うように揺れ、力をなくして降ろされる。

「皆、間違えてるんだ。本当に悪いのは誰か、何も知らされないまま、ただ利用されているだけなんだ」

ウェインの瞳は揺るがない。それは、自分の目で真実を見た者の強さ。耐え難い痛みを、自分の足で乗り越えて来た者のしなやかさ。誰だ？ 俺達が誰に利用されているって言うんだ？」

男が一人、ウェインの前に進み出た。

「カーティとかって言う薬師の女に、ノーヴィアとか言う貴族に、

そして、ターニアとか言う領主面した女にさ」

真っ直ぐに突き刺さる少年の言葉。

「なっ！ 何て事を言いやがる、このガキ」

「よりにもよって、カーティ様とターニア様を疑うなんて！」

驚愕と怒りの声が飛び交う。

「カーティ様は、眠り病にかかった人を助けてくれた、大恩人だぞ」

「ターニア様だって、親を失くした子供達を引き取って、面倒を見てくれてたんだぞ」

「あんまりいい加減な事ばかり言いやがると、子供だからって容赦しねえぞ」

このままでは、ウェインに危害が及ぶかも知れない。何とかしなくてはと思うのだが、頭に血が昇っている群衆が相手では、うかつに動けば火に油を注ぐ結果になりかねない。

「じゃあ、その子達は今、どこにいるんだよ？ 親を失くしたんだる？ 誰かが引き取ったのかよ？」

「それは、ノーヴィア公爵様が……。ターニア様がお亡くなりになって、不憫だふびんとご自分の領内にお引取に」

「カーティに治療してもらった人は、どうしたんだよ？」

「それも……。働き口を世話してやるからって、公爵様が……」

「へえー、それも公爵様かよ。で、その肝心の公爵様は、今、何してんだよ？」

強い光を宿したウェインの視線に、幾人かは逃げるように目を逸らす。

「で、世話してもらった働き口って何だよ？ 王様を殺して、この国に戦争を起こす事かよ？ 大した仕事だな」

居並ぶ大人達の顔を、ウェインは順にながめて言葉を続けた。

「おいらの姉ちゃんも、眠り病だった。姉ちゃんの病気を治してもらいたくて、父ちゃんと一緒に領主様の所へ連れてった。けど、姉ちゃんは助からなかった。父ちゃんも死んじゃった」

救えずに目の前で消えていった、二つの命。ウェインの言葉に、

あの時の情景が脳裏に甦る。結局は、誰も救えていないのかも知れない。そう思うと、トウージュの胸は重く塞^{ふさ}がれる。

「ほれ、見る。こいつらが何もしてこなかったから、お前の家族だって犠牲になったんじゃないか」

誰かがトウージュを指差し叫ぶ。

「おいらの姉ちゃんと父ちゃんを殺したのは、その兄ちゃんじゃねえ。姉ちゃんは、カーティに殺された。父ちゃんもそうだ。領主様ん所に行つて、確かに病気は治つたよ。けど、元気になった姉ちゃん、もう元の姉ちゃんじゃなかった。父ちゃんもおかしくなつた」

あの二人の異形の姿。息子であり、弟であるウェインに対して、二人だったモノはかけらの情けも示さなかった。

「おいらが気付いた時には、二人とも、人間じゃなくなつてた」
そう言つて少年は、切なそうにうつむいた。

「ウェイン」

トウージュには、彼にかけてやる言葉が見つからない。

「な、何を言つてんだ。人間じゃなくなつてたなんて」

「そうだ、そうだ。そ、そんな話、でたらめに決まつてる」

幾人かが手を伸ばし、ウェインに掴みかかるうとした時……広場の石畳に鈍い音が響いた。そちらに気を取られた者達が目をやれば、視線の先を使い古された空の桶が石畳の上を転がって行く。

「その子の言っている事は、ウソじゃねえ」

静かに言葉を発したのは、先程から桶を抱えて立つていた初老の男性だ。その手に、今はもう桶はない。力任せに足許に叩き付けたからだ。

「デタラメだったら……。ウソだったら、どんなに良かったか」
震える声は初老の女性のものだ。目尻に刻まれたシワに、涙がにじんでいる。

「あたし達の息子はねえ。眠り病が治つた途端、別人になつちまつたよ。暴言を吐くようになり、あたしに向かつて手を挙げるように

なった。あたしを殴つて言う事を聞かせ、気味の悪い、変なモノを飲ませようとした。あたしが嫌がつて暴れたら――

声が途切れ、後は言葉にならなかった。力を失くした手から桶が滑り落ち、女性の足許で空虚な音を立てた。わななく両手で顔を覆い、その指の隙間から切れ切れの鳴咽おえつが聞こえてくる。

「仕事から帰った俺が見たのは、床に倒れた女房と、変わり果てた息子の姿だ。せがれは、もう人の形をしていなかった。そして女房を殺そうとしていたんだ」

むせび泣く妻の傍らに寄り添い、細い肩にそつと手を置いた。

「俺は女房を助け起こして、必死で家から逃げた。あいつに何が起きたのか、そんな事を考えている余裕はなかったよ。ただ、その場から逃げる事しか思い浮かばなかった。俺達は家に戻った時には息子の姿はどこにもなく、それっきりだ。何がどうなったのかを知りたくて、俺と女房は息子を探したよ。自分の目で見たモノを信じたくない。そんな気持ちもあった。ようやく探し出した息子は、公爵様ん所で武器を運ぶ手伝いをしておったよ。国王様を殺し、城へ攻め込むための武器をな」

溢れ出る涙を隠すためだろうか。目許を手で覆った男性は、かすれた声を絞り出した。

「もしも息子が人間じゃなくなり、戦に加担しているんだとしたら。俺達は、あいつを止めなきゃならねえ」

男性の話を聞いていた群衆の顔から、何かが拭い去られて行った。

「ここに居るのは、俺達と同じように家族の誰かを奪われた連中だ。病気にじゃねえ。ウソと偽りの善意によってだ。俺達は国王様と一緒に戦う。奪われた家族を取り戻し、仇を取るためにな」

男性の長い語りが終わった。今や、群衆とウェイン達の立場は、完全に逆転していた。

「さあ、どっちを信じるんだよ？ おいら達の話信じるのか。それとも、得体の知れない連中を信じて、国王様を裏切るのか。どっ

ちを選^ぐんだよ！」

25章 ウェイン・受け継がれる想い（前書き）

信じていた現実が崩れ去った時、ウィルカの民は動揺を隠せない。そんな人々を静めたのは、少年の決意に満ちた澄んだ声だった。そしてトウージュも、己の想いと向き合い戦いの場へと赴く。

25章 ウェイン・受け継がれる想い

「嘘だ！ 全部、こいつらのこしらえたデタラメだ！」

群衆が方から力を抜き、手にした武器を次々と下ろし始める。そんな中から、鋭い罵声が飛んだ。

「皆、こいつらの話なんかには惑わされるな！ 俺達の敵は国王だ。」

国王や王族の連中を倒してこそ、俺達の望む未来はやって来るんだ。ツバを飛ばして群衆の関心を集めようとして躍起になっている男の前に、一人の中年女性が立った。

「あんた」

「な、何だ、お前？」

突然、間の前に現れた女性の姿に、面食らったようにわずかに男の背中が仰け反る。

「あんた、あたしの顔見ても、何とも思わないんだね……」

「うるさいいっ！ 何を訳の分からない事を。邪魔だ、どけ！」

大声でわめくと、彼女の体を押し退けようと腕を振った。だが彼女は、相手が伸ばした腕を掴むとキツとにらみ付けた。

「あんた、自分の女房の顔も分からないなんて、あたしや情けないよ！」

掴まれた腕に、まるで焼け火箸でも当てられたかのように男は身を引いた。

「お前、そこに何を持っている！？ 離せ！」

「離すもんかいよ。この馬鹿亭主。王様殺して、どうすんだい？」

あたし達にどんな未来があるってんだい！？

女は男の腕を掴んだまま、服のポケットの中から水晶で出来た香籠りかこを取り出した。

「治療院にいた、神殿の巫女さんからもらったんだよ。化けモン達が嫌がる、聖なる香りが入ってるってね」

鼻にシワを寄せ、男は身をよじって逃げ出そうとする。それを許

さず、女は掴んだ手にさらに力を込め、水晶の香籠を掲げた。

「よせ！ やめろ！ やめてくれ、頼む！」

「この香りがそんなに嫌だつて事は、やっぱりあんたは、もうあたしの知ってるあんたじゃないんだね」

硬い声で呟いた女は、その口調とは裏腹にひどく傷付いた目をしていて、きつく唇を噛み締めると、手の中の香籠を嫌がっている男の眉間に当てた。

「う、や、やめ うあああああ！！」

水晶で出来た繊細な細工が肌に触れるか触れないうちに、男は絶叫して痙攣を始めた。黒目がグルリと上を向くと、その白目の部分にもう一つの瞳が現れた。

「ヒッ ！」

固唾を飲んで二人を見守っていた周囲の者達は、男に現れた変化を目にして、上ずった声を上げて後退った。

「見なさいっ！ 見るのよっ！ これが真実。この人が『眠り病』になった時、あたしが、あの女の所に連れて行ったのよ。病気を治して欲しくて、あの女薬師の所へ行けば何とかなると、そう思ってた。ああ、病気は治ったさ。だけど、亭主はこの様子」

自嘲気味に語る女の目には、涙が盛り上がっている。浮き足立っている群衆に向かって、女はさらに言葉を続けた。

「いいかい、良く見るんだ。これが、あの女薬師のした事だよ。あたしはあの女を許さない。そして、あの女の所へ亭主を連れて行った、自分を許せない。この人が王様に逆らつて戦争を起こすつて言うんなら、あたしはそれを止めなきゃならない。何としてもね」

香籠を眉間に当てられた男は、異形の瞳をギョロギョロと動かしながら体を震わせている。香に込められた力によるものだろうか、身動きする事は出来ないようだ。

「あたしの亭主なんだよ。だから、あたしが止めるんだ」

女の目から涙がこぼれ落ちた瞬間、および腰になっていた人垣の中から唸り声うなが響いた。悲鳴と共に人垣が割れて、声の主の姿が見

て取れた。数人の男女が立っている。手に手に獲物を構え、憎々しげな表情で。

「よくも、余計なマネを」

「邪魔だ、どけ！」

たった今まで自分達と同じ姿をしていた者達が目の前で変貌を遂げて行く様に、ようやく人々の頭にウエイン少年の言葉が染み込み始めた。

『人間じゃなくなっていた』

人間ではないだろう。人でいられるはずがない。あのように長くいびつに歪んだ腕を、人間は持っていない。あのように背中から飛び出した棘状の骨を、人間は持っていない。あのように堅く変じた肌を、人間は持っていない。あのように。

「せっかく人間のフリをして、群れン中に紛れてたつてのによ」

「ああ、まったくだ。馬鹿な人限共を煽^{あお}つて、王家の人間を殺させようとしたのにな」

醜くしゃがれた声音で語りながら、いやらしい嗤いを浮かべて進み出る。

「まあ、予定外ではあるがな」

「いいんじゃないのか？ どうせ俺達が王家の人間を殺しまえ、ここにいる連中もただでは済まないんだ」

集った面々はその言葉にハツとする。どうして思い至らなかったのだろう。国王に、国に逆らうと言う事は、国からの庇護を失うと言う事だ。国から追われると言う事だ。それが『国に弓引く』事の意味。そして、目の前にある真実。正義がどちらにあるのか、すでに明白だ。自分達がどちら側にいるのかも。

「どうせ殺されちゃうんだしさあ。だったらいいじゃん。ここであたしらが殺^やっちゃったって、御主様は許して下さるよ」

全身を鱗で覆った女が、舌なめずりをしながら一步を踏み出した瞬間。

「これを、待ってたんだよ」

ウェインの言葉と同時に、夢魔の集団を取り囲んでいた人垣から幾本かの杖が差し出された。その杖のいずれにも、磨きぬかれた黒曜石がはめ込まれている。

「おいら達は何も考えずに、ノコノコ出て来たと思ってるのかよ」
黒曜石の周囲に清浄な青い光が集り、空気を震わせていく。杖ごとの青光が広がり結び付き、巨大な光の網となってバフォナ達の頭上に覆い被さった。あれだけ威勢の良かった連中も、光が触れた部分から力が抜けるのだらう。牙をガチガチと鳴らしながら、網の中でもがいている。

「ウェイン、これは？」

ただ呆然と事の成り行きを見守っているしかなかったトウージュが、ハツと我に返ってウェインに声をかけた。

「久し振り。兄ちゃんて、お城の偉い人だったんだな」

大きな息を一つ吐いて肩から力を抜いたウェインが、トウージュに目をやって苦笑した。

「え？ あ、ああ……、それより、これは？」

視線を戻して見れば、杖を持つ者達が人垣の中から姿を現しているのが目に入る。光の網に捕えられたバフォナ達に向かって、鋼とオニクスで造られた夢神エルキリユースの印章を掲げている姿は、町の住人達と同じような服装をしてはいるが、どこか着慣れていない雰囲気をもっている。

香の力によって動けなくなっていた男も含めて、体の中のバフォナをどうにかするらしい。夢神の力に締め付けられて苦しいのだらう。ぞつとするような声で吠ええると、その口腔から何やら得体の知れない塊が吐き出されてくる。

「う……あ、あれは」

黒く又める、ブヨブヨとしたトカゲのような塊。一時も形を安定させない、ゼリー状の力エルに似た塊。喉の奥からズルズルと吐き出される、毒々しいオレンジ色をした蛇のような塊。

「神殿の姉ちゃんと一緒にいたのに、見た事ないのかい？　これが

夢魔の種さ。おいらの父ちゃんと姉ちゃんが、カーティに飲まされたのとおんなじモンだよ」

吐き出された魔性の種に針のようなものが打ち込まれた。一瞬だけ全身を震わせると、夢魔の種は動きを止めた。それを鋼とオニキスで飾られた壺の中へ納めて行く。

「あれは神殿で祈りを込めて神に捧げられた、リユートの絃だよ。それを口ウで固めて針状にして、奴等に打ち込むんだ。殺す事は出来ないけど、封じておく事が出来るんだって、神殿から来た人が言ってたよ」

一つ一つの作業を見守るウェインの表情は険しい。その厳しく光る目にあるのは、強固な意志。

「おいらあれから、山程考えたんだ。父ちゃんと姉ちゃんに何が起こったのか。おいらは何をすればいいのか。それで思ったんだ」

自分の家族に起こった事は、きつと他のどこかでも起こっているはずだ。自分と同じ思いをし、同じ苦しみを味わっている誰かがいるはずなのだ。

ウェインはまず、国の作った治療院で手伝いを始めた。そこで医師や薬師、神殿の巫女との関わりを深めて行った。

治療院には様々な人が運ばれて来た。中には純粹な病で来る者もいたが、大半は眠り病に関する者達だ。病は医師や薬師が治す。しかし眠り病は、神殿の巫女にしか扱えない。巫女達が施す術を間近に見ながら、ウェインは自分の思いが正しい事を確信した。

きつと街中に、いや、国中に夢魔に乗っ取られた者達が、何食わぬ顔をして歩き回っているのだ。いくらアイヒナと閻姫が強くても、あの二人だけでは倒し切れない。そして何より問題なのは、本当の事を知る人間が少なすぎると言う事だ。

治療院に病人を連れて来た者や相談に来た者の中で、話を聞いてくれそうな相手を探して近付いて行った。こうやって同じ考えを持つ者を増やし続けたのだ。

エルキリユース神殿から派遣されて来ている巫女にも事情を説明

し、情報を集めていた矢先、アイナセリョースとイルネアの命令で治療院を閉める事となった。ウィルカの住民による焼き討ちや暴動を懸念して、常駐していた医師や薬師、神殿の巫女、治療院に関わる者達の安全を考えた結果だ。

街の噂で戦が起こる話を知ったウェインは、仲間と一緒に神殿からの使者と話し合った。国王軍が戦地へ赴き、城の警備が手薄になるこの時を、夢魔達が見逃すはずがない。足許から切り崩しにかかるために、絶対に何かの動きを見せるはずだ。

「だから、神殿には戻らずに残ってもらったんだ。おいら達じゃ、あいつらを封印する事は出来ねえからさ」

目立つ法衣を脱ぎ、市民と同じ格好をして、それと分からぬように行動を共にしていたのだ。

頭に血が昇った暴徒の群れに物事を納得させるためには、動かしようのない証拠を目の前に呈するしかない。

「と言う事は、城から兵を送り出すのを待っていたんだな？」

「悪いとは思ったんだけどな。でも、おいら達は数が少ねえ。戦う事にも慣れてねえ。第一戦うたって、昨日まで隣りに住んでた者同士、これから先だってこの街で顔合わせて暮らして行かなきゃならないだろ？ 誰かを傷付けたり、傷付けられたりするのとは絶対に避けなくちゃと思ったんだ。だから、城から兵隊が出て来るのを利用させてもらったって訳さ」

夢魔の種を吐き出した男女は、光の網にからめ捕られたまま、その場で昏倒している。彼等を荷車に乗せた初老の男性は、次はどうするのかと言った顔でウェインを振り返った。次々と自分に集まる視線の中、少年はわずかに考え込むと決断を下した。

「閉めてある治療院を開けて、そこに運ぼう。あそこならベッドもあるし、薬もある。大抵の事なら対処できるはずだ」

いい歳をした大人達が、少年の言葉に従い、動いている。そして誰も不自然に感じてはいないようだ。

「これを、君が全部考えたのかい？」

軽い驚きを感じながら、トウージュはウェインに問いかけた。

「ん。所々は皆にフォローしてもらったけどね。けど、大体はおいらが計画したんだ。だって、おいらが言い出した事だろ？ だから、おいらが責任を取らなきゃ、と思ったのさ」

何でもないと言う顔で、ウェインはトウージュに答えた。しかし『人を率いる』という事は、そう簡単な事ではない。

（こいつは将来、とんでもない大物になるかもな）

ウィルカの住人達の間、動揺が広がっていた。良き隣人であり、家族であった者達が、目の前で豹変した事実、市民はおびえて浮き足立っていた。側に立っている人間がいきなり怪物に変身するのではないかと、疑心暗鬼に陥っているのが見て取れた。

「あ、あたしも、薬師様ン所でお薬をもらって……」

震えながら両手をもみ絞り、一人の女性がオロオロと視線をさ迷わせながら口を開いた。途端におびえた目をした者達が、音を立てて後退った。

そつだ。カーティはこの街で、腰を据えて治療を行っていた。ならば、バフォナの種を植え付けられた者がこれだけとは思えない。

この場を放置すれば、今度は街の住人達の間で疑心にまみれた『魔女狩り』が横行しかねない。

だが、とトウージュは思う。顕現けんげんしていないバフォナを見つける事は、果たして可能なのだろうか？ アイヒナが呪を織り込んだ歌によって、バフォナの気配を探るのを見た事がある。閻姫が、その特殊な能力によって獲物を探り当てるのも、知っている。しかしそれは、あの二人に限った事なのかどうか。トウージュは知らない。神殿に仕える他の巫女達にも、バフォナの気配を探り出す事は出来るのか……？

次々と不安を口に始める人の群れに、ウェインの声が響いた。真つ直ぐで、決意に満ち、己の信じる道を貫こうとしている少年の声は、人々の心に突き刺さり染み渡って行く。

「もしも夢魔の種を飲まされていたとしても、この街に残った連中

は軽症だ。症例の重い、融合の深い連中はノーヴィアと一緒に戦場へ行っちゃったからな。だから、おいら達の話の良く聞いて、神殿の巫女様方の言う通りにするんだ。大丈夫。信じてくれ。助けられる者は、必ず助ける」

怒りと憤り、不安と疑心にささくれ立った大人達の心が、少年の真摯な言葉によって満たされ、癒されていく。ざわついた気持ちだが、不思議と静まっていった。

ウェインの仲間が、群衆を先導し始めた。

「大丈夫だ。あの女の薬を飲んだ者は、こっちへ」

「安心しろ。種を植え付けられていても、目覚めさせないように抑えておける」

「さあ、香と聖歌で清めてもらった水だ。これを飲んで。種を抑えてくれるから」

「眠くなる者がいたら、無理をせずそのまま眠るんだ。俺達がちゃんと運んで行ってやるから」

手際良く進められる作業に、正直、瑰国の王弟は舌を巻いた。自分と兵達では、これ程速やかに人心を静め、掌握する事は出来なかつただろう。

トウージュの隣りに立つウェインに、幾人かの男女がやって来た。それぞれに、不安と苦しみを抱えた表情をしている。

「あんた、先刻言ってたよなあ。症例の重い奴等は戦場へ出ていったって。それって、どういう事なんだ？」

「うちのせがれは、公爵様ン所に働きに行つてんのよ。せがれは助かるのよね？」

すがりつかんばかりに迫って来る大人達に向かって、年端もいかぬ少年は切なく、苦渋に満ちて言葉を発した。

「今、見ただろう？ 人が人でないモノに変わっていくのを。あれがギリギリのラインだ。ノーヴィア公爵と一緒にオーガスベルへ行った連中は、段階が進んでいるんだ。種は人間の体内で夢魔として目覚めると、まず、その人間の心を食べて行く。食い尽くされた後

に残るのは『器』としての体と、人の姿をした夢魔だけ。そうなつてしまつたら、もう誰にも助けられない。おいらの父ちゃんと姉ちゃんも、そうだった。」

少年の長い言葉が終わると、息子の身を案じる母親は両手で顔を覆つて泣き崩れた。

「ごめんな、おばちゃん。本当はもつと、希望を持てるような事を言つてやればいいんだろうけど……。それでもやつぱり、嘘は吐けないんだ。責められる事を分かつて、でも本当の事を教えてくれたあの人の想いを無駄にしないためにも、おいら、気休めは口に出来ない」

ウェインが語つた『あの人』とは、夢織りであるアイヒナの事だ。父と姉を救つてくれと頼んだあの時、彼女は「救えない命もある」とはつきり告げた。希望的観測を口にする事も出来たはずなのに、アイヒナはそうしなかつた。夢魔に関わる者としての責任果たすために。そしてその想いは、ウェインに受け継がれた。

「さあ、奥さん。一緒に行こう、な？」

知り合いらしき男性に抱えられて、ウェインとトウージュの前から去って行く女性は悄然しん然とうなだれている。その後ろ姿を見やりながら、ウェインは強い口調で言つた。

「大丈夫だ。オーガスベルには、夢長様もいる。可能な限り助けると約束してくれた。それに。」

視線を上げると、ウェインは珠春宮を見つめた。

「本当に大切なのは、オーガスベルの戦でも、おいら達の戦いでもないのさ。そうだろ？」

少年の言葉に、トウージュも視線を上げた。見慣れたはずのパーティルローサは、なぜだかいつもと違つて見える。

自身の封印を解くために、アーカバルは謁見の間を目指すだろう。玉座にかかる封印は、王家正統の血筋を絶やす事で解ける。そのためにサマル・ビュイク・ノーヴィアを抱き込み、国王に対し反逆するよう仕掛けたのである。兄王亡き後、王位を継ぐ唯一の存在であ

るトウージュを消すために、ウィルカの街で暴動を起こしたのだ。暴徒と化した街の住人達に、鎮圧にやって来た王弟を殺させるという筋書きだったのだろう。万が一にも仕損じた時の事を考えて、住人達を煽動するために紛れ込んでいたバフォナがトウージュの命を奪う手はずになっていたはずだ。

さすがのアーカバルも、ウェインというイレギュラーな駒の出現は予想外だったではなからうか。少年とその仲間が現れたために、人々は正気を取り戻し、バフォナは捕えられた。

しかしもしかしたら、アーカバルにとってそんな事は些末事さまつごとでしかないのかも知れない。『王家直系でない者が玉座に就く』事が封印解除の条件であったとしても、アーカバルはそれに従わないかも知れない。これまでの時間を自分の力を蓄えるために使い、充分に力が戻った所で玉座の封印を力尽くで破らんとしているのでは。様々な想いがトウージュの胸を去来する。果たして、アイヒナに勝機はあるのか？ もしも彼女がアーカバルに負けたりしたら、この世界はどうなってしまうのか？

物思いに沈み込んだトウージュを、現実に戻したのはウェインの澄んだ声だ。

「兄ちゃん。街の方は、おいら達に任せてくれていいよ。もう暴動なんか起こさせたりしない。だから兄ちゃんは今行ってくれよ」

「ウェイン？」

「おいら、夢長様と話をしたんだ。夢長様は教えてくれた。姉ちゃんが何と戦っていて、これからどうしなくちゃいけないのか。兄ちゃん。姉ちゃんを一人で行かせちゃ駄目だ」

じつとトウージュの目を見つめながら、ウェインは城を指差した。「だ、だが。俺には、彼女を助けるどころか、足を引っ張りかねない」

「側にいればいいんだよ。姉ちゃんの事、好きなんだろ？ 姉ちゃんを一人で、あいつと戦わせちゃ駄目なんだ。姉ちゃんの心を守れるのは、兄ちゃんしかいないんだぞ」

両手を握り締めてトゥージュに食ってかかる姿は、とても人心を把握し動かしていた少年と同じ人物とは思えない程、年相応のものであった。

「でも俺は、街を」

「あー、もう！ 何をグズグズ言ってるんだよ！ 悩んでるヒマがあったら、さっさと姉ちゃんトコ行けよ！」

二人のやりとりを近くで聞いていた兵士の一人が、あまりにも無礼なウエインの言葉に顔色を変えた。

「こら！ 殿下に向かって、何て口の利き方をするんだ！」

襟首を掴まれたウエインは、手足をジタバタさせながらトゥージュをにらんで怒鳴った。

「殿下だろうが王様だろうが、関係ねえだろ！ 好きな女を助けるのに、身分が必要なのかよ？ 兄ちゃんは姉ちゃんの事が好きなんだろう？ 助けに行くのに、他に何が要るってんだよ？ おいらが大人数だったら、自分で助けに行くさ。でも、おいらじゃ駄目なんだ。おいらはまだ子供だから。兄ちゃんなら姉ちゃんを助けられるんだよ！」

ウエインを黙らせようと、兵士が荒い口調で叱りつけた。

「いいかげんにせんか！ 子供でも許さんぞ！」

兵士が腕を振り上げると、少年は目をつむって首をすくめた。

「待て！ よすんだ」

「しかし……」

「いいんだ。この子の言っている事は正しい」

トゥージュの制止に、兵士は戸惑いながらも、その通りにした。

「そうだな。好きな女を助けるのに、何も必要なものなどないな。連隊長！」

自嘲気味に呟くと、トゥージュは意を決したように声を張り上げた。

「はっ！」

肩に隊長章を付けた壮年の男性が、トゥージュの前に進み出て最

敬礼をとった。

「ここはお前達に任せても大丈夫か？」

思いもかけなかった言葉に、一瞬だけ眉を吊り上げた連隊長だったが、すぐに何かを察した顔になって頭を下げた。

「この場はどうぞ、我等にお任せ下さい。民の事は、ここにいる者達と図りながら安全を最優先に考え、必ず守るとお約束致します。殿下は殿下の行くべき道を、迷い無くお進み下さい」

「……済まないな、連隊長」

「お気遣い無く。殿下のわがままに付き合わされるのには、慣れておりますよ」

微笑しながら告げられた言葉に、トウージユも笑みを返した。

「ウェイン、連隊長、街を頼む」

薔国の王弟は二人に頭を下げると、広場に背を向けて走り出した。その後ろ姿を見送り、壮年の男性と成長期の少年は顔を見合わせた。

「さて、それでは。何から始めればよろしいかな、ウェイン殿？」

「じゃあ、聖水の作用で動けない人達を、治療院へ運んで下さい」

26章 聖邪まみえる・珠春宮（前書き）

封印の玉座のある珠春宮・パーティルローサの謁見の間。

今その場所で、夢折りと邪神が対峙する。

世界の命運をかけた戦いを前に、アイヒナの胸に去来するものは？

26章 聖邪まみえる・珠春宮

天井の高い謁見の間は、音が良く響く。人の気配がなければ、なおさらである。柔らかな鹿のブーツでさえ足音を消す事は出来なかった。

「待ちかねたぞ、夢織りよ」

松明が揺れる影を落とす謁見の間。その正面に設えられた、豪華な二つの玉座。

「一人でやって来るとは、さすがだの」

広間より一段高くなった玉座の足許、五段ある階に凝った闇が、室内に足を踏み入れた人物に声をかけた。捻じ曲がった喜びと望みと晒いを含んだ、滴る毒に触れられそうな声。

「その姿は、やめろと言ったはずだが。それに、お前は間違っている。私は一人ではないぞ」

大広間に入って来たのは、黒の法衣に身を包み、銀の髪を結い上げ、リュートを背負った黄金色の瞳の美女、夢織りのアイヒナだ。

「ああ、ドラムーナがいるのであったな。我とそなたの仲を引き裂こうとする、あの無粋の輩が」

階段に腰をかけ、立てた片膝に肘をついているのは、砂色の髪の美女だ。皮肉を含んだ笑みを浮かべ、邪な欲望に輝く瞳は赤。

何も答えずに立っているアイヒナの、その足許に落ちた影から黒い狼の巨体が踊り出た。

「貴様なんぞに、吾の大事な主殿を渡すわけにはいかんのでな」

瞬時に狼の姿から人の姿に変わった闇姫は、主人を守るように立つと、砂色の髪の美女に向かって毒づいた。

「貴様こそ、こんな所にいていいのか？ ノーヴィアの軍勢はどうした？」

カーティの姿をした邪なる神は、口唇の端をクツと持ち上げる。まるで歌うように愉しげに語る。

「哀れ、王冠を戴かんとする愚か者は、戦場の原で踊る踊る。真実、己が王たる器であると思っておるのかのう、あの男は」

「それを唆した^{そそのか}のはお前であろうが、アーカバル」

闇姫を従え、モザイク模様が描かれた大理石の床に歩を進めるアイヒナの影が、松明に照らされた広間に複雑に揺れた。

「お前がノーヴィアを焚きつけなければ、無駄な戦は起きなかったものを。戦場で側につき、ノーヴィアを操らなくても良いのか？」

魂の国王軍が勝利するような事になれば、せつかくのお前の企てが水の泡になるのだぞ。こんな所で私と話なぞしていいのか？」

階段に座ったまま、カーティアーカバルは作った表情で嘆いて見せた。

「何と。それ程、我を邪険にせずとも良いではないか、想い人よ」

「言うな、痴^しれ者め。主殿の耳が穢れるわ」

鋭い牙をむき出して、主人と邪神の間に割って入った闇姫が吠える。

「まこと、無粋な奴よな、この初源^{ドラムナ}の獣^{やから}と言う輩は。我と想い人との、久々の逢瀬を邪魔するでないわ」

やれやれと首を振るアーカバルに、闇姫は憎々しげに唇を歪めて吐き捨てた。

「何が逢瀬じゃ。そこいらの物陰にバフォナ達を潜ませておくせに。どれだけ巧みに隠れたとて、夢魔を喰らう吾の鼻を欺く事など出来はせぬぞ」

闇姫の言葉が終わるか終らぬうち、柱の影から、扉の影から、そろそろと夢魔の気配が湧いて出る。

「こんなに連れてきおって。私も買いかぶられたものだな。しかし、これ程の手勢を連れて来ては、オーガスベルが手薄になるのではないか」

視線だけを動かして、バフォナの様子をうかがいながらアーカバルに問いかける。相変わらず同じ姿勢で頬杖をつきながら、面白くもなさそうに砂色の髪的美女は質問に答えた。

「心配せずとも良いわ。あちらは、イーギムに任せてあるのでな」

「手下に任せつきりでいいのか？ 余裕だな」

「ふふ。ノーヴィアが勝たずとも良いのよ。瑰国国王の首が取れれば、それで良いのじゃ。本当は王弟ともども戦場に送ってやれれば、手間が省けたのだがな。まあ、そう何もかも思うようにはいかぬと言うことかの。国王の命さえ奪えれば、他は我が何とでも出来る」

ゆっくりと立ち上がり、優雅な手付きでローブのヒダを整えた。

「それに。放っておいても、あの男はここへやって来るだろうしの」

「何もかも、お前の考えの内と言う事か？ 大した自信だが、果たしてそう上手く事が運ぶかな」

ギリギリと間隔を詰めてくるバフォナ達を視界の端に収め、集中を高めながらアイヒナは挑戦的に言葉を投げ付ける。

「トウージュ殿とて、何も知らぬ訳ではない。国王と自分の命にどのような重みがあるのか、それを知って尚、この場にやって来るとは思えぬが」

だが、その言葉を一番信用していないのは、口にしたアイヒナ自身と閻姫だ。アイヒナの持ちうる瑰国王家の情報から考えれば、国王コルウィンがトウージュをパーティルローサに残して行く事は、充分に考えられる。そしてトウージュの性格を思えば、封印の玉座を守るためにここへ戻って来る可能性は大きいだろう。

「あの男は、やって来るよ。確かにあの男は、何も知らぬ訳ではない。それ故に、少し考えれば分かるはずだ。我とそなたの決戦の場が、封印の玉座の存在する、ここ、謁見の間である事がな。ならば、あの男は必ず来ようよ。そなたがここにいる限り、必ずな」

美しく結い上げた髪からこぼれる後れ毛を指に巻き付けて弄^いいながら、艶然と微笑んで見せる。その仕種に、アイヒナは眉間にシワを寄せた。

「いい加減に、その姿はよせ。今さら姿を偽る必要もあるまい」

「まあ、そう言うな。我はこの姿が気に入っているのだな」

「御主様、もうよろしいですか？ これ以上、話す必要はないでし

よう」

アイヒナの背後に位置し、不自然に背中を丸めた姿の男が舌なめずりをしながらアーカバルに懇願した。

「同感じゃな。ここへは、話し合うために来た訳ではない。ならば、早くケリをつけてしまった方が、主殿にも都合が良からう」

闇姫も姿勢を低く構えながら、獲物を狙う獣の眼光でアイヒナに訴えた。その言葉に、少しかだけアイヒナの表情が動いた。彼女としても自分とアーカバルが戦っている最中に、トウージユが飛び込んでくるのだけは避けたい。

「ああ、もう我慢がなりませぬ！」

長い髪を振り乱し、牙をガチガチと鳴らしながら喚いた女が、大量のヨダレを撒き散らして二人に飛び掛った。

「よもや、吾に勝てるなどとは、思っておるまいな！」

黒髪を打ち振ると、瞬時に姿を獣へと変じた闇姫が迎え撃つ。それを合図に、広間にいる者達が臨戦体勢に入った。

「やれやれ。結局は、こうなるのだな」

いかにも残念だという顔を作り、アーカバルは物憂げに手を振った。途端に、夢魔の群が襲い掛かる。

「ゆめゆめ、巫女殿を傷付けるでないぞ。我の大切な想い人ゆえ」
けだるく発せられたアーカバルの言葉に、素早く印を切りながらアイヒナが答えた。

「勝手に自分だけで決めるな。私は承諾した覚えはないぞ」

銀色の長髪が、火神ネフティの神色を宿して赤く輝く。両手の平に火球を生み出し、飛び掛ってきたバフォナの顔面に叩き込む。そのまま身をひるがえし、背後から伸びてきた粘液にまみれた長い舌を掴む。炎をまとった手で滑る舌を握り締め、一気にそれを引き抜く。

「ギグアアアア　　！！」

口許を押さえて、バフォナがのた打ち回る。すでに数体のバフォナを屠^{ほぶ}っていた闇姫が、すかさず相手の喉笛に喰らい付く。耳障り

な悲鳴が唐突に消え、後に残ったのは夢魔の抜け去った人の体。だが既に、命の灯火はそこにはない。バフォナとの融合が深く進み過ぎたがゆえに、死をもってしか開放されなかった者達である。

「哀れな者共よ。限りある命の刻を生きる身でありながら、なぜにこつまで争い、短い命を散らせようとするのか」

愁い^{うれ}に満ちた表情で、悲しげに語るアーカバル。姿と言葉だけを見れば、争いを目の前にして悲しみと苦悩に苛まれる聖者のようにすら思えるかもしれない。

「お前が、それを言うのか？ 人々の眠りを奪い、人々の間に不安を撒き散らし、互いに争わせておきながら、お前がそれを言うのかっ！？」

風神バルメツサの白に輝く髪を逆立て、アイヒナは風刃を邪神へ放った。圧縮された空気の刃は、巫女の怒りを乗せてアーカバルへと迫る。だが相手の体に触れる直前、アーカバルとアイヒナの間に割って入ったバフォナによって阻まれる。

「御主様っ！」

風の刃はアーカバルではなく、主人をかばったバフォナの体を引き裂いた。自分の盾となつて倒れたバフォナを、赤く光る縦長の瞳で無感動に見下ろし、冷淡に語る。

「バフォナは我の分身。そして我が下僕。我の身より分たれ、我に従う者。分たれたがゆえに、我と一つになろうと願い、我を求める。我を討とうと思うのであれば、まずは、これらの者達を倒さなくてはな。我に危険が及ぼうとすれば、バフォナ達は無条件に体を差し出し、我を守るぞ」

それらの言葉に、アイヒナはギリギリと歯ぎしりをする。

「我を倒す前に、どれだけ^{しかばね}の屍の山を築けば良いのじゃ？」

黄金色の巫女の瞳に、怒りの炎が燃え上った。

人の裡にとり憑いたバフォナの根は深い。夢を介して人の裡へと根を下ろしたバフォナは、その心へと根を伸ばし、最後には魂そのものを絡め取る。そうなってしまうと、人とバフォナの縁を断ち切

るドラムーナの剣をもつてしても助ける事は不可能だ。身の裡にあるバフォナを排した瞬間に、器である人の命も消えてしまう。それは夢魔から人を守る立場のアイヒナにとって、耐え難い屈辱的な事であるとアーカバルは知っているのだ。

アーカバルの言う通り、バフォナ達は無条件に主人を守ろうとするだろう。アイヒナが相手を倒すためには、多くのバフォナを討たなくてはならない。それはつまり、器となっている人間達の死を意味するのだ。

「アーカバル　貴様　！」

「主殿！　敵の挑発に乗るでない！　頭に血が昇っていては、まともな判断が出来なくなるぞ」

閻姫が主人を諫めようとするが、そんなドラムーナの思いを嘲笑うかのように、アーカバルが言葉を続ける。

「いかに神力を自在に操る『夢織り』^{エルシャ}と言えど、これらの者共を救う事は出来ぬと見える」

口角を吊り上げて晒うアーカバルに向かって、長い髪をシャーリハーンの蒼色の染めたアイヒナが向かって行く。手に構えた天空神の槍が、夢織りの怒気を帯びて凶悪な輝きを放つ。

「駄目じゃ、主殿！」

閻姫の制止の声を振り切り、かざした槍をアーカバル目がけて突き出した。だが怒りに満ちた一撃は、邪神が向けた掌に拒まれた。

正しくは、アーカバルの掌から放たれた力の壁によって。槍の穂先は宙に留められたまま、その体に触れる事すら出来ないでいるのだ。「怒りに支配され、気脈の整わぬ様では、我に指一本触れる事など出来はせぬぞ。曲がりなりにも、我は神。どれだけ神力を授けらるようとも、人の身であるそなたが敵うものではない」

アーカバルの手がかぎ爪のように曲げられると、アイヒナの握る天空神の槍が見えない力に軋みを上げる。

「だ　まれ　」

歯を食いしばり、搾り出すようにして言葉を押し出す。

「そなたがいくら命を張ったところで、我の完全なる復活は止められぬ。諦めて、大人しく我のものとなるが良い。永久永遠に美麗なる夢に遊ばせてやるゆえ」

アーカバルの赤い眼が、三日月形に細められた。その手が握り締められる。と、済んだ音を立てて天空神シャーリハーンの槍は砕け散った。衝撃が伝わったものか、アイヒナの織手から赤い飛沫が散る。

「主殿！」

闇姫は強暴な唸り声をあげると、主人の危機を救いに行こうとする。しかし、周囲に群がるバフォナ達に阻まれてアイヒナの元に辿り着く事が出来ずにいた。

「主殿っ！！」

闇姫の目の前で、アーカバルからの衝撃波を受けたアイヒナの体が宙を舞った。柱に叩き付けられたアイヒナは、痛みで呼吸もままならない。空気を吐き出し切ってしまった肺は、喘ぐだけで、なかなか上手く機能してくれないでいた。

「ふふ。夢織りと言い、ドラムーナと言うが、実情はこのようなものよ。我とそなたの間に、これ程までに決定的な差があるうとはの。それでよくも、これまで我に齒向かって来たと言っべきか」

大理石の床の上で背中を丸めて咳込んでいるアイヒナに近寄ると、乱れた彼女の髪を掴んで引き上げる。苦しげに顔を歪めて喉を反らせるアイヒナを、愉しそうに見下ろして猫なで声で邪神は語る。

「これだけ彼我の力の差を見せつけられれば、そなたの心も揺れよう。いかに傷付き、いかに苦しもうと、そなたの神がそなたを救ってくれる事はない。そなた一人を戦わせておきながら、エルキリュースはただ眠っておるだけよ」

もがくアイヒナの背中を踏み付け、仰け反る広い喉に指を這わせて、彼女の心の強さを砕くようにアーカバルの毒に満ちた言葉は流れ込む。

「そなた一人がどれ程頑張ったとて、この状態は変えられまいよ。」

我は復活する。瑰国王は倒れ、王弟も命を落とすだろう。そなたは
我のものとなり、世界もまた我が物となるのだからな」

「だ……ま……れ」

無理な体勢からでは、ひと言を発するのにさえ多大な労力が必要
とした。必死になって腕を動かし、神力を呼び込もうとする。神呪
が唱えられずとも、印さえ組めれば何とかなるはずだ。

肺が痛い。喉が熱い。耳元で鳴る脈がうるさい。酸素を求めて、
心臓が早鐘のように胸を叩く。酸欠によって、目の前が暗くなって
いく。相手の隙について、印を組む事さえ出来れば。

だが、アイヒナが手を動かした瞬間。

「が……っ、はああああああ　！」

夢織りの口唇から、声にならない、かすれた悲鳴があがる。

「神を依らそうと言うのか。見上げた根性だの」

舌なめずりをせんばかりの、アーカバルの声が降ってくる。

アイヒナの手は、邪神の爪により床に縫い止められている。夢神
の巫女の喉に触れていたアーカバルの指の爪が、鋭い刃となって彼
女の手の甲を貫いているのだ。爪が引き抜かれると同時に、傷から
あふれ出した鮮血がアラバスターにも似たアイヒナの白い肌を朱に
染めていく。

「さすがは、神に愛でられし者よ。これ程までに美味なる血を、我
は他に知らぬ。ますます、そなたが欲しゅうなっ たわ」

己の手を掲げると、そこにある夢織りの血を舐め取り、悦に入っ
た様子のアーカバル。

「傷付いたその手では、神を依らせるための印を結ぶは、もはや無
理である。無駄に抗わず、諦めて我の物になるが良い。そなたは我
が想いを受け入れると言うのなら、そなたの願いを聞き入れてや
ろう。瑰国王の命は無理だが、王弟の命は見逃してやっても良いぞ」

痛みと酸欠で意識が混乱する。目蓋が落ちそうだ。視界の隅で、
戦っている閻姫が何かを叫んでいる。ああ、耳の中で脈打つ鼓動が
うるさくて、何を言っているのか聞こえない。なのになぜ、アーカ

バルの声は耳に入るのだろう。まるで、魂に刻まれるかのようだ。

「さあ、我が想いを受け入れよ、エルーシャ。そなたを認めぬ者共を、命をかけてまで守ってやる必要がどこにある？　もう、楽になっても良いのではないか？」

やめてくれ。私は決めたんだ。戦い抜くと、私の大切な人達の生きる未来を守るために、私自身が決めたのだ。邪神の言葉などに、惑わされる訳にはいかないんだ。

「王弟トウージュの命を救いたくはないのか？　そなたさえ首を縦に振れば、我は必ず約定を守るぞ」

嘘だ。王家の血が残っていては、玉座の封印は解けない。アーカバルがトウージュを見逃すはずなど、ないのだ。騙^{だま}されてはいけない。この言葉を聞いてはいけない。それでも、心が揺れてしまうのを止められない。

「ト　ウジュ……を……？」

「そうだ。あの男の命を救いたいだろう？」

抗うアイヒナの思いとは裏腹に、酸欠状態の彼女の脳にアーカバルの言葉はまるで催眠術のように染み込んで行く。彼女を引き止めているのは、皮肉な事に邪神に傷付けられた手の痛みだ。

主人であるアイヒナの気力や意志が衰えれば、閻姫の力も削がれて行く。徐々に重くなっていく体を抱え、勢いを増すかに見えるバフォナの群に牙を剥き、閻姫は懸命にアイヒナに呼びかける。

「主殿！　しっかりせよ、目を覚まさぬか！　奴の言葉に耳を貸しては、ならぬ！」

「はっはあ！　無駄、無駄、無駄あ！　お前の声なんざ、もう、あの夢織りにゃあ届かねえよ」

「あのエルーシャは、御主様のものになるんだ」

「間もなく御主様は、完全復活なさる。そうなれば世界は、全て御主様のものよ。さすれば、最早誰にも邪魔する事は出来はせぬ」

「神である御主様に抗うなど、人である身に敵うはずもないわ」

群がる妖魔達は、鋭さの鈍った閻姫の牙と爪をかわしながら、嘲

笑を投げ付ける。

「やかましいっ！ アーカバルを倒すためだけに、主殿は全てを捨てて来たのじゃ！ 己を奪われ、夢見る事を諦め、邪神を打つこの日のために、あらゆるものを手放して来たのじゃ！ ここで倒れる訳にはいかぬ。それでは、主殿の生きて来た全てが、無に等しくなってしまうのではないか！ 聞いておるのか、主殿！」

渾身の願いを乗せた闇姫の叫びは、果たして主人に届いたのか？
アーカバルに喉を圧迫され、かすれ行く意識を手放す直前。どんなよりと曇った瞳に、色を失くした目蓋が落ち切る寸前。闇姫の声さえ聞こえていなかったはずのアイヒナの耳に、飛び込んで来た一つの声。

「！」

ドクンツ、と心臓が脈打つ。苦しみにも代える鼓動ではない。冷え切った体に、温かなモノを送り出すための鼓動だ。

「ナア……」

床についた傷付いた手に、廊下を駆けて来る足音が伝わる。それは、どんどん彼女の方へ近づいて来る。

「アイヒナー！」

私は 私は決めたんだ。私を信じてくれる人達のために戦うと。あの人に恥じない歩き方をしようと。ならば、こんな所で倒れている訳には、いかない。

「トウ……ジュ……」

切れ切れの息が喉を震わせ、かすかな吐息にも似た呟きが、アイヒナの唇から零れ落ちた。神から与えられた命綱のように、アイヒナはその名前にしがみ付いた。

ちよつとクセのある金色の髪は、日に焼けた肌に良く似合う。大きく、温かな手。穏やかで、真面目で誠実な人柄の伺える口調。いつも自分を見つめてくれていた、深い深い緑の瞳。

私は決めたんだ。自分の大切な人を守ると。一番大切な、あの人を守ると！

生気をなくし濁っていたアイヒナの瞳に、炎が宿った。と同時に、アイヒナの体が光を放つ。胸に彫られた刺青が、目を灼く程の眩い輝きを放っているのだ。

神聖文字の刺青から放たれた五色の彩光が収まると、閻姫に群がっていたバフォナ達は皆、糸の切れた操り人形のように崩おれていった。

「アイヒナ！」

抱き上げられる手の温かさ、腕の力強さ。ゆっくりと目を開けば、額にかかるクセのある柔らかな金髪。心配そうに自分を見つめる深い緑。愛しいその色を、アイヒナはこの世で一番綺麗だと思った。自分を支えてくれている人物の名前を呼ぼうとして、急激に流れ込んで来た空気に激しく咳込んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

驚いた顔で背中をさすってくれる相手の名前を、アイヒナは涙のにじむ目をこすりながら口にした。

「トウージュ……」

自分とアーカバルの決戦に巻き込んでしまったと言う、罪悪感。

そして、それを大きく上回る幸福感と安堵感。

「主殿っ！」

トウージュを突き飛ばし、人型に変じた閻姫が顔を出す。

「大事無いか、主殿？ ハラハラしたぞ」

「ああ、済まない。バフォナ達は？」

「大丈夫じゃ。バフォナの種は喰らうておいた。主殿のお陰よ」

「いや、私の力ではない。トウージュ殿が、私をこちらに呼び戻してくれたからこそだ」

主のその言葉に、少しでも閻姫の表情が揺らいだ。

「それよりも、アーカバルはどこだ？」

肘を突いて上体を起こしたアイヒナにつられて、二人も周囲を見回す。

アーカバルは いた。アイヒナが最初にここへ来た時と同じ場

所、玉座へと続く階段の下で、顔を押さえつづくまっている。

「お……のれ、貴様等。よくも」

くぐもった声が発せられ、幽鬼のようにアーカバルが立ち上がる。美しく結われていた砂色の髪は、聖光に弾き飛ばされた衝撃で解け、おどろに乱れている。

「茶番は終いじゃ。ようも、神である我の顔に傷を付けてくれたな。三人とも、ただでは済まさぬ」

そう宣言したアーカバルの顔は、半分が醜く焼け爛^{ただ}れていた。

27章 オーガスベル・戦いの夜（前書き）

夕焼けに染まるオーガスベルの地を見やりながら、国王コルウィンは思う。

果たして、この戦いを避ける事は本当に出来なかったのかと。

そんな国王の孤独を癒そうと、エルキリユースの夢長は己の胸の内を語り始める。

27章 オーガスベル・戦いの夜

血のように赤い夕陽が、オーガスベルの大地を照らす。流された多くの血と混じり、より赤く染めて行く。

馬上の若き王コルウィン、オーガスベルの原を苦々しい思いで見つめた。敵味方に分かれているとは言え、地に倒れ、血を流し、命をかけて戦っている者は皆等しくコルウィンの民なのだ。

「陛下。このような所までお出ましになられては、危のうございませ。どうぞ天幕までお戻り下さい」

コルウィンの隣りに馬を進めたライナスが、王の身を気遣って声をかけた。

「倒れる者も、倒す者も、同じ瑰国の民だと言うのに。何故、このような戦いをせねばならぬのか。それを思うと、気が重い」

暗く沈んだコルウィンの声からは、昼間の覇気は感じられない。

「ライナス。余は時々思う事があるのだ。王権を棄て、王冠を棄て、玉座を棄て。そうすれば、このような苦しみからは逃れられるのではないか、とな」

「陛下。悲しい事です、これが今、我が国にある現実です。ここで我等が挫けてしまえば、トウージュ殿下やイルネア公爵夫人の努力が無駄になってしまいます。この地で流される血の一滴、失われる命の一つ一つを忘れずにおりましょう。それが戦を始めてしまった我等の、負うべき責任だと思っております」

「そうだな。元帥の言う通りであろう。いかな。余はすぐに悪い方へ考えてしまうようだ。元帥がいてくれて、助かった」

視線をふと和ませ、コルウィンは微苦笑を浮かべてライナスを見た。

「ありがたいお言葉、痛み入ります。さあ、そろそろ天幕へお戻り下さい。日の入りから日の出までは、兵を動かさぬのが通例。しかしその通例を、相手が守ってくれるかどうか怪しいですからな」

「ああ、元帥の言う通りにしよう。妃達はどうしている？」

戦場へ背を向け、王の座所である大天幕へと馬を進めながら、コルウインはライナスに問いかけた。

「はあ、それが。アイナセリヨース妃殿下とイルネア・エメス公爵夫人閣下は、治療用の天幕にこもられたきりで」

申し訳なさそうに答える国王軍元帥に、若き国王は苦笑した。

「面倒をかけるが、二人をよろしく頼む。妃も余の体の事を心配して、このような所までついてきたのであろう。だが」

大小の天幕やテントが並び、夕食の支度をするための火が、あちこちに灯っている。疲れた体を休ませる兵士達が、足を投げ出した食事の摂ったりしている。そのずっと奥にある、治療用の天幕を透かして見るようにしてコルウインは言葉を切った。

「情けないかも知れぬがな、ライナス。余はアイナセリヨースが側にいてくれる事で、救われておるのだ。トウージユと共に珠春宮にいてくれた方が安全だ。それは判っているのだがな。妃が共にいてくれる事が、何より心強く、余の気持を落ち着けてくれるのだ」

少し照れ臭そうに語るコルウインと馬首を並べながら、ライナスもそつと微笑んだ。

「陛下は誠、妃殿下を愛しておられるのですな。また、妃殿下も心底から陛下を大事に思っておいでなのでしょう。それ故に、共に戦場に立つ事を望まれたのだと、私は思いますよ」

そして、口には出さずに付け加える。

（お二人の支え合うお姿に、我々も勇気付けられています。求め合うだけではなく、互いを気遣い、与え合うお姿に我等魂の民は国の明るい未来を信じる事ができるのですよ）

座り込んでいた兵士達が、コルウインとライナスの姿に慌てて立ち上がるうとする。道中で隊列に加わった民達は、普段目にする事のない国王の姿にあたふたと平伏そうとした。馬上の国王は手を振り、それを制する。戦いで疲れた兵や、日頃慣れない緊張を強いられた民に、少しでも体を休めて欲しいとの労いの気持ちからだ。

進むにつれ、次第に負傷者が増えてくる。治療に使った包帯や布の入っているであろう、大きなカゴを抱えた者達が忙しく出入している大きな天幕は目の前だ。

側にいた兵士に手綱を渡し、コルウィン是天幕の中をのぞいて見る。傷を負った兵士を介抱しているイルネアと、女性に指示を出して薬を調べているアイナセリョースの姿が見て取れる。

「お声をおかけにならないのですか？」

王妃と公爵夫人のいる天幕へ入ろうとしないコルウィンに、ライナスが静かに促した。

「良い。邪魔をしたくないのでな。このまま、様子をうかがっているだけで良い」

そう答えたコルウィンの瞳は、愛する者に対する誇りで輝いていた。

治療用の天幕の周囲には、大地母神イシュリーンに仕える僧兵と、夢神エルキリユースに仕える巫女が配置されている。それは国王軍の陣地全てに言える事だが、弱った者と戦闘力を持たぬ女性の多いこの治療用の天幕は特に嚴重だ。相手が人ではないとなれば、当然の配慮である。

自身の天幕へと戻ったコルウィンは、ライナスと入れ替わりに訪れた夢神の巫女頭と向かい合っていた。

簡易式の玉座に腰かけた魂国の若き支配者は、重く堅苦しい鎧を脱ぎ、くつろいだ姿をしている。それと向き合う夢神の巫女頭は、簡素な法衣をまとい杖を手にして立っている。姿勢良く、真っ直ぐに国王を見つめる姿には、なるほど神殿一つをまとめ上げてきた威厳がつかがえる。

「陣内には各神殿から派遣されて来た僧兵と、エルキリユース神殿から連れて来た巫女達を配しました。今宵は安心してお休み下さい」

どうして自分の周りには、このように芯の強そうな女性ばかりが現れるのだろうか、不思議な思いを抱きながら老いた巫女に声をかけた。

「眠りを保証して頂けるのは、戦いに疲れた兵士達にとって何よりありがたい。それは余も同じ思いだ」

自分の言葉に深々と頭を下げる夢長に、コルウィンバフォナは疑問を投げかけてみた。

「エルキリユース神殿の夢長殿。余は弟のトゥージユから、夢魔なる人外のモノ達の存在を聞かされておったのだが。しかし昼間の戦闘を見る限りでは、そのようなモノ達は見受けられなかったように思う。トゥージユの話を疑う訳ではないが、本当のところ、どうなのだ？」

国王の問いを聞き終わると夢長は軽く目を伏せ、吟味するようにして答え始めた。

「弟君の申された事は、全て真実にございます。この世界に仇なす邪神アーカバルの配下、人の夢を貪る魔物。人の眠りの中へ忍び込み、夢を侵蝕し、やがては生きるための精さえ奪い尽くします。そうやって人の裡から喰らい、その人間の抜け殻をまとってなりすます。人の姿はしていますが、内側に巢食っているのは人外の存在なのです」

語り終えた夢長と、聞き終えたコルウィンの口からこぼれた深い深い嘆息が重なった。

「昼間の戦闘にバフォナ達の姿が見られなかったのは、相手もこちらの様子をつかがっていたのでございましょう。見た目は人と何も変わりありません故、常人には見極める事が出来ませぬ」

「ならば、夢長殿。なぜ奴等は昼間の戦いにバフォナを投入してこなかったのだ？ 今回の戦いにバフォナを使う気は、向こうにはないと言う事か？」

この問いこそが、コルウィンが今もつとも知りたい事である。国を率いる者として、傷付く人間を少しでも減らさなくてはならない。そのために必要不可欠なのは、敵陣の情報をどれだけ掴んでいるか、と言う事だ。敵情を正しく把握してこそ、有意義な戦略を立てる事が可能なのだ。

「使う気がなければ、そもそも、この戦に連れ出す意味がございませうまい。明日の戦闘　いえ、今宵の闇の乗じてこちらの戦力を削ぎ、内部から切り崩そうと動き出すはず。それを防ぐための我等であり、布陣でございます」

夢長の返答に、コルウインは目を見開いた。

「そのような奴等が、闇に乗じてやって来ると言うのか？」

「いかにも。夜の闇こそが、夢魔の衣。そこにエルキリユースのもたらす安寧と安息の眠りは、存在いたしません」

再び深く嘆息をもらし、片手で目を覆った。

「聞かねば良かったかも知れぬな。この事は、兵士には　？」

「兵達にはお知らせにならない方が、よろしいかと存じます。自分達の相手にしている者が、人でないと知れば士気が落ちましよう。

夜の闇に魔物が潜むと知れば、いたずらに恐怖をあおる結果となりましよう。バフォナの相手はどうぞ、我等神殿関係者にお任せ下さいませ。そのためにこそ、わたくしがここにいます」

凜と言い放った夢長の顔は、若かりし日の美しさを面影として残している。今はか細く見える双肩には、どれだけの重責が負われているというのか。

「陛下はどうぞ現実の戦いをのみ、お考え下さいませ。それ以外の事柄については、わたくしが責任を持つてお引き受け致します」

「ああ、そのような。余に出来る事は何もなさそうだ。夢長殿にお任せするしかないな。結局のところ、余は戦場においても王宮においても、役には立たぬと言う訳か」

国王とは言え、所詮はこの程度のものだ。そう呟くコルウインに夢長は優しいまなざしを注ぐ。

「陛下、それはわたくしも同じでございますよ。わたくしの行っている事は、我が愛娘の立ち向かわねばならぬ試練に比べれば、何程の事もございません。陛下の大切な弟君と、わたくしの大事な養い子のアイヒナとは、今この時も戦いの場に臨んでおります。それを思えば、わたくしに泣き言を言う甘えは許されぬ、とこの胸に刻ん

であります」

「何と トウージュと共にいる神殿の巫女は、夢長殿の娘御であつたか」

「子を成す事を禁じられた我が身に、神が与えて下さった宝でございます」

コルウインは誇らし気に微笑む夢長の姿を、眩しそうに見上げた。「余と夢長殿は、不思議な縁で結ばれておるらしいな。我が弟と貴殿の娘御が手を携えて戦つておるのだ。余も夢長殿と力を合わせ、この戦を乗り越えてみせよう。夢長殿、余の兵達を頼む」

「御意つかまつりました」

頭を下げた夢長は、錫状を鳴らしながら大天幕を出て行つた。彼女はこの後、夜中休む事なく敵襲に備えるのだらう。

「余にはとても、真似出来ぬな」

疲れたように目頭をもみながら、幾度目とも知れぬため息を吐く。所詮は人知の及ばぬ『神の領域』の話。ならば自分出来る事は、祈る事。そして余計な事を考えず、戦いに勝つ事。何度も何度も胸に刻み、幾度も幾度も決意する。

「まだまだ、余に覚悟が足りぬという事か」

微笑笑して独りごちると、天幕の外で控えていた小姓を呼ぶ。夜の闇の中での戦いを夢長達が受け持つのであれば、昼の陽の中での戦いはコルウインの受け持ちである。

勝たねばならない戦いである。いくら体調の良い日が続くとは言え、油断は出来ない。つい先日まではベッドの上で一日の大半を過ごしていたコルウインである。いつまた、病がぶり返さないとも限らない。万が一にも戦場で倒れるような事があれば、兵達の士気に大きく関わるだらう。そうならないためにも、良く食べ、良く眠らなくてはならない。將軍達との作戦会議に備え、小姓に軽い夜食を用意するように言いつけると、頭を切り替えていく。

自分の背に負われた責任の重さを、ひしひしと感じながら。

＊＊

大天幕を辞した夢長は、その足で王妃と公爵夫人のいる医療用の天幕へと赴く。

兵士として志願したものの、兵としての資質に欠ける者、戦場に出すには早過ぎる者、年を取り過ぎた者。近在の村々からやって来た女衆が出入し、アイナセリョースとイルネアを手伝っている。

王宮から持ち込んだ布を裂き、山程の包帯をこしらえては煮立った湯を張った鍋に放り込み、次々と消毒していく。

持てるだけ持って来た薬剤も無限ではない。足りない分を補うために、王妃と公爵夫人は村人の知恵を借りる事にしたのである。野や林にある草や木々の皮や実から薬効のあるものを採し出し、代用品などを用いて傷や打ち身を治療する方法は大いに役立った。

本来であれば口をきく事はおろか、その姿を目にする事さえ稀な雲の上の存在である王族の二人が、自分達の言葉に耳を傾け知恵を重用してくれる。その事が人々を力付けた。自分達の住む国を、暮らしを、家族を守るのは自分なのだと、人々の顔は誇りに満ちている。

この誇りを、希望を守らねばならぬ。と、夢長メルベリツサは思う。命を守るだけではない。人は誇りを踏みにじられ、希望を失い、夢を失くした時、心が死ぬのだ。

背筋を伸ばし、周囲をうかがう。国王軍の陣内で、一番守りを厚くしなければならぬのは、この治療用の天幕だ。多くの者が出入りし、多くのケガ人が運び込まれる。その中にバフォナの種を宿した者が紛れ込んでいないとも限らない。今、夢長である彼女の手許には夢を渡る夢幻鏡も、バフォナを狩るためのドラムーナもない。それでも、持てる力の全てを使って陣を守らねばならない。国王軍を内側から切り崩そうと送り込まれて来るバフォナを、見逃す訳にはいかないのだ。

陣地の中央近くに燃える篝火の下に立つと、夢長は手にした錫杖

を力を込めて地に打ち付けた。杖に飾られた金環が触れ合い、涼やかな音を立てる。その音は波となって広がり、陣内に配された僧兵や巫女達の持つ神具によって共鳴、増幅を繰り返しながら、陣地全体を包み込む巨大な波へと成長する。

感覚の触手を伸ばし、それを確認した夢長は、両手を広げて神呪の詠唱を始めた。このまま一晩中、神殿の巫女達が交代で神呪を唱え続けるのだ。

夢長の口唇からこぼれる神呪は、陣地を包む波に乗り、力ある文字『神聖文字』となって結界をより強固な壁となる。

28章 オーガスベル・公爵閣下の憂鬱（前書き）

自分の勝利を確信していたノーヴィア公爵は、思いもよらぬ国王軍の攻勢に怒り狂う。

反乱軍に紛れるバフォナの一群は、夜陰に乗じて国王軍の陣地に奇襲をかけようと

画策するが……。

28章 オーガスベル・公爵閣下の憂鬱

「なぜだ！　なぜなんだ！　正義は私の許にあるのではないのか！　！」

怒号と共に、何か重い物が倒れる音や陶器の割れる音が響く。

「カーティはどうした？　なぜ私の前に姿を現わさんののだ？」

決して狭くはない天幕の中を、落ち着きなく歩き回っているのは。

「閣下、ノーヴィア閣下、どうぞ落ち着き下さい」

イライラと爪を噛んでいたサマル・ビュイクは、背後からかけられた若い声に向かってテーブルの上にあったゴブレットを掴んで投げ付けた。

自分に向かって飛来した真鍮製のゴブレットを軽くかわし、冷めた眼差しで反乱軍の最高司令官をながめているのは、黒いマントに身を包んだ若いイーギムだ。

「どうぞ、お気をお静め下さいませ、閣下。御酒を召し上がってすぐにそのように激昂なさつては、お体に障ります」

口振りだけは臣下のそれだが、声の端々に棘が見え隠れする。

「黙れっ！　知ったような口を利くな、若造め。カーティはどうした？　なぜこの場におらんのだ？　カーティを呼べ！」

酒のせいだろうか、興奮しているせいだろうか。目を赤く血走らせて、サマルは控えているイーギムを怒鳴りつけた。戦況が思うように動かない事にイラついているのだらう。完全なる八つ当たりだ。「我が主カーティは、オーガスベルにはおりません。ノーヴィア公爵閣下の勝利を確実なものにするために、別の場所にて働いております。ご安心下さい」

「そんな事を言って、私を見限って逃げ出したのではないのか！　ええい、忌々しい！」

天幕内をギョロギョロと見回しては何か壊す物はないかと探して

いる姿は、正気を失っているように見える。内心の不快感を押し隠し、イーギムはサマル・ビュイクに頭を下げた。

「我が主は、閣下を信用しておられるからこそ、この場を離れたのでございます。決して閣下を見限るなど、そのような事は、あろうはずがございません」

表面だけは穏やかな顔を装いながらもサマルの側へ歩み寄り、テーブルの上にあったベルを手に取った。軽く振ると、天幕の外に控えていた侍者を呼ぶ。

「イーギム、何をしておる！？ 勝手なマネをするな！」

ツバを飛ばし、怒りと焦りと酒のために斑に赤く染まった顔で、イーギムの手の中にあるベルを奪い取って投げ捨てると、サマルは若者に掴みかかった。

呼ばれて天幕内へ入って来た侍者達は、位を召し上げられた公爵の姿に戸惑い、怖れて立ち尽くしている。

「片付けと御酒の支度をさせるだけでございます」

よい。周りを片付けて、新しい御酒を用意するように。と侍者に申し付けたのはイーギムだ。

ビクビクしながら敷物の上に散らばった破片やゴブレットを拾い上げ、調度を整えた者達が頭を下げ部屋を出て行ったのと入れ違いに、酒の盆を掲げた女が静かに入って来た。

憤然とした面持ちでいるサマルの前にテーブルを設え、新しく運んできたクリスタルのデキヤンタから赤くトロリと輝くワインを注ぐ。女が手渡そうとするゴブレットを、サマルは乱暴に押しのける。「いらぬわ。余計なマネをしおって。この天幕は私のものだ。この軍勢は私の軍だ。私が指揮官なのだぞ。その私を差し置いて、勝手な行動は許さん！」

イラ立ちをぶつけるかのように、テーブルの酒器に手をかけた。だがサマルは、その手を動かす事が出来ずにいた。細い腕が彼の手を押さえているのだ。

「いい加減になされよ、サマル卿。どれだけ暴れれば気が済むのか。

己が指揮官と申されるからには、それなりの態度をお取りなさい。軍を指揮する貴方がそのような様では、従う者までもが動揺します」
厳しく静かな口調で、イーギムはサマルに向かつて言葉を吐いた。
「貴様っ！ 平民の分際で、私に意見しようと言うのか、無礼者め！」

全く人の話を聞ける状態ではない。元々から自尊心の強い人物ではあったが、酒精に溺れ、戦の乱気にあてられ、己を守るための懷疑とプライドだけが肥大しているのだ。

振り払おうとする腕がピクリとも動かない。見かけにそぐわない力で、サマルの腕を抑えていたイーギムの瞳が獣のソレに変じてギリと光った。掴まれているサマルの腕がミシミシと音を立てる。
「いい加減にしろと言っているのが、分らないのか？ ギャンギャンとうるさいんだよ、お前。御主様のお言い付けでなければ、誰がお前のお守りなどするものか」

若者の変貌ぶりにサマル・ビュイクは目をむいた。息を呑み、イーギムの腕から抜け出そうともがくが叶わない。

「お、お前は 一体……？」

「貴方が知る必要はないんですよ。サマル閣下。貴方はただ、この戦に勝てば良いのです。そうする事が御主様のためであり、我等のためであり、ひいては貴方のためになるのです。貴方はただ、勝つ事だけを考えていれば良いのです」

そう告げたイーギムの眼に、妖しい光はもうない。手を離された事にも気付かず、棒を呑んだように立ち尽くしているサマルに、表情も変えずにいた女が杯を差し出した。

「あ、ああ……」

震えとしびれの残る手で受け取った杯の中で、血の色をしたワインが波打つ。

「貴方が御自分の役割りを果たしてさえ下されば、我等は貴方の味方であり続ける事が出来るのですよ」

イーギムの顔と自分の手の中にあるゴブレットを交互に見比べ、

意を決したようにサマルは酒をあおった。

「私が勝てば、瑰国の玉座は私のものになるのだな？」

「もちろんでございます。閣下の他に、誰がこの国の王となれるでしょう？」

「正義は、私にあるのだな？　コルウィンでもトウージユでもなく、私が正しいと言う事だな？」

「御意にございます、閣下。どうぞその御力で、この国を正しくお導き下さいませよう」

上目使いにサマルを見ながら、イーギムは慇懃に頭を下げた。

「では私は、閣下の勝利のためにひと働きして参ると致しましょう」
側に立つ女に公爵の相手をするように命じると、イーギムは大天幕を出て行った。その背中を追いかけるように、サマルのひび割れた聞き苦しい哄笑が響いてくる。

「まったくもって、不愉快な男だよ。あのサマル・ビュイクという奴は。我等の仲間にするのもためらわれるわ。御主様に必要でなければ、すぐにでもラ・ズーの懷に送り込んでやるものを」

肩に貼り付いたサマルの気を払いのけようと言うのか、顔をしかめてパタパタとはたく。そんなイーギムに向かって、まだ幼さの残る面差しの少年が「どちらへ？」と声をかけた。それに向かってイーギムは嗤って見せた。夜の闇よりなお深く、黒く染めぬかれたマントを羽織りつて。

「夜の闇は我等の味方。奴等にとっては見えざる恐怖。この闇に乗じて、御主様の邪魔をする輩を叩く」

少年に人数を集めるように言い付け、イーギムは陣地の境界から国王軍の陣を見つめた。その背後に音もなく幾つかの影が集った。中年に壮年に少女。年齢も性別も違うが、身の裡に夢魔を抱えている者達だ。

「奴等の頼みの綱であるドラムーナも夢織りも、ここにはおらん。あそこにいるのは、非力な人間共だけだ。今夜のうちに奴等の陣地へ潜り込み、愚かな人間共に混乱を与えてやろう」

「御主様のために」

「御主様のために」

「コルウインの首級くびさえ挙げてしまえば」

「トウージュなど、御主様の前に虫ケラも同じ」

「あの二人が亡き者となれば、後はマヌケなノーヴィアに虚栄の王冠を与え、瑰国王宮の玉座に就けてやれば良い。そうなれば我々の御主様が完全に復活される。御主様の御力が戻れば、世界は我等のものとなる」

「その通りだ。行くぞ！」

夜の闇に紛れて、黒い影が走った。

オーガスベル平地の対岸、瑰国王軍の陣地へと。

＊＊

戦場となっているオーガスベルは、湿地を含んだ独特の地形をしている。平地を渡って高台へと抜ける風は、湿り気を帯びて肌に重い。

篝火に照らされた国王軍の陣地は、落ち着いた静けさに包まれている。薪の爆ぜる音がそこで起こり、仄暗い影を落としていた。そして影に蠢く、なお黒い人影。頭からスッポリとフードを被り、足の先まで闇に同化したイーギム達だ。

「どうだ？」

「こちら側は駄目です。結界が強固で、とても破れません」

「こちらもです」

若いリーダーの前に膝をつき、バフオナ夢魔の眷属達が報告する。

「さすがに護りは固いか。だが、所詮は寄せ集めの連中だ。奴等を束ねている夢長とて、威勢があつたのは過去の事。今ではただの、老いばれよ。必ず穴はある。良く探すのだ」

イーギムは目の前の手下達に強く命じた。

例えエルキリユースに仕える巫女頭とは言え、慣れぬ戦闘を経験

し、多くの神官、巫女達を従わせねばならぬとあればその疲労は並大抵のモノではない。加えて、年齢的な事もあるだろう。広い陣地全てを結界で守護するとなれば、必ずどこかに薄い部分、すなわち『穴』があるはずなのだ。

昼間のうちに国王軍の陣内へは、ケガ人を装わせたバフォナを数名潜り込ませてある。内からと外から、同時に国王軍を奇襲する手筈だ。

輝く篝火の向こう、陣地を包む結界を透かし見ていたイーギムの耳に、ヒタヒタと夜に染まった足音が届いた。

「イーギム様」

足音の主は、三十半ばの女だ。どこにでもいる、気の良さそうな主婦に見える。だが、口許に浮かぶ下卑た^{げひ}笑みが、その外見を裏切っていた。

「イーギム様、見つけました」

見つけた。とは、結界の『穴』を探り当てたのだろう。女の表情は得意気に見えた。

「どこだ？」

自分よりもはるかに若いイーギムが高飛車に物を言うのにも頭を下げ、褒めてくれと言わんばかりの態度だ。

「食糧や物資の保管されている、荷馬車溜まりの辺りです」

女の報告に、イーギムはニヤリと嘲笑うとアゴをしゃくって全員に移動の合図を出した。

「よし、良くやった。行くぞ」

闇から闇を伝って、バフォナの影が走り抜ける。

国王軍の陣地の外れ、兵士達の姿もまばらな荷馬車溜まりは静まり返り、火の粉の爆ぜる音がやけに大きく耳に響く。

「なる程、確かにこの場所は他に比べて結界が薄い。夢長と言えど、寄る年波には勝てぬという事だ」

他所では何者も寄せ付けぬ堅牢な結界が、ここでは極端に薄く弱い。力を振り絞って強固な結界を張り巡らせたシワ寄せが、この場

所なのだろう。人の出入りの多い場所を重点的に守ろうとした結果とも言えよう。

イーギムとその手下の者達の目付き、顔付きが変わった。上辺だけ取り繕っていた「人間らしい」表情が消え、夢魔としての本性をむき出しにしていく。

メキメキと音を立てて、イーギムの腕が付け根から膨れ上がる。人のモノではない。筋肉を構成する、根本的なものが変化したのだ。そこにあるのは獣の、否、化け物の腕だ。ゴワゴワと密生する剛毛の所々に、破れた袖の残骸がボロ布のように引っかかっている。鋭い鉄のごときカギ爪の生えた五指を、試すように握ったり開いたりしながら、年若い夢魔はほくそ笑んだ。背後に控える者達も、それぞれに夢魔としての本性を現出させている。

かすかに揺れ動いて見せる結界の壁に、イーギムはゆっくりと異形の腕を近付けていった。カギ爪が触れた部分に、わずかに火花が散ったように思えた。結界が腕を押し返そうとする感触はあるが、大したものではない。構わずイーギムは腕を伸ばし、こじ開けるようにひねった。

華奢な玻璃きやしゃはりが砕ける儚い音がした。　　したような気がした。夢長の張った結界が、イーギムの与えた負荷に耐え切れずに破れたのだ。バフォナ達の眼に歪んだ光が灯った。

「人間の分際で、神である御主様の御力を与えられた我等に立てつかうなどと、身の程知らずだと言うのだ」

手下の者達を従え、結界のあった場所をくぐり抜けてイーギムは国王軍の陣地内へと足を踏み入れた。

自分達の勝利を確信して全員が陣内へ入り込んだ瞬間、その場の空気を揺らして澄んだ金属音が響き渡った。慌てて周囲を見回すバフォナの一団を囲み込むようにして、荷馬車溜まりの一带に光の輪が出現した。

「なっ、何だコレは!?!」

思いも寄らない出来事に、夢魔達は浮き足立つ。肌にジリジリと

感じる気配が、己の存在とは相容れない力である事を教えてくる。

「まさかっ!？」

荷馬車の中から、篝火の輪郭の外から、神殿の巫女達が姿を現わす。その中心にいるのは、厳しい顔付きの夢長メルベリツサだ。

「やはり来ましたね。あの臆病者の元公爵が自ら夜襲をかけて来る事はないと踏んでいました。やって来るなら闇に紛れて、お前達バフォナでしょうとね」

静かに語る夢長が片手を挙げると、側に控えた巫女が動く。腕に抱えていた物を篝火の中に次々と放り込んでいく。やがて、大氣中に独特の香りが流れ出した。

「グ……ゲエエエエ……」

香りを吸い込んだ夢魔達が、苦し気に喉元をかきむしる。

「こ、この香りは……! 貴様等、夢幻鏡もドラムーナも手許になりこの状況で、我等バフォナと渡り合おうと言うのか」

先頭に立つイーギムもやはり苦しいのだろう。眉間にシワを寄せ、頬を歪ませた若い夢魔は、荒い息の下から言葉を発した。

「確かにそうね。私達の手許には今、お前達を滅ぼすドラムーナも、夢を渡るための宝鏡ありません。ですがそれだけで、お前達バフォナと戦う手段がないなどと思うのは早計と言うものですよ」

夢長の後ろに控えていた数人の巫女がリユートを構えた。

「滅する事は出来ずとも、お前達を封じる方法があります。私の娘が教えてくれた方法がね」

篝火の光の外から錫杖を打ち鳴らす音が響いてくる。その音に合わせて、リユートが旋律を奏でる。

「ば、馬鹿め……。我等をこんな所で縛したからと言って、いい気になっておると痛い目を見るぞ」

「我等が無策で飛び込んできたとも思っておるのか」

神木から作られ祈りを捧げられた香木の香りによって力を抜かれ、巫女や僧兵のリユート、錫杖の音が物理的な圧力となつてのしかかってくる状態で、それでも憎々し気にバフォナ達が口を開いた。

「今に我等の仲間が目覚めるぞ」

精一杯の抵抗なのだろう。だが、国王軍の陣地に夢魔の種を宿した者が潜んでいるのも事実だ。

「さあ、それはどうかしら？ お前達が頼みの綱にしている者達は、すでに捕らえて種を抜かせて頂きましたわ」

「くっ……この！」

齒ざしりした少女の姿をしたバフォナが、地面に爪を立ててうめく。怒りにまかせて立ち上がろうとするが、その行為は無駄に締め付けを増やしたただけだ。

捕らえたバフォナ達を逃さないための布陣なのだろう。小さな結界を取り囲むようにしてエルキリユース神殿の巫女が、その外側を僧兵達を取り囲んでいる。

「き、貴様の養い子など、御主様の御力にかなうはずがない」

「さよう、今頃は御主様の前にひざまずき、命乞いをしているであろうよ」メルベリツサの気持を揺さぶろうと言うのか。夢魔達が口々に言葉を投げつける。しかしエルキリユース神殿の巫女を束ねる夢長は、顔色一つ変えはしない。

「残念ながら、お前達の思う通りにはいかないわ。あの娘は、ここにいる誰よりも強い。それが例え悪神アーカバルだったとしても、アイヒナを屈服させる事は出来はしないのですよ」

バフォナに向かつて、彼女は柔らかく笑んで見せる。その笑顔にイーギムは膝が震えた。何と迷いのない。

「なぜだ。なぜ笑っていられる？ どうしてそこまで言い切れる？我等が御主様は神ぞ。いかに神力を依らせる巫女だとて、人の子である夢織エルシヤりの娘が、かなう術などあるものか。それなのに、なぜ？」

最早、立ってられない。篝火に投じられた香木から漂う聖香、流れるリユートの音色、打ち鳴らされる錫杖の軽やかな金属音、謡いのように語るように発せられる神呪の言葉。それらが確実に、彼ら夢魔の自由を奪っていく。

「なぜ、と問うのですか？　ならば教えて差し上げましょう。人は神の創造物。弱きがゆえに神を求めます。しかしそれは、神も同じ事。全知にわずか足らず、全能よりわずか小さきがゆえに、神もまた人を求めるのです」

メルベリツサの声を聞きながら、結界の引かれた円陣の中でイーギム達は無様に這いつくばった。

「アイヒナは　あの娘は、生まれながらに神に愛される宿命を負った娘。いえ、神に愛でられるために、生を受けた子なのです。あの娘の魂の輝きは、いともたやすく神を魅了する。アイヒナの魂を見れば、どの神も必ず自身の巫女にと望むでしょう。それは、神々が争いを起こす程に甘美で、かつ物騒な誘惑でもあるのです。ですからエルキリユース神はドラムーナである閻姫と契約を結ばせ、あの娘の魂を縛り、全ての神々に等しくアイヒナに依る事を許されたのですよ。私の娘の魂が、どれ程強く神を惹き付けるか。それはお前達の方が良く知っているでしょう。彼の^かアーカバルでさえ、あの娘の魂の輝きが欲しくて仕方がないのですから」

手下のバフォナ数名は、高まる結界内の圧力に耐え切れず、まとっていた人の器を脱ぎ捨てて逃走を図ろうと試みたらしい。鼻や目口から溢れ出した粘液が寄り集まって、卑小なバフォナの本体をさらす。その瞬間を見逃さず、幾人かの巫女が細い筒をくわえた。鋭い呼気と共に吹き出されたのは、白く光る髪の毛程の針だ。ウィルカの街でウエインが夢魔を捕らえる時に使ったモノと同じだろう。

数本の針をその身に受けたバフォナの本体は、わずかの間体を痙攣させてから動きを止めた。

「私はあの娘を、いえ、あの娘の心を厳しく律する事が出来るように育てたわ。神に愛されると言う事は、人には疎まれ易いと言う事よ。生きて行くには不必要な、重すぎる運命だわ。だからこそ、己に傲^{おご}らぬよう、己に負けぬように育てたわ。傷付いても自分の足で立てるように、大事に思う誰かを守るように、と」

そう語ったメルベリツサの顔は誇らしそうでもあり、また寂しそ

うでもあった。

母として娘を育てながらも、夢長として夢織りの巫女を導く立場でもあったメルベリツサにしか解らぬ、心の葛藤なのだろう。

「生きて行くには不必要な運命か……。バカらしいな、神のために生きるなど」

顔をひどくしかめて、イーギムは弱々しく吐き捨てた。腕も足も震え、体を支えているのがやつのようだ。

「そうね、そうかも知れないわ。でもあの娘は今、神のためではなく、自分のために自分の足で立っている。閻姫と言う最高のパートナーと共に、大切なモノを、大切な人を守るために戦っているわ。私は私の娘を信じます。あの娘が負ける事は決してない、と」

オニキスで飾られたエルキリユース神殿最高位を示す錫杖が、高々と掲げられる。磨き込まれた宝杖の表面を、篝火の光が流れるように伝う。メルベリツサの手の動きに合わせて、イーギムの視線も上へと移動する。

「認めなさい、バフォナ。今宵ここでの戦いは、私達人間の勝ちです。なにせ、この老いばれの策略にはまって、自らワナに飛び込んで来たのですからね」

イーギムを見つめたまま、夢長は空いている手で空中に印を切る。エルキリユース神の印を。

「ふん 聞いていたのか。案外、根性が悪いな」

四肢から力が抜け、地面に倒れ込む寸前。若い夢魔は微かに笑った。

「ええ。そうでなくては、やっていけないんですもの。お前達、イーギムを見据えるメルベリツサの目が、スツと細まった。掲げた錫杖を、力一杯に地へ打ち付ける。

一際高く、一際澄んだ音が、陣地内を駆け巡った。

「人間をナメ過ぎですわよ」

29章 カーティ・秘された過去（前書き）

邪神との戦いの最中、トウージュは語り出す。

アーカバルに器として体を奪われたカーティの過去。

魂国内に病が広まった本当の理由を。

29章 カーティ・秘された過去

顔の半分を醜く焼かれた姿で、アーカバルがユラリと立ち上がる。
「よくも　よくも神である我の顔に傷を　」

ふらつきながらも邪神と対峙しようとするアイヒナをかばい、トウジユが歩み出た。

「カーティ、聞こえるか？」

彼が声をかけたのはアーカバルではなく、彼の神に器とされた女性。

「カーティだと？　貴様の声など届くはずもなかるう。この娘の魂など、とうの昔に滅しておるわ」

憎々しげに言葉を投げつけてくるアーカバルに、トウジユは鋭く怒鳴った。

「うるさい！　お前に用はない。俺はそこにいるホステルの工匠バックスの娘、カーティに話をしてるんだ！」

なぜだろう。トウジユの言葉に、アーカバルの動きが止まったような気がした。

「聞くんた、カーティ。いや、聞いてくれ。ホステルに行つて、君のお父上の事を調べて来たよ。ギルドでお父上と一緒に働いていたという方から、話を聞いた」

背中にアイヒナをかばいながら、トウジユは話を続ける。

匠都ホステルの老人は、トウジユに語ってくれた。

かつて工匠ギルドの中で「名人」「天才」の称号を欲しいままにした男がいた。男の手にかかれれば、どのような原石であれ美しく姿を変える事が出来た。実際、他の者がクズ石として見向きもしなかった原石を組み合わせ、誰もが目を見張るような品物を作り上げた事もあると言う。

男は実に勤勉で、日々研鑽を怠らなかった。性格は穏やかで人望

も厚く、近所の人からもギルドの仲間からも慕われた。

だが男が真面目に働き、信用を得れば得る程、その台頭を快く思わぬ者達が現れ始めた。工匠ギルドを仕切っていた者達である。

当時ホステルの工匠ギルドは、一部の世襲制組合員達が実験を握っており、玉石の仕入れ価格や加工品の取り引き価格を操作し、私腹を肥やす輩も多かったようだ。

そんな中で、男の真面目な働きぶりで見事な加工の腕前から、ギルドの役員にと推す声が挙がり始めた。もしも男がギルドの中枢に入り込み、実権を得たとしたら。工匠達に人望の厚い男の事である。自分達の地位は危うくなるかも知れない。そうならば甘い汁を吸う事も出来なくなるだろうし、下手をすれば不正がバレてギルドを放逐されるかも知れない。

役員職に就いていた者達は、密かに男を陥れる計画を練り始めたのだ。

そんな折、名人と名高い男の許にある注文が舞い込んだ。

『国王と王妃の玉座に、対となる宝飾品を作って欲しい』というものだった。

男の作った玉石飾りを目にした国王が、作りの繊細さ、加工の美しさをいたく気に入り、直々に注文してきたのだ。男は突然の話に大層驚きながらも、身に余る光栄だと注文を引き受けた。この事が、男の運命を決定づけてしまったのだ。

本来であれば、仕事の受発注は全て工匠ギルドを通す仕組みになっている。だが国王からの注文は、ギルドを通さず直接男の所へ持ち込まれた。並みの相手ではない。この瑰国の国王なのだ。従来のやり方を無視したからと言って、文句のつけようもない。しかしその事が、男の失脚を虎視眈々《こしたんたん》と狙っていたギルドの役員達に、かえってつけ入る隙を与えてしまったのだ。

男は吟味に吟味を重ね、手に入る中で最も質の良い玉石を選び出し、持てる技を全て駆使して素晴らしい細工を作り上げた。

極上の原石から二つの玉を削り出し、金銀を使い、紅玉、ルビー、碧玉、サファイヤ

緑柱石ペリルを用いて、美しい雌雄の鳳凰を象った細工。ホステルの、いや魂国の誰にも真似できない仕上がりだった。

品物を王宮に献上する期限が間近に迫ったある日、男の家に工匠ギルドの役員と司法官直属の黒官こっかんがやって来た。献上するはずだった品物を取り上げ、黒官は手にした書簡を読み上げる。内容は『横領罪』。王宮から支給された金を着服し、質の劣る玉石を使ったというものだ。王族に対する『不敬罪』。国王をだまそうとした罪。

男には身に覚えのない事ばかりだった。彼は必死に自分の無実を訴えたが、聞き入れられる事はなく、罪人として投獄された。ギルドの掟で、罪を犯した工匠は二度と道具を持てぬように、利き手を潰される。男も掟に従い、右手を使えぬように潰されて牢に入れられてしまった。

男の作った細工は、ギルドの役員達によって王宮に納められた。男の名は一切出されず、手柄全てを自分達のモノとして。

『横領』は役員達がデッチ上げたもの。仕事に必要な書類を捏造ねつぞうし、男を罪に陥れたのだ。注文が工匠ギルドを通したものであるなら、多くの目が書類をチェックする。いくら役員達であっても、勝手に内容を操作する事は出来なかっただろう。男の許に直接持ち込まれたものだったからこそ、相手にもつけ入る隙があったのだ。

依頼を受けた男ではなく、ホステルの工匠ギルドから品物が献上された事について、王宮内でも様々な憶測が飛び交った。だが王宮と云えども、ギルド内の事柄に軽々しく口を挟むことは出来ない。それ程までに、ギルドの持つ力は大きかったのだ。結局、真相が明らかにされぬまま、珠春宮しゅしゅんぐうの二つの玉座には双子の玉石を抱いた鳳凰が飾られる事になった。

一方、男は獄中から無実を叫び続け、男の妻も夫の無実を信じて何度も黒官の許へ赴いた。だがそれらの訴えはことごとく黙殺され続け、投獄は五年に及んだ。

自分を疎ましく思う者達の策略にはまった男は、過酷な牢内の生活で体調を崩し、獄中で病死した。病に倒れても医師も薬師も呼ぶ

事は許されず、死して尚、埋葬する事さえ許されなかった。男は誇りと尊厳を剥奪されたまま、獄中で無念の死を遂げたのだ。五年間、夫の帰りを待ち続けた妻も心労がたたって体調を崩し、そのまま回復する事無くこの世を去った。

しかし、一家の災難はこれで終った訳ではなかったのだ。罪人の家族と言うことで、妻の遺体も墓地へ埋葬する事を拒まれ、夫婦共に荒地へ放置される事となってしまった。

夫婦には一人娘がいた。美しく育った娘は夫婦の自慢の種でもあった。一人遺された娘は両親の無念を思い、自分だけで父母を荒地に埋葬した。健気に生きようとする娘の心を打ち砕いたのは、やはりギルドの者達だった。無理矢理に娘を屋敷へ連れ込み、困い者にしようとしたのだ。

激しく抵抗する娘に、相手は笑いながら告げた。

『お前の父親は、自分達の策略によって死んだのだ』と。

『力のない者は、力ある者に黙って従っていれば良いのだ』と。

『力を持たぬ者が台頭しようとするから潰されるのだ』と。

それらの言葉の一つ一つが、娘の心を打ち砕いた。怒りと絶望に支配された娘は、相手の隙を見て屋敷を抜け出し、ホステルの街から逃げ出した。

「その後、娘の姿は匠都ホステルから消え、再び人前に姿を現した時には、以前とは全くの別人となっていた」

トウージュの長い語りが終わった。アーカバルは動かない。不思議とその顔には、何の感情も浮かんでいないように見える。

「トウージュ その娘というのは？」

背中からかけられたアイヒナの問いには答えず、トウージュは真っ直ぐに邪神を見た。いや、正確には邪神アーカバルに魂を奪われた哀れな娘を。

「無実の罪でこの世を去った男の名は、バンクス。匠都ホステルで、いや、瑰国で一番の工匠と謳われた男だ。妻の名はティニー、娘の

名は　カーティ。父親譲りの砂色の髪と母親譲りの美貌の持ち主だ」

バンクスの名が出た瞬間、アーカバルの　器であるカーティの眉がわずかに動いたような気がした。

「何のつもりかは知らぬが、もはや手遅れよ。この娘は強く『力』を求めた。無力であつたがために命を落とした両親を思い、自分達を陥れた仇を思い、我に力を求めたのだ。その見返りとして、己が魂を我に捧げ、我が器となつたのじゃ」

傷を逃れた朱唇がアーカバルの言葉を紡ぐ。だが、なぜだろう。声に焦りが滲んでいるように感じるのは、気のせいか。

「聞いてくれ、カーティ。お前の父、バンクスが作つた細工はそこにある。二つの玉座を飾っているのが、お前の父が丹精込めて作り上げた生涯最高の一品だ」

カーティの目が、顔が、首が、体が、そろそろと背後の玉座を確認するように動く。

「バンクスに飾りを作るように命じたのは、俺の父である前国王だ。バンクスが捕らえられたと聞いた時、父はこう言った。『このように繊細で美しい物を生み出す腕を持つ者が、金に目がくらむが如き浅ましい罪を犯すはずがない。きっと何かの間違いだ』と。俺と兄は確かにそう聞いた。バンクスが獄中で病死したと言う噂を耳にして、とても残念がつていたよ。国の財産である貴重な工匠を失つたと。俺達に、出来るならバンクスの名誉を取り戻してやって欲しいと」

懸命に訴える瑰国の王弟に、アーカバルは悪意に満ちた言葉を投げ付ける。まるで己の声によって、トゥージュの声を聞くまいとするかのように。

「もう遅い、遅いのじゃ！　今さら何を語つたところで、この娘の両親も、この娘も救えはせぬ。この娘は我を目覚めさせた時から、我が器となる運命であつたのじゃ！」

「うるさい、黙っている、アーカバル！　お前には用はないんだ。

俺は今、カーティと話をしていると云っているだろう。引っ込んでろっ！」

トウージュのあまりの剣幕にか、アーカバルは言葉を飲み込んだ。「バンクスに罪を陥れた工匠ギルドの者達は、すでにこの世にいない。金で丸め込まれていた官吏もだ。お前が一番憎く思っている者達は、眠り病の最初の発症者だ。眠り病の実態を掴むのに時間がかかったせいで、最初の発症者を見つけるのに手間取ってしまった。もっと早くこの事に気付いていれば、お前にも早く教えてやれたのに」

玉座をながめていたアーカバルの気配が、トウージュに集中する。次の言葉を待っているのだ。

「ギルドを牛耳っていた役人達がなくなった事で、街の住人はようやく自分達の思っていたことを実行に移す事が出来た。住人達は知っていたんだ。バンクスが罪を犯していないって。だが、表立って何かしてやる事は出来なかった。どうにかする事で自分達に火の粉が降りかかるのを怖れたせいもある。だけど人々が行動を起こして、バンクス一家をさらに苦境に追いやる事だけは避けようとしたからだ」

「ソナノハ 嘘ダ」

朱唇が開く。が、そこから聞こえてくる声は、これまでのアーカバルのものとは違っていた。

「嘘ダ 信ジナイ ソナ事」

アーカバルのものでは、あり得ない。半分爛れた顔を引きつらせて、目を見開いている邪神の姿。己の口から出た言葉に、一番驚いているのはアーカバル自身なのだ。

「誰も 助ケテクレナカタ。父サンモ母サンモ 何モシテイナイ
ノニ。誰も 信ジテクレナカタクセニ！」

血を吐くような叫びは、誰にも受け止めてもらえなかった、カーティの本心。

「ミンナ壊レテシマエバ イインダ。コンナ世界ナンテ ナクナッ

「デシマエ！」

「本当に、それでいいのか？ 全部壊れてしまったら、お前の父バックスが残した飾り細工もなくなってしまうぞ。この飾り細工だけじゃない。バックスが心血を注いで作り上げてきた全ての物が、この世から消えてしまうんだ。それはお前自身が、父親の生きてきた全てと誇りを否定するって事じゃないのかっ！？」

叩きつけられたトウージュの言葉に、カーティの瞳が揺らぐ。

完全にアーカバルに奪われ、消え去ったと思われていたカーティの意思が、そこには存在していた。邪神の強大な力によって心の深い闇の奥底に押し込められていた、バックスの娘カーティの意思が揺り動かされて浮上したのだ。

「父サンヲ 否定？ アタシガ？」

「父はバックスの無実を信じていた。ホステルの領主に命じて、真相を明らかにしようとしていたんだ。だが時が足りずに、バックスを牢から出すには間に合わなかった。それについては、本当に申し訳なく思っている」

言葉を切ると、床に片膝をついて深々と頭を垂れる。右の拳を左肩に当てて、目を閉じる。最大の恭順と謝意を表す姿。しかもその姿勢をとっているのは、魂国の王族。世に並ぶ者なき、一国を統べる国王の弟が民の前に膝を折っているのだ。

「トウージュ……」

驚きにアイヒナは息を飲む。王族が膝をつく姿など、一体誰が思い描いただろうか。

「工匠バックスの娘、カーティよ。前国王、当代国王に代わって詫びる。父母の無念を晴らしてやるのが遅くなってしまって、申し訳ない。済まなかった」

カーティの体がグラリと傾いだ。

「お前の父母の亡骸は、ホステルの街の者達によって手厚く葬られた。工匠ギルドのギルド長を始め、バックスの罪をでっち上げた者達の名前は館の壁から削り取られ、そこに新しいギルド長の名前が

彫られた。名匠バンクスの名前だ」

「父サンノ 名前。ぎると長トシテ 。父サンノ名誉ハ 誇リハ 守ラレタノ？」

「そうだ。冤罪によって剥奪された全てのものをバンク스에返そう。今となつては、遅過ぎるのだが……」

静かに頭を下げたまま、トウージュはカーティに告げた。

「お前の父を陥れた者達は、すでにこの世にいない。共謀して金をもらっていた黒官も、眠り病によって命を落としている。あとは、誰の命が欲しい？ あとどれだけの命を奪えば、お前の気が済むんだ？」

カーティは口をつぐむ。膝をついたまま、トウージュは顔をあげて鋭くカーティを見た。

「俺は一人の少年を知っている。彼は父親と姉を目の前で失った」

トウージュの話を黙って聞いていたアイヒナの脳裏に、ある少年の姿が浮かんだ。彼女自身が少年の父親と姉の命を絶ったのだ。忘れられるはずがない。

「ウェイン……」

彼の父親と姉に取り憑いていたバフォナはあまりにも深く巢食つていて、アイヒナと閻姫の力を持つてしても、切り離す事は出来なかった。すでに二人とも、心を食い尽くされた後だったのだ。

「その少年も一人になってしまった。だが彼は、父親と姉を斬った者を許したよ。本当に悪いのは、本当に許せないのは、この世に夢魔^{オナ}を放った者だつてな。確かにアーカバルはお前の恨みを晴らしてくれただろう。だがそのために、自分と同じように親を亡くした子供達を増やして、満足か？ まだ増やし足りないのか？ お前が父親を死に追いやった連中を憎んだように、親を失い、子を失い、恋人を失った者達がお前を恨み、お前を憎む。お前の中のアーカバルをじゃない。砂色の髪^{ハヅレ}の薬師・カーティを、だ」

容赦のないトウージュの言葉がカーティに迫る。揺れる砂色の瞳から、透き通った涙が転がり落ちた。

「私ガ　アノ連中ト同ジ事ヲ？　私ト同ジヨウニ　悲シム子供ヲ？」

震える両手に顔を埋める。

「もうやめるんだ、カーティ。泣けるのなら、涙を流せるのなら、お前にはまだ人の心が残っている。これ以上、自分と同じような人間を増やさないでくれ」

薔国の王弟は膝をついた姿勢のまま、再び深々と頭を下げた。

「やめろ、やめるんだ、カーティ！　そなたを見捨てた者達の言葉を聞くのか。我はそなたに力を与えたではないか。そなたが望んだからこそ、そなたの仇を討つ手助けをしたのじゃ。そなたの真の味方は我だけじゃ。他の者の言葉なぞ、聞くのをやめるのじゃ、カーティ！」

両手に覆われたカーティの唇から、彼女のものではない声がこぼれた。焦りに満ちた、邪神アーカバルの声。

「工匠バンクスの娘、カーティ。邪神に魅入られた、哀れな娘よ。俺はこれから先も、お前達一家の事を忘れない。兄王も義姉上も、玉座の飾りを見るたび思い出すだろう。この薔国の玉座を継ぐ者にバンクスの名と誇りを語り継ごう。この国一番の名匠と謳われた男の事を」

ゆっくりとカーティが顔をあげる。不思議な事に、その顔に醜い傷はない。白く美しい、カーティ本人の顔。涙に濡れたその面を仰向けて、謁見の間の天井へ視線をさまよわせる。いや、そうではない。彼女の目は天井も屋根も通り抜け、星々の輝く天上を見ているのだろう。

「やめよ、カーティ！　私の力を捨てると言うのか？　世界を呪うのではなかったのか？　カーティ！」

「モウ　イイノ。父サンノ誇リガ　守レルノナラ。私ト同ジ想イヲ　コレ以上サセタクナイノ」

穏やかな表情で、そっとカーティが答える。

「ゴメンナサイ。ドレダケ言ッテモ　足りナイダロウケド　ゴメン

ナサイ」

わずかに視線を動かしてトウージユを視界に収めてそれだけを告げると、両手を天に差し伸べた。

松明の灯りが揺れる薄暗い空間に、青白い光が差し込む。新しい一日の始まりを報せ、闇夜を追いやる払暁ふつきょうの光にも似たそれは、窓などないはずの謁見の間に満ちる。清い光に照らされて、カーテイの姿が二重写しのようにブレた次の瞬間、室内の光量は元に戻っている。大理石の床に影を落とす。松明の炎。アイヒナと闇姫とトウージユ、そして。

砂色の髪を持つ美女が立っていた場所には、自分の手を見下ろしている黒い髪の男。関節の壊れた人形のように、妙にギクシャクとした動きで三人の方へ向けられた顔は、半分が醜く焼け爛れていた。溢れんばかりの憎悪を湛えた瞳は、鮮血の赤。

30章 パーティルローサ・聖と邪の真実（前書き）

なぜ、アーカバルは執拗にアイヒナを追い求めるのか？

邪神が本当に求めたものは、何だったのか？

そして、アイヒナがトゥージュにひた隠す「真実」とは？

30章 パーティルローサ・聖と邪の真実

「アーカバル……」

カーティと言う肉体の器を失って、ようやく邪神の本体が姿を現した。

「傷と苦痛までは持つて行つては、くれなかつたようだ。もっともその傷は、お前の魂に刻まれたものだ。他の誰も身代わりにはなれない」

ユラリと足を踏み出したアーカバルに、アイヒナが言葉を投げかけた。立ち上がったトゥーージュをかばうように、今度はアイヒナが前に出る。

「我から器を剥ぎ取るとは、な。それも、何の力も持たぬ人の子が、言の葉だけを頼りにやつてのけるとは。どうやら我は『人間』という存在を、過小評価していたらしい」

「ああ、そうだな。お前は人間の力を知らな過ぎる。人は何も出来ぬ存在だと、決めてかかっていただろう？」

邪神からかけられた言葉に、トゥーージュはニヤリと笑つてみせた。「認めよう。人間とは何の力もない、卑小なモノだと思つていたは、我の間違いであつた。だが、あまりいい気にならぬ方が良くぞ。我から器を奪つた程度で勝つた氣になつておると、痛い目を見るからの」

傷を隠す事もなく、崩れた顔を歪めてアーカバルは嘲笑う。

「そんな事、思つてはおらぬよ。トゥーージュ殿がここまで頑張つてくれたのじゃ。これより先は、吾と主殿の仕事よ」

黒髪をつねらせ、鋭い犬歯を覗かせながら闇姫がうなつた。

「トゥーージュ……」

視線をアーカバルから逸らさず、背後にいるトゥーージュにアイヒナは声をかける。

「おいおい。ここまで来て、逃げるとか言つのはナシだぜ」

聞こえてきた返事に、クスリと笑う。

「まさか。だが危険な事に変わりはない。私から離れるなよ」

「ああ、ずっと側にいるさ」

背中から温かい何かが、体の中に流れ込んでくるような気がした。大丈夫だ。自分はまだ、立っていられる。大切な者を守るためなら、自分はどれだけでも強くなるう。

「さあ、始めよう、アーカバル。器を失ったお前も、そう長くは世界に留まっではいられないだろう」

先程アーカバルの爪に貫かれた左手の指を動かしてみる。ジクジクとした痛みがうるさいが、筋は傷付いていないようだ。これならば、印を結ぶのに支障はないだろう。

「閻姫！」

自身の相棒へ向かって右手を差し出す。主人の意志を汲み取って、閻姫は黒い剣に姿を変える。柄頭にはめ込まれた宝石が紅く煌めく。我を倒せると本気で思っておるのか？ 数ヶ月前ならばいざ知らず、今の我は夢魔達の集めた人の精を喰らうて、力を蓄えておるぞ。所詮は人の子であるそなたらが、神である我に適うはずもない」

何もない空間から巨大な剣を掴み出しアーカバルが不適に笑う。

出現した剣の刀身は、邪神の瞳と同じ血塗られた赤。閻姫の剣とは対照的に、柄頭にあるのは漆黒のオニキス。

「人の力を甘く見るのは、やめるんじゃないかったのか？ 最初から決め付けてかかるな。やってみなくては判るまい」

ドラムーナの剣を振って空を斬る。チャキツと音を立てて正眼に構えるアイヒナを見て、アーカバルも剣を握る手に力を入れた。

「実際に経験せねば、彼^{ひが}我の差を認識する事も出来ぬとは。その時点で既に、私の勝ちが決まったようなものよ！」

手にした巨大な赤剣を一振りすると、予備動作もなしにアイヒナに向かって間合いを詰める。

「あれ程、私のものになれと言ったに。頑なに拒むそなたが悪いのじゃ。私の意入れぬと言うのなら、他の誰かのものになるというの

ならばもう良い。手に入らぬのならばいつそ、我の手で壊してくれる！」

鋭く斬り込んで来るアーカバルの叫びは、なぜだかアイヒナには切なく響いた。頑是^{がんぜん}無い幼子が、母の手を求めて泣きじゃくるような。両の掌から零れ落ちた水を嘆く、砂漠の民の渴きにも似て。

刃を合わせるたびに、激しく火花が散る。黒と赤の刃が交わり、小さな雷のように火花が開くごと、石造りの謁見の間の温度が下がっていく気がした。

トウージュは知らず自身の肩を抱く。吐く息が白く曇っている。足許の大理石に冷たく霜が降りる。

「なぜじゃ？　なぜ、我を受け入れぬ？　なぜ、我を拒むのじゃ？」

振りかぶった剣をドラムーナの剣に叩きつけながら、斬撃よりも激しく問いをぶつける。

「お前の想いはな、アーカバル。相手の気持ちを完全に無視して、自分の言い分だけを一方的に押し付けるだけのものだろう！」

赤い刀身をかわし、防ぎ、相手の隙を見つけて黒い刃を繰り出しながら片手で印を切る。

「来たれ、月神^{リユス}。夜空を統べる光もて、剛き鎖を紡ぎ給え」

空を難^ないだアイヒナの剣から、白銀に煌めく細い鎖が幾重にも流れ出る。彼女の振るう腕に従って、アーカバルの手や剣に絡みつく。

「先程のようには、いかんぞ」

素手で易々と引き千切れそんな見かけを裏切り、その鎖は鋼の強さでアーカバルの動きを封じる。

「火神^{ネフティ}。炎獄の王よ　我に依りて力を顕せ」

月神リユスの白銀に染まったアイヒナの長い髪に、火神ネフティの赤が現れる。それに合わせて、剣を握るアイヒナの手に高温を示す青白い炎が生まれた。

「疾れ！」

夢織りの言葉を受けて、炎は白銀の鎖がつないだ道を疾る。

「見事なものだ。しかし、まだまだよ」

口唇を吊り上げて晒うと、片足で大理石の床を踏み鳴らしたアーカバルの影が大きく広がる。音もなく面積を広げた黒い穴から、アイヒナに向かつて無数の槍が飛来した。

「アイヒナッ！」

彼女の背後から、思わずトウージュが叫ぶ。

アイヒナは瞬時に判断し、迷わず月神と火神の力を切り離して印を組み直す。

「大地母神！ ^{インシュリン}世界を構築する女神よ！」

夢神に捧げられた巫女の髪の色が、目まぐるしく変化する。銀と赤に染まった夢織りの髪が、新緑の色に染まる。

見開かれた瞳に影槍が届く寸前。アイヒナの足許の大理石が盛り上がり、視界を遮った。鈍い音を立てて、大理石の壁が影槍を弾く。

「大地母神よ 我に加護あれかし！」

素早く印を結び、アーカバルの足許を指した。巫女の言葉に従い、邪神の真下、影の落ちていた部分が唐突に崩れる。一瞬バランスを失い下肢に力を込めたアーカバルの両足を飲み込み、大理石がガツチリと固まる。

「くっ」

動きの止まった邪神に向かって、アイヒナは上段からドラムーナの剣を振り下ろす。

謁見の間に鋼のぶつかる音が響き、幾多の火花が飛び散った。ギリギリと刃を合わせて、アイヒナとアーカバルの視線が交差する。

「なぜじゃ？ なぜに、これ程まで我を拒むのじゃ？ そんなにあの男が愛しいのか？ あの瑰国の王弟が、そなたの事をどれ程知っておると言っのじゃ？」

食い縛った歯の間から押し出すように、苦々しげにアーカバルが言う。

「ならばお前が、私の何を知っていると云っのだ？ 私の心の裡までも、お前に判るとも云っのか？」

返すアイヒナの声は静かだ。だが対照的に、腕にこめられた力は揺るがない。

「ああ、判るとも。我とそなたは、追いつ追われる者同士。まるで想い合う恋人のように、そなたの心は我が手の中じゃ。そなたが本心では神々を憎んでいる事も、瑰国の王弟に隠しておる事もな！」

わずか、ほんのわずかだけ、アイヒナの瞳が揺れる。

「そこな男はもう知っておるのか？ 夢織りよ、^{エルーシャ}そなたが子を成せぬ身である事を。神に愛されたと言えば聞こえは良いが、人とは違う体を与えられた、人とは相容れぬ存在ではないか！」

滴る悪意に満ちた視線を、心配そうな顔でこちらを見つめるトゥージユに向けた。

「人の子よ、瑰国の王子よ。お前は知っているのか？ お前の知る、この『アイヒナ』と呼ばれる者の抱える秘密を？ この夢織り^{エルーシャ}がひた隠す己の秘密を？」

「アイヒナの秘密？」

柱の陰にいたトゥージユは、アーカバルの問いに、いつか聞いた闇姫の言葉を思い出す。

『主殿が、お主に隠している事もある。だが主殿を信じてやって欲しいのじゃ』

自分はあの時、何と答えたか。

『心配するな。アイヒナはアイヒナだ』

腹に力をこめ、トゥージユはアーカバルをにらみつけた。

「見損なうなよ。俺は何があっても、アイヒナを信じると決めたんだ。お前の言葉ごとときで」

「己の想う者が、何者かも知らずにか？ 子を成せぬと言った、本当の意味が判っているのかや？ この者はな、夢神の娘にして息子、文字通り『性』を持たぬ者よ！」

力任せにアイヒナの黒剣を跳ね上げ、崩れた半顔を歪め、醜怪に嘲笑う。

「男であり女であり、男でなく女でもない。それが夢織りの、この

者の正体じゃ！ 神々に従う素振りを見せながら、その実、己から何もかもを奪い取った神々を激しく憎む。所詮は神の力を依らせるだけの器、ただそれだけのために生まれて来た者、人であり人でない者！」

三日月の形に唇を吊り上げ、悪意のままに赤剣を振り下ろす。室内に満ちる冷気が更に密度を増したような気がする。アイヒナの気が緩んだ一瞬の隙をつき、アーカバルは大地母神の戒めから逃れる。邪神の狂気をはらんだ剣を受けるアイヒナの腕がしびれる。剣戟けんげきを防ぐたびに、夢織りの体が重くなっていく。

いや、違う。体に受ける衝撃ではない。心に直接打ち込まれているのだ。アーカバルの狂気と悪意とが、彼女の心に流れ込んでくる。だが、それだけではない。もっと、何か。掴めそうで、掴めない。

「ならばなぜ、私の想いを拒む？ 創世の神々の力を依らせるための器ならば、神である我と我が力を受け入れよ！ そのためにこそ、そなたはこの世に生を受けたのではないか！」

「くっ。勝手な事を言うな！ 私の歩んで来た道は、私が決め、私が選り取ってきたものだ。お前にとにかく言われる筋合いは、ないっ！」

次々と印を組み、剣戟の隙を狙って水神や風神の力を発動させるが、激しく繰り返されるアーカバルの攻撃と、凍った床の予想以上の状態の悪さに苦戦する。

アイヒナと邪神の目まぐるしい攻防を視線で追いつつ、トウージュはもたらされた情報を処理しようと必死に頭を回転させていた。

『男であり女であり、男でなく女でもない』

それは一体、どういう人間なのだ？ 果たしてそのような者が、この世に生まれうるのだろうか？ いや、そもそも『人間』なのか？ 子を成せぬと言っただけならば、様々な理由があるだろう。現に兄コルウィンと義姉アイナセリョースの問題を間近に見てきたトウージュだ。理解が及ばない訳ではない。だが『性を持たぬ』とは、

どう言う事なのだ？

自身の理解の範疇を超えた事象に、トウージュは動く事が出来ない。ただ呆然とアイヒナの動きを追っているだけだ。

「それが……それが、アイヒナの隠していた秘密……」

無意識に思いが口を突いて出る。彼の言葉が聞こえたのか、どうか。わずか　ほんの一瞬だけ、トウージュとアイヒナの視線が交わる。

「　っ!？」

時間にして数秒。だがトウージュには無限の時間が流れたような気がした。

『姉巫女達に、神威の名を借りた化け物　と呼ばれておったよ』
闇姫の声が蘇る。

『何だよ、お前の方が化け物じゃないか!』

怒りのままに投げ付けられた、ウェインの声を思い出す。

『そう呼ばれる事には、慣れている』

旅の途中、トウージュに告げたアイヒナの、全てを諦めた寂しそうな顔。

今、彼と視線を交わしたアイヒナの顔は、あの時と同じ表情だ。トウージュが彼女にさせたくないと思っていた、させてはいけなかったと思っていた、あの寂しそうな哀しそうな顔を自分がさせてしまった。

夢も自身の人生も投げ出して、世界を守ろうと闘っているアイヒナを助けたいと、ひたすらに、傷付く事を厭わずに歩き続ける彼女の側にいたいと、そう思ったのではなかったか。何を迷う必要があるのだ？　誰よりも血を流して闘い、痛々しく傷をさらしてもなお、気高く立つアイヒナをこそ愛しく思ったのではなかったのか？

真上から振り下ろされたアーカバルの剣を防ぎ、力を流そうと体を開いた瞬間、凍った床でアイヒナの足が滑った。

「あつ　!？」

体制を立て直す間もなく、アイヒナが大理石の床に倒れる。

「我を受け入れよ！ さもなくば、ここで死ぬが良い！！」

薙ぎ払われた邪神の剣が、赤い軌跡を描いてアイヒナに迫った。

「アイヒナ！」

叫んだのが先か、動いたのが先か。

アーカバルの渾身の一撃を受け止めたのは、瑰国王弟の剣だった。ビリビリと全身が震える。少しでも気を抜けば、吹き飛ばされてしまいそうだ。

（こんなに重い剣戟を、彼女は受けていたと言うのか　？）

歯を食い縛って衝撃に耐えた。

勝利を確信し、喜びの色すら浮かべていたアーカバルの表情が、みるみる変化する。自分のモノだと思つて伸ばした手の先から、大切な宝物を奪われた子供のような。抱き締めてもらえると信じていた母親から、その手を拒絶された幼児のような。

「なぜじゃ？　なぜお前が夢織りを助ける？　その者は、お前とは相容れぬ存在。添い遂げたとしても、子を成す事は出来ぬのだぞ？　それでもお前は、男でも女でもない者を守ると言うのか？」

「さつきから聞いてりゃ、子供だの男だの女だのと、同じ事ばかりクドクドと。それが貴様の切り札か、アーカバル？　だったら残念だったな。俺は以前、俺の持てる全てにかけて閻姫に誓ったんだ。何があつても、アイヒナを信じる。自分の惚れた女を、守るつてな！！」

アーカバルの剣を弾き返し、にらみつけたままアイヒナに手を伸ばす。そつと掴まれた手を強く握り締めると、引き上げる。

「大丈夫か？」

「ああ、私なら大丈夫だ」

答えながら、アイヒナはトゥージュの横顔から目が離せないでいる。

「だけど、どうして？　私はトゥージュ殿にずっと本当の事を隠してて――」

「秘密を知ったからって、それが『アイヒナ』である事に何か差し

障りがあるつてのか？ 俺は一緒に旅をして、自分の目で見て来たアイヒナを信じるだけさ」

寄り添う二人の姿に、アーカバルがフラリと後退る。

「なぜ なぜじゃ？」

「神であるはずのお前にも、判らない事があるんだな、アーカバル」大切な夢織りの手を握ったまま、トウージュは邪神に言った。

「簡単な事だよ。俺はアイヒナを大事に想っている。それは、彼女の容姿とか力とか体の事とか、そんなモンは関係ないんだ。彼女が彼女である事、それだけなんだよ」

ヨロヨロと後退りながら、アーカバルは片手で顔を覆う。

「なぜ、誰も彼も我を拒む？ なぜ、我を愛そうとはせぬ？ 我の想いを、どうして受け入れてはくれぬ？ これ程そなたを求めておるのに、なぜ、何の力も持たぬ人の子を選ぶのじゃ？ 神である我ならば、そなたの願いを叶えてやる事も出来ようと言うのに」

「無理だ」

うわ言のように紡ぎ出されるアーカバルの言葉を、夢神の巫女は一刀両断にする。

「なん じゃと？」

「無理だ、と言ったのだ。お前には、私の願いを叶える事など出来はしない」

「わ、我は神ぞ。叶えられぬ事など……」

「私の願いは夢魔^{バフオナ}共と、その元凶であるお前がいなくなる事だ。これを叶えられるのか？」

「我がいなくなる事。それ程までに、我を拒むと言うのか？」

アーカバルの手から、巨大な赤剣が滑り落ち、床の上で虚ろな音を立てた。震える両手で顔を覆い、かすれた声を絞り出す。

「なぜ、誰も我を愛さない？ そなたまでも我を拒む。こんなにも、そなたを愛している我を！？」

血を吐く程の叫び。求めるものが永遠に手に入らぬと知った者の、絶望。親に置いていかれた幼児の、悲しみ。

「エルキリユースの巫女よ、夢織りよ。我を受け入れてはくれぬのか？ 我を愛してはくれぬのか？ 我が愛しき想い人よ」

顔から離れた両手を広げ、アーカバルはアイヒナに問う。それは懇願にも似て。

「そなたが望むなら、世界をやろう。我の支配する新しき世界で、神の花嫁として未来永劫、幸せに生きて行けようぞ。エルキリユースにより奪われたものの全てを、そなたに与えてやろう。夢も眠りも、女としての『性』も。そなたが望む事ならば、その全てを我が与えよう。我が許へ来よ、想い人」

何と言う甘い誘い。だが、かけられる言葉に乗った必死さが、アイヒナの頭をより冷静に冴えさせていく。

「お前がどれだけ甘言を弄^{もつ}そうと、その言葉は私には届かない。お前は、私が子を生めぬ両性である事を神々の呪いの如くに言うが、人として幸せになれる方法を私は知っている。私を育ててくれた義母メルベリツサが、その身をもって教えてくれた。神殿の前に捨てられていた私を、自分の娘として育ててくれた。己の生んだ子ではなくとも、慈しむ心は同じと愛を注いでくれた義母の姿を思えば、我が身の事など、どれ程の事があるのか」

静かに開かれたアイヒナの手から、音もなくドラムーナの巨剣が滑り落ちた。彼女の影に突き立った黒剣は、そのまま影に沈む。柄頭の紅玉が影に沈んで数秒。アイヒナの影から現れたのは、黒髪に紅眼の闇姫だ。

「私はもう、お前の言葉に惑わされたりしない。お前の言葉は全て、お前自身を鎧うためのものだ。お前が求めたのは、私の愛でも心でもない。自分の力を効率良く使うために、私と言う器が欲しかっただけなんだ」

アイヒナとアーカバルの言葉のやり取りを聞いていたトゥージユは、少しだけ違和感を感じる。

邪神が夢神の巫女をあんなにも欲したのは、本当に『器』としてだけなのだろうか？ 彼には、もっと何か違う気がした。

「違う！ そうではない！ 我は、そなたをこそ欲しているのじゃ。なぜ、我を見ようとせぬ？ どうして誰も、我を愛してはくれぬのじゃ！？」

アーカバルの絶叫。そしてトゥージュは理解する。確かに。
「確かにお前は、アイヒナを愛している」

唐突なトゥージュの言葉に、アイヒナもアーカバルも同様に驚きの視線を超越す。自分でも判らない衝動のままに、トゥージュは言葉が続けた。

「確かにアーカバルは君を愛しているんだよ、アイヒナ。でもそれは、やはり歪で間違っている。アーカバル、お前の愛は自己完結しているんだよ。愛してもらうために愛するのは、結局のところ、自分しか愛してないって事だ」

「愛してもらうために 愛する？ どういう意味だ、トゥージュ殿？」

「簡単な事だよ。そう、簡単な事だったんだ。こいつは最初から、ずっとそう言っていたんだから」

呆然と立ちすくむアーカバルに、トゥージュは語りかけた。不思議と、神と対峙しているという意識はなかった。今、目の前に立っているのは、不器用な愛を口にする一人の男だ。

「アーカバル。お前は方法を間違えたんだ。人は誰しも、好きになって欲しいからって好きになる訳じゃない。誰かを好きになるのに、理由も理屈も必要ないんだよ。相手の生き様に触れ、感じる事で心が揺れたら、それが好きだって事だ。好きな相手には、好きになって欲しい。それは真実だ。だが、最初から自分の気持ちを押し付けるお前のやり方では、誰の心も動かす事は出来ない」

自分の愛した人が自分を見てくれたら嬉しい。誰でもない。自分だけを見て欲しい。そう思うのは当たり前だ。

「皆なあ、自分の好きな相手に好きになって欲しくて、自分を愛して欲しくて、努力するんだ。お前はアイヒナの事を想っているとか、愛しているって言うが、彼女に想いを返してもらっただけの努力をし

たのか？　ただ自分の想いだけを一方的にぶつけて、何の努力もせず、それでいて彼女が自分を愛してくれないと責めるのか？」

「うる　さい。うるさい、黙れ！　黙れ、黙れ、黙れええつ！」

トウージュの言葉に追い詰められたのだろう。髪を振り乱して、アーカバルが叫んだ。焼け爛れた半顔を醜く歪め、血のように赤い瞳から滂沱^{ぼった}の涙を流し、アーカバルは身悶える。

「我はいつも一人だ。誰も、我を必要としない。誰も、我を見ようとせぬ。誰も、我を愛さぬ。我を認める世界など、いらぬ！　我を受け入れぬ世界など、壊れてしまえ！」

世界を呪う言葉を吐き続ける邪神の姿は、溢れ出した狂気に彩られ、陽炎の如くに揺らめいて見えた。

だがアイヒナには、孤独に震える幼い子供に見えた。道を見失い、途方に暮れた子供。

「壊してやる、このような世界！　我を受け入れぬのなら、我がこの手で壊してやるまでだ！」

アーカバルの全身から、黒い霧が噴き出した。渦を巻く邪神の瘴気が、謁見の間に広がっていく。空気中の水分が凍ったものだろう。アイヒナ達三人の体に氷の礫^{つぶて}が容赦なく打ち付ける。

「主殿、吾を……」

閻姫がアイヒナに訴えるが、視線だけでそれを制する。髪を逆立て、血の涙を流しながら、世界を呪う言葉を吐き続ける邪神を見つめる。

飛来する氷の礫によって、アイヒナの衣は引き裂かれ、白い肌にいくつもの傷をつけた。物質的な力を持って荒れ狂う瘴気は膨れ上がり、パーテイルローサの建物全体がビリビリと音を立てて揺れる。その中心でアーカバルが叫ぶ。

「我はただ、誰かに愛して欲しかったただだ。誰かに見て欲しかったただだ。それすらも叶わぬと言うのなら、世界などいらぬ！　この次元、この宇宙にある全ての世界を滅してくれる！」

だがその姿は、しゃがみこんで泣きじゃくる子供のように、アイヒナには見えた。

「アーカバル、愛を知らぬ子供よ。道を違えた、もう一人の私よ。義母がいなければ、閻姫がいなければ、そしてトゥージュ殿がいなければ、きっと私も世界を呪っただろう。全てを奪われ、さらに己の進むべき道までも決められ、神々を呪ったまま身も心も怪物に成り下がっただろう。私の目の前にいるお前は、愛を得られなかった、もう一人の私だ」

荒れ狂う氷礫と瘴気の渦の中心へと歩みを続けるアイヒナに、トゥージュは警戒の声をあげた。

「駄目だ、アイヒナ！」

険しい視線で彼女を見つめるトゥージュに、そつと微笑みを返す。「大丈夫だよ、トゥージュ殿。アーカバルは私を傷付ける事は出来ても、命を取る事までは出来ない。私とアーカバルは、同じカードの裏表。絶対に向かい合う事のない裏と表の存在だからこそ、アーカバルは私を求め、私はアーカバルを憎んだ。私にこの運命を与えた神々を憎んだのと、同じだけの強さで」

再び邪神へと歩み寄るアイヒナに手を伸ばしかけ、それを閻姫に止められた。

「主殿の好きなようにさせてやってくれぬか、トゥージュ殿よ」

「だが、閻姫」

紅玉の瞳が、何とも言えない色を湛えてトゥージュを射た。

「もう、吾にもお主にも止められぬ。アーカバルを何とか出来るのは、主殿だけじゃ。悔しいが、吾も見ておる事しか出来ぬ」

そう。自分などより、閻姫の方が何倍もやり切れぬ思いだろう。ドラムーナである閻姫の使命は、バフォナを滅する事であり、アーカバルを倒す事。主であるアイヒナを守り、支え、武器となる事。主のための盾にも剣にもなれぬ現状は、彼女にとってどれ程苦しい事が想像に難くない。朱唇を噛み締め、拳を震わせる閻姫の姿にトゥージュは返す言葉を持たない。

「闇姫」

そんな闇姫に向かって、アイヒナが後姿で語りかけた。

「今まで私に付き合ってくれて、本当にありがとう。感謝しているんだよ」

「主殿、それではまるで、今生いそごひの別れのように聞こえるぞ」

「そうか？ 大丈夫だ。心配するな。まだ、この生を手放す気はないからな」

笑いを含んだ声で答えると、わずかに背後を見やって続けた。

「トウージュ殿、貴方にも礼を。貴方の言葉で、私にもようやく理解出来た。目の前にいるのは、愛を知らないもう一人の私なんだと。貴方が信じてくれたから、私は道を違えずに済んだ。ありがとう」

止める事なく進められたアイヒナの足は、アーカバルの正面にあった。流れる銀の髪は邪神の巻き起こす瘴気にあおられ、おどろに乱れている。氷の礫に裂かれた肌には、数多の傷が開いていた。

天を仰いで世界を呪っていたアーカバルの赤眼が、エルキリユースの巫女を捉える。

「邪神と呼ばれ、この世の愛を欲しながらも拒絶されし者よ。お前の心は、余りにも幼いのだな」

「何が言いたい、夢織りよ？」

狂気を宿したアーカバルの瞳が、アイヒナの金色の瞳をにらみつけた。だが、そんなアーカバルに臆する事なく、彼女はさらに一歩近寄る。

「寄るなっ！」

真正面から自分に向かってくる夢織りに気圧されたのか、アーカバルが退く。

「何を恐れる？ 私が欲しいのだろう？」

息を詰めて見守るトウージュと闇姫の目の前で、アイヒナとアーカバル、二人の闘いの結論が出ようとしていた。

31章 オーガスベル・戦いの果てに（前書き）

自分が追い詰められた事を悟った、サマル・ビュイク・ノーヴィア。それでも国王軍に一矢報いんと、反撃を試みるが。

一方、コルウィン率いる国王軍も決着を着けるために、反乱軍に猛攻をかける。

31章 オーガスベル・戦いの果てに

湿地帯を抱えるオーガスベルの朝は、立ちこめる靄の中で始まる。白々と夜が座を退くと、一帯に漂う靄は青みがかつた灰色へと変化する、やがてボンヤリと周辺の景色を映し出す。太陽がすっかり顔を出すと、地を這うように漂っていた乳白色の靄も徐々に薄れ始める。その様子をながめているのは、瑰国王に叛旗を翻したサマル・ビユイク・ノーヴィアだ。

陣営の中心に設えられた天幕から出ると、明けゆく空を見上げている。

「閣下」

背後から一人の兵士が声をかけた。

「イーギム殿と数名の者達が、夕べから戻ってきておりません。また、イーギム殿が編成されていた各地より召集致しました者達に、異変が起こっており、兵達が動揺しております。いかがいたしましたでしょうか？」

不安で上ずった声で告げる兵士に、サマルは何も言わずに視線を寄越した。

「閣下、イーギム殿が……」

聞こえておる。良い、下がれ」

「しかし、閣下！」

「うるさい！ 下がれと言ったのだ！」

酒で焼けた声を張り上げ、サマルは兵士を怒鳴りつけた。

不満と不安を顔中に貼り付けた兵士がその場を去ると、サマル・ビユイクは長々とため息を吐いた。

「カーティもイーギムも、我が元を去ったか。所詮は愚かしい夢を抱えて、奴等の手の平の上で踊らされていた、道化者だったと言う事よ」

生まれ立ての太陽が中天にかかれば、全軍を動かして国王軍と戦

わなくてはならない。コルウィンに付き従う兵達は国を愛し、王を敬う者達だ。しかし、自分に従う者とは言え、カーティにより恐怖で縛られた貴族連中と、その私軍。そしてイーギムを始めとする異形、異能の者達。

天の采配は、国王コルウィンに利があるように思えた。しかも相手には、国中の各神殿から僧兵までもが援軍に馳せ参じているのだ。瑰国の王位というものは、サマルが考えているよりも、はるかに強固で神聖なものだったという事か。

「だがしかし　だからと言って、この戦いを退く訳にはいかん。どのような結果になろうと、あやつに一矢報いずにおられようか」
平原を挟んで対峙する国王軍の陣地をにらみ、しわがれた声で吐き捨てる。

「陽が中天に達するまでに、軍議を始める。主だった者達を集めよ！」

平原から目をそらすと、声を張り上げた。

こうしていても始まらない。自らが仕掛けた戦なのだ。勝つための算段をしなくては。戦いに勝たなくては、意味がないのだ。

時間は、さほど残されてはいない。

同じ頃、国王軍の大天幕でも将校達がオーガスベルの地図をにらみながら、打ち合わせの最終段階へ入っていた。

羊皮紙に写し取られたオーガスベル平地の両岸には、黒と赤に色分けされた駒が配され、国王軍とノーヴィア軍の陣形を表している。斥候からの報告をもとに、ノーヴィアの軍勢を示す赤い駒を動かして行く。オーガスベルの平地を挟んで、湿地帯の脇に歩兵隊や重装備の兵士、騎兵隊を配しながら、前面を槍兵隊で固めている。

それらの陣形を指し示しながら、ライナスが作戦を説明した。だが、ライナスの言葉を聞いた将校や將軍達の顔に、戸惑いの色が広

がった。

「怖れながら、元帥閣下。そのような作戦は、これまでに聞いた事
がありません」

將軍の一人が控え目に口を開いた。

「それに今のお話ですと、平民達を戦闘に参加させる事になります。
私としては、経験のない者達にそのような重大な局面を任せるのは、
いささか軽率に過ぎるのではないかと思われるのですが？」

まだどこかに少年のような面影を宿す年若い將校も反論する。

「最前線へ送り出す訳ではない。敵の勢いを殺ぐために、これは必
要な作戦なのだ」

將軍や將校達の反論したい気持ちは、ライナスにも良く分かる。
軍人は戦いを生業とする者達だ。常に危険な前線に立ち、国を守つ
ているという誇りがある。

「ご説明頂いた作戦にも、承服致しかねます。戦とは、正面から正
々堂々と敵を打ち砕く事です。そのような、だまし撃ち染みた方法
は、軍人として」

昇進したばかりなのだろうか。ヒゲの剃り跡が青々と目立つ將校
が、声高に演説を始めようとした。

「ルーブマン大佐。今は時間がない。君の高説を聞くのは、次の機
会にさせてもらおう」

話の途中で遮られた將校は、顔を赤くして口をつぐんだ。だが集
まった者達の表情を見れば、誰もがルーブマン大佐と同じ不満を抱
えているのが分かる。

「よし、正直に言おう。一番最初にこの作戦を聞かされた時、私も
君達と同じ思いを抱いた。つまり、『敵は正面突破で破るべきだ』
とね。しかし今回の敵に、それは通用しない」

「なぜそう感じたのか、お伺いしてもよろしいでしょうか、元帥閣
下？」

ライナスはため息を吐いて、その質問に答える。

「今回の敵には異能を使う者達がいる。軍に神殿の巫女や僧兵が含

まれているのは、そのためだ」

「お言葉ですが、閣下。我等は異能者など、怖れはしません。波の如くに突き進み、我等の刀の錆にしてくれましょうぞ」

歴戦の勇者である老将軍が、拳をテーブルに打ちつけて力説した。年若い者よりも齢を重ねた者の方が頭が堅いのは、世の常だ。口を開こうとしたライナス元帥を、コルウィンが手を挙げて制した。

「それが、自分の見知っている者でもか？ 自分の友人、知人、隣人も知れぬ。愛しい家族や恋しい者である可能性すらあるのだ。その者達の頭上に剣を振りかざす時、心に迷いが生じぬと、お前達は言えるのか？ 余の軍が戦っているのは、そう言う者共なのだ」

これまで黙って軍議の進行を見守っていたコルウィンが、両手を剣の柄頭に置き、良く通る声で大天幕に集った面々に語りかけた。

「歴戦の勇者である余の將軍達や兵士達にとって、今回の作戦は納得のいかぬものかも知れぬ。包み隠さず申せば、この作戦は余が立てたものでも、ライナス元帥が考えたものでもない。余の弟、トウジユの考えたものなのだ」

自分達の国王の言葉に、將軍等はザワついた。

「陛下、お言葉ですが。トウジユ殿下は戦略の何たるかをご存知でない。そもそも、このオーガスベルが戦場になったこと事態が、予想外の出来事のはずです。軍事を理解なさっていないトウジユ殿下の考えられた作戦よりも、経験豊富な將軍のご意見を容れられた方が」

「言葉を慎め、ケンスウェル中佐！ 陛下の御前で王弟殿下を貶めおとしるとは、何事だ！」

ライナスの怒号に、ケンスウェル中佐は、はっ、と姿勢を正して頭を下げた。

「ライナス、構わぬ。皆、命をかけて国を守るために戦う同志だ。忌憚のない意見を聞こう。余も、余の知りうる限りの全てを話そう。こうなると、時間のないのが悔やまれるな」

コルウィンは薄く笑むと、中佐に頭をあげるように命じた。

「皆も聞くが良い。このオーガスベルの地を戦場に選んだのは、トウージュだ。これは偶然でも気紛れでもない。立派な理由があつての事だ。経験豊富な　　そう言つてケンスウエルをチラリと見た　　諸君なら、ここがどう言う場所か分かるだろう。平地を挟んで、高台と湿地帯。そして岩場と林。この土地には大型の投石器や破城槌を持ち込む事は出来ない。地盤がそれを許さない。故に我等は、頭上から襲い掛かつてくる大岩も、高温に熱せられた油や松脂を心配する事なく戦える。また、オーガスベルには所有権を有する者がいない。暮らすにも耕すにも適さない土地だからだ。ここで戦が始まり、万が一、戦局が悪化したとしても、土地を失い、家を焼かれる民が出る事はない」

そう。ライナスがオーガスベルの地に入つて最初に思つたのは、それらの事だ。大型兵器を持ち込めない事で、一度に大量の死傷者を出す可能性はなくなつた。土地を徴収する事も、家や畑を店を潰される事もない。国内の様々な土地を知るトウージュだからこそ、戦いの場にオーガスベルを選び、あの作戦を授けたのだ。

「先程のお話ですと、ノーヴィア軍の中には異能者がいるという事です、ではなぜ昨日の戦闘にその者達を使わなかつたのでしょうか？　自分ならば戦局の始めから異能者達を投入し、一気にケリをつけようかと考えますが？」

国王の話を驚きの表情で聞いていた将校の一人が、考えながら発言する。

「うむ、もつともな考えである。諸君等は知らぬ事だが、昨夜、我が陣地内に忍び込んだ者達がいる。君達が言うところの、異能者の集団だ。この場にトウージュがいてくれれば連中について適当な説明をしてくれるのだろうが、あいにく余は相手の特質に明るくない。ただ分かっているのは、連中は人の夢に入り込み内側から人を攻撃するという事だ」

「夜間に？　歩哨からは、そのような報告は来ておりませんが」
自分達の眠りが何者かに脅かされていたと知り、それぞれがシヨ

ツクを隠せない。

「歩哨は、何も知らされてはおらぬよ。事にあたったのは、エルキリユース神殿の夢長殿と巫女の方々、各神殿から遣わされている僧兵の方々だ。彼等がいなければ、余は今この場にはおらず、余の首級はノーヴィアの手元にあっただろう」

余りに率直な国王の言葉に、軍の主立った者達は声を失った。

「我等の戦場は一つではない。我等は、ここオーガスベルでノーヴィアの軍と。夢長殿率いる神殿の者達は、異能を身に付けた者共と。そして余の弟トゥージユは、夢織りと呼ばれる巫女と共にパーティルローサで。我等には立ち入る事の許されぬ、高次元での戦いに身を投じているのは、諸君等言うところの『世間知らず』な余の弟だ。そして、最も重要な戦いをしているのもな」

柄頭の上でゆっくりと手の指を組み合わせ、コルウィンは部下達を見回した。

「どの戦いも勝たねば意味のないものだ。タベ我が軍にかけた奇襲が失敗した事を知った今、ノーヴィア軍は躊躇なく異能者を投入してくるだろう。それを見越しての、トゥージユの作戦である」

卓上に広げられたオーガスベルの地図に視線を戻し、コルウィンは指揮杖で自軍の駒を示しながら、先にライナスが説明した作戦をもう一度語ってみせた。

「これまで余が言った事を踏まえて、考えてみて欲しい。最も危険な前線を守るのは、もちろん戦に詳しい諸君等である。布陣はここに展開した通りだ。経験に乏しい平民達は、本陣隊の後方にある林にて待機。戦を知らぬ彼等は力にならぬとの向きもあるだろうが、誰よりも国を、街を、村を、家族を、友人や愛する人を守りたいと強く願っているのは、彼等、何の身分も持たぬ民草達だ。彼等の力を侮るでないぞ」

今度は誰も笑わなかった。

時は留まる事を知らず、太陽は空を駆ける。高らかに響くラッパの音が、太陽神の乗る黄金の馬車が中天にかかった事を両陣営に伝えた。

オーガスベル平地を挟んで向かい合う、国王軍とノーヴィア軍。双方共に槍兵隊を先頭に立て、その背後に騎兵隊が控える。違っているのは、国王軍の騎兵隊が軽装であるのに対し、ノーヴィア軍の騎兵隊はかなりの重装備である事。そして国王軍の騎兵隊の背後には、神殿の巫女や僧兵達が真剣な面持ちで配置されている事。

一際目立つ見事な白毛の馬に乗ったコルウィンが、全軍の先頭に立った。身にまとった鎧が、陽光を受けて眩しく輝く。

「我等が得た戦略は、一人でも多くの民を生かすためのものだ。忘れるな。兵一人、民一人、欠ける事は許さん。そなた達こそが、余の守る『魂』の国である。それを、胸に刻むのだ！」

国王コルウインの言葉に、全兵が剣を掲げて応えた。

開戦の角笛が吹き鳴らされる。

「行こう！ この愚かな戦いを終らせるのだ！」

年若き国王の手にある、黄金色の指揮杖が振り下ろされた。

長槍を構えた槍兵隊が先陣を切って高台を駆けて行く。ノーヴィア軍からも槍兵隊が押し寄せてくるが、それを弓兵隊の繰り出す矢が阻む。まるで嵐の如くに、ノーヴィア軍の頭上に降り注いだ。

「弓矢だと？ 一体、どこに隠れていたのだ！ そのような報告、受けてはおらぬぞ！」

自軍の兵に浴びせかけられる何千もの矢に、叛乱軍の指揮をとるサマル・ビュイクが喚く。関節が白くなる程に握り締められた手の中の指揮杖は、黒檀で作られているにも関わらず、今にもへし折れそうだ。

「カーティモ、イーギムも イルネアやティルスまでも、我が許から去って行く。今や私につき従うのは、殺されるかも知れないと毒薬の影に怯えた愚かな貴族と、人ですらない化け物達の群れだ」

自嘲気味に晒って、サマルは己の軍を見回した。

「ふ。所詮私には、王となる資質など、なかったと言っただけの事よ。」

改めて指揮杖を握り直すと、声を張り上げる。

「二陣、前へ！」

戦場に目をやれば、一陣の槍兵隊が苦戦しているのが見てとれる。ノーヴィア軍の使っているモノよりも、国王軍の使用している槍の方が長く、間合いが広い。相手の懐へ入り込むより先に、敵の槍が自分の間合いに入ってくるのだ。その上、頭上からは性格に狙い済ました矢の雨が降り注ぐ。

「飛距離のある長弓を選んだか。射手の腕も良いようだ。さすがだな」

カーティとイーギムから与えられ続けてきた狂気が、体中を覆っていた不快な油膜が流れ落ちていくように、抜けていくのが分かる。今となれば、自分の仕掛けた戦がどれだけ愚かな事なのかも理解できる。だが、もう止める事は出来ない。自分かコルウィンか、どちらかが倒れるまで、走り出したこの戦は終わらない。

苦戦している槍兵を下がらせ、騎兵隊を前に出した。比較的軽装である騎兵隊を前面に出し、重装備の騎兵を後方から当らせる。騎兵隊が国王軍を留めている間に、圧倒的な質量をもつて本陣を潰すつもりでいた。もちろん騎兵隊には、バフォナ達も紛れ込ませてある。戦闘中にバフォナに遭遇すれば、相手方は恐怖にかられて総崩れになるはずである。

サマルがするように判断し槍兵を動かし始めた時、国王軍の伝令が角笛を二度、短く吹き鳴らした。途端に長槍兵達が中央に密集し、全体を守りながら後退を始めた。戦闘中、最も難しいのは退却の方法だ。だが相手の兵達は陣形を小さくし、互いを守る事で死角をカバーしているのだ。

「やりおるわ。」

サマル・ビュイクがこれまでに学んだ兵法には、このような方法

はなかった。

「この戦略を組んだ奴は、余程頭の中身が柔らかいと見える」

サマルの脳裏に魂国軍を束ねるライナス元帥の顔が浮かんだ。

「まだまだ、老いてはおらぬと言う事か」

後退する長槍部隊の左右から、剣を煌めかせた軽装の騎兵部隊が包み込むように攻めて来る。これにより徒歩である長槍兵隊は、より安全に退却する事が出来る。ノーヴィア軍からも騎兵隊が戦場へ駆け出る。

「いかに新しい兵法を取り入れようと、人外の者は対抗の術があるまい。人としての『恐怖』も『痛み』も感じぬ者共よ。どうする、コルウィン？」

わずかにサマルが余裕を取り戻して呟いた時、眼下の平原を疾る騎兵隊の中に見慣れぬ装備の者達がいるのに、気が付いた。色とりどりのローブに胸当てをつけ、手には凶悪な形をしたメイスを掲げた者達だ。

「僧兵？」

サマルの口走った通り、神の祝福を受けたメイスを携えているのは、魂国の各神殿から遣わされた僧兵達だ。

国王軍の本陣に控える夢神エルキリユースの巫女達が、錫杖を打ち鳴らして呪文を詠唱している。その中心に立つのは、オニキスの杖を擬する夢長メルベリツサの姿。彼女を目にした瞬間、サマルはイーギム達が自分の許に戻って来なかった意味を、正しく理解した。戦場にあるには、少々不似合いに見える幾人ものリユート弾き。

そして、その楽の音に合わせるように錫杖を打ち鳴らし、夢神への聖呪を歌う巫女達。片方の手には、球状の香炉を載せている。

良く見れば、馬上の僧兵達の腰にも小さな香炉が結び付けられている。バフォナにとって耐え難い香りを発しているのだろう。あまり目にする機会もない僧兵達の手にあるメイスも、夢神からの祝福を受けているのだろう。香りにもだえる者達だけを正確に狙い、僧兵はバフォナを打ち砕いていく。だがバフォナは、ドラムーナによ

つてしか滅する事が出来ない。手足を失い、器となる人間の体を失ったバフォナ達が逃げ出さないように、リュートの弦を口ウで固め聖呪で清めた針や、香木そのものを削り出した針をを打ち込んで行く。

「人ならざるモノ共を怖れるな！ 目の前の敵に集中せよ！ 異能者達は神殿の者に任せるのだ！」

コルウィンが兵士達を鼓舞する声が響く。

戦いで命を落とすのは、誰だって怖い。戦場で人ならざる姿をする夢魔を目にすれば、精神が逃げ出してしまいそうになる恐怖はいかんともしがたいだろう。万が一にも、そこに見知った顔があつたとすれば、なおさらだ。だからこそ、コルウィンはあえて僧兵を前線へ出す決意をした。どうしても、兵士達の代わりにバフォナと戦ってくれる者が必要だったのだ。人間には見えぬ姿形をした者達と戦わなくても済むという事実は、兵士達の精神的負担をかなりの意味で軽減したらしい。

切り札でもあったバフォナ達の攻撃が、さほど大きな打撃を与えられぬ事実に、サマルは齒ぎしりした。だが、まだ勝機はある。国王軍の本陣へ、重装騎兵が雪崩れ込めば、あるいは。

砂ぼこりの舞い上がるオーガスベルの平原をにらみつけていたサマルの耳に、再度、角笛の短い響きが二度、鳴り渡るのが聞えた。

「右翼、パイク隊、前へ！」

国王軍の陣形が変わる。長槍兵部隊の戦闘にも加わらずにいた長身で屈強な体躯をした槍兵達が、展開していた右翼から本陣の中央へ布陣を移動させたのだ。先程の長槍兵達が使用していたものよりも、さらに長い。六〜七メートルはあるうかというその槍は、穂先のみならず、柄の部分までも鋼の板で巻かれ強度を増した造りになっている。そのような槍・パイクを構えた兵達が、本陣を守る形で四列に並び、独特の防御隊形をとっていた。

最後方の四列目は直立し、頭の位置にパイクを構え前方へ突き出す。参列目の兵は同じく直立し、パイクを腰の高さに水平に構えて

いる。二列目の兵は中腰の姿勢で、右足内脇の上に石突きを置いて斜め上方へ突き出す。そして最前列の兵は膝について水平、もしくは低めにパイクを構えている。少しでも兵法をかじった事のある者ならば、この四列の隊形を一目見れば分かる。密集した、たった四列のパイク兵隊がどれ程の防御力を秘めているかを。突進してくる騎兵達は、自らの突進力によって槍の防壁に貫かれる仕組みになっている。

「誰だ！？ ライナスの如き石頭に、このような策が思い付けるはずがない。誰かが、この策を奴に授けたに違いないのだ！」

猛攻をかけるべく馬を走らせていたノーヴィア軍の重装騎兵隊は、前方で槍を構えるパイク兵隊の列を見て思わず手綱を引いた。そこへパイク兵の後方から弩の矢が飛来する。長弓の矢などとは、比べ物にならないその威力でサマルの騎兵隊の重装備を襲った。

「くっ」。弩まで用意していたのか。どこまでも私の邪魔をすると言っのだな」

先に撤退した長槍兵と弓兵とが、本陣隊の後方で弩の準備をしていたのだらう。恐ろしく威力がある一方で、矢をつがえるまでに時間のかかる弩は、準備の段階で標的になりやすい。通常ならば、幅広の楯の後ろで弓を張るのだが、それでは相手に弩を用意しているのが丸分かりだ。威力に比べて、ある意味では野外戦向きではないのかも知れない。

これは国王軍に従い、協力してくれている多くの民の支えがあったればこそ、可能な戦法なのだ。

形勢不利を見て取ったサマル・ビュイクは、伝令に命じて重装騎馬部隊を反転させ、平原の国王軍に標準を変じさせた。この事により、コルウインの騎馬兵隊は前後から反乱軍に挟まれる事となる。

その様子を見ていたコルウインが、手甲に覆われた右手を挙げた。同時に、控えていた伝令が角笛を長々と吹き鳴らした。

良く訓練されているのであろう騎馬兵達は、馬首を巡ら方向を変えた。そのまま、パイク兵隊が中心に移ったために出来た右翼の布

陣、その薄くなった部分へと進み始める。頭に血の昇ったサマルには、コルウィン軍のその行動は、挟み撃ちにあつた騎馬兵隊が敗走して行くように見えた。駆け戻ってくる兵達を迎え入れるためのなのか、本陣全体が左翼に広がった形に変化する。

「今だ！ 全軍で追い込め！ そのまま国王軍の本陣も、蹴散らしてやれ！」

黒い指揮杖を振り上げ、サマル・ビュイクは自軍に指示を出した。サマルの声に士気を取り戻したのか、勢いにのつて国王軍に迫る。時折、矢が飛んでは来るものの、先程までの勢いはないように思えた。

「ふん、所詮は付け焼き刃。今まで上手く事が運んでいた事の方が、不思議なくらいよ」

走り去る国王軍の騎馬兵隊と、それを追撃する自軍の騎馬兵隊と重装騎馬達を、笑さえ含んだ眼差しで満足そうにながめていた。だが国王軍を追う反乱軍が森の陰に入った瞬間、サマル・ビュイクの表情が凍り付いた。

砂煙を蹴立てて高台を登り切り、森の縁を走り抜ける騎馬兵達の側面に向かって拳大の石が、音を立てて飛来したのだ。

森の縁に身を潜めていたライナスが立ち上がり、号令と共に手を振った。

「スリング隊、第二陣、前へ！」

その声に、前列にいた者達がしゃがみ、後方に控えていた者達が一步踏み出した。「スリング」と呼称され、中央部分が少しだけ幅広になった長めの革ヒモに石や鉛を包み、両端を持って頭上で振り回す武器。剣や弓の技を取得するには、時間がかかる。だがコレならば、コツさえつかめれば素人にも扱える。熟練者の腕にかければ、石一つで飛ぶ鳥さえ落とす事も可能だ。

十分な間隔を空けて配された者達が、頭上でスリングを振り回している。驚き、動きの止まった反乱軍の兵士達は、馬にまで厚く装甲を着せているため機敏に行動する事が出来ない。右往左往してい

る重装備兵達に向かつて、一斉に石が放たれた。鉄の鎧を着込んだ兵士に対して、殺傷能力を持つ訳ではないが、鎧をへこませ、騒音によって馬達を混乱させるには充分だ。加えて、多量の石によって足場が悪くなり、兵達は防御と馬の制御の両方に気を取られる羽目に陥った。

再度、ライナスの号令が響く。

「弓矢隊、放て！」

森の縁、スリング隊よりも前で矢をつがえて構えていた者達の、弦を離す音が連続して聞えた。至近距離から放たれた矢は、騎手ではなくその馬の脚を狙ったものだ。装甲やケープで覆ったとしても、馬の脚だけは別だ。馬の利点は、その機動力。脚を装甲で固めてしまつては、機動力を殺してしまうため、装備を薄くせざるを得ない。ライナスは、弓隊にその装備の薄い部分を狙わせたのだ。鎧や装甲の隙間、継ぎ目を狙うよりも的が大きく、何より敵の陣形を乱すのもってこいだ。

脚や腹に矢を受けた軍馬達がいななき、兵士を乗せたまま倒れる。後脚で立ち上がり、前脚で空をかく馬の背から、騒々しい音をたてて騎手が滑り落ちる。一度馬の背から落ちてしまえば、立ち上がる事は容易ではない。全身を鉄の鎧で覆っていれば、矢や剣からは身を守るかも知れないが、倒れた場合に自力で起き上がるのは困難だ。しかも暴れる馬の蹄の下では、なおさらの事。落馬の衝撃や、ぶつけられた石により、あちこちがへこんでしまったブーツは、外す事もままならない。

畏にかかった事に気付いたノーヴィア軍の目の前で、敗走していたかに見えた国王軍の騎馬隊が反転して向かつて来る。慌てて馬首を返せば、自分達の退路がすでに絶たれているのを発見した。

国王軍の本陣隊が剣を掲げて、ノーヴィア軍に迫る。挟み撃ちに合ったのは、結局のところ、自分達だったと言う事だ。それに気付いても、もう遅い。サマル・ビュイクは歯噛みした。援軍を出そうにも、鉄壁の防御を誇るパイク兵団にはばまれて叶いそうにもない。

それどころか、温存されていた国軍の兵達が反乱軍の本陣を目指してくる。

「閣下、このままでは」

サマルの傍に駆け寄ってきた将校が、片膝をついた状態で指揮官を見上げる。

「早急にどうにかせねば、我が軍は総崩れとなってしまいます。閣下！」

そのような言葉を改めて聞かされずとも、全てを見ていた元ノヴィア公爵には、己のおかれている状況は誰よりも理解している。

「……してやられたわ。まさか、これ程の布陣を用意してしようとは」

すでに力を失くした腕は、ダラリと下げられている。

「投降する者は、抵抗を止めよ！ 抗う意志のない者に、危害は加えぬ。投降する気のある者は、速やかに武器を捨てるが良い！」

国王軍の伝令なのだろう。王国旗を掲げ、戦場となったオーガスベルの平原を駆け抜けて行く。

「投降する者は、抵抗を止めよ！」

伝令の発するその言葉に、反乱軍の兵士達は顔を見合わせ、次々と手にしていた武器を離れた。抗う気がない事を示すため、馬から降りその場に座り込んだ。

サマルの切り札とも言える夢魔達^{バフォナ}も、あらかたが神殿の巫女や僧兵に捕らえられてしまっている。

「所詮この戦、我等に勝ち目はなかったと言う事か。そなたも早く行くが良い。このまま私の許に留まったとて、そなたのためにはなるまい」

戦場に向けていた視線を側に控える将校に移し、思いの外静かな声でサマルは言った。

「し、しかし、閣下はいかなさるので？」

仲間の将校や兵達が投降していくのが、気になるのである。視線を忙しく動かしながら、だがサマルを放り出して降服してもいい

ものかと、必死に考えているのだろう。部下の言葉の中に含まれる迷いに、サマルは自嘲気味に言った。

「私には、この戦を始めた責任がある。そのけじめはつけなければならん。お前達までも、それに付き合う道理はなかるう。危害を加えぬと言つ以上、国王はその約束を守るはずだ。武器を捨て、行くが良い」

そう言つと、サマルは部下から視線を逸らした。そして静かに指を差す。

「さあ、早く行け。私を迎えに来る者共がいる」

見れば、王国旗をためかせた騎馬が数騎、平原を横切つてこちらへ向かつてやって来る。先頭にいるのは、ライナス元帥だ。

将校は再度サマルを見上げると一礼してその場から立ち去つた。部下の背中を視界の端で確認しながら、ライナスに率いられた者達が高台を駆け上がつて来るのを待った。

「元ノーヴィア公爵、サマル・ビュイク・ノーヴィアであるな」

サマルの眼前で馬を止めたライナスが、重々しく口を開いた。

「いかにも、サマル・ビュイク・ノーヴィアは私だ。言われずとも、用向きは分かっている。この期に及んで、逃げも隠れもせぬ」

兵の一人が捕縛用の縄を手にしたのを見て、サマルはそれを制した。

「では、参ろうか」

用意された馬に騎乗すると、周囲で様子をうかがっていた者達に向かつて声をあげた。

「この戦、我等が軍の負けである。武器を捨て、元帥殿の指示に従うが良い。この私の命令を全軍に伝えよ！」

それがサマルの発した、最後の命令となつた。ライナスの部下がサマルの指揮杖と剣を外し、その腰の縄を打つのを目にして、反乱軍の否、敗軍の将校達は深く一礼して主の命令を伝えるために丘を下つて行つた。

ライナスが馬首を巡らすと、全員が黙つてそれに従つた。オーガ

スベルの地を、敗軍の将が行く。

勝利に沸き立つ者、敗北を知り途方に暮れる者、傷の痛みに苦しみ、うめく者達の間を、ライナス達は進んで行った。

戦に勝利したとは言え、ライナスの旨に喜びはない。傷付いた者も、傷つけた者も、共に同じ国の住む民だ。確かに国は守れたかも知れないが 苦い勝利である事に違いはない。それはきっと、年若い国王も同じだろう。

オーガスベルの平原を横切って行くと、大天幕の前にコルウィンが立っているのが見えた。一行の到着を待っていたのだろう。

「陛下」

馬から下りると、ライナスはコルウィンの前で敬礼した。

「元ノーヴィア公爵、サマル・ビュイク・ノーヴィアを連行致しました」

コルウィンは厳しい、そして哀しい表情を浮かべて、軽くうなずいた。

縄を打たれたサマルが馬から下され、コルウィンの眼前へ引き出された。謀反を画策し、扇動した大罪人として。国王を弑し玉座を篡奪しようとした、大逆の徒として。

「叔父上」

地に膝をつき頭を垂れるサマル・ビュイクに向かって、コルウィンは沈んだ声をかけた。

「貴方の方が、何故このように愚かな戦いを」

「愚か……そうだな。今となってみれば、私にも分かる。自分のした事が、どれ程に無謀で愚かであったかが」

自らを嘲るように、サマルが言う。

「出来る事なら、これ程に犠牲が出る前に気付いて欲しかった。同じ魂国の民が、互いに争う前に」

「言い訳にしかならぬが、やはり、どうかしていたとしか言いようがない。そなたには理解出来ぬかも知れぬがな。王になれると、本気で思っておったのだよ。コルウィン・イルス・ダルムに代わり、

魂の国氏を戴いて王となり、この国を治める。そう思っていたのだよ」

若い国王の言葉を継いで、サマルはどこか空虚に響く声で続けた。「王位継承第三位。それが、こんなにも甘美で、抗い難い誘惑であろうとはな。私であれば、そなたよりも良く国を治められる。自分の持つ力を試したい。そのような私の思いに、奴がつけ込んだ結果が、これなのだな」

一言一言を噛み締めるように、サマルは言葉を身裡から絞り出し、コルウィンを見上げた。

「教えてくれ、我が甥よ。奴等は何だったのだ？ 私は一体、何に踊らされていたのだ？ そなたは知っているのだろうか？ 教えてくれ。あの薬師は、異能者とは何だ？ それを知らずに死んで行くのだけは、嫌なのだ」

後ろ手に縛られ、膝を屈して己の目の前にいる男に、王座を狙って戦を始めた時の狂気も覇気も感じられない。あるのはただ、後悔と疑問。なぜにそこまで、至尊の座を求めて愚行に走ったのかを知りたがっている、男がいるだけである。

「叔父上、あなたと言う人は。何者かも知れぬ相手と手を組んでいたと言われるのですか。あの『異能者』と呼ばれる者達の、真の姿をご存じない？」

サマルを見つめるコルウィンの眉間に、深いシワが刻まれた。

「ああ、あの者達が、常人にない能力を有しているのは知っていた。だがそれは、神に仕える神殿の人間が持つ『力』のようなものではないのか？」

では、サマルは知らないのだ。『異能者』の正体が、人ならざる者達であると言う事を。

「カーティは、ラ・ズーに祈りを捧げる事によって、死へ向かう人々の病を取り除き、薬によって人々の体を癒やすと言っていた。ラ・ズーの神力によって癒やされた者達の中でも、特に深く神の力に浴した者が『異能』と呼ばれる力を有した、と」

語るにつれ、サマルの口調は弱々しくなっていく。

「あなたはそれを……信じたのですね」

その場に、別の声が響いた。

「イルネア……」

「伯母上……」

サマルが捕らえられた事を耳にしたのだろう。医療用の大天幕から、イルネア・エメスが姿を現した。側には、彼女を支えるようにアйнаセリヨースが寄り添っている。

「神官や巫女達は、己の仕える神への信仰により常人にはない『力』を有するのです。病を癒やされたからと言って、おいそれと手にする事など叶いはしないですよ」

妻が夫を見る目は、どこまでも静かで、どこまでも哀しい。

「あなたが信賴していた、薬師のカーティと言う女は、一連の出来事の元凶なのです。この瑰国に蔓延していた『眠り病』は、カーティ自身がばら撒いたもの。ラ・ズーの神への祈りなど、あの女の騙り事」

自分の罪を国王へ告発した妻の言葉を、サマルは呆然と聞いていた。

「それだけではないのです。叔父上、あなたを言葉巧みに唆し、王位へと駆り立てたカーティは、人ですらない。この世界を混沌へと墮し、支配を目論む邪神の化身だったのですから」

若き国王の前に膝をついた元公爵は、自身の理解の範疇を超えた話に、半開きになった口を閉じる事も忘れて聞き入っている。

「ならば　そうすると　私のやった事は　？」

腰に縄を打たれた男が、震える手で顔を覆う。己に肩入れをし、知恵をつけ、戦へと向かわせた者が全ての元凶であったと。しかも人ですらなかったと知らされたサマル・ビュイクの心情は、察して余りある。

「あなたが『異能者』と呼んだ者達は、『^{バフオナ}夢魔』と言うそうです。人の眠りの中へ入り込み、夢を喰らい尽す。そうやって人の精気を

奪い尽くした後に、生命の灯の消えた体に乗っ取ると聞きました。

人としての生命はすでになく、人外存在と化した者達です。邪神の手足として働き、世に災厄をもたらす。そのような者達を、あなたは自領へ招き入れ、戦場にまで。家族や隣人、友人や恋人であった者同士を悲しみのうちに引き裂き、敵として戦わせる。その苦しみを瑰国の民に　私の民に与えた罪は、王位を篡奪しようとしたそれよりも、はるかに大きく、重い」

国王を弑し奉り、玉座を篡奪する。人の治める世で、最も重いとされる「大逆罪」。だがコルウインは、その「大逆罪」よりもサマルの負うべき罪は重いと断じたのだ。

己にかけられる言葉の一つ一つが、しなうムチの如くに罪人を打ち据える。

「この戦も、王位の篡奪も、邪神が己の復活のために描いた筋書き。その筋書きに乗せられたのは、あなたの心に王位への野心があつたればこそ。王家に仕える家臣として、陛下を支える立場にありながら、その本分を忘れて玉座を望んだ　あなたの罪」

イルネアの言葉にかすかに感じ取られる想い。それは、夫婦として暮らし、ティルスという子まで成した夫への愛情か。サマルにはすでに、頭をあげるだけの気力も残されてはいないようだ。その小さく力ない姿を見下ろしながら、若き国王は口を開いた。

「この愚かな戦いを終わらせるため、逆臣の徒として、叔父上の責を問わねばなりません。余は、この瑰国の国王として、民を守る義務と権利を負っているのですから」

「民を守る　義務と……権利？」

ノロノロとサマルの視線があがる。

「瑰国の……否、一国の王位にある者として、第一に考えるべきは民の安寧。国王とは、その国にあつて比類なき絶大な権力を持つ者だが、その権力は己のためのものではない。王位に就いたその日から、この国にある全ての民草の命が、余の判断によつて左右されるのだ。余が一つ判断を間違えれば、数多の者の命が失われる。故に

国王は、常に民にとって最良である事を考えねばならない。有する権力は民のために行使される。なぜならば、国王の持つ権力を支えるのは、国に住む民の一人一人であるからだ。いかに力のある王であれ、民の信用、信頼を失えば、王座より追われる。国に変事がある時、国王は一命をもつて民を守る。そのためにこそ在るのだ。これは王位に就いた者にもみ許される権利であり、心に留め置かねばならぬ義務でもある」

滔々《とうとう》と『国王の義務と権利』について語る甥の姿を、サマルは眩しそうに見つめた。その姿は病に侵され、王宮の一室で臥してい弱々しい若者のものではなかった。瑰という国を背負い、導いて行く王者の姿だ。

「陛下。最早、逃げも隠れも致しませぬ。この結果を招いたのは私自身の不徳と無知によるもの。謹んで、陛下の御命令に従う所存でございます。ただ、気掛かりが一つ」

覚悟を決めた表情で、サマルはコルウィンに告げた。その口調は甥に話しかける叔父のものではなく、罪を犯した臣下が国王の裁可を請うものである。

「申し述べてみよ」

「私の気掛かりは唯一つ。我が子、ティルス・グラルの事にございます。大逆人の子とは言え、今回の出来事は、私一人の責任。ティルスには、何の罪咎もございません。どうか陛下には、寛大な御裁可を賜りたく、お願い申し上げます」

そんな夫の姿を見つめながら、イルネアは一文字に唇を引き結んで気丈に立っている。だが彼女の瞳は、来るべき将来を思つて、涙で潤んでいた。

「サマル・ビュイク・ノーヴィア。汝は既にノーヴィア公爵に任を解かれ、爵位を剥奪された身である。同時に、我が叔母である、イルネア・エメスとの婚姻も解消されたもの考える。ティルス・グラルがこの件に関わっていないのは、余が誰よりも知っている」

コルウィンの言葉を聞いたサマルの目に、安堵の色が浮かんた。

一人息子であるティルスが、己の罪の巻き添えにならないと知って安心したのだろう。この余りにも愚かな戦を始める前に、息子ティルスの事に思い至って欲しかったと、イルネアの胸に痛みが走る。

まだ幼いティルスが、この事を知ったら。自分の父親が国王の弑逆^{ぎやく}を画策し、王位の篡奪^{せんぎやく}を狙っていたと。その父親を捕らえ、刑を下す国王コルウィンに対し、どのような思いを抱くのか。

だが、このままサマルを不問に付す訳にはいかないのだ。国を二分する戦を始め、多数の犠牲者が出してしまった。コルウィンに叛旗を翻したサマルを放免すれば、国王としての責任を問われる事になる。王家に連なる者だからと言って、温情をかけて良い相手ではないのだ。サマルに情けをかければ、民に対して示しがつかない。

全ての元凶が邪神の思惑にあると知って尚、コルウィンはサマルを断罪しなくてはならないのだ。

「サマル・ビユイク・ノーヴィア。この者、瑰国王家に対し弓引く大逆人として、斬首の刑を申し渡す。だが、我が叔母との婚姻によって王家の戚に名を連ねる者だ。他の罪人のように首を晒す事はすまい」

感情を交えず、あえて事務的に告げられる国王の命。だがそこに籠められた、他の罪人とは同列に扱わぬという意こそが、コルウィンに許された最大級の情けであると、サマルもイルネアも正しく理解していた。

「ライナス元帥。人目につかぬ所へ連行して、首をはねよ。ただし、兵士に命じてはならぬ。そなた自らが首を打て」

「御意」

ライナスは鎧の胸当てに拳をあてて鈍い音を立てながら、己の息子ほどの国王に頭を下げた。

厳しい言葉とは裏腹に、悲しみを湛えた瞳で自分を見つめるコルウィンに、サマルは深々と礼をして立ち上がった。

捕縛を握る兵に促されるまでもなく、サマルは歩き出した。うなだれる事なく、背筋を伸ばして前を向いて。爵位は失っても、貴族

の心までは失つておらぬという事か。だが、イルネアの前を過ぎる瞬間、わずかに歩みを緩めて妻の方を見た。

「すまなかったな。ティルスを頼む」

「御心配なく。いずれ、わたくしも参ります。先に逝って待っていて下さいませ」

「ああ、そうするでしょう」

かすかに笑みを浮かべて、サマルはイルネアに別れを告げた。

一行の姿が天幕の陰に消えて行くと、イルネアはコルウインの前に進み出た。

「寛大な御処置、心より感謝致します」

膝を折り、深く頭を垂れる。

「どうか頭をあげて下さい、イルネア伯母上。このような結果になってしまい、申し訳なく思っているのです。叔母上にも、ティルスにも、本当に何と言って良いのか。余の方こそ、お二人に詫びねばならぬ」

コルウインはイルネアの手を取り、涙に濡れた彼女の目を覗き込んだ。

「どうか許して下さい、叔母上。こうする事でしか、全てを収める方法がなかったのです。余にもっと力があれば、別の方法があったかも知れませんが」

先程までのコルウインとは違い、今イルネアの前にいるのは、己の力不足を嘆く若者でしかない。イルネアは自分の手をそつと離すと、そのままコルウインを抱き締めた。

「あなたが気に病む必要はないのですよ、コルウイン・イルス・ダラム。全ては、あの人の弱さが招いた結果。それを一番理解しているのは、サマル自身でしょう。ティルスだって、あなたに非がない事ぐらい、話して分からない年齢ではありません。あなたは、この瑰国の王として立派に務めを果たしました。私の兄が瑰国に在れと、玉座を譲った正当なる王。どうか、強さを求めるだけの愚昧な王にだけはならないで」

幼かった頃よくそうしていたように、穏やかな口調でそつと語りかける。

「さあ、この戦いに終結を。こんな愚かな争いは、もうたくさんです。己のした事を悔いて泣くのは、いつでも出来ます。ですが、王たる身のあなたには、今なさなければいけない事があるはずですよ」
「ええ、そうですね。もう迷いはすまいと決めていたのに、余は、まだまだ未熟なようです」

コルウインはイルネアに微笑みかけると、しばし目を閉じた。大きく息を吐き出して、傍らに控えるアイナセリョースに視線を向けた。

「アイナセリョース、我が愛する妃よ。これから先も、余と共に歩いて行ってくれるか？ 決して平坦な道ではないだろう。それでも余の側にいて、余を支えて行ってくれるか？ この瑰という、大きな荷を背負って」

「陛下。わたくしは、この命尽きる時まで陛下のお側に。瑰国王家に、いえ、コルウイン・イルス・ダルム・瑰様に嫁いだ時から、心に決めておりました。この方と共に歩んで行くのだと。それがどれだけ険しい道であつたとしても、わたくしの決意は変わりませんわどこまでも御一緒いたします、我が君」

コルウインの手を優しく両手で包み込み、アイナセリョースは力強く答えた。病身の王を支え、国政を担い、廷臣達と対等に渡り合ってきた王妃の言葉には重みがある。

王妃にうなずきかけると、コルウインは姿勢を正して声を張り上げた。

「負傷している者は、治療用の天幕へ。抵抗する意思のない者には、水と食糧を与えて休ませよ。手向かう者は武器を取り上げ、捕えておくように。暴れる者は巫女様方に任せよ」

戦が終結したからと言って、すぐさま兵を引上げさせる訳にはいかない。負傷者の手当てをし、体力を回復させなければ、王都に帰り着く前に命を失う可能性もある。

バフォナにより体を動かされていた者は、エルキリユース神殿を始めとする各神殿関係者に任せるしかない。だが死者をそのままにする訳にはいかない。放置すれば、骸の腐敗むくろによって危険な伝染病が国中に蔓延する恐れがある。それ以上に、死者の尊厳に関わる。

本来ならば死を司るラ・ズー神殿に遺体を運び、必要な手順を踏み、儀式を執り行つて死者の魂を安らかに旅立たせるのだが、戦場においてはそうもいかない。

指輪などの装飾品、身に着けていた物を集めて羊皮紙に詳しく書き込む。故人を特定し、遺族へ届けるためだ。

幸いな事に、このオーガスベルの地には豊富な木がある。林から木々を伐り出し、死者を荼毘たひに付すために組み上げる。

大天幕に戻つて後の事を將軍達と打ち合わせている最中、コルウインの許にライナスからの報告が入った。

「サマル・ビユイク・ノーヴィアの刑の執行が完了致しました」

それを聞いたコルウインはしばし目を閉じ、そうか、とだけ呟いた。

「首を改められますか？」

「いや。御苦労であつたな、ライナス元帥」

謀叛を企てた首謀者として、サマルの遺体を王都へ連れて戻る訳にはいかない。他の戦死者達と共に、ここに埋葬するしかあるまい。「必要なだけの木材を伐り出し終えたなら、軍属する兵士以外の民達はそれぞれの土地に帰らせようと思う。そのための編成を組んでおいてくれ」

見知つた顔もあるであろう死者達の弔いまで、兵士ではない民草を駆り出す訳にはいかないと考えての事だろう。

「この瑰国を守るために、強き心で共に戦つてくれた者達だ。最大の敬意を持つて、家族の待つ家へ帰してやらねばならぬ。埋葬にかかる人選は、將軍達に任せよう。皆を送り届けてより後は、速やかに王都ハディースへ戻るように」

コルウインは座につく面々を見回し、告げた。戦により、身にま

とう鎧はへこんだり、汚れたりはしていても、將軍達の表情に不安や不満は見られない。かと言って、勝利に沸き立っている訳でもない。

国を守るための戦いであつたとしても、戦つた相手は同じ瑰国に住まう者だ。その胸の裡は複雑なのだろう。

「陛下は、いかなさるのです？」

將軍の一人が顔をあげて質問する。

「余は全てを見届けてから、王都へ戻る。それが王としての余の務めだからな。パーティルローサではトウージュが留守を預かつてくれている。余が戻るまでは、トウージュの指示に従え」

「御意」

もう迷いは見せるまいと心を決めた国王の言葉に、集つた將達は皆一様に頭を下げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9930v/>

夢幻の瞳 現の涙

2011年8月29日03時25分発行